

博士学位論文（東京外国語大学）  
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	薦原亮
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 266 号
学位授与の日付	2019 年 3 月 12 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	スペイン語 <i>-dor/-nte</i> 接辞に関する意味論的研究

Name	Ryo Tsutahara
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 266
Date	March 12, 2019
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A Semantic Study on the Spanish <i>-dor/-nte</i> Suffixes

# スペイン語 -dor/-nte 接辞に関する意味論的研究

蔦原亮

## 謝辞

本論文の提出にあたり、大変多くの方々にお世話になりました。深く感謝の意を表します。

2015 年度から指導教官を引き受けてくださった川上茂信先生に深謝申し上げます。本論文の構成から文章表現に至るまで、懇切丁寧なご指導を賜りましたこと、心より感謝しております。2014 年度の退官までお世話になりました高垣敏博先生にも御礼申し上げます。先生にはゼミやオフィスアワーに辛抱強くご指導いただきました。また、留学の実現や日本学術振興会特別研究員への応募にもご尽力いただきました。副査を務めてくださった上智大学の西村君代先生にも心の奥底より感謝しております。西村先生には学部から博士前期課程までの 7 年間直接の指導を賜りました。また、それ以後も研究会や学会などで貴重なご助言、叱咤激励をいただきました。今現在に輪をかけて未熟だった研究の初期段階に長く、温かい目でご指導いただけたことは幸甚に存じます。副指導教員を引き受けてくださった黒澤直俊先生、川口裕司先生にも御礼申し上げます。スペイン語以外の様々な言語をご専門とされる先生方からのご助言は有意義であるばかりでなく、今後の研究につながる極めて興味深いものでした。そして、本論文の副査を担当してくださった浦田和幸先生にも謝意を表します。

また、東京スペイン語学研究会、日本イスパニヤ学会などで研究発表を行いました。そのたびに出席されていた先生方、大学院生の皆様から様々な貴重なご助言をいただきました。心より感謝しております。

大学院在学中、二度にわたりスペイン、マドリード自治大学に長期留学をさせていただきました。この経験がなければ、本研究を成し遂げることはできなかったように思います。この留学にあたっては本学の若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラムからご支援をいただきました。本プログラムの策定に携わられた先生方、職員の皆様に深謝申し上げます。マドリード自治大学では特に情報言語学研究室の Antonio Moreno 先生から様々なご支援いただきました。先生の研究室に所属していた Leonardo Campillos 氏、Alicia Gonzalez 氏、Carlos Herrero 氏らにも感謝しております。彼らとの切磋琢磨は私の研究者としての人生における財産です。

また、大学院生活の後半では日本学術振興会特別研究員 (DC2) に採用されました。おかげさまで、国際学会への出席やスペインでの現地調査など、貴重な経験を得ました。深謝いたします。

最後になりましたが、大学院生活において様々な形で支えてくださった家族、友人にも心よりの感謝を申し上げます。

蔦原亮

## 目次

0. はじめに .....	8
0.1. 指向性の接辞 .....	9
1. 先行研究・本研究の意義、位置づけ .....	14
1.1. 両接辞の変遷 .....	14
1.1.1. -dor の歴史的変遷 .....	14
1.1.2. -nte の通時的変遷 .....	19
1.1.3. 通時的観点から明らかになったこと 共時的分析の必要性 .....	20
1.2. Laca (1993) .....	21
1.2.1. Laca (1993) の問題点 .....	23
1.3. Cano (2013) .....	24
1.3.1. -dor の付加: 動詞の動性 .....	24
1.3.2. -nte の付加: 語根動詞の非有界性 .....	26
1.3.3. Cano (2013) の問題点 .....	29
1.4. 問題の所在と解決策 .....	31
1.4.1. 直観・内省に基づく分析 .....	31
1.4.2. 分析対象の意味の固有化 .....	32
1.5. 本研究の位置づけ .....	33
1.5.1. 理論的位置づけ .....	33
1.5.2. 方法論上の位置づけ .....	36
2. -dor/-nte 接辞による名詞とその意味 .....	39
2.1. 本研究の方向性 .....	39
2.2. 語彙的使役性について .....	40
2.3. 方法論 .....	43
2.3.1. データの収集 .....	43
2.3.2. 分析対象の選別・意味の記述 .....	43
2.3.3. 分析対象 .....	44
2.4. 有生物 .....	44
2.4.1. 使役的動作主 .....	47
2.4.1.1. -dor 派生名詞の表す使役的動作主 .....	47
2.4.1.2. -nte 派生名詞の表す使役的動作主 .....	47
2.4.1.2.1. 一定の透明性を有していると思われる使役的動作主を表す -nte 名詞 .....	48
2.4.1.2.2. 例外的な使役的動作主を表す -nte 名詞 .....	48
2.4.2. 非使役的動作主 .....	54
2.4.2.1. -dor 派生名詞の表す非使役的動作主 .....	54

2.4.2.2. -nte 派生名詞の表す非使役的動作主.....	55
2.4.3. 非動作主 .....	55
2.4.3.1. -dor 派生名詞の表す非動作主 .....	55
2.4.3.2. -nte 派生名詞の表す非動作主 .....	56
2.4.3.3. -nte の派生名詞の表す内項相当の対象.....	57
2.4.4. 一有生物を編入する接辞としての -dor と -nte — まとめ .....	57
2.5. 無生物 .....	58
2.5.1. 道具 .....	58
2.5.1.1. -dor 派生名詞の表す道具.....	59
2.5.1.2. -nte 派生名詞の表す道具 .....	60
2.5.2. 原因 .....	60
2.5.2.1. -dor 派生名詞の表す原因 .....	61
2.5.2.2. -nte 派生名詞の表す原因 .....	61
2.5.3. その他 .....	62
2.5.3.1. 非使役的道具.....	62
2.5.3.2. 内項相当の対象.....	63
2.5.3.3. 場所 .....	63
2.5.4. 一無生物を表す接辞としての -dor, -nte— まとめ .....	63
2.6. 考察 .....	64
2.7. 同一動詞を語根とする派生名詞のペア .....	65
2.7.1. 意味の差の観察された同語根ペア.....	66
2.7.1.1. 使役的動作主・道具を表す -dor 名詞と自動詞派生の -nte 名詞 .....	66
2.7.1.2. 使役的動作主・道具 VS. 原因.....	70
2.7.1.3. 非語彙的使役動詞と動作へのコントロールの有無.....	73
2.7.1.4. その他の意味の異なる最小対.....	74
2.7.2. 同義的な同一語根ペア.....	75
2.7.2.1. 両派生名詞が非使役的動作主を表すケース .....	75
2.7.2.2. 両派生名詞が原因を表すケース.....	77
2.7.2.3. 両派生名詞が非動作主を表すケース .....	78
2.7.2.4. 両派生名詞が使役的動作主・道具を表すケース .....	78
2.7.2.5. まとめ .....	78
2.8. 結論と次章以降での要検討事項.....	79
3. 両接辞による新語的派生名詞 .....	83
3.1. 新語の分析 .....	83
3.2. 方法論 .....	84
3.2.1. 新語辞書からの抽出.....	85

3.2.2. コーパスからの収集 -Hapax Legomenon-	86
3.2.3. 派生語の作成	86
3.3. 分析対象	87
3.3.1. 両接辞の現代における生産性	99
3.4. 分析	100
3.4.1. 使役的動作主	100
3.4.2. 非使役的動作主	103
3.4.3. 使役的道具	103
3.4.4. 非使役的道具	104
3.4.5. 原因	104
3.4.6. 非動作主	105
3.4.7. 内項相当の対象	106
3.4.8. まとめ	106
3.5. 同語根ペアの分析	109
3.5.1. 意味の差の観察されたペア	109
3.5.2. 意味の差の確認されなかったペア	118
3.6. 結論	121
<b>4. 両接辞による派生形容詞</b>	<b>124</b>
4.1. 分析の意義	126
4.1.1. 仮説	129
4.1.2. コロケーション	130
4.2. 方法論	132
4.2.1. 分析対象	132
4.2.2. コーパスとコロケーションの強度	134
4.3. 分析	137
4.3.1. コロケーションの違い	137
4.3.1.1. Limitador VS. limitante	138
4.3.1.2. Estabilizador VS. estabilizante	140
4.3.1.3. Perforador VS. perforante	141
4.3.1.4. Secador VS. secante	143
4.3.1.5. Cortador VS. cortante	145
4.3.1.6. その他のペア	146
4.3.1.7. まとめ	147
4.3.2. 共通するコロケーション	148
4.3.2.1. 原因	148
4.3.2.2. 非主語的用法	151

4.4. 結論 .....	151
<b>5. -dor/-nte 形容詞の非主語的用法 .....</b>	<b>155</b>
5.1. 非主語的用法について .....	156
5.1.1. 関係的形容詞 .....	157
5.2. 両派生形容詞の持つ関係的用法の自発性、生産性 .....	160
5.3. 派生形容詞の関係的用法の起源 .....	162
5.3.1.1. Rainer y Wolborska-Lauter (2012) .....	162
5.3.1.2. Tsutahara (2015b) .....	167
5.3.1.2.1. データ .....	167
5.3.1.2.2. 分析 .....	168
5.3.1.2.2.1. 両形容詞の関係的用法の起源 .....	170
5.3.1.2.2.2. 関係的用法が広がりをもせた時期 .....	171
5.3.1.2.2.3. 表現としての自発・自然性 .....	172
5.4. まとめ .....	173
<b>6. 関係的形容詞派生接辞としての-dor/-nte .....</b>	<b>176</b>
6.1. 方法論 .....	176
6.2. 分析 .....	178
6.2.1. 意味上の主語 .....	178
6.2.2. 意味上の主語の選択パターン .....	182
6.2.2.1. Acción purificadora VS. acción purificante .....	183
6.2.2.2. Efecto esterilizador VS. efecto esterilizante .....	184
6.2.2.3. Función moralizadora VS. función moralizante .....	185
6.2.2.4. その他のケース .....	186
6.2.2.5. 意味の上の主語の選択における類似性 .....	189
6.2.2.6. まとめ .....	192
6.3. インフォーマント調査 .....	193
6.3.1. アンケートの構成 .....	194
6.3.2. Acción を修飾する関係的形容詞の意味上の主語の選択 .....	197
6.3.3. Función を修飾する関係的形容詞の意味上の主語の選択 .....	198
6.3.3. Efecto を修飾する関係的形容詞の意味上の主語の選択 .....	200
6.3.4. Actitud を修飾する関係的形容詞の意味上の主語の選択 .....	202
6.4. まとめ .....	204
<b>7. 結論 .....</b>	<b>206</b>
7.1. 両接辞による派生語と多義性 .....	209
7.2. 両接辞による派生語の容認性 .....	211
7.3. 両接辞による派生語の意味上の差異と共通点 .....	212

参考文献 .....	214
------------	-----



## 0. はじめに

本研究の主要な目的はスペイン語の、動詞を名詞・形容詞化する接尾辞 *-dor/-nte*<sup>1</sup>が派生のプロセスの中で語の意味の決定にどのような影響を及ぼしているのかを記述することにある。そして、この記述を基に両接辞による派生語の持つ多義性・多機能性のメカニズム、両者の分布、および、類似する両接辞の共通点と差異を意味論の観点から説明することを目指す。

両接辞は形態、統語、意味論といった様々なレベルで類似している。

まず、形態論上の類似点として、両者は共に動詞に付加されることで、名詞、または形容詞を派生するという点が挙げられる。

### (1) 両接辞による動詞の派生

Jugar > jugador, matar > matador, estimular > estimulador, gobernar > gobernador

Caminar > caminante, cantar > cantante, variar > variante, secar > secante

また、動詞に付加される場合に比べ、生産性<sup>2</sup>は著しく限定されるが、両者ともに名詞から名詞、または形容詞を派生することもある。

### (2) 両接辞による名詞の派生

*-dor*: aguador, leñador, prosador, viador, viñador (NGLE 6.6. ñ)

*-nte*: comediante, romeriante, promesante, feriante (NGLE 6.10. d)

意味面でも両者の間には類似性がみられる。両接辞による派生名詞は意味論上、主語的とされる。これは両接辞による派生名詞は語根動詞の主語にあたる対象を表すことによる<sup>3</sup>。このことから、両接辞による派生名詞は「語根動詞の表す動作を実行する人・もの」と換言される。以下の jugar と派生名詞 jugador ならびに estudiar とその派生名詞 estudiante の関係を参照されたい。

### (3) 動詞と派生名詞の意味的対応関係

Juan juega al béisbol. フアンは野球をする。

1 NGLE は *-dor* の異形態として *-tor, -sor, -or* があるとし、本研究もこれに従う。また、Rossowová(2009)のように、*-nte* ではなく *-ante, -ente, -iente* を分析の最小単位とする立場存在するが、本研究は NGLE に従い、*-nte* を分析単位とする。

2 派生に関する文脈では、接辞の造語力、使用頻度を指す。詳しくは Plag(1999) および Plag(2006) を参照されたい。

3 「語根動詞」は両接辞の付加される動詞を指す。

Juan es jugador del béisbol. フアンは野球選手である。

Juan estudia japonés. フアンは日本語を勉強する。

Juan es estudiante de japonés. フアンは日本語の学生である。

また、先述のとおり両接辞による派生名詞は共に人以外の対象も表す。つまり、両者は多義的であるが、この多義の範囲にも共通する部分が多い。NGLE は両派生名詞の持ちうる意味タイプを以下のように分類している。

Los sustantivos derivados en *-dor / -dora* denotan **personas** (*trabajador*), **instrumentos** (*computadora*), **lugares** (*comedor*) y, en ciertos casos, admiten más de una interpretación (*agitador, impresora, secadora*), como se explicará más adelante<sup>4</sup>.

(NGLE: 6.6 a)

Se forma un gran número de sustantivos en *-nte*, de base verbal, que designan **personas** (*cantante*), **instrumentos** (*tirante*), **lugares** (*restaurante*, débilmente asociado con *restaurar* en la conciencia lingüística de los hablantes) y **productos**<sup>5</sup> (*calmante*), entre otras interpretaciones menos frecuentes que se examinarán en las páginas que siguen<sup>6</sup>.

(NGLE: 6.10 a)

また、両接辞は共に、動詞から形容詞を派生する。両接辞による派生形容詞もまた主語的とされるが、それは、この場合、修飾される名詞が語根動詞の主語相当の対象を表すためである。例えば以下の派生形容詞を含む名詞句は、*que V* という形に言い換えられる<sup>7</sup>。

#### (4) 主語的な派生語のパラフレーズ

Jefe fumador > Jefe que fuma

Fármaco calmante > Fármaco que calma

### 0.1. 指向性の接辞

両接辞による派生語は名詞、形容詞という統語範疇を問わず、語根動詞の主語と密接に結びついている。Laca (1993) はこうした性質を持つ両接辞による派生語を語根動詞の外項を編入 (*incorporar*) する、主語指向の派生語と規定している。主語指向の派生語と指向性を持

4 太字による強調は筆者による。

5 二章で述べる通り、*-dor* による派生名詞にもこの *producto* を表す用法がないわけではない: *blanqueador, inhibidor*。

6 太字による強調は筆者による。

7 Rainer (1999) は *que puede V* などの異なる換言パターンを紹介しているが、これはあくまでも総称性に基づく変種であり、語根動詞の主語相当の対象を修飾するという点は変わらない。

たない派生語は、同じ動詞を語根とするものであっても主語相当の名詞句を補語としてとるか否かで異なるふるまいをみせる。この性質は、本研究で扱う *-dor*, *-nte* とその他の接辞を隔てるものである。

例えば、動詞 *descubrir* を語根とする *-dor* による派生名詞、*descubridor* は主語指向の派生名詞である。一方、*descubrimiento* は当該動詞と指向性を持たない *-miento* 接辞からなる<sup>8</sup>。これら二種類の派生名詞は指向性の有無において異なり、両者は語根動詞である *descubrir* の外項相当の名詞句を補語としてとるか否かで異なるふるまいをみせる。まず、語根の *descubrir* であるが、通常、他動詞として用いられ、外項には発見者、内項には発見されるものがあてはめられる。

(5) Los españoles descubrieron América.

外項・発見者

内項・発見されるもの

動詞が派生される際には外項と内項は付加句として引き継がれる。しかしながら、この引き継ぎを、指向性を持つ派生語は自由に行うことができない。以下の例を参照されたい。

(6) *el descubrimiento de América por los españoles* (Laca 1993: 188)

(7) *\*el descubridor de América por los españoles* (ibid.)

(8) *el descubridor de América* (筆者による作例)

(9) *\*el descubridor por los españoles* (筆者による作例)

(6) の例における派生名詞 *descubrimiento* は指向性を持たない。それ故に、語根の外項・内項ともに付加句として継承されうる。

一方、本稿で扱う *-dor* 接辞による派生名詞 *descubridor* は (8) のように内項を引き継ぐことができるが、(7), (9) にみられるように、外項を付加句として継承することができない。これは、*-dor* がすでに語根の外項（発見者）を編入しており、さらに外項を付加句とすると余剰となるためである。

*-nte* 派生名詞も同様の制約を受ける。(10)の *visita* は指向性のない派生名詞であり、語根 *visitar* の外項（訪問者・*el Presidente*）および内項（訪問先・*San Sebastián*）をそれぞれ前置詞 *de, a* 句として継承することができる。一方、*-nte* による *visitante* は (11) のように、外項を引き継ぐことができない。これも *-dor* の場合同様、*visitante* にすでに外項が編入されていることから生じる余剰性によるものと考えられる。

---

<sup>8</sup> 本研究は指向性の接辞、*-dor*, *-nte* を分析対象とするが、*-miento* のような指向性を持たない接辞による動詞の名詞化も様々な先行研究で論じられている (cf. Martínez 1975, Pena 1980, Picallo 1999, Melloni 2007, Fradin 2012 等)。

(10) la visita del Presidente a San Sebastián en enero (Laca 1993: 188)

(11) \*el visitante del Presidente a San Sebastián en enero (ibid.)

本稿では Laca (1993) に従い、-dor/-nte 接辞を語根の主語を編入する外項指向の接辞として扱う。しかしながら、両者の間にはこれまでに指摘したように機能・意味面における類似性が観察されるが、差異も観察される。

第一に、両者にはそれぞれ、付加され得る動詞と付加され得ない動詞が存在する。つまり、両接辞は異なる分布をしている。例えば以下の派生は容認されない。これらの存在しない派生語は全て、もう片方の接辞によって派生される: \*sobrevividor/sobreviviente<sup>9</sup>。

(12) 容認されない -dor による派生語

\*sobrevividor, \*resultador, \*restador, \*delirador, \*participador, \*penitidor, \*intolerador 等

(13) 容認されない -nte による派生語

\*matante, \*creante, \*consumiente, \*marcante, \*goleante, \*libertante, \*generante 等

また、同じ動詞を語根とする両接辞による派生語のペアが少なからず存在し、そうしたペアを構成する二つの語の意味は往々にして異なるという事実も、両者が様々な共通点を持ちつつも、根本的には性質を異にするものであることを示している。

(14) interrogador (尋問者)/interrogante (疑問符), vividor (人生を謳歌する人物・誰かにたかって生きる人物)/viviente (生きている人物), vibrador (バイブレーター)/vibrante (振動音), colgador (ハンガー)/colgante (ペンダント), picador (刺す人物)/picante (刺激物), fulminador (怒鳴り散らす人物)/fulminante (起爆剤), concertador (仲裁人)/concertante (協奏曲), andador (素早く、もしくは長い距離を歩く人物・歩行器)/andante (歩く人物), espumador (ハンドミキサー)/espumante (泡立て剤), 等

これらのペアからも分かるとおり、両接辞は語根動詞の主語相当の対象を編入するが、両者による編入は完全に自由なものではない (例えば -dor はハンドミキサーを編入できても同じ語根 *espumar* の主語となりうる泡立て剤を編入することができない)。両接辞による編入はなんらかの規則に基づくものであるのか、もしそうであるのならばその規則はどのようなものであるのかという問題はこれまでに様々な先行研究で議論されてきた(Laca (1993), Rifón (1996-1997), Cano (2013) 等)。しかしながら後述するとおり、このパターンについては、いまだにその全貌が明らかになっていない。

先に述べた通り本研究の主要な目的は両接辞の意味的な性質を明らかにすることである。

---

<sup>9</sup> DRAE, 西和中における記載がないこと、および、コーパス *Corpus del español* における使用が確認されないことを非容認性の根拠とした。

そしてこの意味的性質を明らかにすることは、即ち、それぞれの接辞がどのような対象を編入し、また、編入することができないのかを明らかにすることであると考え。そして、この記述を基に以下の三点を説明していく

1. 両接辞による派生語の多義性
2. 派生語の容認性
3. 類似する両接辞の差異と共通点。

まず、1.として挙げた「多義性」であるが、先述の通り、両接辞による派生名詞には人だけでなく道具や場所を表すものがある。この意味において両接辞は多義的である。また、両接辞による派生語の一つ一つも、往々にして複数の意味を持つ: *marcador* (マークする人、スコアボード、マーカー)。本稿ではこの二重の多義性がなぜ、どのようにして生じるのか、そのメカニズムを接辞の意味的価値を明らかにしたうえで説明し、また、一つ一つの派生語について語根の動詞から、どのような意味を持ち得て、また、どのような意味を持ち得ないのか、その「多義の範囲」の予測も目指す。

次に、2.の「両接辞による派生の（不）可能性・派生語の容認性の予測」という点もまた、両接辞の編入のパターンを明らかにすることで概ね予測することが可能になると考える。例えば、先に、\**sobrevividor*, \**matante* という派生語が容認されず、存在しないことを紹介したが、この非容認性は、意味に軸足を置いて考えれば、-*dor* が生き残る人物を、-*nte* が殺人を犯す人物を編入することができないことによると推測される。つまり、両接辞がどのような意味タイプの外項を編入（不）可能であるかを明らかにすることは、両接辞による派生の可否を一定の度合いまで予測することにつながる<sup>10</sup>。

3.の「両接辞の類似性と差異」であるが、これまでにみてきたとおり、両接辞は似て非なるものである。その類似性と差異を意味の観点から説明したい。後述する通り、先行研究においては、両接辞の差異は議論の対象とされてきたが、類似性、共通点については特に言及されてこなかった。本研究では、両接辞には具体的にどのような共通点があるのかという点についても論じ、様々な点で類似している二種類の接辞が現代スペイン語において、それぞれ一定の生産性を維持し続けているのか、その意義も考察する。

また、これらの問題は非母語話者が躓きやすいポイントでもあり、したがって、上述の目的を達成することはスペイン語学だけでなく、スペイン語教育への貢献にもつながると考える。

本稿の構成は以下のとおりである。

まず第一章では、両接辞、ならびにその意味的差異に関する先行研究を概観し、設定した問題について何が明らかになっていて何が明らかになっていないのかを示したうえで、本

---

<sup>10</sup> 派生の可否は意味以外の要因にも左右されるため、「一定の度合いまで」とした。例えば、次章で紹介する阻止現象 (*bloqueo*) という要因がある。

研究にはどのような新奇性、意義があるのかを論じる。例えば、本研究ではコーパス等を用いた量的なアプローチを採用しているが、これは従来の質的な研究では困難であった網羅的な分析や、そうした研究で検証されることのなかった提案、仮説の検証を可能とするものである。また、同章では本研究の理論的枠組みと方法論上の位置づけについても言及する。第二章ではコーパスを用いて 20 世紀以降に一度以上使用され、かつ辞書に記載のある両接辞による派生名詞を網羅的に分析し、両接辞の外項編入のパターンは語根動詞の主語相当の対象における動作へのコントロールの有無、使役性という意味論的素性の値の組み合わせと密接な関係にあるという提案を行う。第三章ではこの仮説を、両接辞による新語的派生名詞を分析対象とし、検証を実施する。仮説の大筋での妥当性を示しつつ、必要な修正を加える。続く第四章では両接辞による形容詞を分析する。具体的には両派生形容詞がどのような名詞を修飾することができて、あるいは修飾することができないのか、またそれらが典型的に修飾する名詞はどのようなものであるかを明らかにする。この分析には、質的アプローチによる先行研究における予測の検証としての意義もある。第五章では Rainer (1999) が *uso nuevo* とする両派生形容詞の非主語的用法を記述する。この用法がどのようなものであるのか、いつ、どのように生じたのかを紐解いていく。第六章では、この非主語的用法における両派生形容詞にはどのような類似点と相違点があるのかを考察し、この問題は「意味上の主語」の使役性と意図性と密接に関連していることを示す。最終章では、*-dor/-nte* の編入に関わる規則を提示し、先に挙げた両接辞による派生語の多義性、分布、および両接辞の意味的な差異について包括的に論じる。

# 1. 先行研究・本研究の意義、位置づけ

これまでに接辞 *-dor*, *-nte* およびその差異に関する研究は様々な観点からなされてきた。本章ではその内の重要なものを概観し、両接辞について、何が明らかになっていて何が明らかになっていないのかを示す。そしてそのうえで、この問題に取り組む意義、および本研究の位置づけを述べる。

1.1.では両接辞の語源から現在に至るまでの変遷を、両接辞の通時的な分析を行った先行研究を紹介しながら確認する。1.2.では両接辞の意味上の差異を論じた研究の中でも特にインパクトのある Laca (1993)、および、Laca とは異なる角度から両接辞の差異の説明を試みた Cano (2013) を重点的に紹介し、これらの主要な先行研究に欠けていた視座がどのようなものであったのかを考察する。そして 1.3.では、これまでに残されている課題を紹介し、その解決には、コーパスをデータの収集および仮説の検証に活用することが有効であることを主張する。1.4.では、本研究の位置づけ、および設定した問題を解決することがスペイン語学だけでなく、周辺の領域にどのような貢献をなし、どのような意義を持つのかを論じ、1.5. では本研究が理論、方法論的にどのような性格を持つものであるのか、言語学という広い枠組みにどのように位置づけられるのかを述べる。

## 1.1. 両接辞の変遷

本節では分析対象である両接辞の語源、およびその現代にいたるまでの変遷について論じた先行研究を概観する。本研究は両接辞による派生語のみせる様々なふるまいを包括的に説明することを目指すものであるが、通時的な観点から扱えるものをまず明らかにしておきたい。

### 1.1.1. *-dor* の歴史的変遷

接辞 *-dor* の語源はラテン語の所謂動作主名詞 (羅・*nomina agentis*) を派生する接辞 *-tor* である。この *-tor* は動詞の過去分詞形、またはスピーヌム<sup>11</sup> (西 *supino*, 英 *supine*) に付加され、語根動詞の主語に相当する対象を表す名詞を形成する。この過去分詞に付加されるという性質の名残は現代スペイン語の *escritor* 等にみられる (cf. Cano (2013))。

(1) *laborare* > *laboratum* > *laboratore(m)* > *labrador*

*-dor* の語源である *-tor* の機能は人間、動作主を表す名詞を形成するものに限られていたが、先述の通り、現代スペイン語では *-dor* 名詞は動作主だけでなく道具、場所などを表す。また、名詞の他に形容詞も形成する。Rainer (2011) には、この単一の機能しか持たなかったラテン語の *-tor* 接辞が、多機能的かつ多義的である *-dor*、および対応する現代ロマンス諸

<sup>11</sup> 準動詞の一種で、形式的には過去分詞と同形。動詞を修飾して「～するために」という目的を表す。

語の接辞に至るまでの過程、変遷が詳しく記述されている。

Rainer (2011) によれば、-tor に生じた第一の新機能は形容詞を形成するというものであった。この点は様々な言語学者によっても指摘されており、形容詞としての用法が散発的に生じ始めたのは古典ラテン語、同用法が広がりをもせたのは後期ラテン語の時代であったとされている。

Latinists agree that the deverbal suffix *-or* of formations like *cunctat-or* ‘vacillator’ (< *cunctari* ‘to vacillate’, p.p. *cunctatus*), *victor* ‘winner’ (< *vincere* ‘to win’, p.p. *victus*), *defensor* ‘defender’ (< *defendere* ‘to defend’, p.p. *defensus*), etc. was purely agentive. This is what LEUMANN (1977: 358–359) says about Classical Latin, and for Late Latin the only innovation pointed out by FRUYT (1990) was the adjectival use of the suffix. This adjectival use, which is already attested sporadically in Classical Latin, was also continued directly in Romance, witness examples such as Old Spanish *caualleria* [...] *olvidadora de su tierra* ‘cavalry forgetful of their country’, which contains the adjective *olvidador* ‘forgetful’, derived from *olvidar* ‘to forget’ (cf. PATTISON 1975: 111–115)

(Rainer 2011:8)

Rainer は現代の -dor 接辞の特徴である「多義性」の獲得はこの形容詞としての用法が生じた後のことであり、それはこの形容詞用法と地続きであったとしている。-dor 名詞の動作主以外の意味で特に特徴的なものとして道具読みが挙げられるが、スペイン語以外のロマンス諸語においても、ラテン語の -tor を語源とする接辞はこうした道具読みを持つ。そこで、なぜ、動作主名詞が道具を表すのかという問題はスペイン語学だけでなく、その他のロマンス諸語の研究においても考察されてきた。

こうした問題を説明する仮説として、「擬人化説 (personalification)」がしばしば採用されてきた。道具など、無生物の擬人化は中世から行われており、この擬人化からの類推で -tor およびロマンス諸語の -tor を接辞による派生名詞が道具読みを獲得したと説明するものである。

Rainer によればこうした擬人化説の草分けは Meyer-Lübke のイタリア語文法における以下の記述であった。

Aufgrund einer oft eintretenden Metapher kann das Werkzeug, mit welchem eine Handlung ausgeführt wird, als der Träger oder als der Ausführende, also persönlich gedacht werden, und so können mit den Suffixen, die eigentlich lebenden Personen zukommen, auch Sachbezeichnungen geschaffen werden.

(Meyer-Lübke 1890: §498)



Translation: “Due to a frequent metaphor the instrument with which an action is carried out can be conceived of as the bearer or executer, i.e. as a person, and so suffixes which originally refer to living persons may also serve to create designations of objects.”<sup>12</sup>

フランス語学においても、Ronjat が擬人化説を採用している。

Par une métaphore toute naturelle [...] l’objet, l’instrument, outil, etc. qui sert à exécuter un travail peut recevoir un nomen actoris; parfois un même mot désignera et l’actor et l’instrument, ex. devanaire ‘dévideur; dévidoir’ [...].

(Ronjat 1937: 36)

Translation: “By a quite natural metaphor [...] the object, the instrument, the tool, etc. which serves for executing some work can receive a nomen actoris; sometimes, one and the same word will refer both to the actor and to the instrument, e.g. devanaire ‘reeler; reel’ [...].”<sup>13</sup>

スペイン語学においても、Menéndez Pidal がこの擬人化という見方をしている。

-tor se une en latín a temas verbales para expresar el agente, como en acusa-tor, lec-tor, fac-tor; pero en romance, además de este uso, el sufijo forma adjetivos: acusa-dor, salva-, o mediante una personificación, expresa también el instrumento (en vez del trūm, ūlu y otros del latín): calza-, parti-, cola-, destila-, trilla-dora, apisona-, y luego el lugar en que se hace algo: mostra-dor, come-, obra-, corre-.

(Menéndez Pidal 1968: § 82.2))

こうした擬人化説は Lüdke (2005) のような比較的新しい研究でも取り入れられている。

Es liegt dabei eine Übertragung des Merkmals ‘belebt’ in Personenbezeichnungen auf Unbelebtes vor, die einen neuen, nicht im Latein angelegten Bezeichnungsbereich schafft.

Translation: “We have here a transfer of the feature ‘animate’ in designations of persons onto inanimate entities, which constitutes a new conceptual domain still unknown to Latin.”<sup>14</sup>

(Lüdtker 2005: 252)

---

<sup>12</sup> 翻訳は Rainer (2011: 11) から引用

<sup>13</sup> 翻訳は Rainer (2011: 11) から引用

<sup>14</sup> 翻訳は Rainer (2011:11) から引用

このように、スペイン語学だけでなくロマンス諸語の *-tor* 由来の接辞の多義性を説明するために提案される擬人化説であるが、Rainer はこれを否定している。その根拠として Rainer は 1. 動作主読みを持たず、道具読みのみをもつ派生名詞があること、2. 動作主用法よりも先に道具用法を持った派生名詞があること、3. そして後述する場所読みという擬人化説では説明することの難しい用法が存在するという三点を指摘している。

1. および 2. の事実は、Rainer による 1500 年以前からの使用が確認されている中世スペイン語 23 の道具を表す派生名詞の、コーパス CORDE<sup>15</sup>における、道具読みと動作主読みの初出時期の調査から明らかになった。表に見られるように、大半の道具読みを持つ派生名詞には対応する動作主読みが存在しない。また、*asador* や *follador* のように道具読みが動作主読みよりも前の時代に確認された派生名詞も存在する。

表 1. Rainer (2011: 28)による中世スペイン語における *-dor* 名詞の多義性発生時期

	instrument	agent		instrument	agent
<i>cobertor</i>	1267	–	<i>pelador</i>	1438	1400
<i>pisador</i>	1268	1200	<i>bastidor</i>	1440	–
<i>foradador</i>	1277	–	<i>colador</i>	1450	–
<i>asador</i>	1295	1450	<i>lamedor</i>	1450	–
<i>tajador</i>	1295	–	<i>majador</i>	1450	–
<i>rascador</i>	1330–1343	–	<i>aparador</i>	1477–1496	–
<i>follador</i>	1380–1385	1400	<i>tapador</i>	1486–1499	
<i>alimpiador</i>	1381–1418	–	<i>cerrador</i>	1492	–
<i>menador</i>	1385	–	<i>purgador</i>	1493	–
<i>picador</i>	1423	1325	<i>mosqueador</i>	1495	–
<i>pasador</i>	1385	1208			
<i>partidor</i>	1438	1180	<i>raedor</i>	1495	1256

こうした根拠から Rainer は道具読みが無生物の擬人化であるとする説を否定したうえで、中世における道具を表す用法はカタルーニャ語、アラゴン語からの翻訳借用および、産業革命以降の英語・フランス語からの翻訳借用という異なる時代の二系統の経路からスペイン語に流入してきたとしている。

まず中世におけるカタルーニャ語・アラゴン語からの影響であるが、これらの言語ではス

<sup>15</sup> スペイン王立アカデミーによるコーパスで、正式名称は *Corpus Diacrónico del Español*。スペイン語の最初期の時代から 1974 年までの中南米を含めたスペイン語圏全域におけるデータからなる主に通時的な研究用のコーパス。

ペイン語では生じることのなかったラテン語 *-torium* 接辞の *-tor* への融合 (conflation) が起きている。*-torium* はまさに、道具、場所を表す接辞であり、この接辞が音韻上の類似性から *-tor* へと融合された結果、上述の言語では *-tor* を語源とする接辞が動作主、道具、場所を表すようになった。しかしながら、スペイン語においては、周知のとおり、現代においても *-tor* は *-dor*, *-torium* は *-dero*, *-torio* と独立を保っており (cf. Pharies 2002)、スペイン語の内部で *-dor* が道具、場所読みという新たな意味的価値を獲得することは考えづらい。そこで、Rainer は *-dor* の多義性は隣接するカタルーニャ語やアラゴン語の *-dor* の翻訳借用に端を発するとしている。実際に先の表 1 における道具読みを持つ名詞に対応するカタルーニャ語の派生名詞はスペイン語のものよりも早い時期から使用されている。

Here are, for example, some potential Catalan models for the instrument nouns of Table 9 (cf. Coromines 1980–91): *cobertor* ‘cover’ (1181), *foradador* ‘gimlet’ (without date), *tallador* ‘plate’ (1271), *follador* ‘vat for treading grapes’ (1024), *passador* ‘sharp arrow’ (1330), *pelador* ‘depilatory’ (1399), *bastidor* ‘frame’ (without date), *colador* ‘sieve’ (ca. 1450), *mallador* ‘pestle’ (attested in dialects), *tapador* ‘lid’ (without date), *porgador* ‘recipient used for cleansing’ (in some dialects).

(Rainer 2011: 28)

中世におけるカタルーニャ語、アラゴン語がスペイン語の *-dor* 接辞が多義性を獲得した際のモデルであったように、産業革命以降の時代では英語、フランス語が同様にモデルとなった。Rainer は 19 世紀半ば以降の、道具を表す *-dor* の用法の生産性の高まりは産業革命の副次的な効果であったとしている。イギリスでの産業革命以降、その時代以前には存在していなかった新たな道具や機械が発明され、こうした新たな発明品は、その道具の役割にあたる動作を表す動詞に *-er* 接辞<sup>16</sup>を付加した派生名詞を用いて表現されることとなった。この形態上の着想がフランスを経由しスペインに流入された結果、スペイン語では *-er*、フランス語 *-eur* 接辞に対応する *-dor* が新たな道具や機械を表す際に用いられるようになったのではないかと述べている: *ventilador*, *conductor*, *condensador*, *elevador*, *generador* 等。

また、この時代にはスペイン語内部の変化として、「名詞 + *-dor* 派生形容詞」句における名詞の消失 (elipsis) という現象が挙げられる。この現象は名詞が消失した結果、残された派生形容詞が句全体の意味を引き継いだ名詞として使用されるというものである。例えば、*secadora* のような、女性形で機械を表す派生名詞が同様に 19 世紀以降増加している。これらの名詞の多くはもともと、*máquina secadora* のような「名詞 + 派生形容詞」という名詞句であり、名詞句の主要部、*máquina* が省略された結果生じたものであるという見解を

<sup>16</sup> スペイン語 *-dor* 接辞に対応するこの英語接辞もまた多義的で様々な先行研究において考察の対象となっている (cf. Lieber 2004, Alexiadou & Schäfer 2010)。また同系のドイツ語 *-er* 接辞は英語 *-er* 接辞よりもさらに多義的で、動作主や道具だけでなく事象も表す (cf. Kelling 2001)。

Rainer は示している。

次に、-dor 名詞の持つ意味タイプとして代表的なものに「場所」がある。ここでも道具の場合同様、なぜ、-tor と -torium がそれぞれ独立を保っているスペイン語において -dor 接辞が場所を表す用法を獲得したのかが問題となる。Rainer (2011) は、-dor 名詞が場所読みを持つようになったのも、-tor に -torium が融合したプロヴァンス語、カタルーニャ語、アラゴン語、古フランス語からの翻訳借用であるとしている。こうした外国語からの借用、翻訳借用は dormitor (現在の dormitorio), mirador, obrador などがある。これらの場所を表す用法が外国語からの借用であったとする根拠は「おしゃべりをする場所」を表す名詞、parlador である。「話す」という動作を表す動詞としてロマンス語にはラテン語の parabolare を語源とするものと、fabulari を語源とするものがある。スペイン語では初期から一貫して fabulari を語源とする hablar が用いられている。そして中世に出現した、「おしゃべりをする場所」を表す派生語はスペイン語では用いられていない parabolare 系の動詞を語根とする parlador であった。プロヴァンス語では「話す」という動作を表すのに parabolare 系統の動詞が用いられており、このことから場所読みは外国語からの借用であると考えられ、こうした借用語からの類推で -dor が場所を表すのに用いられるようになったのではないかと Rainer は述べている。そうしたスペイン語内で生じた場所読みを持つ派生名詞には comedor などがあるが、現代にいたるまで、この場所を表す用法の生産性は限定されている。

#### 1.1.2. -nte の通時的変遷

-dor がラテン語の時代から名詞を派生する接辞であったのに対し、-nte の語源であるラテン語の -ns/-ntis は、能動動詞、形式所相動詞 (verbo deponente)<sup>17</sup>の現在幹を語根とし、現在分詞を形成する屈折接辞であった。

a. AM(A)- > AMANS, AMANTIS

tema prest. inf. AMARE ‘amar’ participio de presente

b. HORT(A)- > HORTANS, HORTANTIS

tema prest. inf. HORTOR ‘exhortar’ participio de presente

(Cano 2013: 68)

ラテン語が後期ラテン語の時代を迎えたころ、-ns, -ntis は徐々に屈折接辞としての機能を失いはじめ、形容詞・名詞を形成する派生接辞としての性格を強めていった。しかしながら、現代スペイン語の -nte 派生語も、特に懐古主義的な文脈において、現在分詞のように用いられることがある (Lapesa 1968, Cano 2013, Tsutahara 2015a)<sup>18</sup>。これはラテン語における

<sup>17</sup> 統語機能、意味論の面では能動的であるが、形式が受動態である動詞を指す。

<sup>18</sup> この用法は生産性が低く、使用されるレジスターも限定されており、本研究ではこれ以上分析の対象としない。

-ns 接辞の有していた機能の名残と考えられる。

Finalmente, una vieja camioneta Ford amarilla se detuvo un poco trastabillante.

(Tsutahara 2015a: 485)

このように、-nte は本来、分詞を形成する屈折接辞であった。その述語的な性質故に、現代においては -dor とは異なり、本質的には形容詞派生接辞であると考えられる。特に、Leumann & Hofmann (1928) が二世紀後半には、形容詞としての用法が現在分詞を作る用法に比べ、すでに優勢であったとしているように、-nte は形容詞を派生する際の方が、生産性が高い<sup>19</sup>。そして、-nte の多義性についても、当該接辞が根本的に形容詞派生接辞であることから説明されるだろう。-nte による名詞であるが、それは N + -nte 形容詞句の N が消失した結果生じたものであると考えられる。つまり、-nte による形容詞が修飾する名詞の中には人間だけでなく物や場所を表すものがあり、そうした「物や場所を表す名詞 + -nte 派生形容詞」という名詞句が現代の人以外を表す -nte 名詞の起源であったと推測される。時代の経過とともに、一部の道具・機械を表す -dor 名詞の場合同様、修飾される名詞が消失した結果、物や場所を表す -nte による名詞が生じたと考える。

#### 1.1.3. 通時的観点から明らかになったこと 共時的分析の必要性

ここまでは先行研究を概観しながら、両接辞が現代に至るまでに経てきた歴史的変遷を紹介し、両接辞による派生名詞は動作主や道具、場所など様々な類似した意味を持つが、そこに至るまでの道のりは異なるものであったこと示した。

また、現代スペイン語において、両者は名詞と形容詞を形成し、-dor は名詞を、-nte は形容詞を派生するときにより生産性的である。この事実も語源と結び付けて説明されるだろう。これは -dor の語源は名詞を作るためだけに用いられる接辞であり、-nte は現在分詞という述語を形成するために用いられるものであったためであると考えられる。他にも、-nte による派生語のみが現在分詞のような用法を持つが、これも両接辞の語源と関連付けて説明されるだろう。

しかしながら、こうした歴史的変遷を明らかにすることは、冒頭で設定した問題のすべてを解決するものではない。例えば、両接辞は人や道具、場所などを表すが、それぞれに表すことのできる人、道具、場所と表せないものがあるのは何故なのだろうか (\*matante ‘殺人者’, \*sobrevividor ‘生存者’, picador ‘刺す人’/picante ‘刺激物’)。この分布に何らかの規則性はあるのか、あるとすればどのようなものであるのか。こうした問題に対して通時的観点から十分な説明を与えることは不可能である。

<sup>19</sup> 二章で紹介する通り、拙稿でも -nte 接辞の形容詞を派生する接辞としての生産性の高さを確認している。また、Pharies (2002) は形容詞派生接辞と -nte を性格付け、Laca (1993) や Cano (2013) など、主要な先行研究も同様の見解を示している。

スペイン語だけでなく、人間言語全般における語形成の可否を左右する要因に、阻止現象(西・bloqueo, 英・blocking) 等がある。これはなんらかの人や物を表す単語がすでに存在する場合、当該の人や物を表す別の単語は形成されづらいとするものである。例えば、Laca (1993) は阻止現象のスペイン語における事例として *ladrón* という単語があるので *robador* という派生語は存在しない<sup>20</sup> という例を挙げている。よって、*-dor* ないし *-nte* による派生名詞のどちらかが、先に何らかの動作主、道具、場所を表す場合、もう片方の接辞による派生名詞が同じ対象を表すことがないのは阻止現象の結果と解釈することは可能であろう。しかし、そうだととしても、“*persona que mata*” を表すために、なぜ、*-dor* が選択され、*-nte* が選択されなかったのかという疑問は残る。この問題については別の角度から、つまりは *-dor/-nte* それぞれに固有の意味的な性質に関する共時的な問題として考察される必要があるだろう。次節では、実際に、こうした観点から、派生の可否、派生語の意味決定の規則性について考察、提案を行っている先行研究を紹介する。

## 1.2. Laca (1993)

本節では Laca (1993). *Las nominalizaciones orientadas y los derivados españoles en -dor y -nte* を紹介する。この研究はおそらく、両接辞の多義性のメカニズムをとりあげた最初期の研究の一つであり<sup>21</sup>、両接辞の意味的な性質をめぐる一連の研究の中で最も影響力のあるものであると思われる。

先述の通り、Laca (1993) は *-dor/-nte* は、語根動詞の外項を編入する接辞であるとしている。

[...] los derivados en *-dor* y en *-nte* incorporan el argumento que corresponde al sujeto del verbo de base en una construcción activa.

(Laca 1993: 191)

そして、両接辞は異なる基準にしたがって外項の編入を行っており、これが両者の意味的な差異であるとしている (cf. Laca (1993: 201) )。Laca は、両接辞の典型的な編入のパターンを以下のように記述している。

*-dor*

<sup>20</sup> DRAE には *robador* が登録されている : *robador*; *dora* 1. adj. Que roba. U. t. c. s. しかしながら *robador* と *ladrón* は使用頻度の上では圧倒的に後者が上回っている。Corpus del español では前者の用例が 3 件にとどまるのに対し、後者は 255 例確認されている。この頻度の差は阻止現象が生じた結果であると考えられる。

<sup>21</sup> スペイン語学だけでなく言語学一般において、接辞、および派生はその音韻面が主に議論の対象とされてきたため、意味面に関する研究は近年になるまでなされてこなかった。この点については 1.5.1 節を参照されたい。また、Laca (1993) よりも前に 両接辞による派生語の多義性を扱った研究として Beniers (1992) がある。この研究は両タイプの派生語の意味の多様性を紹介したもので、接辞そのものの意味に関する言及はない。

“[...] incorporan prototípicamente sujetos que corresponden a instancias causales de procesos agentivos controlados por humanos en particular de procesos transitivos”

(Laca 1993: 201-202)

-nte

“[...] incorporan prototípicamente sujetos que corresponden a entidades directamente involucradas en un estado de cosas no controlado, en particular en procesos intransitivos”

(Laca 1993: 202).

図式化していえば、Laca は外項の有生性 (humano vs entidad)、語根の表す動作・状態へのコントロール<sup>22</sup>の有無、そして参加する動作・状態の(自)他動性から両接辞が典型的に編入する外項を規定しているということになるだろう。

先述の通り、スペイン語には語根を同じくする両接辞による派生語のペアが少なからず存在し (limitador/limitante)、往々にしてそうしたペアを構成する派生語の意味・用法は異なる。Laca (1993) は以下に挙げるペアの意味のコントラストはそれぞれの接辞が、先に述べた異なる基準に基づき外項を編入する結果として説明可能であるとしている。

例えば動詞 *vivir* からは *vividor/viviente* という二種類の派生名詞が形成されるが、その意味は異なっている。後者の意味が単に生きている人物である一方で、前者は人生を謳歌しようとする人物、または他人にたかることで生きていこうとする人物を指す。Laca によればこうした意味のコントラストが生じるのは偶然ではなく、それぞれの接辞の異なる意味的性質と結び付けて説明される。

*Vivir* には自動詞と他動詞、両方の用法がある。前者は単に外項が生きているという状態にあることを表し、後者の用法では *Dedicados a vivir la vida*. (西和中・*vivir* の項) のように、外項が意思をもって人生を謳歌するという出来事が表される。後者の場合、外項にあたる人物は *vivir* という動作<sup>23</sup>へのコントロールを有していることになる。換言すれば、動詞 *vivir* の主語にはコントロールを持つ他動的なものと、持たない自動的なものがあるということになる。

そして派生名詞の *vividor/viviente* であるが、これら二つの派生名詞が先に紹介した意味になるのは、それぞれの接辞が優先的に編入する外項の意味タイプが異なるためである。つまり、-dor であれば、他動かつコントロールを持つものを優先的に編入するので *vividor* は他動詞としての *vivir* を引き継いだものとなり、*viviente* は -nte がコントロールを持たない自動的な外項を編入しやすいために、自動詞としての *vivir* を引き継いだ、と説明されるだ

<sup>22</sup> Laca はこの素性の明確な定義を示していないが、概ね、意味論、語彙意味論一般で用いられているような意味合いでこの素性を使用していると思われる。一般に、動作に対して *control* を持つということは、意思を以てなんらかの動作を開始、または終わらせることができることと理解されている (cf. Demirdache & Martin 2015)。

<sup>23</sup> 他動詞の *vivir* は命令形や進行形で使用されることから活動動詞であると考えられる。

ろう。

この他にも、*hablador* (よくしゃべる人物 [+コントロール])/ *hablante* (なんらかの言語を話す能力を持った人物 [-コントロール])、*compositor* (作曲家 [+コントロール])/ *componente* (構成物 [-コントロール])などのペアにも同様の意味上の対立がみられる (cf. Laca 1993: 202)。

また、Laca は両タイプの派生名詞の表す無生物の下位分類として「厳密な意味での道具 (*instrumento en sentido estricto*)」と「物質を表す名詞 (*nombre de masa*)」という二種類の範疇を設けている。前者には何らかの目的のために作られた人造物を、後者には一定の効果を及ぼす物質 (典型的には化学物質) が該当する。こうした範疇が *-dor* と *-nte* の差異に関する議論に必要となるのは、*-dor* 派生語の表す (修飾する) 無生物は典型的に厳密な意味での道具であり、*-nte* の表す・修飾するものは後者であるためである。この分布も先に引用した両接辞の外項の編入に関する、それぞれに特有の条件と関連付けて説明される。つまり、道具とは、動作主がなんらかの目的のために使用するものであり、従って、道具が用いられる際、その事象には常に動作主のコントロールが介在している。よって、*-dor* による派生語は道具と密接に結びついていると Laca は述べている。一方、化学物質などはそれ単独で、自発的になんらかの変化を引き起こす。こうした事象にはなにもものかのコントロールが働いているとは考えがたく、よって *-nte* が典型的にこうした対象を表し、修飾するのだとしている。この主張の根拠として Laca は *secador* (ドライヤー)/*secante* (吸い取り紙) というペアを挙げている。

このような、動作に対するコントロールの有無を、両接辞を区別する要因とする見方は後続の研究でも支持されている (cf. Rifón 1996-1997, Gràcia *et al.* 2000, Tremblay 2006)。

### 1.2.1. Laca (1993) の問題点

両接辞の意味的差異を論じ、両者による派生語の意味は一定の規則に基づき決定されると主張した Laca (1993) は両接辞に関する新たな角度からの分析への道を拓くものであったと評価できるだろう。後述するように、接辞および派生における意味に関する研究が広く、活発に取り組まれるようになったのは 21 世紀以降のことである。したがって、この研究は極めて先進的なものであったといえる。しかしながら、Laca の研究に問題がないわけではなく、特に *-nte* の記述については検討されるべき事項が残されているように思われる。

Laca は語根動詞の表す動作に対してコントロールを持たない無生物を表す、もしくは修飾することが *-nte* のもっとも典型的な機能とあるとしている。しかし、*-nte* にはコントロールを持つ対象を表す、またはそうした対象を修飾していると考えられるケースが散見される。Cano (2013) や Tsutahara (2014) がこの点を指摘している。

*mujer suplicante, sacerdote celebrante, renunciante...*

(Cano 2013: 145)



atacante, caminante, visitante, ayudante, navegante

(Tsutahara 2014 で扱ったデータより)

このようなケースを根拠に、先に挙げた二点の研究は *control* という素性の不在は *-nte* 接辞の意味的性質を特徴づけるものではないとしている。

En este punto, es relevante hacer hincapié en el hecho de que los datos de (35) refuerzan nuestra hipótesis inicial de que el sufijo *-nte* no lexicaliza únicamente (o no se combina forzosamente con) causas no controladoras de la acción, sino también con agentes o iniciadores con control.

(Cano 2013: 145)

また、Laca は「典型的に (*prototípicamente*)」という語を、両接辞を特徴づける際に用いているが、Laca のいう典型性は何に基づくものなのか明らかにされていない。Laca (1993) にはデータの全貌、データの収集に関する方法論なども説明されておらず、おそらく当該の研究で分析対象として扱われている語は著者の思いつく範囲のものであったように思われる。研究者の内省に基づくこうした研究にはその研究独自の価値があると考えるが、このように明らかな反例が少なからず挙げられる以上、Laca の主張については、なんらかの客観的な形で検証される必要があるだろう。

### 1.3. Cano (2013)

Laca (1993) の *control* という意味素性の有無に基づく両接辞の差異に関する説明を否定した Cano (2013) は Laca とは異なる視点から、両接辞の差異を説明することを試みている。この研究は両接辞の差異を統語論の観点から明らかにし、両接辞の持つ構造を新構築主義 (*neo-constructionism*) 的モデルで提示することを目指すというものであるが、理論化の前提として、意味面を含めた両接辞の細緻な記述がなされている。

両接辞はどのような外項を編入 (不) 可能であるかという観点から両接辞の差異を示すことを試みた Laca とは異なり、両接辞が付加され得る動詞がどのような意味的条件を満たすものであるのか、換言すれば、両接辞はそれぞれ、どのような動詞に付加 (不) 可能であるかを記述し、この観点から両接辞の差異と多義性のパターンを説明するという方向性をとっている。次節以降では Cano の提案するそれぞれの接辞による付加の可否に関わる条件がどのようなものであるのか概観する。

#### 1.3.1. *-dor* の付加: 動詞の動性

Cano (2013) は以下に挙げる動性 (西・*dinamicidad*) を持たない動詞に *-dor* が付加不能であることから (*presidir* > \**presidor*, *brillar* > \**brillador*, *dormir* > \**dormidor*, *yacer* > \**yacedor*, *comandar* > \**comandador*, *residir* > \**residor*, *esperar* > \**esperador*)、*-dor* の付加可能な動詞は

まず、動性 (*dinamicidad*) を持つものであるとしている。

Los datos de (31) sugieren que *-dor* se muestra parcialmente sensible a la *dinamicidad* del verbo que selecciona, al no adjuntarse a verbos no dinámicos.

(Cano 2013: 262)

また、*-dor* は非対格動詞<sup>24</sup>に付加されえない (*\*mori-dor \*aparece-dor \*alcanza-dor*) ことから、*-dor* が付加される動詞は動性を持つだけでなく、動作をコントロールするものを外項にとるものとしている。

Desde el punto de vista sintáctico, los verbos puntuales suelen ser verbos inacusativos; es decir, verbos que disponen de un solo argumento que carece de toda agentividad o control, por lo que tampoco son buenos candidatos a la hora de formar derivados en *-dor* (9a).

(Cano 2013: 253)

このように規定することで、まず、*-dor* 名詞が典型的にあらわす対象が動作主や道具にあたることが説明される。動作主と道具は動的な動詞のコントロールをもった外項として生起するためである。換言すれば、これらの対象は、*-dor* の要求する動性とコントロールという性質を備えたものであることによって、*-dor* 名詞によって典型的にあらわされるといえるだろう。

Cano の主張は Maienborn (2005) のいうところの Davidsonian state、Fábregas & Marín (2012) のいう *Actividades no dinámicas* というクラスに属する動性に乏しい動詞に *-dor* が付加されないという事実によっても支えられている。Davidsonian state という範疇に属する動詞の主語には一定の意思性、control が認められるものの、その動詞の表す動作は動きを伴わない。従って、状態動詞と活動動詞の中間に位置するとも考えられている。

*\*presididor, \*vigilador, \*brillador, \*yacedor, \*esperador, \*resididor*

(Cano 2013: 254)

*-dor* の動性・control との強い結びつきは以下のような派生名詞にもみられる。先述の通り、*-dor* は動性、外項に control のない動詞、つまり状態動詞や非対格動詞に付加されづらいが、完全に不可能というわけではない。しかしながら、*-dor* がこうした動詞に付加される際には、派生語は強い動性・意思性を帯びる。つまり、実質的には動性と意思性のある活動動詞に付加されていると考えられる。

<sup>24</sup> 主語の意思に関係なく遂行される動作を表す自動詞を指す。スペイン語の非体格動詞に関する詳細な研究として、Cifuentes (1999a, 1999b) がある。

非対格動詞に付加されるケース：entrador, salidor, llegador

状態動詞に付加されるケース：sabedor, conocedor, vividor

(Cano 2013: 254)

Entrador は自身とは関係のない問題に積極的に「介入」する人物を、salidor の語根には「娯楽目的で出歩く・外出する」という意味があるが、この意味を基にした「よく遊びに出かける」人物、llegador は「ラストスパートをかける」人物をそれぞれ表している。いずれの語根動詞も非対格動詞と考えられてきた動詞であるが、意思性を持った非能格的用法もないわけではない。-dor がこうした動詞に付加された場合、後者の用法から派生名詞が形成される。

次に状態動詞に -dor を付加することで派生された sabedor, conocedor, vividor であるが、「知っている」という状態を表す動詞からなる前者二つであるが、いずれも単に何かを知っている人物ではなく、何かを知るために主体的を勉強し、専門的な知識を身に着けた人物を表す際に用いられる。Vividor についても、単に生きている人物ではなく、主体的に人生を謳歌しようとしている人物、または、他人にたかって生きようとする人物を表している。このように、状態動詞そのものは -dor の語根になりえないわけではない。しかしながら、その場合、派生名詞にはコントロールが付随する。

このように、-dor は動性とコントロールのある外項を持つ動詞にのみ付加されると Cano は述べている。この点に関しては Laca と概ね同じ観点からの説明であるといえるだろう。

### 1.3.2. -nte の付加: 語根動詞の非有界性

一方の -nte による派生を可能とする条件であるが -dor のものとは全く異なるものを挙げている。Cano によれば、-nte 接辞は語彙的に非有界性 (西・atético, 英・atelic) の動詞にのみ付加され、そうした動詞の外項を引き継ぐとしている。語根の語彙アスペクトを、派生を左右する主要な要因であるとする説は Laca をはじめ、この問題に関する先行研究では提案されてこなかったものである。よってこの観点は Cano (2013) の独自のものと評価されるだろう。

Por otro lado y respecto a las restricciones de selección sobre la base, en el caso de los adjetivos en *-nte*<sup>25</sup>, el aspecto léxico del verbo restringe la derivación. Parece que la inmensa mayoría de los adjetivos selecciona bases verbales de carácter aspectual atético o no delimitado. Esto es, *-nte* se muestra sensible al aspecto léxico del verbo al que se une, seleccionando una interpretación semántica (aspectual) particular.

<sup>25</sup> Cano は -nte は形容詞派生接辞であり、同接辞による名詞は -nte 派生形容詞の一部が名詞化したものとする立場をとっており、例えば「-nte による派生語」のような呼称は用いず、*adjetivo* という語を用いている。

Cano の主張は以下に挙げる根拠に基づく。

第一に Cano は *-nte* は活動動詞 (西・*verbos de actividad*, 英・*verbs of activity*) に付加されることが非常に多い<sup>26</sup>ことを挙げている。活動動詞とは動性を持ち、かつ語彙的有界性を持たない意味クラスの動詞である (cf. Vendler 1967)。Cano は活動動詞から派生された *-nte* による派生語として、*circular* > *circulante*, *correr* > *corriente*, *girar* > *girante*, *susurrar* > *susurrante*, *negociar* > *negociante*, *vibrar* > *vibrante*, *arder* > *ardiente*, *ondear* > *ondeante*, *traficar* > *traficante*, *andar* > *andante*, *viajar* > *vijante*, *rodar* > *rodante*, *navegar* > *navegante*, *gobernar* > *gobernante*, *habitar* > *habitante*, *brillar* > *brillante* などを挙げている。この内の、*negociante*, *andante*, *vijante*, *navegante*, *gobernante* 等は、形容詞として用いられる際には明確な意思をもって語根動詞の表す動作を遂行する人物を表す名詞を修飾し、名詞として用いられる場合にはそうした対象を表す。このことから、Cano は *control* の有無は *-nte* による派生の可否に直接かわるものではないとしている。

ほかにも *-dor* 接辞が付加されにくい状態動詞 (動性のない動詞 (西・*verbos de estado*, 英・*state verbs*)) も非有界的であるため、*-nte* は付加されやすい: *abundar* > *abundante*, *circundar* > *circundante*, *constar de* > *constante de*, *lindar con* > *lindante con*, *consistir en* > *consistente en*, *depender de* > *dependiente de*, *pertenecer a* > *perteneciente a*, *sobrar* > *sobrante*, *distar* > *distante*, *existir* > *existente*。

また、有界と非有界、両方の語彙アスペクトを持つ動詞にも *-nte* は付加されうるが、この場合、後者の用法におけるもののみに付加されるとしている。以下のような派生形容詞がこれに該当する: *descender* > *descendente*, *ascender* > *ascendente*, *anunciar* > *anunciante*, *limitar* > *limitante*, *colgar* > *colgante*, *restar* > *restante*, *seguir* > *siguiente*, *componer* > *componente* (p.86)。

Cano は *descender* を例に、この点を詳述している。*Descender* の有界的用法と非有界的な用法には以下のようなものがある。

El camino descende por la colina. 非有界

Un montañero vasco descendió El Aneto (en dos horas). 有界

(Cano 2013: 87)

前者には動性もなく、また、下っているという状況の終わりが語彙的に想定されづらいことから、状態動詞、つまり非有界的である。一方のケースでは、*descender* は動性を帯び、かつ下山という明確な動作の終結点が設定されていることから有界的である。このように、*descender* には状態動詞としての非有界的な用法と達成動詞としての有界の用法がある。そして、*descender* の *-nte* による派生語 *descendiente* は前者のみを語根とする。

<sup>26</sup> 後述する通りどの程度多いのかという量的な根拠は Cano (2013) では挙げられていない。

un camino descendiente

\*un montañero descendiente de El Aneto

(Cano 2013: 87)

こうした事実が Cano の *-nte* は非有界動詞にのみ付加されるとする主張の根拠となっている。

*-nte* はこのように、語彙的に非有界性の動詞にしか付加されないために、典型的には活動動詞、状態動詞に付加される。しかし、実際に、*-nte* は *-izar* 動詞<sup>27</sup>のような語彙的使役動詞にも付加される。語彙的使役動詞の多くは語彙的な有界性を持つものであり、Cano の主張と食い違うものがあるように思われる。この点については、Cano は *-nte* が付加される際の語彙的使役動詞は総称読みを受けるためであるとしている。語彙的使役動詞が総称的に用いられる際には特定の目的語などが想定されず、故に非有界的になると Cano は述べている。

Crucialmente, este tipo de predicados son los que derivan adjetivos en *-nte*. En estos casos, el sufijo se adjunta a un verbo que está subespecificado para telicidad, seleccionando una lectura disposicional-potencial, que siempre es estativa y atética

(Cano 2013: 99)

総称・能書き的に用いられる使役動詞から派生された *-nte* 形容詞として以下のようなものを挙げている。

- a. objeto cortante
- b. crema hidratante
- c. papel secante
- d. líquido disolvente

Los SN de (75) (筆者注：上記の a-d の例) se interpretan de forma disposicional-potencial. El SN *líquido disolvente* podría parafrasearse como ‘un líquido que puede o tiene la capacidad de disolver’. Nótese que el predicado ‘poder’ es en este contexto no dinámico, se refiere a capacidades de individuo en principio no sujetas a cambio temporal y, por tanto, convierte los eventos télicos en atéticos.

(Cano 2013: 99)

---

<sup>27</sup> 英語の *-ize* 接辞に相当する、名詞もしくは形容詞に付加され、目的語を語根の名詞・形容詞に変化させる動作を表わす接尾辞。

このように、Cano は語根動詞の動性および外項の *control* が派生の条件となっている *-dor* とは異なり、*-nte* は非有界動詞にのみ付加され、その動詞の外項相当の対象を自由に修飾し、表すことができるとしている。従って、以下のような動詞が両接辞によって派生することができないのはそれぞれ異なる理由によるとされる。

- a. \**mori-dor* \**aparece-dor* \**alcanza-dor*
- b. \**murie-nte* \**aparecie-nte* \**alcanza-nte*

Tras este breve repaso por los principales trabajos dedicados al estudio del sufijo *-dor*, podemos concluir que en todos ellos se defiende la hipótesis de que *-dor* se muestra sensible a la EA del verbo al que se une, seleccionando verbos que dispongan de una posición de argumento externo o iniciador. Esta es ya una diferencia relevante con respecto al sufijo *-nte*. Recuérdese que si bien *-nte* se muestra sensible al aspecto léxico del verbo, al seleccionar verbos atéllicos o no delimitados; se muestra indiferente con respecto a la EA de tales verbos (cf. §4.1.2). Pese a todo, estas restricciones que imponen los sufijos sobre los predicados verbales que seleccionan —argumental o temática en el caso de *-dor* y aspectual en el de *-nte*— hacen que en algunos casos los sufijos se comporten igual ante la misma base verbal:

(Cano 2013: 252)

### 1.3.3. Cano (2013) の問題点

Cano (2013)では *control* の有無を、両接辞を区別する最小の決定的要因としなかったことで、Laca (1993)では説明されなかった、語根が活動動詞のような有界性をもたないものであれば、*-nte* 派生語も動作主を表す、または修飾するという事実が捉えられている。しかしながら、Cano (2013) にも問題がないわけではない。特に、*-nte* は非有界性の動詞にのみ付加され、その外項を自由に修飾し表すことができるとする説明は検証が必要であると考ええる。

Cano は、非有界性の動詞に *-nte* は付加可能で、自由にその外項相当の名詞を修飾可能、またはそうした対象を表す名詞を形成することができるとしている。しかし、使役動詞からなる *-nte* 語を観察してみると、修飾される対象、表される対象が薬品や化学物質などの、意味役割でいえば原因にあたるものに偏っているという印象を受ける<sup>28</sup>。そして、同時に、語彙的使役動詞からなる *-nte* 派生語が動作主や道具を表すことは稀であるという印象もある<sup>29</sup>。道具も原因も、能書き読みの語彙的使役動詞から派生されるものである。道具、原

<sup>28</sup> *-nte* と「原因」の結びつきの強さについては後の章で検証するが、*-nte* 派生語が典型的に「原因」であるということは様々な先行研究で述べられている (cf. Laca 1993, Rifón 1996-1997, Rossowová 2009)。

<sup>29</sup> Laca (1993: 199) にも、*-nte* の表す無生物について、Dentro de los sustantivos que presentan el rasgo [INANIMADO], son prácticamente inexistentes los nombres de instrumento en sentido estricto, es decir, las designaciones de artefactos o partes de artefactos según la función. とある。

因は共に非有界性の動詞から派生されると換言することもできるだろう。従って、Cano (2013) の記述が妥当なものであれば、**-nte** による派生語は道具、原因を共に編入、修飾可能であるはずだが、実際には **-nte** が編入、修飾する対象は原因に限定されており、**-nte** による道具の編入、修飾は極めて稀である。従って、**-nte** による派生の成立の唯一の要件は語根動詞が非有界性の動詞であるとする点については修正が必要であると考ええる。

Este aparato seca bien el pelo. > un secador/\*un secante

能書き読み

Este fármaco calma bien el dolor de cabeza. > \*un calmador/un calmante

能書き読み

もしも Cano の主張するように、**-nte** が語彙的に非有界の動詞の語根を自由に引き継ぐことができるのであれば、道具も表せるはずであるが、様々な研究で指摘されているように、**-nte** が道具を表す、修飾することは極めて稀である。

また、動作主についても、総称・能書き性を帯びた動作主が存在する（典型的には職業名が該当する）：*matador*, *cazador* 等。これらの派生名詞の語根もまた、単に *que V* ではなく、*que tiene por oficio de V* というような総称性を持った用法におけるものである。従って、Cano の主張が正確であれば、**-nte** も職業名を表しうるのははずだが、実際には、Laca (1993) の示したように、**-nte** が職業名を表すことは稀である<sup>30</sup>。

以上の事実から、**-nte** の意味の決定に関わる規則は Cano の主張するような「語根が非有界的であれば、その外項を自由に引き継ぐ」というような単純なものではないと思われる。

第二に、語根の非有界性が **-nte** による派生の成立に必須とする主張も検討が必要であろう。Cano の主張で興味深く、また問題があると思われるのは、基本的に有界性があるとされる語彙的使役動詞も、総称・能書き読みで用いられる際には非有界化し、**-nte** の付加が可能とされる主張である。そして、**-nte** が総称・能書き読みの語彙的使役動詞から派生される場合、形成される語は意味役割でいう、無生物の「原因」に強く結びついたものである：*calmante*, *relajante*, *refrigerante* 等。確かに、こうした原因にあたる対象の多くは非有界解釈をとる動詞から形成されていると考えられるが、それらは常に総称的な価値を持つわけではなく、「いまここ性」のエピソード的な事象を表す用法から派生されていると考えられるケースがないわけではない。例えば、*contaminante* にはこうした「いまここ性」の *contaminar* から形成されていると思われるケースが散見される。

<sup>30</sup> Laca は *Dentro de los sustantivos que presentan el rasgo [ANIMADO], son muy pocos los que se basan en predicaciones genéricas o disposicionales.* (p. 198) としている。また、2 章で紹介するように、Tsutahara (2014) でもこの制限を確認している。

Autoridades locales ya habían alertado que la actividad minera en Ananea es la principal contaminante del río Ramis.

(es TenTen)

この文における *contaminante* は *río Ramis* という特定の目的語をとっていることから、語根の *contaminar* は総称ではない、「いまここ性」のエピソード的な事象を表す用法であると判断される。ここで問題となるのはこうしたエピソード的な用法においては、特定の量化可能な対象を目的語としている以上、*contaminante* の語根は語彙的な有界性を保持していると考えられることである。こうした有界性を持った動詞が *-nte* によって派生されているケースは *Cano* の主張を根幹から揺るがすものである。

以上の点から、*-nte* による派生の可否は語根の非有界性によってのみ決定されるものではなく、*-nte* を非有界的動詞にのみ付加される接辞とする *Cano* の主張はやや性急であると考えられる。*Laca* らの、*-nte* は意味論上、「原因」に強く結びついた接辞であるとする主張を棄却するためには先述の点について詳細に検討する必要があるだろう。

#### 1.4. 問題の所在と解決方策

ここまで概観した通り、両接辞の差異に関する研究はこれまでにないが、いずれも課題を残すようである。そうした課題がどのようなものであるか、そしてそれらを本論ではどのような手法で解決を目指すのかを以下で述べる。

##### 1.4.1. 直観・内省に基づく分析

重点的に確認をした *Laca* (1993) および *Cano* (2013) をはじめ、多くの両接辞をめぐる研究にみとめられる問題として、記述が母語話者の直観、内省に基づくという点が挙げられる。その結果、先行研究における提案への反例が少なからず存在するということはこれまでに指摘したとおりである。これは分析対象となる派生語が網羅的ではなく、それぞれの著者が思いついたものに限定されることから生じる「分析漏れ」があるためだと考える<sup>31</sup>。

おそらくは同様の理由で、両接辞による派生形容詞の非主語的用法もほとんど扱われていない。本稿の前半でも述べたとおり、*-dor/-nte* 接辞による派生語は基本的に主語的と性格付けられるものであるが、両接辞による派生形容詞には主語的ではない用法が存在する。主語的用法とは“*que V*”と換言可能な用法 (*jefe fumador* > *jefe que fuma*, *fármaco calmante* > *fármaco que calma*) を指すが、*-dor* 形容詞には“*que V*”と換言することのできない用法、いわば非主語的用法が存在する：*expediciones buceadoras* (\**exoediciones que bucean*), *habilidad*

<sup>31</sup> *Laca* (1993) には分析対象とそれがどのように集められたものであるのかという説明がない。*Cano* (2013) には分析対象を辞書・コーパスから網羅的に抽出したとあるが、その手法は不透明であり、非母語話者から見てもあきらかな反例が多い。



lectora (\*habilidad que lee) (cf. Rainer 1999, Rainer y Wolborska-Lauter 2012)。-nte 形容詞にも同様の非主語的な用法があるが、こちらに関しては先行研究等における言及がない。-nte 形容詞の非主語的用法を指摘し、その使用の実態を記述したのは筆者による Tsutahara (2015a, 2015b, 2016a) である。五章で詳述するとおり、この用法は現在では一定の頻度で用いられしており、両接辞とその派生語の本質を明らかにするうえで、分析対象から外すことのできない重要な用法である。

こうした問題を踏まえ、本研究はコーパスを使用し両接辞を分析する。コーパス使用の最大の利点は周辺的なケースも含めた網羅的な分析を可能にするという点、ならびに、思い込みを排し、現象の新たな側面を浮き彫りにするという点にあり (cf. McEnry & Wilson 1996, Biber 2009, Cheng 2012, 石川 2012, etc.)、これまでの両接辞を扱った先行研究の問題を解決するうえで最適のアプローチであると考ええる。

#### 1.4.2. 分析対象の意味の固有化

これまでに取り上げられてきた先行研究に共通する問題点として、分析対象の派生語の起源、使用され始めた年代に関する言及がないことが挙げられる。つまりこれまでの先行研究における分析の対象の中には、数百年以上前から現代にいたるまで使用されてきた派生語が含まれている。古くから使用されている語（派生語に限らず）ほど意味が固有 (idiosyncratic) のものとなる傾向がある。そしてこうした意味の固有化の度合いが高い派生語とその語根の比較からは接辞の意味を推測することは困難である。例えば、16 世紀から用いられている *despertador* は現代ではほぼ、目覚まし時計を表す時にのみ用いられる。語根の *despertar* そのものは主語に時計をとることもあれば、人をとることもあるにもかかわらず、派生語が目覚まし時計のみを表すのは、接辞 *-dor* に「時計」という意味が含まれているからというよりも、この派生語が数世紀にわたり使用され、意味・用法が固定された結果である。極端な例でいえば、*durante* (Pharies 2002: 84 によれば 1382 年から使用されている) などはこの固定化が語の統語カテゴリーを変えるまでに至り、現代ではもっぱら前置詞として用いられている。

上述の理由から、派生語の意味を分析するにあたっては、新語の観察が必要となると思われるが、スペイン語学における派生、接辞の意味に関する先行研究で、分析対象を新語に限定したものは見当たらない。この問題は語形成を意味論的に分析する上で避けては通れないものである。同種の問題はスペイン語の語形成だけでなく、自然言語全般にみられ、この分析を困難なものにしていた。

しかしながら、数十年前であれば、分析に必要なだけの数の新語的派生語をリストアップし、その使用例を同様に一定数揃えることは困難であったと思われるが、近年のコンピューター、およびそれを用いた自然言語処理の発展に伴い状況は劇的に改善されたように思われる。

本研究では英語学などで提案された手法を基に、両接辞による新語的派生語を一定数収

集し、分析対象をこうした派生語に限定し、記述の検証を行いその妥当性を補強したい。新語の収集法、ならびに検証の結果は三章で紹介、報告する。

### 1.5. 本研究の位置づけ

以上、前節までに述べた通り、本研究はコーパスを用いつつ、接辞 *-dor/-nte* およびその派生語の意味的性質を記述し、その差異、および多義性が生じるメカニズムの説明を目指すというものである。以下ではそうした性格を持つ本研究が、言語学という学問分野においてどのように位置づけられるものであるのかを論じる。

#### 1.5.1. 理論的位置づけ

スペイン語の *-dor/-nte* 両接辞の持つ意味的な性質を明らかにしたうえで、両接辞による派生語の多義性や両者の差異の説明を目指す本研究は、言語学一般という広い観点からいえば、スペイン語の派生の意味論的研究 (*semantics of derivational process*) という分野に位置づけられるものであるといえるだろう。

派生とは本研究で扱うような、独立した語にそれ自体では語として使用されることのない語、「接辞」を付加することで、新たな語を形成するという語形成の一手段である。そして接辞および派生は従来、形態論の枠組みで盛んに分析されてきたものであり、派生における音韻、形態上の変化が主たる関心の対象であった。一方、意味に焦点を置く派生の意味論的研究という分野は形態論と意味論の境界面に位置するものといえるだろう。

派生の意味論的研究は、比較的新しい研究分野、もしくは問題意識であるが、近年、形態論および意味論に携わる研究者が活発に派生の意味に関わる問題を取り上げている。Kawaletz & Plag (2015) は英語の *-ment* 接辞による、語根に心理動詞を持つ派生名詞の意味の予測を目指す研究であるが、導入部分で近年の派生の意味論的研究の盛り上がりを以下のように紹介している。

In recent years, the semantics of derivational processes has attracted considerable attention, both as a special theme of conferences (e.g. International Morphology Meeting, Vienna 2012; Mediterranean Morphology Meeting, Dubrovnik 2013)<sup>32</sup>, and in major studies and collections (e.g. Trips 2009; Uth 2011; Bauer *et al.* 2013; Rainer *et al.* 2014), especially since the publication of the seminal Morphology and lexical semantics by Rochelle Lieber (Lieber 2004).

(Kawaletz & Plag 2015: 1)

Kawaletz & Plag (2015) の指摘するように、この研究分野の転機は Lieber (2004).

---

<sup>32</sup> ここには記載がないが 2015 年にはデュッセルドルフ大学にて語形成の意味論を扱うワークショップが開催された。Kawaletz & Plag (2015) はこのワークショップにおける口頭発表を基に執筆されたものである。

*Morphology & Lexical Semantics* の出版であったように思われる<sup>33</sup>。Lieber (2004) で派生の意味に関する問題が明確化され、問題を解決するための具体的な方法論、分析装置が提示されたことで、この研究分野は大きく推進した。以下では Lieber が論じるところの派生の意味論的研究がどのような問題意識に基づくものであるか、また具体的に、どういった問題の解決を目指すものであるかを簡単にではあるが紹介する。

Lieber は派生の意味論的研究がなされてこなかった要因の一つに、従来の派生の研究がおもにその音韻論的側面を扱うものであったことを挙げている。

One reason for this is perhaps the late start morphology got in the history of generative grammar; generative morphology has arguably come into its own as a legitimate field of study only since the mid- 1970s and has concentrated on structural and phonological issues concerning word formation to the neglect of semantic issues (see Carstairs-McCarthy 1992 for a cogent discussion of this issue).

(Lieber 2004: 2)

こうした状況の背景には、当時、接辞は原則的に、単に語根の品詞を変えるだけの役目を持った機能語であると考えられていたことがあげられる。

“Unlike a free morpheme a suffix has no meaning in itself, it acquires meaning only in conjunction with the free morpheme which it transposes.”

(Marchand 1969: 215)

しかしながら、Marchand は同時に接辞が語根の意味クラスを変えうることも報告している。

As a word class transposer, *-er* plays an important part in deverbal derivatives, while in denominal derivatives its role as a word class transposer is not important, since basis and derivative in the majority of cases belong to the same word class “substantive” . . . ; its role as a semantic transposer, however, is different in this case. Although most combinations denote a person, more specifically a male person (types **potter**, **Londoner**, **banqueter**, **weekender**<sup>34</sup>), many other semantically unrelated senses are possible. Derivatives with *-er* may denote a banknote, bill (*fiveer*, *tenner*), a blow (*backhand*), a car, a bus (*two-seater*, *two-decker*), a collar (*eight-incher*), a gun (*six-pounder*), a gust of wind (*noser*, *souther*), a lecture at a certain hour (*niner* “a class at nine

---

<sup>33</sup> Lieber (2004) 以前には Aronoff (1984) や Plag (1998) 等において接辞と意味に関する考察がなされていた。

<sup>34</sup> 強調は筆者による。

o'clock”), a line of poetry (*fourteener*), a ship (*three-decker*, *freighter*, . . .).

(ibid.)

Lieber は、Marchand は接辞に「紙幣」や「車」といった意味があると考えているわけではなく、接辞は意味的に流動的で、語根との兼ね合いにおいて派生語の意味が決定されると提案していることを紹介している。Lieber はそうした見方に概ね同意しつつも、実際に接辞の意味決定における働きかけがどのようなものであるのかという点が説明されていないことを指摘している。

Marchand of course does not mean to say that *-er* actually means “car,” “bus,” “banknote,” or “gust of wind” in these forms. Rather he suggests that the meaning of the affix is fluid enough to allow all of these meanings in combination with particular bases. But why should this be? What, if anything, does *-er* add to a base to give rise to these meanings?

Lieber はこのように、Marchand (1969) を引用しつつ、英語の *-er* 接辞の多義性に関する問題は、従来の枠組みでは十分に扱えないことを指摘している。こうした方法論上の不備が Lieber (2004) および、それに続く派生の意味論的研究の出発点となっている。こうした問題の解決方策として、Lieber は「接辞の意味」を規定し、それを基に派生、および派生語の意味に関わる性質、現象および問題を論じていくというアプローチを提案している。

This book is about the semantics of word formation. More specifically, it is about the meaning of morphemes and how they combine to form meanings of complex words, including derived words (writer, unionize), compounds (dog bed, truck driver), and words formed by conversion. To my knowledge there is no comprehensive treatment of the semantics of word formation in the tradition of generative morphology.

(Lieber 2004: 2)

こうした視座に立つ研究が解決を目指す問題として、Lieber は以下の四点を挙げている。本研究の最終的な目標は *-dor*, *-nte* の意味を記述し、両接辞による多義性を説明することであり、これは Lieber のいうところの *polysemy question* に該当する。また、同時に、機能的に類似している両接辞が現代スペイン語において共に生産性を維持している意義についても考察を行うが、これは *multiple affix question* にあたる<sup>35</sup>。

*The polysemy question*: for example, why does the affix *-ize* in English sometimes seem to mean

---

<sup>35</sup> この問題の扱う接辞の競合関係はしばしば “rivalry” とも呼ばれる。Rivalry を論じた Fábregas (2010) や Ferret (*et al.*) (2010) もまた、言語内の *multiple affix question* を扱ったものといえるだろう。

“cause to become X” (*unionize, randomize*), sometimes “cause to go into X” (*containerize*), and sometimes “perform X” (*anthropologize*); why does the affix *-er* sometimes create agent nouns (*writer*), sometimes instrument nouns (*opener*), and sometimes patient nouns (*loaner*)? Do these affixes have any unitary core of meaning at all, and if so, what is it?

*The multiple-affix question*: why does English often have several affixes that perform the same function or create the same kind of derived word (e.g., *-ize, -ify* for causative verbs; *-er, -ant* for agent nouns)?

*The zero-derivation question*: how do we account for word formation in which there is semantic change without any concomitant formal change (e.g., in so-called conversion or zero derivation)?

*The semantic mismatch question*: why is the correspondence between form and meaning in word formation sometimes not one-to-one? On the one hand, why do there sometimes seem to be morphemes that mean nothing at all (e.g., the *-in-* in *longitudinal* or the *-it-* in *repetition*)? On the other hand, why do we sometimes find “derivational redundancy,” that is, cases in which the same meaning seems to be expressed more than once in a word (e.g., in *dramatical* or *musicianer*)? Finally, why does the sense of a morpheme sometimes seem to be subtracted from the overall meaning of the word (e.g., *realistic* does not mean “pertaining to a realist”)?

以上、大まかにではあるが、派生の意味論的分析という研究が、どういった理念によるか、どのような問題を解決することを目指しているのかを確認した。こうした視座に立ち、同様の問題意識に基づく研究には英語の派生を扱うものはもちろん、イタリア語、ギリシャ語、フランス語を扱ったものがある (cf. Booij & Liener 2004, Plag 2004, Melloni 2007, Melloni 2010, Ferret *et al.* 2010, Andreou 2014, Ferret & Villoing 2015, Kawaletz & Plag 2015)。

#### 1.5.2. 方法論上の位置づけ

先述の通り、両接辞の差異について扱った先行研究にはいずれにも未解決の事項が残されており、それらの多くは経験的な検証が実施されなかったために生じていることを指摘した。本研究ではその解決方策として、コーパスを活用し、経験的な検証を実施していく。従って、本研究にはコーパス言語学としての側面がある。そこで本節では、本研究がコーパス言語学という枠組みの中にどのように位置づけられるものであるのか、そして、本研究内にコーパスはどのように位置づけられるのか、換言すれば、本研究にとってコーパスはどのような役割を果たすものであるのかを述べておきたい。

石川 (2012) が指摘するように、大まかにいって、コーパス言語学にはコーパスの位置づけをめぐる二つの立場がある。コーパスに独立性、特殊性、固有性を認め独立したコーパス

言語学を言語学の一分野として位置づける立場と、コーパスをデータの収集、分析のための技術として位置づける立場である。

前者は既存の理論やモデル、仮説を出発点とせず、白紙の状態でコーパスを観察し、得られた発見を追究するという姿勢をとる。研究者の主観、バイアスを排除することが目的となるため、タグなどは付与されない場合が多い（クリーンテキスト原則）。このように、コーパス内のデータが研究の出発点となることから、こうしたアプローチをとる研究はコーパス駆動型研究（corpus-driven study）と呼ばれる。Cheng (2012: 187) はコーパス駆動型研究はコーパス観察→パターン検出→臨時仮説構築→理論化というプロセスで実施されるものとしている。

コーパスをめぐるもう一つの立場、コーパスをデータの収集や分析に関わる技術とみなす立場の研究は、特に先述の駆動型研究との区別を強調する場合に、コーパス準拠型研究（corpus-based study）と呼ばれる。こちらの立場では、コーパスが研究の出発点となっていたのとは対照的に、コーパスは仮説の検証などを行う際に用いられる。Cheng (2012) は、準拠型研究は典型的に、理論→仮説構築→コーパス観察→仮説確認という流れで行われるとしている。

語形成の意味論という理論的枠組みの中で仮説を構築し、その検証をコーパスを用いて実施する本研究は、後者のコーパス検証型研究と位置づけられるだろう。

しかしながら、石川 (2012) の言うように、駆動型研究と検証型研究は相互排他的なものではない。

たとえば、特段の目的を持たず、コーパスデータを漠然と観察していたところ、ある語の振る舞いについて一定のパターンらしきものが発見されたとします。この時、おそらく研究者は、パターンらしきものには再現差異があるのだろうか、そうだとすると、当該語と類似したほかの語についてもそのようなパターンは確認されるのだろうか、そうしたパターンをもたらす原因はどこにあるのだろうか、といった素朴な疑問を抱くことでしよう。

すると、今度は、そうした疑問（つまりこれが仮説に相当します）を解決するために、新しい目で同じコーパスないしは別のコーパスをより詳しく調べていきます。もちろん、すべての問いについて、はっきりした解がすぐには見つからないかもしれません。その場合、研究者は、再び白紙の状態に立ち返ってコーパスを全体的に眺めます。そうすることで、残された疑問を解決するヒントが言語データの中から浮かび上がってきます。それを新たな仮説に整理した後、再びコーパスを詳しく調べて仮説の妥当性を確認していくのです。

このとき、コーパス駆動型研究とコーパス検証型研究はめまぐるしく交替しており、両者が一体的に融合する形でコーパス言語学の実践が成立していることに気が付きます。

(石川 2012: 31-32)

本研究においても、駆動型研究的アプローチと準拠型研究的アプローチの循環が起こっている。五章で論じる **-nte** 接辞の派生形容詞の持つ非主語的用法であるが、これは単に、**-nte** 派生形容詞の用法を観察しているときに期せずして発見されたものである（駆動型）。そして同様のケースを多数収集し、一時的な記述を実施、再度コーパスを用いて検証を行った（準拠型）。

語形成の意味論という枠組みの中で構築した仮説を、コーパスを用いて検証するというアプローチをとる本研究は、コーパス準拠型研究として位置付けられる。しかしながら、同時に駆動型研究的な契機に基づく問題も扱う。したがって、本研究は、準拠型研究に軸足を置きつつも、適宜駆動型研究的着想、姿勢を取り入れたスペイン語における派生の意味論的研究の実践として特徴づけられるだろう。

## 2. -dor/-nte 接辞による名詞とその意味

本章では -dor/-nte 接辞による派生名詞の意味を網羅的に分析し、両者間の意味上の共通点、および差異を探る。そしてこの分析を基に、名詞派生接辞としての両者の固有性がいかなるものであるのかを考察する。

2.1. では先行研究とその問題点を概観しながら、本研究において派生語の意味をどのように扱っていくのかを述べる。次に 2.2. 節では、議論を進めていくうえで重要となる語彙的使役性を論じる。次節 2.3. では、データ、およびその収集法などの方法論を紹介する。2.4. 節では有生物を表す派生名詞を分析し、-dor 派生名詞は経験者や内項相当の有生物のような、動作主性の低い対象を表すことが稀であることを示す。同様に -nte 派生名詞は語彙的使役動詞から動作主を表す名詞を形成することが稀であることも報告する。2.5. 節では同様に無生物を表す派生名詞を分析する。特に 道具を表す -nte による派生名詞の数が極めて限定的なことは示唆的である。それをうけて、両接辞による語根動詞の外項の編入は、その外項の持つ使役性と意思性、または動作・状態に対するコントロールの有無という二点の語彙意味論的素性の組み合わせに左右されるという仮説を提示し、2.6. 節ではその仮説の妥当性を、同一の動詞を語根とする両接辞による派生名詞のペア (ej. *picador/picante*) を分析しながら検討していく。

### 2.1. 本研究の方向性

前章では、両接辞の意味的差異に関する研究として、異なる視座に立つ二件の先行研究を紹介した。すなわち、両接辞の意味的差異とは、外項の編入に関わる制約の違いであるとする Laca (1993) と両接辞の差異を、付加可能な動詞の種類の違いとして説明する Cano (2013) である。

このうち、Cano (2013) の記述、とりわけ、-nte は語彙的に非有界性の動詞にのみ付加され、そうした動詞の外項であれば自由に編入できるとする説には質的にも量的にも無視することのできない反例があることを前章で指摘した。そこで本研究では Laca (1993) と同様の方向性をとる。すなわち、両接辞の意味的差異を外項の編入に関する規則の違いであると考え、その上で設定した問題に取り組む。しかし、前章で指摘した通り、Laca (1993) にも問題がないわけではない。そしてそれらの問題は一点の方法論上の問題に集約されると考える。Laca (1993) にはその記述に対する明らかな反例が少なからずあり、形容詞の非主語的用法に関する説明が一切ないなどの問題があるが、それらは、分析対象がおそらく Laca が思いついた派生語とその用例に限定されていたために生じたものと考えられる<sup>1</sup>。つまり、もしも分析対象となる派生語が客観的な手法により収集、分析されていたとしたら生じていなかった問題であったように思われる。そこで本研究では、一貫して、分析対象およびそ

<sup>1</sup> Laca (1993) には分析対象とその収集法に関する説明がない。



の意味、実例をコーパス、辞書から網羅的に収集していくことでこの問題の解決を図る。

## 2.2. 語彙的使役性について

Laca (1993) および, Tsutahara (2014) で指摘されているように、両接辞の意味的な差異は語根動詞の持つ使役性と密接に結びついていると考えられる<sup>2</sup>。両接辞間の意味的な差異はそれらが語彙的使役動詞に付加される時に浮き彫りになるともいえよう。そこで、両接辞の意味的な性質を記述する上で重要な語彙的使役動詞がどのようなものであるのか本節では論じる。

語彙的使役動詞とは、その名前の通り、語彙的に使役性 (西・causatividad) を表す動詞を指す。そして使役性という概念は Lavale Ortiz (2013) で紹介されているように、言語学だけでなく、哲学、法学などの学問分野でもしばしば議論されており、人間の認知と深くかかわった概念である (cf. Lavale Ortiz 2013: 17)<sup>3</sup>。Lavale Ortiz (2013) は使役性を因果関係に関わる概念であるとして以下のように説明している。

La causatividad es una noción semántica básica que los seres humanos empleamos para explicar la relación que se produce entre dos eventos del mundo: la causa, encargado de iniciar la acción, y el causado o efecto, que sufre un cambio de estado. Como expresión de la cognición humana, es un concepto que nos permite comprender la realidad y que se manifiesta en las diversas lenguas del mundo mediante diferentes formas de expresión lingüística.

(Lavale Ortiz 2013: 17)

言語学における使役性の研究の先駆的なものに Shibatani (1976) がある<sup>4</sup>。この研究は使役構文 (英・causative constructions) を扱ったもので、使役構文の表す使役的状況 (英・causative situation) を考察している。Shibatani (1976) によれば、使役的状況とは以下の二点の条件を満たすものである。

- a. The relation between the two events is such that the speaker believes that the occurrence of

---

<sup>2</sup> Laca (1993) も両接辞の意味論的な説明を行う際に causativo という語を使用している。

<sup>3</sup> Lavale Ortiz (2013) は名詞から派生した動詞の使役性について論じた博士論文である。論文の前半部分では使役性という概念に関する言語学の先行研究だけでなく、隣接する人文学分野における当該概念がどのように考察されてきたのか、極めて詳しく紹介されている。

<sup>4</sup> Lavare Ortiz (2013) は Shibatani (1976) について以下のように述べている。  
Quizá, entre ellos, los más representativos sean los dos editados por M. Shibatani (1976 y 2002). El volumen 6 de Syntax and Semantics se dedica a *The grammar of causative constructions* (Shibatani 1976). En este volumen, se destina una primera parte a las características gramaticales de estas construcciones y una segunda parte a estudios lingüísticos particulares que observan las construcciones causativas en lenguas tan dispares como el bantú, el hindi-urdu, el húngaro, el turco, el lahu, el chino mandarín, etc. Este primer acercamiento profundo y englobador al estudio tipológico de las construcciones causativas se completa posteriormente con otro volumen monográfico *The Grammar of Causation and Interpersonal Manipulation* (Shibatani 2002), donde se incluyen artículos que estudian las causativas en lenguas de América Central y América del Sur, que no habían recibido tanta representación en el anterior volumen, como el tarasca, el cora, el olutec, el nahuatl, el sikuani, el akawaio, el matses, el guaraní, etc.

one event, the “caused event,” has been realized at  $t_2$ , which is after  $t_1$ , the time of “causing event.”

- b. The relation between the causing and the caused event is such that the speaker believes that the occurrence of the caused event is wholly dependent on the occurrence of the causing event; the dependency of the two events here must be to the extent that it allows the speaker to entertain a counterfactual inference that the caused event would not have taken place at that particular time if the causing event had not taken place, provided that all else had remained the same.

(Shibatani 1976: 1-2)

このように、Shibatani (1976) による使役的状況の定義は、第一に、caused event と causing event からなり、後者は常に前者に先行し、依存される、とするものであった。そして、意味論という枠組みの中で使役性という概念に関する議論が深まるにつれ、より細やかな使役的状況の定義が試みられるようになった。たとえば Moreno Cabrera (1993) は、使役的状況は以下の三点の意味論的構成要素からなるとしている<sup>5</sup>。

#### Semantic components of causative processes

- a. External: purpose (P)
- b. Internal:
  - (i) transition (TR)
  - (ii) force (F)

(Moreno Cabrera 1993: 159)

Moreno Cabrera によれば、使役的状況が成立するためには、内的構成要素の二点、すなわち TR と F が必須である。これらの要素はそれぞれ以下のように説明されている。

#### TR

The transition semantic primitive accounts for the fact that something which had a property acquires a new related property in a causative event. For example, the event denoted by *break* conveys a transition from a state as in *the glass broke*.

(Moreno Cabrera 1993: 159)

#### F

In order to bring about a transition, the agent or causer must exert a certain force and he can also

---

<sup>5</sup> Moreno Cabrera 自身は causative situation ではなく causative process としている。

have the intention to do that.

(ibid.)

Moreno Cabrera の挙げた使役性を構成する三種類の意味的構成要素の内、P は動作主の意思に該当する。しかし、この P は使役的状况を構成する「外的」要因とされる。この構成要素は以下のように説明される。

The first two semantic primitives, transition and force are internal to the causative state of affairs while the third semantic primitive, purpose, is external. This means that, although we can have a causative process without a purpose, we cannot have a causative process without force and transition.

(ibid.)

これらの要素が使役的状况を構成する要素であることは以下の例からも明らかであろう。以下の例では主語として表される対象が目的語に対して「意図的に」変化を引き起こす力を行使している。

(1) John intentionally broke the glass.

(ibid.)

しかし、この要素 P が外的とされるのは主語が目的語に対して非意図的に変化を引き起こす場合が存在するためである。こうしたケースも因と果という二段階からなり、目的語相当の対象がなんらかの変化を被っている以上、使役的状况といえる。そして、こうした場合においては意思性抜きに、使役的状况が成立している。よって、意思性 P は使役的状况の外側にある、随意的な要素とされる。

(2) John accidentally broke the glass.

(ibid.)

こうした使役的状况を構成する意味的構成要素を Moreno Cabrera のものよりも細かく分類した研究もある<sup>6</sup>。しかし、その多くは根本的な使役性、使役的状况に対する理解は Shibatani や Moreno Cabrera らの記述と同じ方向性のものであると思われる。本研究もこう

---

<sup>6</sup> Dixon (2000) は使役的状况を構成するものとして、九種類の意味論的要素を提案している。この九種類の内、二種類は動詞の性質に関わるもの（アスペクト、他動性）、三種類は変化を被る対象に関わるもの（コントロール、意図性、受影性）そして残りの四種類は使役者、主語に関わるもの（直接性、意思性、自然性、含意性）である。このほかに使役性と言語を扱った研究として、Harley (2005), Cifuentes y Lavale Ortiz (2009), Copley & Martin (eds.) (2014), Martin & Schäfer (2014) などがある。

した先行研究を踏襲し、使役的状况とは主語が目的語になんらかの変化を与える状况を指すものとする。

そして動詞の中には語彙的に使役性を表すもの、語彙的使役動詞が存在する。たとえば、*abrir* や *matar* などが該当する。*Abrir* は、(3) のように意図性を持った動作主 (*el jefe*) が扉 (内項にあたる) を閉じた状態から開いた状態に変化 (TR) させるという力 (F) を意図的に (P) 行使するという動作を語彙的に表すものである。従って、この動詞は語彙的使役動詞であると考えられる<sup>7</sup>。

(3) Pero, cuando el jefe abrió la puerta, ocurrió algo que me dejó sin habla.

(es TenTen)

語彙的使役動詞とは、このような論理的、意味的な性質を持つ以上、必然的に他動詞である。しかしながら、他動詞が常に語彙的使役性を有しているというわけでもない。外項が内項に変化を与えないような事象を表す他動詞も存在する。特に活動動詞や状態動詞は多くの場合、他動詞であったとしても使役性を持たない (cf. Levin 1993)。使役的状况は、なんらかの人・物が変化を被ることにより成立するため、他動詞の中でも特に、状態変化、創造、消費、位置変化等を表す動詞が典型例となる。なお、*-izar*, *-ificar* のような変化を表す接辞により派生された動詞を、形態的使役動詞 (英・ *morphological causative verb*) として語彙的使役動詞と区別する立場もあるが、本稿ではこうしたタイプの動詞も語彙的使役動詞として扱う。

## 2.3. 方法論

### 2.3.1. データの収集

本章の分析対象となる両接辞による派生名詞は *Corpus del español* にて *\*dor*, *\*sor*, *\*tor*, *\*nte* というワイルドカードを含む文字列を検索し、収集した。これらの文字列の意味するところは「*dor (sor/ tor/ nte)* で終わるすべての文字列」であり、当該コーパス内の問題となる接辞による派生語を一度に、網羅的に収集することができる。また、このコーパスでは検索の範囲を限定することも可能で、今回の調査では 20 世紀以降に使用されたものに限定した。したがって、本章における分析は「*Corpus del español* 内の 20 世紀以降に一度以上使用されたことのある両接辞による派生語」を扱うものである。

### 2.3.2. 分析対象の選別・意味の記述

本章では両接辞による派生名詞の意味を扱う。先述のとおり、両派生語、特に *-nte* による派生語には形容詞としての用法しか持たないものが存在する。これは *-nte* による派生語

<sup>7</sup> ただし、動作主の意図性 P の現れない場合もある。*Abrir* についていえば、以下のようなケースである。  
El viento abrió, escandalosamente, la portezuela del vagón de primera de morados asientos, y arrancó el fez rojo de un viajero que dormitaba vestido con una pulcra chilaba blanca y calzaba cómodas babuchas de color calabaza. (es TenTen)

は本来、述語的だったことによる。こうした形容詞としてのみ用いられる派生語は、派生名詞の意味を扱う本章の目的には合致しないため分析対象から除外する。

本研究では辞書を利用し、コーパスから収集した派生語から名詞としての用法を持つものの選別、および、その意味の抽出を行った。辞書は DRAE および、西和中を使用した。辞書を複数使う理由は両接辞による派生名詞の多義性をできる限り広く捉えるためである。どちらか片方の辞書に名詞としての用法の記載があれば分析の対象とした。

### 2.3.3. 分析対象

上述の手法を用いて、本研究では 810 の **-dor** 名詞、264 の **-nte** 名詞を収集し<sup>8</sup>、その語義を DRAE、西和中から抽出した。次節以降では抽出した語義を分析し、それぞれのタイプの派生名詞の語義、ひいては両接辞による語根動詞の外項の編入になんらかの共通性、差異がみられるかを検討していく。

## 2.4. 有生物

本節では、有生物を表す両派生名詞を分析し、両者の間になんらかの意味的な差異がみられるか否かを検討する。両タイプの派生名詞は多義的であるため、このように、有生性についてまず分類することで、より明確にそれぞれの多義性のありかたを記述することが可能になると考える。Laca (1993) でも有生性に基づく分類は行われている。

分析したところ 810 の **-dor** 名詞のうち 660、および 264 の **-nte** 名詞のうち、155 が有生物を表すことを確認した。これらは語根動詞の有生の主語を編入したものであるともいえる。

このことからいずれの接辞も有生の対象を編入するものであると考えられるが、それぞれの派生名詞の表す有生物は意味的に同種のものであるだろうか。この点について、Laca (1993) は **-dor** は動作に対するコントロールを持つ対象を典型的に編入し、**-nte** はコントロールを持たない対象を編入する接辞としている。そこで、Laca (1993) を踏襲し、動作に対するコントロールを持つか否かで分類を行った。コントロールを有するものを便宜上「動作主」、持たないものを「非動作主」とした。この結果を以下の表にまとめた。

表 1. 両派生名詞の表す有生物

	<b>-dor</b>	<b>-nte</b>
<b>動作主</b>	<b>639</b>	<b>108</b>
<b>非動作主</b>	<b>21</b>	<b>47</b>
<b>計</b>	<b>660</b>	<b>155</b>

まず目に付くのが **-dor** 名詞と動作主との強い結びつき (639/660)、そして非動作主を表

<sup>8</sup> データから除外した、形容詞としてしか用いられない派生語も含めた **-dor** 派生語の総数は 941、**-nte** 派生語の総数はコーパスから収集を行った段階では 555 であった。

すことが稀であるという点である (21/660)。**-dor** の表す有生物に関する Laca の説明は妥当と言えるだろう。

一方で、**-nte** による派生名詞の表す有生物の三分の二以上が動作主に分類されたことも目をひく。Laca (1993) における、**-nte** は典型的にはコントロールを持たない対象を編入するとする記述と食い違うためである。確かに、絶対数 (108) のうえでも、**-nte** 名詞の表す非動作主との割合 (108/155) という観点からいっても **-dor** 名詞と比べ、**-nte** 派生名詞と動作主との結びつきは弱いようである。しかし、それでも、大多数の **-nte** 名詞の表す有生物は動作主として分類される。非動作主名詞の語根となる状態動詞や非対格自動詞の数が単純に少ないということを加味しても、**-nte** はコントロールという意味的素性と全く相いれないわけではないことが表 1 から読み取れる。Cano (2013) は、**-nte** がコントロールを持つ有生物を表すということを指摘しているが<sup>9</sup>、今回の調査の結果はこの指摘が妥当なものであることを裏付けている。

表 1 から読み取れる **-nte** は **-dor** に比べ非動作主を編入しやすいという事実は両接辞の意味的差異の一つと考えられるであろう。しかしながら、**-nte** 派生名詞の表す有生物の対象についても、数の上では動作主のほうが多い。したがって、両者は基本的には動作主を編入する接辞ということになり、意味的に概ね等価ということになる。

しかしながら、この説明が十分なものであるのか疑問が残る。これまでに紹介したように、**-dor** と **-nte** では前者の生産性は後者の生産性に比べ圧倒的に高い。つまり、**-nte** は編入に際して、より多くの制限を課された接辞である。しかし、表 1 からは **-dor** は非動作主の編入に際して厳しい制限を課されていることが推測される一方で、**-nte** が有生物を表す際に受ける編入に関する制限を推測することは困難である。より正確には、**-nte** の表す動作主の種類が **-dor** の表すものに比べて圧倒的に少ないことから、**-nte** には編入することのできないタイプの動作主が存在すると考えられる。しかし、Laca (1993) を踏襲したコントロールの有無に基づく二分法ではそれがどのようなものであるのか推測することは困難である。

それでは **-nte** が有生物を編入する際に課されている制限とはどのようなものであるか。ここで手がかりになると思われるのは Cano (2013) の挙げている以下の例である。Cano (2013) では **-nte** は実際には、外項にコントロールを持つ対象をとるような動詞にも付加可能であると述べつつ、そうした動詞は活動動詞のような語彙的に非有界性の動詞であると述べている。

gobernante, aspirante, ayudante, comerciante, negociante, residente, cooperante, navegante, traficante, contendiente, viajante, anunciante, manifestante, militante, visitante, combatiente, informante, suplente, presidente, contribuyente, vigilante

(Cano 2013: 134)

---

<sup>9</sup> cf. 前章。

Cano (2013) の有生物を表す **-nte** 名詞は活動動詞から派生されたものであるとする説明は本研究の分析とも合致している（次節以降で詳述）。こうした事実から Cano は **-nte** による派生が成立するための条件として、語根の動詞が非有界性のものでなければならないとしている。しかし、前章で指摘したように、動詞の語彙的有界性は **-nte** による派生の可否を直接左右するものではない。

それでは、なぜ、**-nte** は活動動詞から動作主を表す名詞を派生しやすい一方、達成、到達動詞といった有界性の動詞から同種の名詞を形成しづらいのだろうか。確かに、事実として **-nte** による派生語の多くは活動動詞のような非有界性の動詞であることは確認した。この事実に加えて、語彙アスペクトが直接関係ないとすれば、可能性として、語根動詞の語彙的使役性が派生の可否を左右しているのではないかと考えられる。先述の通り、語彙的使役動詞とは動作の結果状態としての変化までを語彙的情報として含む動詞である。よって、語彙的使役動詞は典型的には達成、到達動詞のような有界性の動詞であり、活動動詞のような非有界性の動詞が使役性を持つケースは稀である<sup>10</sup>。**-nte** は語彙的に有界性の動詞の有生の外項を編入しづらいのではなく、語彙的使役動詞の外項相当の対象、つまり内項に対してなんらかの変化を意図的に生じさせる力を持つような有生の対象を編入しにくいと考えられるのではないだろうか。

そこで、先の分析で動作主と分類したものを、語根動詞の使役性に基づきさらに分類した。具体的には、語彙的使役動詞からなる派生名詞が表す動作主を「使役的動作主」、非語彙的使役動詞からなる派生名詞の表す動作主を「非使役的動作主」とした。そしてさらに、**-nte** 名詞の中には再帰動詞や非対格自動詞の主語にあたる対象を表すものがあり、そうした対象については、内項相当の対象として非動作主とは分けて扱った。その結果をまとめたものが以下の表である。

表 2. 使役性・コントロールの有無による両派生名詞の意味の分類

	<b>-dor</b>	<b>-nte</b>
使役的動作主	417	14
非使役的動作主	222	94
非動作主	21	40
内項相当	0	7
計	660	155

このように、動作主を語根動詞の使役性という観点からさらに分類した結果、**-dor/-nte** 間の意味的差異が明確になった。すなわち、**-dor** は動作主相当の対象であれば、自由に編入

<sup>10</sup> 非有界性の動詞が語彙的使役性を持ちえないわけではない。例えば、McCawley (1976) は使役性とアスペクトの間には相関関係がないと述べている。また、Van Valin & LaPolla (1997) はいかなるアスペクトタイプの動詞も使役性を持ちうるとしている。しかしながら、使役性の典型例が状態変化や搜索、消失であるため、有界性の動詞は非有界性の動詞と比べ、語彙的な使役性を持ちやすいと考えられる。

することのできる接辞であり、**-nte** は動作主については、使役的動作主、つまり、意図的に目的語相当の対象になんらかの変化を生じさせる動作主を編入しづらい接辞であると説明できるだろう。加えて、後述するように使役的動作主を表す 14 の **-nte** 名詞の中には解釈上の透明性や使用頻度が著しく低いものがあり、**-nte** による使役的動作主の編入は表 2 から読み取れるよりも厳しいものであると考えられる。

次節以降では、それぞれの接辞により表される使役的動作主、非使役的動作主、非動作主を詳しく観察していく。

#### 2.4.1. 使役的動作主

本稿では動作に対するコントロールを有する有生の対象を動作主、特に、被動作主になんらかの変化を生じさせる力を持った動作主を「使役的動作主」として扱う。語彙的使役動詞の有生の外項はこのタイプの対象にあたる。

表 2 に示したように、**-dor** の表す有生の対象の大多数 (417/660) はこの使役的動作主として分類されるものであるが、**-nte** がこうした対象を表す例は少ない。この事実は、**-dor** 接辞が **-nte** 接辞に比べ、高い動作主性と結びついた接辞であることを示唆している<sup>11</sup>。

##### 2.4.1.1. **-dor** 派生名詞の表す使役的動作主

先の表に示した通り、**-dor** 派生名詞の表す有生物の多くは、この使役的動作主に該当する。Laca (1993) は **-dor** は典型的には動作に対するコントロールを持ち、使役的なプロセスにある有生物を編入するとしたが、この Laca の説明は、本研究における辞書とコーパスに基づく分析の結果と合致している。今回の分析でみられた使役的動作主を表す **-dor** 名詞には以下のようなものがある。

- (4) creador, fundador, constructor, cazador, matador, devastador, demoledor, consumidor, marcador, libertador, organizador, innovador, diseñador, grabador, lanzador, matador, bateador, mediador, reformador, exportador, seleccionador, cargador, restaurador, despertador, revelador, anotador, iniciador, transformador, controlador, tirador, realizador, unificador, corregidor, trovador, tentador, impresor, reparador, tejedor, transportador, trazador, etc.

##### 2.4.1.2. **-nte** 派生名詞の表す使役的動作主

先の表に示した通り、**-nte** が動作主相当の対象を編入することは稀ではないようであるが、使役的動作主となると、その編入は厳しく制限されているように思われる。表 2 から明らかなとおり、**-nte** の表す動作主は大多数が非使役的な動作主である。使役的動作主はいわけではないが、その数は限られている。今回の分析でみられた、使役的動作主を表す -

---

11 Dowty (1991) は五種類の語彙意味論的素性の有無による動作主性の典型性の測定を提案している。そして本研究における使役的動作主とはこれら五種類の素性のすべてを有した動作主性の高い対象である。



nte 名詞には以下のものがある。

- (5) fabricante, tajante, cortante, cambiante, delineante, donante, dibujante, remitente, escribiente, mandante, firmante, comandante, sellante, trajinante

さらに、これらの派生名詞すべてが意味上の透明性を有し、現代スペイン語において広く使われているとはいえない。これらの -nte 名詞の中には語根に -nte 接辞が付加され、その外項を編入した結果、意味が決定される、という体系的なプロセスを経て形成されたものだけでなく、言語外の要因からの影響を多分に受けて使役的動作主を表すに至ったと考えられるもの、もしくは現代の、本研究が記述することを目指す派生のルールが定まる前の時代に形成され、それがそのまま生き残った派生語、または、使用が一部の話者に限られると考えられる語が存在するように思われる。以下ではこれらの -nte 派生名詞を一つずつ考察する。

#### 2.4.1.2.1. 一定の透明性を有していると思われる使役的動作主を表す -nte 名詞

以下で紹介する 8 つの -nte 名詞は、解釈上の透明性を持つものであると考える。つまり、それぞれ、製造する人物、何かを提供する人物、命令をする人物、指令をする人物、サインをする人物全般を表しており、いずれの派生名詞も一定の頻度で用いられている。従って以下の派生語は、使役的動作主を表す -nte による派生名詞として扱われるべきものであり、先に提示した仮説の反例ともなるものである。

- (6) fabricante, donante, mandante, comandante, firmante, delineante, dibujante, remitente

#### 2.4.1.2.2. 例外的な使役的動作主を表す -nte 名詞

一方で、以下に挙げる六種類の -nte 名詞は、本研究における基準によっては、使役的動作主を表すものとして分類されるが、その意味の透明性および現在における使用頻度という観点からいって、前節であげた -nte 名詞と大きく異なると考えられる。

- (7) cortante, tajante, cambiante, escribiente, sellante, trajinante

以下ではこれらの名詞を一つずつ、詳細に見ていきたい。

派生名詞 cortante は動詞 cortar と -nte 接辞からなる。まず、語根動詞の cortar は DRAE によれば以下のように定義されている。

cortar

Del lat. curtāre.

1. tr. Dividir algo o separar sus partes con algún instrumento cortante.
2. tr. Dar con las tijeras u otro instrumento la forma conveniente y apropiada a las diferentes piezas de que se compone una prenda de vestir o calzar. *Era capaz de cortar tres vestidos en una hora.*
3. tr. Darle en la extremidad del cañón a la pluma de ave para escribir los tajos convenientes y abrirle puntos.
4. tr. Hender un fluido. *Una flecha corta el aire; un buque, el agua.*
5. tr. Separar o dividir algo en dos porciones. *Las sierras cortan una provincia de otra; los ríos, un territorio.*
6. tr. Dividir el conjunto de cartas que forman la baraja, levantando unas cuantas de la parte superior para colocarlas en la parte inferior.
7. tr. Dicho del aire o del frío: *Ser tan penetrante y sutil, que parece que corta y traspasa la piel.*  
U. t. c. intr. y c. prnl.
8. tr. Acortar distancia.
9. tr. Atajar, detener, entorpecer o impedir el curso o el paso a las cosas.
10. tr. Dejar de decir algo, o señalar lo que no ha de decirse, en un discurso, un sermón, una comedia, etc.
11. tr. castrar (|| quitar panales con miel).
12. tr. Impedir que el jabón haga espuma. U. m. c. prnl.
13. tr. recortar.
14. tr. Mezclar un líquido con otro para modificar su fuerza o su sabor.
15. tr. Adulterar una droga con una sustancia que rebaja su pureza. U. t. c. prnl.
16. tr. Suspende o interrumpir algo, principalmente una conversación o plática.
17. tr. Decidir o ser árbitro en un negocio.
18. tr. grabar.<sup>12</sup>

この動詞の中心的な意味は「何かを切ること」であり、その結果、「生地を裁断する」、「蜂の巣を切って採蜜をする」といった専門的な意味合いでの切る動作（定義2・11）、および、「矢が風を切って飛ぶ」のような比喩的な意味での切る動作（定義4）が語義として記載されている。

この極めて多義的な動詞に **-nte** が付加され、**cortante** という派生語が形成される。そして、この接辞は語根動詞の外項を編入することから、派生語 **cortante** の語義は、「何かを切る人」、「裁断をする人」、「採蜜をする人」、「風を切って飛ぶ矢」のように、**cortar** の外項相当の対象を表すものであることが予想される。しかし、**cortante** の語義は極めて限定的である。DRAE、西和中はこの派生語を以下のように定義している。

<sup>12</sup> このほかにも辞書には様々な分野で用いられている **cortar** の記述があるが、紙面の都合上省略した。

cortante

Del ant. part. act. de cortar.

1. adj. Que corta.
2. m. y f. cortador (|| carnicero). (DRAE)

cortante

一男

- 1 肉切り包丁
- 2 肉屋 (西和中)

両辞書によれば、**cortante** の意味は「切る人・物」全般を表すのではなく、肉を切る人・物に限定される。確かに、本研究における分類の上では、**cortante** は使役的な動作主を表すものとなるが、この語は、前節で紹介した **fabricante** 等とは異なり、**-nte** が使役的動作主を編入したケースとしては例外的なものである。つまり、もしも **-nte** が使役的動作主を制限なく編入するものであれば、**cortante** は肉屋以外の「切る人」、「切る職業」を表すと考えられる。しかしながら、実際には **cortante** の語義は肉屋に限定されており、むしろ **-nte** による使役的な動作主の編入が限定的であることを示しているように思われる。

派生名詞、**tajante** は動詞、**tajar** と **-nte** 接辞からなる。まず、語根の **tajar** は DRAE によれば、以下のように、**cortar** 同様、切る動作を表すものであると定義されている。

tajar

Del lat. vulg. taleāre 'cortar', 'rajar', y este der. del lat. talea 'brote, renuevo', 'tálea'.

1. tr. Dividir algo en dos o más partes con un instrumento cortante.
2. tr. p. us. Cortar la pluma de ave para escribir.

そして派生名詞 **tajante** も **cortar** の場合同様、「切る人・物」全般を表すものではなく、肉屋のみを表すとされる。

tajante

Del ant. part. act. de tajar.

1. adj. Que taja.
2. adj. Concluyente, terminante, contundente.
3. m. carnicero ( || persona que vende carne).

(DRAE)

tajante

一男 肉屋の主人 (= carnicero)

(西和中)

このように、tajante も cortante 同様に、-nte が使役的動作主を編入したケースとしては周縁的なものである。

動詞 cambiar も DRAE が以下のように定義している通り多義的である。この動詞の中心義は変化に関わる動作であり、この動詞には自動詞と他動詞としての用法が記載されていることからわかるとおり、「変える」と「変わる」という動作を表す。

cambiar

Del lat. cambiāre, voz de or. galo.

Conjug. c. anunciar.

1. tr. Dejar una cosa o situación para tomar otra. U. t. c. intr. y c. prnl. Cambiar DE nombre, lugar, destino, oficio, vestido, opinión, gusto, costumbre.

2. tr. Convertir o mudar algo en otra cosa, frecuentemente su contraria. Cambiar la pena en gozo, el odio en amor, la risa en llanto. U. t. c. prnl.

3. tr. Dar o tomar algo por otra cosa que se considera del mismo o análogo valor. Cambiar pesos por euros.

4. tr. Dirigirse recíprocamente gestos, ideas, miradas, sonrisas, etc. U. t. c. prnl.

5. tr. trasladar ( || llevar de un lugar a otro). *He cambiado la mesa a otra habitación.*

6. tr. Quitar el pañal a un bebé y ponerle uno limpio.

7. intr. Dicho de una persona: Mudar o alterar su condición o apariencia física o moral. *Luis ha cambiado mucho.* U. t. c. prnl.

8. intr. Modificarse la apariencia, condición o comportamiento. *Ha cambiado el viento, el tiempo.*

9. intr. En los vehículos de motor y bicicletas, pasar de una marcha o relación de velocidad a otra.

10. intr. Equit. En la ambulación o carrera, acompasar el paso de modo diferente al que se llevaba.

11. intr. Mar. Bracear el aparejo, cuando se navega ciñendo por una banda, a fin de orientarlo por la contraria.

12. intr. Mar. virar ( || cambiar de rumbo un buque).

13. intr. Mar. Virar el cabrestante.

14. prnl. Mudarse de ropa.

こうした語根動詞の多義性、多機能性を考えれば、派生語 cambiante の意味は極めて狭い。両辞書による定義を参照されたい。

cambiante

Del ant. part. act. de cambiar.

1. adj. Que cambia.

2. m. Variedad de colores o visos que hace la luz en algunos cuerpos. U. m. en pl. *Los cambiantes de un tejido de seda.*

3. m. Hombre que tiene por oficio cambiar moneda.

(DRAE)

cambiante

形 変化する；変わりやすい

一男 （主に複数で） （光による）色の変化

一男 女 両替商

(西和中)

これらの語義のうち、DRAE の 3、**cambiante** の両替商という語義は本調査の分類上、使役的動作主と性格づけられる。しかしながら、**cambiar** が主語として選択し得るその他の様々な使役的動作主が一切編入されず、両替商に意味が限定されていることから、この **cambiante** も、**-nte** による派生名詞としては周辺的であり、**-nte** による生産的な使役的動作主の編入を示唆するものではない。

動詞 **escribir** は「書く」という動作を表す動詞である。

escribir

Del lat. scribere.

Part. irreg. escrito.

1. tr. Representar las palabras o las ideas con letras u otros signos trazados en papel u otra superficie. U. t. c. intr.
2. tr. Componer libros, discursos, etc. U. t. c. intr.
3. tr. Comunicar a alguien por escrito algo. U. t. c. intr.
4. tr. Trazar las notas y demás signos de la música.
5. prnl. Inscribirse en una lista de nombres para un fin.
6. prnl. Alistarse en algún cuerpo, como en la milicia, en una comunidad, congregación, etc.

そしてこの動詞からなる派生名詞 **escribiente** は「書く人」全般ではなく、「筆耕者」のみを表す。

escribiente

1. m. y f. Persona que tiene por oficio copiar o poner en limpio escritos ajenos, o escribir lo que

se le dicta.

2. m. desus. escritor ( || autor de obras escritas o impresas).

(DRAE)

escribiente

男 女 筆耕者、写字生；書記

(西和中)

この動詞には「清書をする」という意味のほかに、「本・論文を執筆する」、「手紙を書く」という意味もある。しかしながら、実際に *escribiente* がこうした動作を行う対象を表すことはなく、常に、筆耕者を表すためにのみ、*escribiente* は使用される。*Escribiente* は筆耕者という自らの意思で清書を行う人物を指すことから<sup>13</sup>、本研究の分類上、使役的動作主を表すものとなるが、上記の透明性のある派生名詞と同列に扱えるものはないだろう。

「押印する」という動作を表す動詞、*sellar* から派生した *sellante* には「(なんらかの書類に) 押印する人物」という意味があると西和中にはある。こうした人物は本研究における分類法では、使役的動作主となるだろう。しかし、DRAE にはこの派生語の記載がない。また、Corpus del español では使用が一度しか確認されない等、使用頻度が低い。加えて、当該コーパスにおける唯一の用例においては、*sellante* は「押印する人物」ではなく「歯の詰め物」という原因（2.5 節で詳述）相当の対象を表していた。

同様に、西英対照データベース Linguae における *sellante* の翻訳例の大多数は *sealant* という原因相当の物質であり、使役的な動作主として訳出されたケースは確認されなかった。

- (8) Una causa reconocida del fracaso de un sellante de fosas y fisuras es su incapacidad de sellar.  
'A recognised cause of pit and fissure sealant failure is an inability to seal.'

以上の点から、この派生語は、体系的に使役的動作主を表す語としては扱えないように思われる。

動詞 *trajinar* には自他両方の用法があり、前者の場合は「忙しく働きまわる、奔走する」、後者の場合は「配達する」という動作を表す。以下の DRAE による定義を参照されたい。

1. tr. Acarrear o llevar géneros de un lugar a otro.
2. intr. Ir de un lado a otro con cualquier ocupación o actividad.

<sup>13</sup> 以下の例文は *escribiente* が直接目的語 *estas líneas* を前置詞句として継承しており、この派生語が使役性を持つことを示している。El escribiente de estas líneas sólo quiere plasmar en las mismas una tenue radiografía de esta última promoción. (es TenTen)

そして、この動詞からなる派生名詞、*trajinante* には西和中によれば「配達人」という語義がある<sup>14</sup>。これは他動詞としての *trajinar* の主語を編入したものであると考えられる。「配達人」とは物の所在地を変える人物であり、本研究の分類上は、使役的な動作主である。しかしながら、これまでに紹介してきたケース同様、この派生名詞はその使用頻度が極端に限定されていることから *-nte* による使役的動作主の編入例として、*fabricante* 等とは同列に扱い難いものである。

本章における分析で使用しているコーパス、*Corpus del español* における名詞としての *trajinante* の用例は一例に留まり<sup>15</sup>、その *trajinante* は自動詞から派生したと考えられるものであった。

- (9) Y amigo si se echa usted al camino busque la compañía que todo buen trajinante nunca olvida.

(Corpus del español)

従って、*trajinante* には「配達人」という語義があるとされてはいるものの、現代において、この意味でこの派生名詞が使用されることは稀のようである。このことは、やはり、*-nte* による使役的動作主の編入が限定的であることを示唆するものであろう。

#### 2.4.2. 非使役的動作主

動作主の中には使役性を持たないものもある。そして本分析では、両接辞はともに、一定の頻度でこの「非使役的動作主」を編入していることを確認している。こうした派生名詞は、語彙的使役性を持たない動詞、典型的には活動動詞に両接辞が付加されることで形成される。以下に示す通り、両接辞とも、このタイプの動作主を一定数編入しており、この点は、両接辞の類似点と考えることができるだろう。

##### 2.4.2.1. *-dor* 派生名詞の表す非使役的動作主

非使役的動作主を表す *-dor* 名詞には以下のようなものがある。

- (10) Jugador, corredor, investigador, historiador, trabajador, narrador, observador, colaborador, servidor, obrador, boxeador, seguidor, competidor, contestador, negociador, fumador, inquisidor, predicador, nadador, volador, entrevistador, celador, perseguidor, retador, hablador, continuador, visitador, esquiador, peleador, saltador, batallador, cantor, bailador,

<sup>14</sup> DRAE はこの派生名詞の語義を 1. adj. Que trajina. Apl. a pers., u. t. c. s. としてのみ説明している。この場合の “trajina” が他動詞としてのものなのか、自動詞としてのものであるのかが述べられていないため、DRAE がこの派生名詞に「配達人」という他動詞由来の語義があるとしているかは不明である。

<sup>15</sup> この他に三例の、派生形容詞としての *trajinante* が検出されている。

escalador, estibador, arreador, recitador, navegador, interrogador, imitador, etc.

このように、-dor は活動動詞にも付加可能で、意味的に透明な動作主名詞を派生する。

#### 2.4.2.2. -nte 派生名詞の表す非使役的動作主

非使役的動作主を表す -nte 名詞には以下のようなものがある。

- (11) Estudiante, correspondiente, cantante, andante, caminante, visitante, ayudante, asistente, resistente, navegante, vigilante, acompañante, sirviente, atacante, migrante, inmigrante, combatiente, suplicante, durmiente, concursante, marchante, emigrante, traficante, paseante, participante, pasante, contendente, viajante, denigrante, actuante, conferenciante, asaltante, danzante, coadyuvante, deliberante, postulante, atorrante, reincidente, querellante, etc.

-nte による派生名詞が使役的動作主を表すことは稀であるが、この接辞は活動動詞という非使役的な動詞には付加可能で、意味上の透明性を有した動作主名詞を派生する。この点は -dor との一つの共通点であるといえるだろう。

#### 2.4.3. 非動作主

両派生名詞の表す有生物の中には語根動詞の表す動作に対してコントロールを持たないものが存在する。こうした有生物を本研究では「非動作主」と呼ぶ。非動作主を表す名詞を両接辞は派生することが確認されているが、分析によれば、-dor 派生名詞がこうした対象を表すことは稀である (表 1 参照)。従って -dor による非動作主の編入は制限されていると推測される。次節以降では非動作主を表すそれぞれの接辞による派生名詞にはどのようなものがあるのかを提示する。

##### 2.4.3.1. -dor 派生名詞の表す非動作主

表 1, 2 に示した通り、-dor による派生名詞の総数は -nte による名詞に比べ圧倒的に多いにもかかわらず、こうした非動作主を表す -dor 名詞の数は同様の -nte 名詞に比べ少ない。しかしながら、そうした -dor 名詞が全く存在しないわけではない。以下の -dor による派生名詞は非動作主を表していると考えられる。

- (12) morador, sufridor, ensoñador, apreciador, aborrecedor, odiador, habitador, sucesor, conservador, amator, triunfador, perdedor, prometedor, tenedor, poseedor, soñador, merecedor, complometedor, poblador, favorecedor, consentidor

一見して分かる通り、このクラスの派生名詞は基本的に状態動詞からなる。そしてこのこ



とは、**-dor** による派生名詞が非動作主を表しにくいことと密接に関連していると思われる。なぜなら「状態」とはその状態にある人や物の意思に関わらず成立するため、状態動詞の主語相当の対象は状態に対してコントロールを持たない。そしてすでに指摘した通り、**-dor** は原則的に、コントロールを持つ主語相当の対象を編入する接辞である。こうした理由から、**-dor** による状態動詞の派生は困難であり、そのため、非動作主を表す **-dor** 名詞の数は限定的なのだと考えられる。

(12) に挙げた例の他にも、一見状態動詞からなるとされる **-dor** による派生語は存在する。しかしこの場合、表される対象は語根の表す状態に対するコントロールを持つ有生物を表すことに注意されたい。例えば、典型的には状態動詞と考えられる *vivir* からなる *vividor* は単に「生きている人物」ではなく、西和中によれば、「人生を謳歌する人」、「抜け目のない人」、「要領のいい人」、「人にたかるもの」といった、「生きている」という状態に対するなんらかの意思性、コントロールを持つ人物を表す。同様に、動詞 *conocer* からなる *conocedor* も単に何かを「知っている人物」ではなく、「専門家」、「目利き」、「通」（西和中）を表す。*Laca* も *vividor*, *conocedor* には一定のコントロールが認められると述べている。

同様に、非対格動詞は実質的には **-dor** と結びつくことがない。このことも、非対格動詞の主語が動作に対するコントロールを持たないことと関連していると説明できるだろう。*NGLE* などで指摘されているとおり、一見、**-dor** が非対格動詞に付加されているように思われるケースも存在するが、こうした場合においては語根の非能格的再解釈が行われている：*llegador*（「到着する人」ではなく、「ラストスパートをかける人」を表す）。こうした派生名詞は編入される対象が動作、状態に対してコントロールを持つと考えられることから、表 2 では非使役的動作主として分類している。

このように、**-dor** 接辞が状態動詞、非対格動詞に付加されることは稀で、それはこれらの動詞の主語には状態・動作に対するコントロールが認められないことによると考えられる。そして更に、*vivir* のような基本的には状態動詞である動詞が **-dor** によって派生される際には活動動詞化されることも示唆的である。**-dor** による派生が成立するためには編入される対象が語根動詞の表す動作に対してコントロールを有していることは重要な条件であることが推測される。

#### 2.4.3.2. -nte 派生名詞の表す非動作主

一方、**-dor** による派生名詞と比べ、使役的動作主を編入することが著しく少ない **-nte** による派生名詞であるが、非動作主については、**-dor** に比べ、より自由に編入しているように思われる。そうした名詞には以下のようなものがある。このことは、状態動詞の主語などの、低い動作主性の対象と **-nte** の相性の良さを示すものであると考えられる。

- (13) *Amante, teniente, constituyente, residente, habitante, hablante, integrante, exponente, oyente, ignorante, viviente, sobreviviente, creyente, participante, pretendiente, superviviente,*

agonizante, penitente, intolerante, ocupante, intrigante, pudiente, desobediente<sup>16</sup>,  
principiante, gestante, concurrente, vidente, conviviente, habiente, aspirante, imponente,  
reemplazante, contratante, semejante, interviniente

#### 2.4.3.3. -nte の派生名詞の表す内項相当の対象

また、先行研究でも指摘されているように、-nte は -dor とは異なり内項相当の対象を編入することも確認した。内項相当の対象とは、非対格自動詞や再帰動詞の主語に相当する対象である。数は少ないものの、今回の調査では、そうした動詞を語根とし、かつ、有生の内項相当の対象を表す -nte 名詞を七種、確認している。

(15) Descendente, ascendente, cesante, mutante, convaleciente, maleante, sudante

-dor 派生名詞にはない、こうした内項相当の対象を表す -nte 名詞は、この接辞が -dor に比べ、低い動作主性指向の接辞であることを示唆している。

#### 2.4.4. 有生物を編入する接辞としての -dor と -nte — まとめ

以上、有生物を表す両接辞による派生名詞を分析した。一連の観察、分析を通じてまずわかったことは、両者の差異は Laca (1993) の主張とは異なり、単一のコントロールという素性の有無によってのみ説明されるものではないという点である。すでに示した通り、-nte による派生名詞の中には動作主を表すものが少なからずある。

そこで本研究では動作に対するコントロールを持つ有生物、本稿でいうところの動作主をさらに、語根動詞の使役性の有無でさらに分類した。その結果、表 2 に示した通り、両者の意味的な差異、すなわち、外項の編入のパターンの差異が浮き彫りになった。

まず、-dor が典型的に編入する一方で、-nte が極めて編入しづらい有生物は使役的動作主という意味タイプに該当することも分かった。-nte の表す有生物の中にも、本研究における基準のもとでは、使役的動作主として分類されるものがなかったわけではないが、その中には解釈上の透明性が乏しいものや、使用頻度が極めて低いものがあり提示した分析結果が示す以上に -nte による使役的動作主の編入は稀である。この点から、-nte は使役的動作主の編入を制限された接辞であると考えられる。

次に、-nte が特徴的に編入する対象として、非動作主にあたる有生物、または内項相当の有生物が挙げられる。これらの意味タイプの特徴はその動作主性の低さにある。そして、すでに示した通り、-dor がこうした対象を編入することは稀である。この事実も、両接辞を意味的に区別するものと考えられる。

また、分析からは両者の類似点も明らかになった。両接辞は非使役的動作主であれば共に生産的に編入するようである。

<sup>16</sup> 語根となる動詞は desobedecer であり、形態論的には不規則な派生である。

## 2.5. 無生物

両接辞による派生名詞は多義的であり、有生物だけではなく無生物を表す。本節ではそうした無生物名詞を分析し、有生物の場合同様、両タイプの派生名詞の表す無生物にはなんらかの差異がみられるのか、あるとすればそれはどのようなものであるのかを考察していく。

前節で有生物を動作主と非動作主という対立を軸に分析したように、本節でもまず、先行研究を踏襲し両接辞の表す無生物を「道具」と「原因」に分類する。様々な先行研究において、無生物については **-dor** は道具を、**-nte** は原因を典型的に表す接辞であるということが指摘されてきた (cf. Laca 1993, Rifón 1996-1997, Cano 2013, etc.). しかしながら、すでに指摘したように、これらの研究は研究者の内省に基づくものであり、本研究で進めている定量的なものとは異なる。従って、以下の議論は、これまでの質的研究における、**-dor** は道具、**-nte** は原因に強く結びついた接辞であるとする接辞を検証するものとして位置付けられるだろう。

まず、今回扱った、810 の **-dor** 名詞、264 の **-nte** 名詞の内、それぞれ 315、117 種類が無生物を表すことを辞書から確認した。これらの派生名詞によって表される無生物をまず、道具、原因、そしていずれにも該当しないその他に分類すると以下の通りになる。

表 3. 両派生名詞の表す無生物

	-dor	-nte
道具	251	4
原因	39	68
その他	25	45
計	315	117

次節以降では、それぞれの範疇の無生物を詳しくみていく。また、併せて道具、原因の詳しい定義についても次節以降で確認する。

### 2.5.1. 道具

**-dor/-nte** による派生名詞のような主語的な派生語の意味を議論する際には、しばしば「道具」(西・INSTRUMENTO、英・INSTRUMENT) という意味役割が設定される<sup>17</sup>。これは両タイプの派生語の差異を明らかにするにあたり、有用であると考えられ、本研究でも条件を満たす無生物を道具として扱う。

Laca (1993) も道具という意味役割を設定したうえで議論を進めているが、Laca (1993) は

<sup>17</sup> スペイン語以外の言語においても所謂動作主派生名詞が道具を表すという現象が確認されている。こうした多義性に関する先行研究には Alexiadou & Schäfer (2006), Alexiadou & Schäfer (2008), Rainer (2009), Navalón (2011), Ferret & Villoing (2015) 等がある。

この役割について以下のように述べている。

[...] instrumento en sentido estricto: designan todo tipo de aparatos, utensillos, herramientas, máquinas o pares de tales artefactos según la función que éstos cumplen (en este sentido son la contraparte inanimada de los sustantivos personales clasificantes).

(Laca 1993: 197)

このように通常、なんらかの目的に使用されるために作られた人造物が道具とみなされる。道具は無生物であるが、道具が使用され、動作が実行される際には常に動作主のコントロールが介在するという点は本論を進めていくうえで極めて重要である。この介在性について、Luján (2010) は以下のように、道具と動作に対するコントロールの関係について述べている。

As opposed to Agents, Instruments are prototypically inanimates and can be controlled. This second trait seems to be more salient in Instruments than the lack of animacy, given that inanimate entities that cannot be subject to control rarely show up as Instruments.

(Luján 2010: 164)

Laca (1993) も明言こそしていないものの、道具とコントロールを併せて考える立場をとっていたと考えられる。同著者は、-dor を高い頻度で道具を編入する接辞であることを指摘し、最終的に -dor をコントロールの介在するプロセスにある対象を編入する接辞であるとしている。

本稿でも、動作主のコントロールは道具という意味役割を特徴づける重要な要素であると考え、使役性を持ち動作主に意図的に使用される人造物を道具として扱う。

#### 2.5.1.1. -dor 派生名詞の表す道具

表 3 を一見して分かる通り、-dor 派生名詞の表す無生物の大多数は、道具に該当する対象を表すものであった。例えば、以下のようなものがある。

(14) Marcador, vendedor, mostrador, acelerador, servidor, contador, indicador, grabador, generador, regulador, borrador, portador, ventilador, contenedor, amplificador, tenedor, cargador, refrigerador, computador, procesador, despertador, numerador, condensador, elevador, anotador, conmutador, transformador, controlador, obturador, distribuidor, buscador, abridor, transportador, perturbador, surtidor, detonador, disparador, calentador, etc.

先述の通り、道具は使役性とコントロールを有することから、使役的動作主に極めて類似

している（有生性によってのみ対立している）。-dor が道具を編入する際に特に制約を受けないのは、この意味タイプに属する対象が、高い動作主性を有することによると考えられる。従って、-dor 名詞の表す無生物の大多数が道具であるという事実はやはり -dor が高い動作主性と結びついた接辞であることを示唆するものであるだろう。

#### 2.5.1.2. -nte 派生名詞の表す道具

-dor による派生名詞が活発に道具を編入するのとは対照的に、-nte 名詞が道具を編入することは極めて稀である。今回の分類法に従えば、検討した 117 の -nte 派生名詞のうち、以下の四例のみが道具を編入する -nte 名詞に該当する。

(15) cortante, tajante, trinchante, tirante

さらに、これらの道具を表す -nte 派生名詞の解釈上の透明性については、疑問が残る。Cortante, tajante, trinchante は先の -nte による使役的動作主を分析していた時にも問題になった派生名詞である。これらの派生名詞の表す有生物は「切る人」全般ではなく、「肉屋」に限定されていたのと同様に、これらの表す道具は「切る道具」全般ではなく、「肉切り包丁」に限定される<sup>18</sup>。Google Books によればこれらの派生名詞は 16 世紀から用いられており、現代のスペイン語において、-nte が生産的に道具を編入するものであることを示すものではない。道具という範疇は先に紹介した使役的動作主に意味論上、類似するものであるが、こうした対象を -nte が使役的動作主の場合同様、原則的に編入しないという事実は強調しておきたい。この事実もまた、-nte 接辞が高い動作主性を持つ対象を拒絶するものであることを示唆している。

#### 2.5.2. 原因

両接辞による派生名詞の中には、意味役割でいえば原因相当の対象を表すものがある。表 3 に示したように、両接辞による派生名詞の中には共に一定数、原因を表すものがある。これもまた両接辞間の意味的類似点であると考えられる。

原因とは多くの場合無生物<sup>19</sup>であり、目的語相当の対象になんらかの変化を生じさせるものである。この点において、道具と原因は意味的に類似しているが、変化を生じさせるプロセスにおける動作主の介入の有無、つまり動作に対するコントロールの有無において異なっている。原因はそれ自体で、動作主の意図的な介入なしに変化を生じさせる無生物の持つ意味役割である。

<sup>18</sup> 西和中には「石切り用ハンマー」、「サイドテーブル」という語義の記載がある。

<sup>19</sup> 原因とは、非意図的に、対象になんらかの変化を生じさせるものを指す。従って、文脈次第で、有生物も原因として解釈されうる: Este hombre rompió el vaso accidentalmente. しかしながら、今回調査をした派生名詞のなかで、辞書によって有生物でありかつ、非意図的に変化を生じさせるものを表すと定義されていたものはなかった。Laca (1993) もまた、無生の CAUSA のみを扱っており、有生物でありかつ原因にあたる対象を扱っていない。

例えば Laca (1993) が道具という意味役割を *instrumento en sentido estricto* としているのも、道具と原因を明確に区別するためである。また、同著者は原因にあたる化学物質などを *-dor* 名詞が表すことは稀であるとしている。

De los nombres de instrumento en sentido estricto conviene distinguir aquellos sustantivos que no son designaciones de artefactos según la función, sino que se basan en la capacidad de producir un efecto determinado, y designan agentes químicos (*blanqueador, catalizador, fijador, reforzador*). Este tipo, que produce sustantivos no individuados (nombre de masa o continuos), apenas está representado dentro de los derivados en *-dor*.

(Laca 1993: 196)

原因と道具の違いは動作へのコントロールの有無、つまり動作主の介入の有無の違いである。これにより、以下のような前置詞との共起の容認性に関する差異が原因と道具との間には観察される。

(16) Los ríos se contaminan a causa de/por/con el mercurio. 原因

(17) Las botellas de esta marca se abren #a causa de/#por/con el abrelatas. 道具

道具とは動作主に行使されることで変化を生じさせる物である以上、*con* との共起は自然である一方、*a causa de* や *por* といった句との共起は不自然である。この共起が認められるのは、道具が（なんらかのアクシデントにより）動作主に意図に反してなんらかの変化を生じさせた時、つまり、原因として解釈される場合のみである。一方、原因相当の対象は、自発的になんらかの変化を引き起こすものであり、そのことから、*por* や *a causa de* といった語句と共起する。このように、道具と原因の使用可能な文脈は必ずしも同一ではない、従って、両者はそれぞれ異なる意味役割であるといえる。

#### 2.5.2.1. *-dor* 派生名詞の表す原因

原因を表す *-dor* 派生名詞には以下のものがある。このように *-dor* の表す無生物は道具だけでなく原因に該当するものも少なからず存在する。

(18) *Inhibidor, revelador, catalizador, trazador, fijador, aglutinador, bronceador, acondicionador, preservador, poulidor, purgador, endurecedor, blanqueador, potenciador, reduccionador, organizador, encantador, acogedor, multiplicador, confortador, conturbador, intensificador, modificador, cuantificador, actualizador, especificador, aceptor, conector, etc.*

#### 2.5.2.2. *-nte* 派生名詞の表す原因

原因を表す *-nte* 名詞には以下のものがある。これまでみてきたとおり、*-nte* の生産性は

-dor よりも低い、原因を表す -nte 名詞の数は原因を表す -dor 名詞に比べて多い。このことから、-nte は原因という意味役割と密接に結びついた接辞であるといえるだろう。

- (19) Estimulante, disolvente, excitante, picante, absorbente, aislante, fulminante, refrigerante, reconformante, contaminante, aglutinante, secante, sedante, colorante, fertilizante, detergente, fundiente, repelente, relajante, desinfectante, purgante, reflectante, desodorante, nutriente, edulcorante, coagulante, espumante, congelante, desecante, tranquilizante, reconstituyente, diluyente, suavizante, mordiente, conservante, reactante, confortante, adulterante, etc.

### 2.5.3. その他

両派生名詞の表す無生物の大多数は道具と原因のいずれかに分類されるが、先にふれたとおり、いずれにも分類不可能なものも存在する。以下ではそうした対象について論じる。

#### 2.5.3.1. 非使役的道具

ここまでは先行研究に従い、両タイプの派生名詞の表す無生物を道具と原因というカテゴリに分け、両者の差異を探るという方向性をとった。道具と原因はいずれも、目的語相当の対象になんらかの変化を与えるものであるが、両者は語根動詞の表す動作の達成のために、動作主のコントロールを必要とするか否かという点で対立するものである。

しかし、実際に両派生名詞の表す無生物には、数は多くないものの、先に見た道具のように人造物であり、日常的な意味合いでの道具に該当するものの使役性を持たないものが存在する。こうした性質から、これらの道具は「非使役的道具」とすることができるだろう。つまり、道具という範疇も、動作主と同様、使役性の有無により二種類の下位範疇に分類可能である。こうした非使役的道具は表3における段階では「その他」に分類してある。

具体的には、-dor 名詞には12、-nte 名詞には六種類、非使役的道具を表すものを確認している。特に興味深いのは、道具とは Laca の述べる通り、基本的に使役性を持つものであると考えられ、したがって、非使役的道具は使役的道具に比べ、圧倒的にその数が少ない。しかしそれにもかかわらず、非使役的道具を表す -nte 名詞の種類は、使役的な道具を表すものに比べて多い。この点は -nte 接辞の編入規則を記述するにあたっての有力な手掛かりとなるように思われる。両派生名詞の表す非使役的道具には以下のものがある。

- (20) -dor: servidor, contestador, mecedor, volador, bañador, saltador, navegador, flotador, respirador, zumbador, andador, ascensor

- (21) -nte: flotante, batiente, pesante, basculante, acompañante, interrogante

また、(20), (21) の名詞の表す道具は使役性を持たない、いわば非典型例であることから

先行研究で取り上げられることがなかった。本研究の採用したデータの収集法は、こうしたケースも漏らさずに収集することを可能とする。

#### 2.5.3.2. 内項相当の対象

先述の通り、**-dor** とは異なり、**-nte** 接辞は非対格動詞や再帰動詞に付加され、名詞、形容詞を派生する。この時、**-nte** はその主語を編入するものであるが、非対格自動詞の主語は項構造上、内項にあたるものであり、結果として、非対格自動詞から派生した **-nte** 名詞の表す対象は語根動詞の内項相当のものとなる。今回の調査では以下の 36 種類の派生名詞を確認した。これらの名詞も表 3 では「その他」とした。

- (22) Corriente, montante, asonante, rompientes (複数形で砕ける波), discordante, constante, sudante, creciente, brillante, secante, equivalente, consiguiente, referente, resultante, antecedente, entrante, variante, resultante, cambiante, saliente, vibrante, emergente, colgante, delirante, sonante, excedente, afluyente, faltante, durmiente (横木), silbante, fulorecente, concertante, cuadrante, menguante

#### 2.5.3.3. 場所

両派生名詞は語根動詞の動作に関連する場所を表すことがあることはこれまでに、様々な先行研究で指摘されている。そして、同様に指摘されているように、両接辞の場所を表す接辞としての生産性は現代では極めて限定的である。場所を表す両接辞による派生名詞には以下のものに限られる。

- (23) **-dor**: corredor, comedor, orador, mirador, recibidor, parador, asador (焼肉屋), vestidor, probador, apagador, cenador, graneador, partidador (m. Sitio donde se hace esta división o repartimiento.)

- (24) **-nte**: restaurante, batiente, rompientes

また、上記の名詞には意味の透明性が極めて低いものが多い。例えば、**asador** は何かを焼く場所全般ではなく、焼いた肉を提供するレストラン、食堂に限られる。同様に、**restaurante** も「休む場所、修復する場所」全般ではなく食事をする場所に限られる。

以上の理由から、両接辞は共に現代においては場所を表す名詞を派生する機能を実質的に失っていると判断し、以後では分析の対象として扱わない。

#### 2.5.4. 一無生物を表す接辞としての **-dor**, **-nte** — まとめ

本節では無生物を表す両接辞による派生名詞を分析し、先行研究の妥当性を確認した。分



析の結果、先行研究で指摘されてきた通り、**-dor** は道具、**-nte** は原因と、それぞれ強く結びついていることが確認された。

しかしながら先行研究と食い違うケースも散見された。例えば、**-dor** は頻度の上では **-nte** に劣るものの、原因を表すことがある。また、**-nte** についても道具を表さないわけではない。**-nte** が語彙的使役動詞から道具を形成するケースは周辺のなものに限られているものの、自動詞のような非語彙的使役動詞から道具を表す名詞を形成することを確認した。この点も先行研究で指摘されてこなかった点である。

分析の結果を反映し、表 3 をより詳細にまとめなおしたものが以下の表 4 である。

表 4. 両派生名詞の表す無生物

	-dor	-nte
使役的道具	251	4
非使役的道具	12	6
原因	39	68
内項相当	0	36
場所	13	3
合計	315	117

## 2.6. 考察

両接辞は共に、有生・無生の対象を編入していることが明らかになった。従って、有生性は両接辞を区別する直接的な要因ではない。動作に対するコントロール (CON)、および、語彙的使役性 (CAU) という二種類の語彙意味論的素性の組み合わせこそが両接辞の分布と密接に関連していると考えられる。ここまで使用してきた本研究における意味範疇（「使役的動作主」、「非動作主」等）は以下の素性の組み合わせをとる。

### 有生物

使役的動作主 (+CON, +CAU)

非使役的動作主 (+CON, -CAU)

非動作主 (-CON, -CAU)

内項相当 (-CON, -CAU)

### 無生物

使役的道具 (+CON, +CAU)

非使役的道具 (+CON, -CAU)

原因 (-CON, +CAU)

内項相当 (-CON, -CAU)

道具を +CON としたのは、道具というものが、動作に対するコントロールを持った動作主に使役されること、つまり、道具が語根動詞の表す動作に用いられる際、常にコントロールが介在することによる。

これまでの観察は二種類の語彙意味論的素性の組み合わせという観点から表 5 のとおりにまとめられる。

表 5. -dor/-nte 派生名詞の意味の分布

素性の値	意味役割	編入の可能性
+CON, +CAU	使役的動作主 使役的道具	-dor のみが編入
+CON, -CAU	非使役的動作主 非使役的道具	両接辞が編入
-CON, +CAU	原因	両接辞が編入
-CON, -CAU	非動作主 内項相当の対象	-nte のみが編入

このことから、両接辞による編入に関わる規則は以下のものであることが推測される。

#### -dor による外項の編入

-dor は使役性とコントロールという素性のうち少なくともどちらかが + である外項を編入する。

- 両素性が + である外項（道具・使役的動作主）を自由に編入
- 片方の素性のみ + である外項（非使役的動作主・非使役的道具・原因）を編入
- 両素性が - である外項を編入しづらい（非動作主・内項相当の対象）

#### -nte による外項の編入

-nte は使役性とコントロールという両素性について + である外項を編入しない。

- 使役的動作主・使役的道具（ともに+CON, +CAU）を編入しない
- 片方の素性のみが + である外項（非使役的動作主・非使役的道具・原因）を編入
- 両素性が - である外項を編入する（非動作主・内項相当の対象）

## 2.7. 同一動詞を語根とする派生名詞のペア

ある動詞に -dor と -nte の両方の接辞が付加されることがしばしばある。本節ではこの一見同義的な、同じ動詞を語根とする両接辞による派生名詞のペア（以下、同語根ペア、ex. picador/picante）を前節で提示した記述を基に分析していく。本章で扱ってきた分析対象の中には 90 種類の同語根ペアが確認されており、これらを本節では扱っていく。

前章で紹介したように、こうしたペアの間では意味の差異がしばしば観察される。そして、ペア内の派生名詞は、それらを構成する接尾辞によってのみ異なっている。従って、基本的に、派生名詞の間で観察される意味の違いは、接辞によって引き起こされたものであるといえることができるだろう。そして、こうした意味の差異は多くの場合において編入する対象の動作に対するコントロールと使役性の有無に基づくものであることを紹介し、前節で提示した記述の妥当性を示す。

### 2.7.1. 意味の差の観察された同語根ペア

今回分析した 90 のペアの内、47 で使役性、コントロールに関する意味の違いが確認された。そしてその多くは、先に提案した両接辞の異なる外項編入に関わる制約から説明される。

#### 2.7.1.1. 使役的動作主・道具を表す -dor 名詞と自動詞派生の -nte 名詞

スペイン語動詞の中には他動詞としての用法と自動詞としての用法（再帰動詞、非対格動詞を含む）の両方を持つものがある。こうした動詞に両接辞が付加される場合、例外なく -dor による派生名詞が他動詞の外項、つまり使役的動作主や使役的道具を編入し、-nte が自動詞の主語相当の対象を編入することが確認された。

動詞、secar はこのタイプの動詞である。

(25) Lavamos las endibias, las secamos y las cortamos en cuartos. 他動詞としての用法

(es TenTen)

(26) Se recogen los frutos que se secan a 35°C.

(es TenTen)

他動詞としての secar の主語は動作主、ないしは原因に相当するものであり、目的語相当の対象を濡れている状態から乾いている状態へと移行させるものである。一方の、再帰動詞の secar の主語にあたる対象は使役者・物の介入がない中、自然に乾くものである。このように、他動詞としての secar、自動詞としての secar の主語はそれぞれ、使役性・動作へのコントロールの有無という点で大きく異なる。

この secar には両接辞が共に付加され、secador, secante という派生名詞が形成される。しかしながら、その意味は全く異なる。以下の DRAE の定義を参照されたい。

secador, ra

1. adj. Que seca.

2. m. Cada uno de los diversos aparatos y máquinas destinados a secar las manos, el cabello, la ropa,

etc. (道具 +CAU, +CON) <sup>20</sup>

3. m. Arg. Utensilio de limpieza consistente en un brazo de goma con mango, que se desliza a ras del piso para enjugarlo. (道具 +CAU, +CON)

4. m. Bol., El Salv., Nic. y Perú. Paño de cocina para secar los platos y la vajilla.  
(道具 +CAU, +CON)

5. f. secador (|| cada uno de los diversos aparatos destinados a secar). (道具 +CAU, +CON)

secante

Del ant. part. act. de secar; lat. siccans, -antis.

1. adj. Que seca. U. t. c. s.

2. adj. Fastidioso, molesto. U. t. c. s. (原因 +CAU, -CON)

3. adj. coloq. Ur. Dicho de una persona: gafe. U. t. c. s.

4. m. aceite secante. (自動詞相当<sup>21</sup> -CAU, -CON)

5. m. papel secante. (原因 +CAU, -CON)

このように両派生名詞はそれぞれ多義的である。しかしながら各派生名詞の語義を本論における基準で分類していくと、多義性にも規則性があることがわかる。まず、secador は「乾かすもの」を表すが、それは全て、動作主を前提とする「道具」に該当するものである。一方、secante の語義には道具に該当するものがなく、原因（次節で詳述）か自動詞としての secar の主語相当のものに限られている。

この意味の分布は前節で提案した両接辞の意味的価値の違い、つまり、両接辞が編入に際して語根動詞に課す制約の違いとして説明されるだろう。

他動詞 secar は主語として動作主、道具、原因をとり、自動詞としての secar は内項相当の対象をとる。そして、この動詞には主語を編入する機能を持った接辞、-dor/-nte が付加される。しかしながら、それぞれの接辞は動詞 secar のとりうる全ての意味タイプの主語を編入するわけではない。既に示した通り、少なくとも辞書のレベルでは -dor は道具、-nte は原因・内項相当の主語のみを編入するとされている。このような分布になるのは単なる偶然ではなく、-dor は使役性、コントロールの両者が陰性である内項相当という対象を、-nte は両素性が陽性であるような道具という対象を編入できないことからこのような差異が生じているのではないと思われる。

Cambiador/cambiante では前者が交換器という道具や、交換する人全般、特に両替商という使役的動作主を表す。一方、cambiante は -nte 派生名詞としては例外的に、cambiador 同

<sup>20</sup> 意味役割、二種類の接辞の値に関する記載は筆者による。

<sup>21</sup> 西和中では「(塗料と混ぜて乾きを早める)乾性油」という「原因」ともとれる形で定義されている。しかしながら、aceite secante は Diccionario de Arquitectura y Construcción で Aceite vegetal que se oxida y endurece fácilmente al ser expuesto al aire, creando así una película elástica y resistente. と定義されているように、「乾燥させる油」ではなく、「乾燥する油」と認識されているように思われる。

様、両替商という使役的動作主を表す<sup>22</sup>。しかし、この *cambiante* には *cambiador* にはない、以下の語義がある。

m. Variedad de colores o visos que hace la luz en algunos cuerpos. U. m. en pl. Los cambiantes de un tejido de seda. (DRAE)

光による色の変化（西和中）

「光による色の変化」とは、色に主体性、使役性があるわけではない。この対象の動作主性の低さから、この対象の編入には *-dor* ではなく *-nte* が使用されるものと考えられる。

*Vibrar* も「何かに振動を与える」という他動詞としての用法と、「振動する」という自動詞としての用法を併せ持つ動詞である。そしてこの動詞にも両接辞による派生名詞があり、意味には明確な違いがある。*Vibrador* は「バイブレイター」という道具を、*vibrante* は「振動音」という非対格自動詞 *vibrar* の主語を編入し、表している。

*Colgar* から派生した *colgador/colgante* のペアにも同様のことがいえる。*Colgador* は「ハンガー」を *colgante* は「ペンダント」、南米ではこれに加え、「懐中時計」を表す (cf. 西和中)。この意味の対比も両接辞に異なる意味的価値から説明される。ハンガーは、動作主が洋服などをつるすために用いる道具である。従って *+CON, +CAU* という意味的価値を持つこの道具の編入には *-dor* が使用される。一方、ペンダントと懐中時計は、動作主が何かを吊るすために使用するものではなく、それ自体が「吊るされるもの」である。つまり、*colgante* の語根は再帰動詞としての *colgarse* から派生していると考えられる。その主語は使役性も意図性も持たないものである。よって、ペンダントや懐中時計は *-nte* により編入されるものと考えられる。

動詞 *silbar* には「動作主が意図的に口笛を吹く」という非能格的自動詞としての用法<sup>23</sup>と「風や飛んでいる矢・弾丸などが鳴る」という非対格自動詞的な二種類の用法があり、また、両接辞による二種類の派生名詞が存在する。*Silbador* は非能格自動詞の外項を編入し、「口笛を吹く人物」を、*silbante* は非対格自動詞の外項を編入し、「歯擦音」を表す。本論の枠組みでいえば、前者は非使役的動作主、後者は内項相当となり、このペアにおいても先に述べた分布が観察されていることになる。

動詞 *Sonar* にも「なんらかの音を鳴らす」という他動詞としての用法と、「なにかが鳴る」という非対格自動詞的な用法があり、*sonador* は「何かを鳴らす人物」、すなわち使役的動作主を、*sonante* は「母音として音節の核となる子音」という非対格自動詞としての *sonar* の内項相当の対象とおもわれるものを編入している。

多義的な動詞、*batir* にも二種類の派生形がある。この動詞の中心義は「何度も打ち付け

<sup>22</sup> 先述の通り、極めて例外的なケースである。

<sup>23</sup> 目的語になんらかの曲の名前をとり他動詞として用いられることもある。

る」であると考えられ、自他両方の用法が存在する。まず、-dor による batidor(a) は現代においては基本的に、「泡だて器」、「ハンドミキサー」という使役的な道具を表す。このほかにも、「金属を打ち延ばす人物」、「箔職人」という使役的動作主を表す場合もある。一方の batiente には「扉の板」という意味がある。これは自動詞としての batir の外項が編入されたものであろう。その語根は以下のような形で使用される batir であると考えられる。

- (27) Contamos con las mas amplia gamas de puertas automáticas de emergencia, este tipo de mecanismo son en esencia puerta corredizas (operadores SLX), con la ventaja de que estas se pueden hacer abatibles en caso de emergencia, las puertas baten tanto hacia fuera como hacia adentro (break out; break in) las cuales se abren una manera sencilla garantizando una fácil evacuación en caso de emergencia.

(es TenTen)

動詞 operar は「実行する」、「手術などを行う」という外項に動作に対するコントロールを持った対象をとる用法と、「何かの要因が作用している」というコントロールを持たない主語をとる自動詞としての用法を持つ。その派生名詞 operador には「手術の執刀者」という使役的動作主を表す用法 (el médico operó a esa persona.), および、コールセンターなどにおける「オペレーター」を表す用法がある。いずれも他動詞としての operar を語根とするものであろう。また、一方の operante は広く、「作用している要因」を表す。これは自動詞としての operar から派生されたものであると考えられる。

Montar から派生された montador/montante のペアにも同様の意味の違いが観察される。西和中、DRAE の両辞書は montar の第一義は「何かに乗る」という動作であるとしている。この動詞は非能格自動詞としても用いられるが、目的語に乗る対象をとり、他動詞としても使用される。この用法から派生したと思われる、「何かに乗る人物」を表すのは -dor による montador である。また、この動詞には「機械などを組み立てる」という意味もある。そして「機械などを組み立てる人物」という使役的動作主は、やはり、montador によって表される。また montador は「乗馬用の踏み代」という道具を表すこともある。このペアにおいても道具は -nte ではなく -dor によって編入されるという点は仮説の妥当性を示すものであろう。一方の montante には西和中によれば「総計」という意味がある。これは同辞書による montar の意味の一つ、「a...(数量に) (合計が) なる」という非対格自動詞としての用法から派生したものであろう。また、montante は女性形で使われる場合に、「満潮」を表すと西和中にある。同辞書の montar の項目内に対応する意味はみられないが、これは DRAE による自動詞としての montar の語義、5. intr. Dicho de parte de una cosa: Estar cubriendo parte de otra. から派生したものと考えられる。このほかにも montante は「機械などの支柱」、「つかえ棒」を表すとされる (西和中)。これらは日常言語的感覚でいえば、道具のようにも思われるが、支柱とは動作主の介在を必要とせず、単独で機械を支えるものであり、本研究の分類基準では原因に該当する。このように、montador, montante は共に多義的であるにもかかわらず、-dor による派生名詞は使役的動作主、道具を、-nte による派生名詞は内

項相当の対象および原因を表すという対比がこれまでに紹介してきた同語根ペアと同様に観察される。

Romper にも rompedor/rompiente という二種類の派生名詞が存在する。前者は「何かを壊す人物」という動作主を、後者は複数形で使用される際には「砕ける波」、単数形、主に女性形で「岩礁」を表す。「砕ける波」はおそらく、las olas se rompen. という再帰動詞から派生したものであると考えられ、後者は場所を表すものである。

Pesar から派生した pesador/pesante 間にも同種の意味の対立がみられる。Pesador は「計量係」という他動詞としての pesar の主語相当の対象を編入し、分銅を表す pesante は自動詞としての pesar から形成されたものであろう。このペアにおいても、-dor が動作 pesar へのコントロールを有する対象を編入し、-nte はコントロールを持たない対象を編入するという対比が観察される。

多義的な動詞、tratar から派生した tratador/tratante についても同様のことが言える。Tratador は「仲介人」、tratante は自動詞としての tratar から派生していると考えられ、「商人」を表す。Tratar の表す「商売をする」という動作は両辞書において自動詞であると定義されている。

#### intr. Comerciar con géneros. (DRAE)

Aspirador/aspirante についても同様である。語根の aspirar には「吸い上げる」という他動詞としての用法と、「熱望する」という自動詞としての用法がある。他動詞 aspirar の表す「吸い上げる」という動作は通常、なんらかの意図をもってなされる。従って、この他動詞としての aspirar に付加されるのは -dor であり、派生名詞 aspirador は「掃除機」という使役的道具を表す。一方の -nte は自動詞としての aspirar に付加され、aspirante は「志願者」を表す。このような差異が生じるのも、-nte が使役的道具という使役性、コントロールという二種類の素性が陽性であるような対象を編入しえないためであると思われる。

以上、ここまで、自他交替をする動詞を語根とする同語根ペアについて論じた。こうしたペアにおいては既に示した通り、一貫して、-dor 名詞は他動詞、自動詞であれば非能格自動詞から派生されており、-nte 名詞は非対格自動詞を含む自動詞から派生されている。こうしたペアとは真逆の、-nte 名詞が他動詞から、-dor 名詞が自動詞から派生されているというケースは一例も観察されなかった。この事実は本論の仮説の妥当性を支持するものであるだろう。両接辞による派生名詞は確かに多義的ではあるものの、その意味は決して自由に、場当たりの決定されるのではなく、なんらかの規則に従って決定されているように思われる。そしてその規則は先に提示した仮説と矛盾するものでないことも明らかになった。

#### 2.7.1.2. 使役的動作主・道具 VS. 原因

また、同じ語彙的使役動詞を語根とする両接辞による派生名詞のペアも確認されている。

そうしたペアの多くでは、-dor 派生名詞が使役的動作主・道具を、-nte 派生名詞が原因を表すという規則的な意味の対比が観察された。

例えば動詞 *excitar* には、西和中によると、「感覚・組織などを刺激する」、「興奮させる」、そして電気工学における「励磁する」という語義がある。そして、この *excitar* から派生した名詞 *excitador* には、本研究で使用した二種類の辞書は「励磁機」という意味があるとしている<sup>24</sup>。この励磁機は動作主が意図して、コイルなどに磁気を帯びせるために使用する装置であることから、本論における分類では使役的道具となるだろう。一方、同じく *excitar* および -nte 接辞からなる *excitante* は、「興奮剤」、「刺激物」を表す際に用いられる。これらの広い意味合いでの物質が「励磁機」と異なるのは、動作主の関与なく、対象を興奮させ、刺激する点である。以上の点から、*excitante* の表す対象は道具ではなく、原因に該当するものであると考えられる。このように、両接辞は、外項に動作主・道具および原因を外項にとる語彙的使役動詞に付加された際には、-dor が動作に対するコントロールを持つもの、つまり動作主と道具を、-nte はコントロールをもたない原因を編入する。この「分担関係」がみられるのは *excitador/exticante* のペアだけではない。

「物理的に刺す」という動作や「舌を刺すような痛み」のような比喩的な意味での「刺す」までを広く表す動詞 *picar* にも同種の分担がみられる。*Picador* の語義としては「闘牛におけるピカドール」、「つるはしを使う鉋夫」を西和中、DRAE はともに記載している。いずれも意図的に「刺す」という行為を行っていることから使役的動作主と考えられるだろう。また、*picador* には「包丁」、そして女性形 *picadora* には「肉挽き機」という使役的道具を表すケースもあるとされている。一方で、*picante* は唐辛子のような「刺激物全般」を指すとされる。動作主の関与なく、単独で、目的語相当の対象に刺激を与えていることから、原因といえる。

「冷却・冷蔵する」という動作を表す *refrigerador/refrigerante* の間にも同様の分担が観察される。*Refrigerador* は「冷却装置」、「冷蔵庫」といった道具相当の対象を表す一方で、*refrigerante* は「冷却材」という典型的な原因相当の対象を表す。このほかにも、*refrigerante* には「蒸留器の冷却槽」という一見、道具のように思われる意味もある。しかしながら、冷却槽とはつまるところ、蒸留器に組み込まれている冷水を貯めた容器である。構造上、冷却槽とは、動作主が蒸気を冷却するために主体的に使用するものではなく、それ自体で、冷却効果を果たす。従って、本論における分類基準によれば、原因に該当するものである。こうした周辺のケースも仮説から説明可能であり、その妥当性を支えている。

先にみた *secador/secante* のペアの間にも、同種の分布がやはりみられる。上述の通り、*secador* は「ドライヤー」や「乾燥機」という使役的機械を表すものである。そして、*secante* には先に見た通り、乾性油のような、再帰動詞から派生したと思われる対象を表す用法があ

<sup>24</sup> 西和中にのみ「興奮した人」という再帰形、*excitarse* から派生したと思われる語義が掲載されている。しかしながら、*excitador* がこの意味で用いられている実例は確認できなかったため本論の分析対象から捨象した。



る一方で、「吸い取り紙」という原因相当の対象を表す。このように、ここでも **-dor** は道具、**-nte** には原因という対比が見られる。

「溶かす」、「融合させる」という動作を表す **fundir** からなる **fundidor/fundente** のペア内の意味の差異もこれまでにみた意味の分布に従うものである。すなわち、**fundidor** は「製錬工」や「铸造者」といった意図的に **fundir** という動作を行う使役的動作主を、**fundente** はそうした動作主を表すことはなく「溶剤」という原因相当の対象を表すものである。

動詞 **purgar** は「排出する」という動作を表すものであり、**-dor** による派生名詞 **purgador** は「排水装置」という道具を表す。その一方で、**-nte** による **purgante** は「下剤」という原因相当の対象を表す。

「スープなどのあくをとる」、および、「泡立てる」という動作を表す **espumar** からなる **espumador/espumante** にも同種の対立が見られる。まず、**espumador** であるが、これは専ら「あくをとる人」という意味合いで用いられると両辞書にはある<sup>25</sup>。つまり、**-dor** は動詞 **espumar** に付加された際には使役的動作主を編入する。一方の **espumante** は「泡立て剤」という原因相当の対象を表す。

動詞 **fulminar** には「電撃する」、「感電死させる」、「爆発させる」という意味がある。**Fulminador** はこの動詞に対するコントロールを持つ外項を編入し、「怒鳴りつける人物」、「脅しつける人物」という動作主を表す。また、テレビゲームにおいて「電撃を発し、敵を感電させる剣」を表すために、**fulminador** が用いられていることを確認している<sup>26</sup>。こちらは本論における分類基準によれば、使役的道具となるだろう。**-nte** による **fulminante** は「雷管」や「起爆薬」という原因相当の対象を編入している。

以上、外項に動作に対するコントロールを持った対象、およびコントロールを持たない対象の両方を取りうる語彙的使役動詞によるペアをここまで分析した。多くの両接辞による派生名詞がそうであるように、ここで見た派生名詞の多くも多義的であった。しかしながら、その意味は自由に、不規則に分布しているのではなく、**-dor** であれば使役的動作主・道具 (+CON, +CAU) を、**-nte** であれば原因 (-CON, +CAU) を優先的に編入するというルールがあると考えられ、このルールに沿う形で派生名詞の意味は決定されていると考えられる。

そして、語根動詞は潜在的に、動作主も原因も問題なく外項とすることができるのにもかかわらず、**-dor** は動作主・道具を、**-nte** は原因を編入しているという事実からはやはり、両接辞の外項の編入を左右する要因は CON と CAU という二種類の素性の値の組み合わせとする本稿の仮説を支持するものでもある。

<sup>25</sup> 辞書には記載がないものの、昨今では **espumador** は泡だて器やプロテインスキマー（水槽に微小な泡を発生させる装置）という使役的道具を表すために用いられることをコーパスから確認している。Para el que no haya visto nunca un sump este es uno de los muchos diseños que hay para acuarios marinos, lo que aparece en el número 18 es un skimmer o espumador de proteínas y en acuarios de agua dulce que yo sepa no se usa. (es TenTen)

<sup>26</sup> Cf. <https://us.battle.net/d3/es/item/fulminator>

### 2.7.1.3. 非語彙的使役動詞と動作へのコントロールの有無

これまでにみてきたように、同一の語彙的使役動詞に両接辞が付加される際には派生名詞間で規則的な意味の差異、つまり、**-dor** が動作へのコントロールを有する対象を表し、**-nte** がコントロールを持たない対象を表すという対比が観察される。対して、**-dor** が原因、内項相当の対象を編入する一方で、**-nte** が使役的動作主や道具を編入するというケースは観察されていない。こうした語彙的使役動詞の場合に比べ、数は少ないが、同一の非語彙的使役動詞を語根とする両接辞による派生名詞のペアにおいても、コントロールの有無による対立が観察される。

既に紹介した **vividor/viviente** のペアがこのケースに該当するだろう。通常、**vivir** は「生きている」という状態を表し、その外項には状態へのコントロールはみとめられない<sup>27</sup>。

この **vivir** の外項を編入しているのは **-dor** ではなく **-nte** である (**viviente** (生きている人))。そしてこちらも先述の通り、**vividor** は「人生を謳歌している人物」、「他人にたかって生きようとする人物」を表す。本研究の枠組みでこの語義の違いが生じる理由を説明するとしたら、**-dor** は **CON, CAU** という二種類の素性について、少なくともどちらか片方が陽性であるような対象しか編入しないために、コントロールを持たない「生きている人」ではなく「人生を謳歌しようとする人物」を表すのだと考えられる。「人生を謳歌する」、「人にたかって生きる」ということは、いずれも、能動的に **vivir** という動作を遂行するということであろう。従って、この用法における **vivir** の主語は動作に対するコントロールを持つと関がえられる。

また、**vivir** に接頭辞 **sobre** を付加し派生される動詞 **sobrevivir** (生存する) の派生形も興味深い。この動詞の用法は、「生存する」という状態動詞としてのものに限定されている。そして、この **sobrevivir** には **-nte** のみが付加され、**sobrevividor** という派生名詞は少なくとも今回使用した二種類の辞書のいずれにも記載がない。この状態動詞の主語にはいかなる文脈においてもコントロール、使役性のいずれも認められないため、**-dor** による派生がおこなわれないためと説明できるだろう。

**Hablar** より派生した **hablador/hablante** のペアにも同種の意味の対比が認められる。まず、**hablador** は西和中によれば「よくしゃべる人物」を表す。これは **hablar** という動作を、意思性をもって行う人物を編入したものであると考えられる。一方の **hablante** は「なんらかの言語の話者」を表す。**Hablante** は、なんらかの言語を話すことのできる能力を表すものであり、その語根は状態動詞的である。**Laca (1993)** はこの **hablante** はコントロールを持たないとしている。

「尋問をする」という動作を表す **interrogar** にも両接辞による派生名詞としての形が存在する。**-dor** による **interrogador** は「尋問者」、すなわち尋問をするという動作に対するコン

<sup>27</sup> 日常言語的に考えれば、「自殺」は可能である以上、**vivir** の主語も状態に対するコントロールを持つともいえるかもしれないが、言語学的には状態動詞の主語は状態へのコントロールを持たないと考えられる。例えば、状態動詞を他のタイプの動詞と区別するのは **intencionalmente** のような副詞を付加できないという事実である。\***Juan vive intencionalmente**.

トロールを持った対象を表す。一方の *interrogante* の表す対象は無生物に限られており、当然のことながらそれらの無生物は *interrogar* へのコントロールを持たない。*Interrogante* は「クエスチョンマーク」や「(広義の) 問題」を表す。

やや周辺的にはなるが、*dormidor/durmiente* のペアもこのパターンに該当すると考えられる。*Dormidor* は単に「寝る人」ではなく「よく眠る人 (1. adj. Que duerme mucho. U. t. c. s. (DRAE)) 」とある。一方の *durmiente* は「(単に) 眠っている人物 (1. adj. Que duerme. U. t. c. s.) 」そして、建築における「土台となる角材」(横に倒されて使われていることから *durmiente* で表されていると考えられる)、線路における「枕木」という使役性のない道具を表している。一見して明らかなおとおり、これらの対象は *dormir* という動作<sup>28</sup>に対してコントロールを持つものではない。

#### 2.7.1.4. その他の意味の異なる最小対

これまでに紹介してきた同語根ペアにおける意味の差は、両接辞が異なる規則に従って外項を編入する結果として説明される。しかしながら、数は多くないものの、体系的に説明することのできない意味の差をみせるペアが存在する。

本来、「航海する」という動作を表す *navegar* からは *navegador* と *navegante* という派生名詞が形成される。両者には「航海をする人物、航海士」という語義があるとされているが、この点については、航海をする人物とは +CON, -CAU という素性を有する非使役的動作主に該当することから説明可能であろう。

しかしながら、この動詞の「航海する」という意味が拡張され、近年では「ネットサーフィンをする」という語義が生じている。そして、この IT 用語としての *navegar* からも *navegador/navegante* というペアが形成される。両辞書によれば、*navegador* は「ブラウザ」を *navegante* は「ネットサーファー・インターネット利用者」を表す。後者は活動動詞の主語相当の、つまり、非使役的動作主に該当することから想定範囲内といえるが、*navegador* が *navegante* をさしおき、ブラウザという使役性を持たない道具を表している理由は先に提示した仮説から説明することはできない。仮説によれば、使役性のない道具であれば、-nte による編入も可能であることが予測されている。

*Servidor/sirviente* の最小対についても同じことが言える。ともに「使用人」という非使役的動作主を表すという点では共通しており、この同義性の説明は可能であるが<sup>29</sup>、*servidor* のみが、コンピューターの「サーバー」という非使役的な道具を表す。このペアと先述の *navegador/navegante* において -dor による派生名詞のみが、ブラウザ、サーバーを表すのは、接辞による要請というよりも、コンピューター、IT に関わる文脈に特有のスタイルに従う

<sup>28</sup> 眠ることが状態であるか動作であるかは意見の分かれるところではないかと思われるが、言語学的に、*dormir* が典型的状態動詞とは性質を異にしていることから、活動動詞の一種であると考え。こうした動性的でない活動動詞を Davidsonian state とする立場もある。

<sup>29</sup> 語根の *servir* の主語にはコントロールが認められる一方で、使役性は認められない。そして仮説として提案した両接辞の編入に関する制約は、いずれもこうした対象の編入を妨げるものではない。

ためであると考えられる<sup>30</sup>。

Mandador/mandante 間の意味の差異は上述のケースに比べ、やや周縁的である。現代スペイン語では *mandante* は「命令する人全般」を、*mandador* は DRAE によればコスタリカ、ニカラグアにおいて「農園管理の助手」、西和中には、ベネズエラでは「馬方の鞭」を表すために使用されるとある。この差異も先に提示した仮説から説明できるものではなく、例外として扱う必要があるだろう。

このように、本調査で分析した同語根ペアにはそれぞれの派生名詞の持つ語義が異なるものがあり、そうした対比の中には本節で紹介したような、体系的説明の与えにくいものが存在する。しかしながら、このような例外は全体からみれば少数かつ特殊であり、先に提示した仮説の妥当性を脅かすものではないと考える。

## 2.7.2. 同義的な同一語根ペア

本研究で分析を実施したペアの中には、二種類の派生名詞が少なくとも本研究の分類基準において同義的であると判断されたケースが少なからず存在した。本節ではそうしたペアを詳しくみながら、その同義性に体系的な説明を与えることができるのかを検討する。

### 2.7.2.1. 両派生名詞が非使役的動作主を表すケース

前節では意味の違いの観察される同語根ペアを紹介した。そして、そうしたペアの語根動詞の多くは使役的なものであった。

本節ではそれとは対称的な、少なくとも本研究における分類上は同義的であるペアを紹介する。こうしたペアにおける語根動詞の多くは、非使役的な動詞である。具体的には 49 の同義的と考えられるペアのうち、29 が非使役的動作主を表す派生名詞からなるものであった。そして両者が同義的であるという点に関連していると思われるが、こうした最小対を構成する二種類の派生名詞の使用頻度には大きな差があることは少なくない。この事実は両者が高度に同義的であることを示唆するものでもあると考える。つまり、その同義性からどちらか片方の派生名詞が余剰であると判断され、使用頻度が限定されるものと推測される。具体的には以下のペアを参照されたい。括弧内の数字は、コーパス *es TenTen* における両派生名詞の出現頻度を表す。全体的に出現頻度が高いため、単位は千とした。

*cantor/cantante* (共に「歌う人」を表す<sup>31</sup> 29/365)

*visitador/visitante* (共に「訪問者」、前者のみ「巡察官・視察官」を表す 16/554)

*ayudador/ayudante* (共に「助ける人、助手」を表す。前者のみ「牧夫頭の助手」を、後者のみ軍隊の「副官」を表す。 0.3/74)

<sup>30</sup> IT 用語は特に英語からの借用がおこりやすい。Browser, server は共に -dor と平行関係にある -er が使用されていることも無関係ではないだろう。

<sup>31</sup> ただし、*cantor* は特に民謡を歌う人物を表す。

reidor/riente (共に「笑う人」を表す 0.1 VS 0.3)  
 informador/informante (共に「情報を提供する人物」を表す。前者のみ、「新聞記者」を表す 15/42)  
 gobernador/gobernante (共に「統治者」を表す 1373/202)  
 atacador/atacante (共に「攻撃をする人物」を表す 0.5 / 62)  
 votador/votante (共に「投票者」を表す 0.02/2000)  
 combatidor/combatiente (共に「戦う人物」を表す 0.01/64)  
 practiacdor/practicante (共に「実践する人物」を表す 0.01/27)  
 denunciador/denunciante (共に「告発者」を表す 0.4/44)  
 contendedor/contendiente (共に「係争者」を表す 0.09/25)  
 demandador/demandante (共に「原告」を表す 0.01/99)  
 viajador/viajante (共に「旅する人物」を表す 0.04/6)  
 denigrador/denigrante (共に「侮辱する人物」を表す 0.1/10)  
 asaltador/asaltante (共に「攻撃する人物」を表す 0.1/34)  
 danzador/danzante (共に「踊る人物」を表す 0.02/0.5)  
 solicitador/solicitante (共に「申請者」を表す 0.02/115)  
 coadyuvador/coadyuvante (共に「寄与する人物・貢献する人物」を表す 0.005/5)  
 postulador/postulante (共に「集金をする人物<sup>32</sup>」を表す 1/1)  
 querellador/querellante (共に「呻く人物」を表す 0.005/18)  
 comunicador/comunicante (共に「コミュニケーションをとる人」を表す 71/1)  
 rumiador/rumiante (共に「反芻する人物、動物」を表す 0.01/7)  
 anunciador/anunciante (共に「アナウンスをする人物」を表す 2/46)  
 consultor/consultante (共に「相談に乗る人物」を表す 200/0.6)

上記の動詞は基本的に、動作に対するコントロールを持ち、対象に対する使役性を持たない有生物を主語とする。そして両接辞はともにこうした動詞に一定の頻度で付加され、先に述べたような外項相当の対象、つまり、非使役的動作主を表す名詞を形成する。この事実は、先に提案した両接辞の外項編入における制約と矛盾するものではない。先に紹介した制約を再掲する。

#### -dor による外項の編入

-dor は使役性とコントロールという素性のうち少なくともどちらかが陽性である外項を編入する

- a. 両素性が + である外項（道具・使役的動作主）を自由に編入

<sup>32</sup> 一見「使役的動作主」のようであるが、語根は通常、自動詞として用いられるため、非語彙的使役動詞として分類した。

- b. 片方の素性のみが + である外項（非使役的動作主・非使役的道具・原因）を編入
- c. 両素性が - である外項を編入しづらい（非動作主・内項相当の対象）

-nte による外項の編入

-nte は使役性とコントロールという両素性について + である外項を編入しない

- a. 使役的動作主・使役的道具（ともに+CON, +CAU）を編入しない
- b. 片方の素性のみが + である外項（非使役的動作主・非使役的道具・原因）を編入
- c. 両素性が陰性である外項を編入する（非動作主・内項相当の対象）

非使役的動作主は素性のうえでは +CON, -CAU として分析されるものであり、いずれの制約にも触れない。換言すれば、+CON, -CAU という意味的価値を持つ非使役的動作主の編入は両接辞の意味上の共通点とすることができるだろう。このように、仮説からは両接辞は共に非使役的動作主を編入することが予測されており、実際に同種の対象を表すペアが少なからず確認された。従って先に紹介した 29 のペアは仮説の妥当性を補強するものといえる。

#### 2.7.2.2. 両派生名詞が原因を表すケース

上述の仮説によれば、非使役的動作主（+CON, -CAU）のほかに、原因（-CON, +CAU）にあたる対象も、両接辞はともに編入しうることになる。そして、本調査では実際に、同一の動詞を語根とし、ともに原因相当の対象を表す両接辞による派生名詞のペアを確認している。

aglutinador/aglutinante（共に「接着剤」を表す 0.7/5）

relajador/relajante（共に「リラックスさせるもの」を表す 0.06/4）

causador/causante（共に「なにかを引き起こす人物、物」を表す 0.02/55）

atenuador/atenuante（共に「軽減させるもの」を表す 1/9）

こうしたペアの同義性もまた、すでに提示した仮説により説明可能であり、仮説の妥当性を支持するものといえるだろう。

また、いずれのペアにおいても -nte による派生名詞の方が、圧倒的に出現頻度が高いことも興味深い。仮説によれば、-nte にとっては原因相当の対象を編入することがその典型的な機能であるが、これは -dor にとっては非典型的なものである。この使用頻度の差はこの両接辞間のこうした差が反映されたものであると考えられる。

### 2.7.2.3. 両派生名詞が非動作主を表すケース

上述の仮説からは **-dor** は動作・状態に対するコントロール、および使役性を持たない経験者などの非動作主を表さないことが予測されるが、実際には数種類、そうした **-dor** 名詞があることは表 3 で紹介したとおりである。

しかしながら、そうした **-dor** 名詞の多くには、同一動詞を語根とする **-nte** による競合する派生名詞が存在する（例 **sufridor/sufriente**）。そしてこうした最小対は共に、非動作主を表す同義的なものであるということができよう。こうしたペアには以下のようなものがある。

**oidor/oyente** (共に「聞く人」を表す 3/48)

**habitador/habitante** (共に「住む人」を表す 0.09/883)

**sufridor/sufriente** (共に「苦しむ人」を表す 1/0.8)

このように、**oír** と **habitar** を語根とするペアにおいては圧倒的に、**-nte** 接辞による派生名詞の方が、使用頻度が高い。**Oidor** については、古語で「裁判官」、「聴訴官」という極めて固有性の高い意味合いでも用いられることがあり、こうした用例を除けば、「聞く人」という透明性の高い用例の数はさらに減少し、**-nte** 名詞との差が大きくなる。**Sufrir** のペアについては **-dor** の方がやや生起数が多いが、**-nte** 名詞の生起数との差は大きなものではない。

従って、こうしたペアにおける生起数の差からいっても、**-dor** が非動作主を編入するのは稀なことであり、実際に非動作主を表す **-dor** 名詞は例外として考えられるだろう。

### 2.7.2.4. 両派生名詞が使役的動作主・道具を表すケース

先述の通り、**-nte** による使役的動作主・道具の編入は稀であるが、そうした対象を表す **-nte** による派生名詞は存在しないわけではない。そのような **-nte** 名詞と、同じ動詞を語根とし、同様の対象を表す **-dor** 名詞という同義的ペアも確認されている。

**trinchador/trinchante** (共に「肉切り包丁」を表す 0.06/0.06)

**delineador/delineante** (共に「デザイナー」を表す 3/1)

### 2.7.2.5. まとめ

2.7.2. 節では、同義的な同語根ペアを分析した。そうしたペアは 49 種類確認されたが、そのうちの 29 種類は、両派生名詞が共に、非使役的動作主 (+CON, -CAU) を表すというものであった。この事実は、両接辞が共に、非使役的動作主を編入することのできる接辞であることを示す。このタイプの対象の編入こそが両接辞の共通点であり、また、こうした同義的なペアは仮説から十分に説明される。

また、今回分析したペアの中には両派生名詞が共に原因を表しているペアも確認されて

いる。こうしたペアが存在することも仮説から予測され、同様に仮説を補強するものである。

## 2.8. 結論と次章以降での要検討事項

本章では、Corpus del español から収集した 20 世紀以降、一度以上の使用が確認され、かつ、西和中、DRAE のいずれかの辞書に記載されている両接辞による派生名詞の語義を網羅的に分析した。その結果、両接辞の語義は、それぞれ、一定の意味タイプに偏っていることが分かった。ここでいう意味タイプは語彙的使役性の有無と、語根の表す動作、状態に対するコントロールの有無という二種類の語彙意味論的素性の価値の組み合わせによるものである。本研究における分析によれば、まず、-dor 名詞の表す人や物は -nte のものに比べ、圧倒的に、使役的動作主・道具 (+CON, +CAU) であるケースが多いことを確認した。また、一方で、-nte 名詞は非動作主 (-CON, -CAU) を -dor 名詞に比べ表すことが目立って多いこと、特に、内項相当の対象は -nte 名詞によってのみ表されることを確認した。これらの点は、-dor/-nte による名詞を区別するものであるといえるだろう。

一方で、問題となる両素性の片方が陽性、もう片方が陰性であるような対象、つまり非使役的動作主 (+CON, -CAU)、原因 (-CON, +CAU) を両接辞による一定数の派生名詞が表していることを確認した。この点は両者の共通点といえる。

本研究では Laca (1993) などと同様に、両接辞の意味的な差異とは、外項の編入に際しての異なる制約であると考ええる。この観点から、以上の確認事項をまとめると以下の通りになる。

### -dor

- +CON, +CAU (使役的動作主・道具) であるような対象を編入する。-nte はほぼ、こうした対象を編入しないため、こうした対象の編入は -dor の固有性の性質であると考えられる
- 活動動詞の、+CON, -CAU という意味タイプの外項を編入する。また、典型的には状態動詞と考えられている動詞に付加された場合にも、同タイプの対象を編入することがある (ex. vividor)。これは -dor の動作主性への強い結びつきを示唆するものである
- 語彙的使役動詞からは -CON, +CAU という原因にあたる対象を編入しているケースを一定数確認した。しかしながら、ペアの分析からも明らかである通り、その使役動詞が潜在的に使役的動作主・道具を外項にとりうるものであれば、後者を優先して編入する
- -CON, -CAU であるような対象を編入することは稀であり、非対格動詞や再帰動詞の内項相当の対象を編入するケースは確認されなかった

上述の根拠から、-dor の意味的価値、つまり、当該の接辞の課す、外項編入に際しての



制約は以下のようなものであると主張した。

-dor 接辞は CON, CAU という二種類の語彙的素性の内、少なくともどちらかが + であるような対象を編入する

次に、-nte に関する分析は以下のように要約される。

-nte

- +CON, +CAU であるような対象、使役的動作主・道具を編入することは極めて稀である
- +CON, -CAU であるような対象、非使役的動作主を編入するケースを一定数確認した。しかしながら、-dor とは異なり、状態動詞からこうした対象を表す派生名詞を形成しない
- -CON, +CAU であるような対象、原因を表す。-dor とは異なり、原則的に、語彙的使役動詞からは専ら、こうした対象のみを編入する
- -CON, -CAU であるような対象、非動作主や非使役的道具を -dor よりも編入することが多い。この点は -dor との意味的な差異であると考えられる
- 語根動詞の内項にあたる対象を -dor とは異なり編入する。この点もまた、-nte と -dor を区別するものであると考えられる

これらの事実から、-nte による外項編入に関する制約は以下のようなものではないかと提案した。

-nte は CON, CAU という二種類の語彙的素性の両方が + であるような対象を編入しない。

本章では上述の制約を仮説として提示した。次章以降では様々な角度からこの仮説を検証していく。

第一に、本章で扱った派生語の中には数世紀以上前から使用されているものが少なからず含まれている。つまり、派生語の意味は語根動詞の意味と接辞の意味（外項編入に関する制約）から決定されるという前提に立ち、派生語の辞書における語義と語根の意味を対照することで、接辞の意味を記述するという方向性を本研究では採用している。しかしながら、先述の通り、古くから用いられている派生語の語義には固定、固有化されているものがある。また、接辞の意味が以前と現代では異なっている可能性もあり、以前のルールに沿って決定された派生語の意味が、慣習としてそのまま残っていたとしたら、分析、およびその結果に基づく記述の正確性が損なわれうる。

そこでこの問題の解決のために、次章では、分析対象を新語的な派生語に限定し、再度、同様の分析を行い、仮説を検証する。新語に限定するのは一章で述べた通り、新語的な派生語の意味の決定には接辞以外の要素からの影響が少ないと考えられるためである。

そして、本章における分析が限定的なものであるという理由の一つに、それがタイプ頻度に基づくものであるという点が挙げられる。例えば、本章では **-dor** の典型的な編入対象は使役的動作主としたが、それは、**-dor** 派生名詞にはそうした対象を表すものが多かったことを根拠とした。つまり、使役的動作主を表す **-dor** 名詞の「種類数」を性格付けの根拠としたものである。

こうした種類数、タイプ頻度に基づく分析にも固有の意義があると考えるが、別の視座からの分析、トークン頻度に基づく分析を補足的に実施することが必要であるだろう。トークン頻度とは、実際に、ある **-dor** による派生名詞が使役的動作主を表す頻度をさす。つまり、本章の分析では「多くの **-dor** 名詞が使役的動作主を表す」ことを確認した。しかしながら、可能性としては、「多くの **-dor** 名詞は使役的動作主を表すものの、それは極めて例外的な語義で、実際にはほとんど観察されない」という状況もありうる。この場合、使役的動作主を **-dor** による典型的な編入の対象とする記述は誤りとなるだろう。

そこで四章では、両接辞による派生形容詞の修飾のパターンを分析し、これをもってトークン頻度に基づく分析・検証としたい。形容詞に着目する理由は当該の章で後述する。



### 3. 両接辞による新語的派生名詞

本章では前章で仮定した **-dor** および **-nte** 接辞による外項の編入に関する制約を検証する。そのために、本章では分析対象を両接辞による新語的派生語に限定し、前章と同様の分析を実施する。前章では非新語を含む両接辞による派生名詞の表す対象を分析し、それぞれの派生名詞は意味的に異なる分布をみせること、そしてその分布は語根の表す動作や状態に対するコントロール、および使役性の有無という二種類の意味的素性の値の組み合わせと密接に関係していることを紹介した。そして、この事実から両接辞はそれぞれ、自由に語根の外項を編入しているのではなく、特有の基準に基づき外項を選択、編入していると仮定した。前章では両接辞の編入に関する制約を以下のように、仮説として提示した。

**-dor** はコントロール・使役性という二種類の語彙意味論的素性のうち、最低でもどちらかが + であるような外項を編入する。

→ **-dor** による派生名詞は典型的に使役的動作主・道具(コントロール・使役性ともに +)を表す、使役性のない動作主(コントロールのみ +)、原因(使役性のみ +)も頻度は落ちるが可能。経験者・内向相当の対象(ともに -)は表しづらい。

**-nte** はコントロール・使役性という二種類の語彙意味論的素性のうち、両方が + であるような外項を編入しない。

→ **-nte** による派生名詞は原因、使役性のない動作主、経験者、内向相当の対象を表すが、使役的動作主・道具は極めて表しづらい。

本章では上記の傾向が分析対象を新語的派生語に限定した際にも観察されるかを確認する。上述の傾向が分析対象を新語的派生名詞に限定した際にも観察されれば、仮説の妥当性が補強されるだろう。分析対象を新語に限定する理由、および、分析対象をそのように限定することが何故検証になるのかを次節で述べる。

#### 3.1. 新語の分析

両接辞が、派生における意味の決定に及ぼす影響を記述することを目指す本研究は、一章で述べたように派生の意味論として言語学という枠組みに位置づけられる。接辞の意味を記述するにあたっては、接辞が単独で使用されることがない以上、派生語の意味と語根の意味を対照する必要があるが、その際に分析対象となる派生語は新語 (neologism) であることが望ましいと Aronoff (1976) などで述べられている。

... they<sup>1</sup> have not existed long, these words have not yet had any opportunity to become fixed in

---

<sup>1</sup> 新語を指す。

some idiosyncrasy. We will assume, then, that there are regular and interesting rules for making up new words...

(Aronoff 1976: 19)

こうした姿勢は現代の派生語の意味研究においても引き継がれている。たとえば、語形成の意味的研究の中でも比較的新しい Kawaletz & Plag (2015) は、英語の *-ment* 接辞 (例 *employment*) の意味的性質を考察したものであるが、Aronoff (1976) 等と同様に、接辞の意味的性質の抽出、記述に際して、分析対象は新語的であることが望ましいと述べ、実際に分析の対象を新語に限定している<sup>2</sup>。

Because of *-ment*'s high productivity between the 15th and 17th centuries, contemporary English derivations in this suffix are very frequent. However, these are mostly long since established words such as *government* (first attested in 1484 according to the OED), *development* (1756) or *department* (c.1450). Lexicalized words such as these are well-known to show all kinds of idiosyncrasies which are not related to actual speaker knowledge or intuition (see Plag 1998). In our study, however, we seek to investigate the productive derivational process of affixation with *-ment*. In other words, we want to know how speakers of contemporary English employ the suffix to form new words. This is why we investigate neologisms instead of established formations.

(Kawaletz & Plag 2015: 293)

既に前章で指摘したように、語彙化された派生語や一定以上の期間使用されたことで意味の固定化された派生語からは意味の決定における接辞の働きを抽出しにくいと考えられる。なぜなら古い派生語の意味は現代ではすでに消滅しているルールにより決定されていること、ならびに、体系的なルールとは全く別の、慣習や社会的な要請といった要因によって決定されているといったことがありうるためである。これが近年の接辞の意味論的研究において、新語的派生語が分析対象として取り上げられる理由である。

前章における分析対象は、「20 世紀以降に一度以上使用されたことが確認された派生語」である。つまりそうした派生語の中には 20 世紀よりも前から使用されている派生語が含まれている。従って、その中には上記のような、接辞の意味と語根の意味以外の要因によって意味の決定された派生語が一定数混じっている可能性がある。分析対象を新語的な派生語に限定することで、語根と接辞以外の派生における意味決定に関わる要素を排除することができるだろう。こうすることで、本章では前章の提案の妥当性を検証していく。

### 3.2. 方法論

本節では分析対象として扱う新語的派生語の収集法を紹介する。

---

<sup>2</sup> 同種の、新語を分析対象とした研究には Plag (1998), Heinold (2010) などがある。

### 3.2.1. 新語辞書からの抽出

2016 年現在、複数のスペイン語新語辞書が出版、あるいはオンラインで公開されている。本研究ではそうした資料体から **-dor** および **-nte** 接辞による派生名詞を抽出し分析対象とした。

ポンペウファブラ大学を拠点とする研究グループ、**Observatori de Neologia** がオンラインで公開している新語辞書、**Diccionario de neologismos on line** は本研究における新語データの主要な供給源の一つである。

このオンライン辞書にはおよそ 4000 の新語が語義、用例とともに収録されている。収録されている新語は 1989 年から 2007 年の間に、主に出版物で観察されたものである。

ウェブページ、**Centro Virtual Cervantes** 内で公開されている **Banco de neologismos** から新語的派生語を収集した。このデータベースには様々な資料体から収集された新語が収録されている。第一に、このデータベースには前節で紹介した **Observatori de Neologia** の提供する資料、**ILUA** から抽出された新語が含まれている。収集の対象となった資料は 1988 年以降に作成されたものである。こちらの資料体には出版物だけでなく口語データも含まれている。また、**Observatori de Neologia** による資料体だけでなく、様々な研究グループによる資料に依拠しているという点も、このデータベースの特徴である。この資料体はラテンアメリカ諸国の大学<sup>3</sup>による共同プロジェクト、**Antenas Neológicas**、そしてスペイン各地の大学<sup>4</sup>による研究プロジェクト **NEOROC** のデータに基づく。上述の資料体を網羅する **Banco de neologismos** であるが、**Diccionario de neologismos online** とは異なり、各新語の語義は掲載されておらず、用例および分類上のタグが付加されているのみである。従って、このデータベースから収集した新語の語義は、掲載されている用例、および、コーパスから収集される実例をもとに、筆者が判断した。

現在に至るまでに、スペイン語の新語資料としてオンライン上のデータベースだけでなく、紙媒体の辞書も出版されている。そうした辞書にはたとえば、**María Moliner Neologismos del español actual** がある。本研究では、2013 年に出版されたこの辞書からも分析対象となる新語的派生名詞を抽出している。この辞書に収録されている新語は 1990 年から 2013 年の間に、主に書き言葉から収集されたものである。この辞書の特徴としては、高度に専門的な用語や使用の著しく限定されている俗語等は除外されており<sup>5</sup>、一般的な文脈で用いられる語が中心にとりあげられているという点が挙げられる。

**Everest** 社から出版されている **Diccionario de neologismos** も、紙媒体の新語辞書である。こちらの辞書は前節で紹介したものとは異なり、インターネット等における口語的な新語

<sup>3</sup> アルゼンチン、チリ、コロンビア、キューバ、メキシコ、ペルー、ウルグアイ。

<sup>4</sup> アリカンテ、カディス、マラガ、ムルシア、バイス・バスコ、サラマンカ、バレンシア。

<sup>5</sup> Por otra parte, se centra en lo que suele llamarse «lengua general» o «lengua estándar», una abstracción metodológica que excluye el lenguaje estrictamente especializado de la ciencia o la técnica, o el de registros muy limitados (jergas, coloquialismos restringidos, etc.). *María Moliner Neologismos del español actual*: p9.

や専門性の高い新語もカバーされている。

### 3.2.2. コーパスからの収集 -Hapax Legomenon-

既に紹介した新語辞書以外にも、今回の調査ではコーパスからも新語の収集を行った。新語は *Corpus del español* 内の Hapax Legomenon（以下、hapax）から抽出した。Hapax とはとある資料体において、一度しか現れない語を指す。Hapax はその出現頻度の低さから、新語である可能性が高いと考えられている。例えば Plag *et al* (1999) では以下のように述べられている。

The third important measure is the number of words of the given category that occur only once in the corpus (socalled hapax legomena, or hapaxes for short), which can be interpreted as an indication of how often a suffix is used to coin a hitherto unattested word, i.e., a neologism.

(Plag *et al.* 1999: 220)

確かに、Plag らの述べるように、Hapax の出現頻度の低さは、語の新しさを示唆するものである。しかしながらある語の出現頻度が著しく低いということは、その語が古くから使用されていたものの、時代の経過とともに出現頻度の限定されたものであること、いわば死語の予備軍であることを示している可能性もある。語の出現頻度の低さは必ずしもその語が新しいものであることを意味するわけではない。

そこで本研究では、収集した Hapax は全て、Google Books Ngram Viewer、およびコーパス、CORDE を用いて実際に新語的であるか否かを検討した。いずれも、語の歴史的分析に特化したものであり、ある語、句の年代毎の使用頻度の推移が得られる。本研究では 20 世紀以降に最初の使用の確認された語を新語として扱う。これは Kawaletz & Plag (2015) を踏襲したものである。

### 3.2.3. 派生語の作成

これまでに紹介した新語辞書・データベースには新語的な -dor/-nte による派生名詞だけでなく、新語的な動詞も収録されている。そしてこうした新語的な動詞から語根とする、両接辞による派生名詞もまた、同様に新語的であると考えられるだろう。そこで本研究では、分析対象となる新語的派生名詞をより広く収集するために、Diccionario de neologismos online 内の新語動詞に両接辞を付加し、上述の新語辞書に記載のない派生名詞を「作成」した。こうして作成した派生名詞はコーパス、es TenTen で分析を行った<sup>6</sup>。10 以上の名詞としての用例が確認されたものを分析対象として加えた。

<sup>6</sup> 2017 年時点では最も規模の大きいコーパスであり、また、WEB 上のテキストが基になっていることから新語の分析に最適であると判断した。

### 3.3. 分析対象

以上の手法により、本研究では 184 種類の新語的 -dor 名詞、65 種類の新語的 -nte 派生名詞を収集した<sup>7</sup>。これらの派生名詞を本節における分析対象とする。表 1. に分析対象となる新語的 -dor 名詞を、表 2 には同様の -nte 名詞をまとめた。

表 1. 新語的-dor 名詞

語根動詞	派生名詞	意味的分類
acondicionar: 調整する	acondicionador: リンス、エアコン	使役的道具 原因
aerotransportar: 空輸する	aerotransportador: 輸送機	使役的道具
agregar: 加える	agregador: フィードリーダー・RSS リーダー	使役的道具
airear: 空気を供給する	aireador: 空気を供給する装置	使役的道具
amarrar: 船を停泊させる	amarrador: 船を停泊させる人物	使役的動作主
apapachar: やさしくなでる	apapachador: やさしくなでる人物	非使役的動作主
apisonar: 地ならしをする	apisonador: 地ならしをする人、機械	使役的道具 使役的動作主
atrasar: 遅れる	atrasador: 前進、進歩に時間のかかる人物	非動作主
auspiciar: 支援する	auspiciador: 支援者	非使役的動作主
banalizar: 価値を損なわせる	banalizador: 価値を損なわせる人物	使役的動作主 原因
blindar: 遮蔽する	blindador: 装甲車	使役的道具
buscar: 探す	buscador: 検索エンジン	使役的道具
cablear: ケーブルを設置する、伸ばす	cablear: ケーブル技師	使役的動作主

<sup>7</sup> 既に紹介した新語辞書・データベース内に収録されている全ての -dor, -nte 名詞を分析対象として取りあげたわけではない。例えば Diccionario de neologismos online 内に収録されている派生名詞、agroexportador は分析対象から除外したが、これは agroexportar という動詞が存在しないことによる（派生名詞 exportador に接尾辞 agro- が付加されて形成されている）。また、上述の資料体には 20 世紀以降に新たな語義 (variante semántica) を得た派生語も収録している。例えば、派生語 navegador は 20 世紀以降に「インターネットのブラウザ」という新たな語義を得たことで、Diccionario de neologismos online に収録されている。しかしながら、観察によれば navegador という派生語自体は 18 世紀後半から使用されており、-dor の派生語の意味決定への影響を特定するための分析対象としてはやや不適切であると考えられる。そこで、こうした新たな語義により新語資料体に収録されている派生名詞も分析対象から除外した。



callejear: ぶらつく、遊ぶ	callejeador: ぶらつく、遊ぶ人物	非使役的動作主
cancelar: キャンセルする	canceladora: キャンセルする装置	使役的道具
castrar: 去勢する	castrador: 去勢する人物	使役的動作主
chatear: おしゃべり、チャットをする	chateador: チャットをする人物	非使役的動作主
chuponear: 吸う、たかる	chuponeador: 吸う、たかる人物	使役的動作主
coanimar: 応援する	coanimador: 応援する人物	非使役的動作主
cocrear: 共同で作成する	cocreador: 共同作成者	使役的動作主
coeditar: 共同で編集を行う	coeditor: 共同編集者	使役的動作主
coescribir: 共著する	coescritor: 共著者	使役的動作主
cofinanciar: 共同出資する	cofinanciador: 共同出資者	使役的動作主
cofundar: 共同で設立する	cofundador: 共同設立者	使役的動作主
cohesionar: 結びつける	cohesionador: 結び付ける人物	使役的動作主
colocar: 置く	colocador: バレーボールのセッター	使役的動作主
comercializar: 製品を市場に出す	comercializador: 製品を市場に出す人	使役的動作主
complotar: 陰謀を企てる	complotador: 陰謀を企てる人物	非使役的動作主
compostar: 堆肥を作る	compostador: 生ごみ処理機、コンポスター	使役的道具
conjugar: 活用する	conjugador: 動詞の活用ソフト、プログラム	使役的道具
conseguir: 勝ち取る	conseguidor: 勝ち取る人物	使役的動作主
contaminar: 汚染する	contaminador: 汚染する人物、物質	使役的動作主 原因
coorganizar: 共同で組織する	coorganizador: 共同で組織する人物・集団	使役的動作主、
cotizar: 公共料金などを払う	cotizador: 料金を支払う人物 オンラインの支払いフォーム	使役的動作主 使役的道具
crackear: クラッキングをする	crackeador: クラッカー	使役的動作主 使役的道具

criminarizar: 犯罪者扱いする	criminarizar: 犯罪者扱いする人	使役的動作主
crispar: 引きつらせる	crispador: 事態に緊張をもたらす人物	原因
cuplabilizar: 責める	culpabilizador: 責める人物	使役的動作主
customizar: カスタマイズする	customizador: カスタマイズする人、カスタマイザー	使役的動作主 使役的道具
deconstruir: 抽象的な形に分解する	deconstructor: 抽象的な形に分解する人物	使役的動作主
defenestrar: 辞職させる	defenestrador: 辞職させる人	使役的動作主
defoliar: 葉を枯れさせる、落とす	defoliador: 枯葉剤、葉に害を与える虫	使役的動作主 原因
deforestar: 森を伐採する	deforestador: 森を伐採する人物	使役的動作主
demonizar: 悪いものと決めつける	demonizador: 悪いものと決めつける人物	使役的動作主
depilar: ひげをそる	depiladora: ひげそり機	使役的道具
desaparecer: 消滅させる	desaparecedor: 消滅させる装置	使役的道具
desarrollar: 発展させる	desarrollador: 発展させる人物・企業	使役的動作主、
descargar: ダウンロードする	descargador: ダウンローダー	使役的道具
descongestionar: つまりを解消する	descongestionador: 充血を解消する薬剤・点鼻薬	原因
desencriptar: 暗号を解読する	desencriptador: 暗号を解読する人物、暗号解読器	使役的道具 使役的動作主
desenmascarar: 正体を暴く	desenmascarador: 正体を暴く人物	使役的動作主
designar: デザインする	designador: デザイナー	使役的動作主
desincentivar: やる気を失わせる	desincentivador: やる気を失わせる要因	原因
desinformar: 情報を捻じ曲げる	desinformador: 情報を捻じ曲げる人物	使役的動作主
desinhibir: 抑制を解く	desinhibidor: 抑制を解く物質	原因
desinstalar: アンインストールする	desinstalador: アンインストーラー	使役的道具

deslocalizar: 場所を移す	deslocalizar: 場所、特に生産拠点をを移す要因	原因
desmaquillar: 化粧を落とす	desmaquillador: 化粧落とし	原因
desminar: 地雷を撤去する	desminador: 地雷を撤去する人物	使役的動作主
desmotivar: やる気を失わせる	desmotivador: やる気を失わせる要因	原因
desmultiplicar: 分裂を抑制する	desmultiplicador: 分裂を抑制する装置	使役的道具
desnitrificar: 脱窒化させる	desnitrificadora: 脱窒装置	使役的道具
desvalijar: 金品などを盗む	desvalijador: 金品などを盗む人物	使役的動作主
diagramar: レイアウトを作成する	diagramador: レイアウト作成者、レイアウト作成ソフト	使役的動作主 使役的道具
dialogar: 対話をする	dialogador: 対話を生産的なものにしようとする人物	非使役的動作主
dinamizar: 活性化させる	dinamizador: 活性化させる要因	使役的動作主 使役的道具
diseccionar: 解剖する人物	diseccionador: 解剖する人物	使役的動作主
distorsionar: ひずませる	distorsionador: 何かをひずませる人物、装置、要因	使役的道具 原因 使役的動作主
dolarizar: ドル本位制にする	dolarizador: ドル本位制推進者	使役的動作主
driblear: ドリブルをする	dribleador: ドリブルをする人物	非使役的動作主
ecualizar: 均質化する	ecualizador: エコライザー	使役的道具
electrificar: 電力を供給する	electrificadora: 電力を供給する機械	使役的道具
emprender: 決断を下す	emprededor: 決断を下す人	使役的動作主
encaminar: 正しい道に向かわせる	encaminador: ルーター	使役的道具
encarar: 問題などに対応する	encarador: 対応者	非使役的動作主
encriptar: 暗号化する	encriptador: 暗号化する装置	使役的道具

encuestar: アンケート調査をする	encuestadora: アンケート調査をする人物	非使役的動作主
envejecer: 老化させる	envejecedor: 老化の原因となる物質、画像をセピア調にするソフトウェア	使役的道具 原因
equiparar: 同等にする	equioarador: 同等にする装置、要因	使役的道具 原因 使役的動作主
erradicar: 根こそぎにする	erradicador: 根こそぎにする人物	使役的動作主
escanear: スキャンする	escaneador: スキャナー	使役的道具
estibar: 荷下ろしをする	estibador: 荷下ろしをする人物	使役的動作主
estructurar: 構築する	estructurador: 構成要素	原因
exhibir: 展示する	exhibidor: CM 作成者、展示ケース	使役的動作主 使役的道具
exprimir: 果物などを絞る	exprimidora: ジューサー	使役的道具
externalizar: 外注する	externalizador: 外注する人物	使役的動作主
extorsionar: 暴力を用いて何かを手に入れる	extorsionador: 暴力を用いて何かを手に入れる人物	使役的動作主
fagocitar: 魅了する	fagocitador: 魅了する要因	原因
fichar: 日付を記録する	fichador: タイムレコーダー	使役的道具
fidelizar: 顧客を獲得する	fidelizador: 顧客を獲得する人物	使役的動作主
finalizar: 終止符を打つ	finalizador: 特にスポーツなどのフィニッシャー	使役的動作主
financiar: 出資する	financiador: 出資者	使役的動作主
flexibilizar: 和らげる	flexibilizador: 和らげる要因	原因
franquiciar: フランチャイズ経営を行う	franquiciador: フランチャイズ経営をする人物	非使役的動作主
globalizador: グローバル化させる	globalizador: グローバル化推進者	使役的動作主
googlear: グーグルを用いて検索を行う	googleador: グーグルを用いて検索を行う人物	非使役的動作主
humificar: 加湿する	humificador: 加湿器	使役的道具

ideologizar: 思想性を与える	ideologizador: 思想性を与える人物	使役的動作主
impulsar: 推進する	impulsador: 推進する人物	使役的動作主
incubar: 孵化させる	incubadora: 孵卵器	使役的道具
inicializar: 初期化する	inicializador: 初期化プログラム	使役的道具
intermediar: 仲買する	intermediador: 仲買人	非使役的動作主
internacionalizar: 国際化する	internacionalizador: 国際化推進者、国際化を加速させる要因	原因
invernar: 越冬させる	invernador: 家畜を冬に向けて太らせる人物 プールなどに冬の間塗布する薬物	使役的道具 原因
joder: 性交する、台無しにする	jodador: 性交する人物、台無しにする人物	使役的動作主
lanzar: 放つ、投げる	lanzador: ロードレースでスプリンターの発射台となる人物	使役的動作主
lapidar: 宝石をカットする	lapidador: 宝石をカットする人物、道具	使役的道具
lenkear: リンクを貼る	linkeador: リンクを貼る人物、プログラム	使役的道具 使役的動作主
levitar: 浮遊する	levitador: 浮遊させる機械	使役的道具
llegar: 到達する	llegador: ラストスパートをかける	非使役的動作主
localizar: 定位する	localizador: 定位する機械	使役的道具
maltratar: 虐待する	maltratador: 虐待をする人物	使役的動作主
maquetar: レイアウトを作成する	maquetador: レイアウト作成者、作成ソフト	使役的動作主 使役的道具
masacrar: 虐殺を行う	masacrador: 虐殺を行う人物	使役的動作主
memorizar: 記憶する	memorizador: 記憶する人物、電子データの記憶装置	使役的動作主 使役的道具
metabolizar: 物質代謝で変化させる	metabolizador: 代謝による変化を起こす物質	原因

migrar: 移住する・移動する	migrador: 別の OS に乗り換える人物、季節ごとに住処を変える鳥	非使役的動作主
minimizar: 最小限にする	minimizar: 最小限にする人物	使役的動作主 原因
monitorear: モニタリングする	monitoreador: モニタリングをする人物	非使役的動作主
movilizar: 活発化させる人	movilizador: 活発化させる人、道具	使役的動作主 使役的道具
musicalizar: BGM などをあてる	musicalizador: BGM などをあてる人物	使役的動作主
noquear: ノックアウトする	noqueador: ノックアウトする人物	使役的動作主
nuclear: 集める	nucleador: 集める人物、装置	使役的動作主 使役的道具
obstaculizar: 妨げる	obstaculizador: 妨げとなる要因	原因
opinar: 意見を言う	opinador: 意見を言う人	非使役的動作主
orbitar: 軌道を廻る	orbitador: 人工衛星	非使役的道具
organizar: 組織する	organizador: 組織する人物・団体	使役的動作主
orquestrar: オーケストラを運営する	orquestrador: オーケストラを運営する人	非使役的動作主 使役的道具
pepenar: 拾う、取り上げる	pepenador: 拾う、取り上げる人物	使役的動作主
periodificar: 出来事を時代ごとに区切る	periodificador: 出来事を時代ごとに区切る人物	使役的動作主
perlizar: 真珠にする、真珠状の形にする	perlizador: 真珠状の形にする機械	使役的道具
personalizar: 擬人化する	personalizador: 擬人化する人物、ソフト	使役的道具 使役的動作主
postear: インターネット上の掲示板に投稿する	posteador: インターネット上の掲示板に投稿を行う	使役的動作主
potenciar: 強化する	potenciador: 強化する物質	原因
precalentar: 予熱する	precalentador: 予熱する装置	使役的道具
prescribir: 処方箋を作成する	prescriptor: 処方箋作成者	使役的動作主

privatizar: 民営化する	privatizador: 民営化する人物	使役的動作主
problematizar: 問題を起こす	problematizador: 問題を起こす人物、要因	使役的動作主 原因
proclamar: 宣言する	proclamador: 宣言する人物	非使役的動作主
propugnar: 支持する、擁護する	propugnador: 支持者、擁護者	非使役的動作主
proseguir: 継続する	prosecutor: 継続する人物	非使役的動作主
purificar: 浄化する	purificador: 浄水装置	使役的道具
quebrar: 壊す	quebrador: 壊す人物	使役的動作主
readaptar: 再適合させる	readaptador: 再適合させる人物	使役的動作主
reasegurar: 再保険をかける	reaseguradora: 再保険会社	使役的動作主
reasignar: 再び割り当てる	reassignar: 再び割り当てる人物、装置	使役的道具 使役的動作主
reciclar: リサイクルをする	reciclador: リサイクルをする人物	使役的動作主
recircular: 再循環させる	recirculador: 循環させる機械	使役的道具
recomprar: 再購入する	recomprador: 再購入者	使役的動作主
reconfigurar: 再設定をする	reconfigurador: 再設定用ソフトウェア	使役的道具
redireccionador: 新たな行き先を与える	redireccionador: 特定のホームページに移動させるプログラム・ウェブツール	使役的道具
reemplazar: 置換する	reemplazador: 置換プログラム	使役的道具
reequilibrar: バランスを失ったものを均衡させる	reequilibrador: バランスを失ったものを均衡させる人、要因	使役的動作主 原因
reestructurar: 再構築する	reestructurador: 化粧品	原因
referenciar: 言及する	referenciador: 言及する人	非使役的動作主
reformular: 再形成する	reformulador: 再形成する人・要因	使役的動作主 原因
refundar: 再設立する	refundador: 再設立する人物	使役的動作主
regasificar: ガスを補充する	regasificadora: ガスの補充船	使役的道具
rehabilitar: リハビリをさせる	rehabilitador: リハビリトレーナー	使役的動作主
reinterpretar: 再演する	reinterpretador: 再演者	非使役的動作主

rellenar: いっぱいにする	rellenador: 水や化粧品を注ぐ機械	使役的道具
remezclar: リミックスする	remezclador: リミックスをする人物、道具、ソフトウェア	使役的動作主 使役的道具
remontador: 上げる	remontador: リフト	使役的道具
reponer: 商品を補充する	reponedor: 商品の補充を行う人物	使役的動作主
reprogramar: 再プログラムをする	reprogramador: 再プログラムをする人物、ソフトウェア	使役的動作主 使役的道具
resetear: リセットする	reseteador: プリンター用インクのリセッター	使役的道具
reubicar: 再配置する	reubicador: 再配置する	使役的道具
revisitar: 有名な作品を振り返る	revisitar: 有名な作品を振り返る人物	非使役的動作主
revitalizar: 新たに活力を与える	revitalizador: 新たに活力を与えるシステム、物質	使役的道具, 原因
samplear: サンプリングする	sampleador: サンプリングをする人物	使役的動作主
secuenciar: 連続させる, 逐次配列する	secuenciador: シークエンサー	使役的道具
simbolizar: シンボルとなる	simbolizador: シンボルとなる人、物, 記号化するプログラム、装置	非動作主、非使役的道具
sondar: 水底を調査する	sondador: ソナー	非使役的道具
sustraer: 切り離す	sustractor: 切り離す人物・道具	使役的動作主 使役的道具
tensionar: 緊張状態に置く	tensionador: 緊張状態に置く道具、ボビン	使役的道具
tercerizar: 外注する	tercerizador: 外注する人物	使役的動作主
testear: テストをする	testeador: テスター	使役的道具 使役的動作主
tipear: キーボードで何かを書く	tipeador: キーボードで何かを書く人物	使役的動作主
troquelar: 切断する	troqueladora: 切断する機械	使役的道具



tunear: 車、機械などを調整する	tuneador: 調整者、チューナー	使役的道具 使役的動作主
urbanizar: 都市化する	urbanizador: 都市化する人物	使役的動作主
viabilizar: 実現可能にする	viabilizador: 実現可能にする人物、要因	使役的動作主 原因
vibrar: 振動させる	vibrador: バイブレーター	使役的道具
victimizar: 被害者として扱う	victimizador: 被害者として扱う人物	使役的動作主

表 2. 新語的-nte 名詞

abrumar: 圧倒する	abrumante: 圧倒する要因	原因
acondicionar: 調整する	acondicionante: リンス、コンディショナー	原因
ahorrar: 貯蓄する	ahorrante: 貯蓄する人物	非使役的動作主
alertar: 警戒する	alertante: 警戒する人物	非使役的動作主
aportar: 寄付をする	aportante: 寄付をする人物	非使役的動作主
auspiciar: 支援する	auspiciante: 支援者	非使役的動作主
ayunar: 絶食する	ayunante: 絶食する人物	非使役的動作主
bascular: 上下に動く	basculante: 上下に移動する物	内項相当
cagar: (俗語的に) 糞をする	cagante: 糞をする人物	非使役的動作主
complejizar: 複雑にする	complejizante: 何かを複雑にする要因	原因
conformar: 調和させる、形成する、合わせる	conformante: 調和させる要因	原因
convocar: 募集を出す人物	convocante: 募集を出す人物、団体	使役的動作主
cotizar: 保険料などを支払う	cotizante: 保険料などを支払う人物	使役的動作主
cuestionar: 問題意識を持つ	cuestionante: 問題意識を持つ人物	非使役的動作主
defoliar: 葉を枯れさせる、落とす	defoliante: 枯葉剤	原因
descalificar: 失格とさせる	descalificante: 失格の原因となる反則	原因
descolocar: 呆然とさせる	descolocante: 呆然とさせる要因	原因
descongelar: 解凍する	descongelante: 凍結を解消する薬物	原因
desequilibrar: バランスを崩させる	desequilibrante: バランスを崩させる要因	原因
desespumar: 泡を取り除く	desespumante: 泡を取り除く薬剤	原因

desestresar: ストレスを軽減する	desestresante: ストレスを軽減する要因	原因
desfilar: 列になって歩く	desfilante: 列になって歩く人	非使役的動作主
desinformar: 情報を捻じ曲げる	desinformante: 情報を捻じ曲げる人	使役的動作主
desmaquillar: 化粧を落とす	desmaquillante: メイク落とし	原因
desmigrantar: 色素の沈着を解消する	despigmentante: 色素の沈着を解消する薬剤	原因
despachar: 営業する、仕事をする	despachante: 従業員	非使役的動作主
dialogar: 対話をする	dialogante: 対話をする人物	非使役的動作主
discapacitar: 能力を奪う	discapacitante: 能力を奪う物質	原因、
dispersar: 分散させる	dispersante: 分散材	原因
distorsionar: ひずませる	distorsionante: ひずませる要因	原因
energizar: エネルギーを与える	energizante: エネルギーを与える物質	原因
englobar: 包括する	englobante: 包括する要因	原因
envejecer: 老化させる	envejeciente: 老化しつつある人物	内項相当
exculpar: 責任を免除する	exculpante: 責任を免除する要因	原因
exfoliar: 古くなった角質などを落とす	exfoliante: 古くなった角質などを落とす薬品	原因
franquiciar: フランチャイズを経営する	franquiciante: フランチャイズ営業をする人物、会社	非使役的動作主
globalizar: グローバル化させる	globalizante: グローバル化主義者	非動作主
hechizar: 魅了する	hechizante: 魅了する物質	原因
hipnotizar: 催眠する	hipnotizante: 催眠状態を引き起こす要因	原因
incriminar: 糾弾する	incriminante: 糾弾する人物	非使役的動作主
infartar: 心筋梗塞を引き起こす	infartante: 心筋梗塞を起こす要因	原因
inflamar: 炎症を引き起こす	inflamante: 炎症を引き起こす要因	原因

ingresar: 入学する	ingresante: 入学者	非動作主
mejorar: より良くする	mejorante: 改善する効果を持つ物質	原因
migrar: 移住する	migrante: 移住者	非使役的動作主
minimizar: 最小限にする	minimizante: 最小限にする関数	原因
movilizar: 動的にする	movilizar: 動的にする要因	原因
nuclear: 核となる	nucleante: 核となるもの、物質	内項相当
permeabilizar: 透過性にする	permeabilizante: 透過性にする薬品	原因
postear: インターネット上の掲示板に投稿する	posteante: インターネット上の掲示板に投稿する人物	使役的動作主
profesar: 信奉する	profesante: 信奉する人物	非動作主
recombinar: 組み替える	recombinante: 遺伝子を組み替えるウイルス、物質	原因
reemplazar: とってかわる	reemplazante: 代役となる人物	内項相当
remontar: のぼる	remontante: 総額	内項相当
replicar: 複製を作成する	replicante: 複製された人物、物	内項相当
resaltar: 際立つ	resaltante: 際立つ人物、物	内項相当
revitalizar: 活力を与える	revitalizante: 活力を与える薬品、要因	原因
saborizar: 味をつける	saborizante: 調味料	原因
saciar: 食欲などを満たす	saciant: 食欲などを満たす薬品	原因
silbar: 音が鳴る	silbante: 歯擦音	内項相当
simbolizar: 象徴する	simbolizante: 象徴するもの、人	非動作主 非使役的道具
tensionar: 緊張状態に置く	tensionante: 緊張状態に置く要因	原因
testimoniar: 遺言を残す	testimoniante: 遺言を残す人物	非使役的動作主
torturar: 拷問する	torturante: 拷問する人物	非使役的動作主
victimizar: 被害者として扱う	victimizante: 被害者とさせる要因	原因

### 3.3.1. 両接辞の現代における生産性

表 1 と表 2 から両接辞の現代における生産性も推測される。-dor による新語的派生名

詞の数は **-nte** による名詞の三倍であることは注目に値する。

前章で紹介した非新語も含む分析においては、**-dor** による派生名詞は 810 種類、**-nte** によるものは 264 種類あった。比率でいえば、3.06:1 となる。このことから両接辞の生産性は現代において概ね以前と同程度のまま推移していると考えられる。

### 3.4. 分析

収集した派生名詞は表に示したようにその意味に応じて使役的動作主、非使役的動作主、非動作主、使役的道具、非使役的道具、原因、内項相当のカテゴリーに分類した。前章で提示した仮説からは **-dor** が使役的動作主や道具といった動作主性の高い対象を、**-nte** が原因や非動作主、内項相当の対象を優先的に編入することが予測される。実際にその通りであれば、それは仮説を補強するものとなるだろう。そして、仮説との齟齬が確認されれば、事実に即した形に仮説を修正する必要がある。

分析の結果、仮説から予測される意味の分布は、分析対象を新語的派生名詞に限定した場合においても観察された。従って、前章で提示した仮説は概ね妥当なものであり、両接辞の意味的性質を適格に捉えたものであったといえるだろう。より具体的な分析結果は、表 3 にまとめた。

表 3. 分析結果

	-dor	-nte
使役的動作主	94 (42.3%)	4 (5.8%)
非使役的動作主	24 (10.8%)	15 (21.7%)
非動作主	2 (0.9%)	4 (5.8%)
使役的道具	70 (31.5%)	0 (0%)
非使役的道具	3 (1%)	2 (2.9%)
原因	29 (13.1%)	36 (52.2%)
内項相当の対象	0 (0%)	8 (11.6%)
計	222	69

次節以降では、それぞれの意味範疇に該当する両タイプの表す対象を具体的に紹介していく。

#### 3.4.1. 使役的動作主

前章で提示した仮説からは、本研究でいう使役的動作主は **-dor** が高い頻度で編入し、**-nte** によるこうした対象の編入は制限されていることが予想される。そして表 3 に示したように、現代の語形成においても、こうした編入における差は観察された。分析を新語に限定した場合にも観察されるこの対比は両接辞の意味的本質を反映したものであるといえるだろう。

使役的動作主を表す新語的な **-dor** 派生名詞には以下のようなものがある。

Amarrador, comercializador, coorganizador, dinamizador, extorsionador, movilizador, privatizador, reasegurador, rehabilitador, reponedor, banalizador, crackeador, defenestrador, etc.

一方で、-nte による使役的動作主の編入は著しく限定されている。本研究における分類法では、以下の四種類の派生名詞が使役的動作主を表すものと考えられる。

Cotizante, convocante, posteante, desinformante

しかも、これらの派生名詞は解釈上の透明性、および使用頻度において、同種の対象を表す -dor 名詞とはやや異なる。例えば、convocante と cotizante はそれぞれ、特定の招集人、支払人を表すのではなく、デモなどの発起団体、および支払い義務のある人物を集合的に表すために用いられるようである。

- (1) El paro, según los sindicatos, ha "colmado" todas sus expectativas al igual que la manifestación celebrada en Oviedo por la tarde, a la que han asistido decenas de miles de personas -más de 100.000 según los convocantes y entre 20.000 y 25.000 según la Policía-.
- (2) La organización de apoyo a los presos de ETA Askatasuna era la convocante de esta marcha que recorrió Hendaya en silencio y sin incidentes y que empezó y acabó ante el Ayuntamiento de esa localidad.
- (3) La Comunidad de Madrid, que emplea al 21,8 % de los trabajadores extranjeros del total que cotizan en España (1.121.419), ocupa el segundo lugar detrás de Cataluña que acoge al 22,84% de los cotizantes extranjeros.

本章における分析では上記の四種類の使役的動作主を表す -nte 名詞が観察されているが、これらの -nte 名詞には語根を同じくする -dor による派生名詞があり、同様に使役的動作主を表す。しかしながら、その意味の透明性、多義性について、対応する -nte 名詞とはやや異なっている。

まず、Convocante と同じ語根を持つ convocador は前者とは異なり、特定の招集人、発起人を表すことができる。

- (4) ¡Bolívar, el soñador de la Confederación Continental; el convocador de los Anficiones del Istmo de Panamá, entre los cuales se había deslizado como un augurio la idea de crear una autoridad "sublime" (es la palabra), para presidir, sin duda, al continente confederado!

¡Bolívar, cuya ambición era más grande que su gloria, que era muy grande, y que no había recatado en las conversaciones de Chuquisaca ni sus malquerencias argentinas, ni su voluntad de hacer y de deshacer desde los Andes hasta el Plata, desde el Plata hasta el Amazonas!".

同様に、cotizante は総称としての支払人を表していたが、cotizador は同様の対象を表す一方、「オンラインの支払いフォーム」という使役的道具に相当する対象を表すことを確認した。

- (5) Para facilitar la cotización y/o contratación de la póliza, Zurich Connect pone a disposición del usuario un servicio de call centers, la web, el cotizador online, y la posibilidad de llamada gratuita a través de Skype y de videollamada con un asesor interactivo.

また、「インターネット上の掲示板になんらかの発言を投稿する」という動作を表す動詞 postear から、そうした動作を実行する人物を表す名詞、posteante が派生される。しかしながら、一方で、この動詞は -dor によっても派生される。派生名詞、posteador の語義も「投稿者」であり、両派生名詞は同義的であるといえるだろう。しかしながら、両者は同義的ではあるものの、使用頻度において著しく異なっている。後者の使用頻度は前者の使用頻度に比べ、圧倒的に高い<sup>8</sup>。よって、posteante は一応の存在、使用が確認されたものの、一部の話者のみが用いる、場合によっては容認されることのない語であると考えられる<sup>9</sup>。

- (6) Mi caso es parecido al anterior posteante , pero mi caso es peor, yo firmé el nuevo contrato con Axa, sin saber muy bien qué firmaba, pues estaba y sigo enferma, firmé por presiones.

- (7) Soy un nuevo posteador en este foro y me he apuntado para ayudaros en cualquier duda y añadir cosas que hacer a nuestro mini plus.

「(操作された・偽の) 情報を与える」という動作を表す動詞を語根とし、そうした動作を行う人物を表す desinformante は使役的動作主を表すものと考えられる。しかしながら、同義的な派生名詞、desinformador の使用頻度は desinformante のそれを上回る<sup>10</sup>。従って、desinformante も分類上、使役的動作主を表す派生名詞ではあるが例外的なものである。

<sup>8</sup> es TenTen では posteador の用例が 1063 件確認された一方で、posteante の用例は 13 件にとどまる。

<sup>9</sup> 三名のインフォーマント（スペイン人 2 名、コロンビア人 1 名）に確認したところ、全員が posteador を容認した一方で、posteante は容認されなかった。

<sup>10</sup> es TenTen では desinformador は 251 例、desinformante は 170 例生起が確認されている。しかしながら、後者の 170 の用例には映画“The Informant!”の西題 “¡El Desinformante!”が約 20 例含まれており、実際には検索結果以上に、使用頻度の差があると考えられる。

### 3.4.2. 非使役的動作主

本研究では動作の対象への使役性の有無で、従来、広く「動作主」とされてきた意味役割に、「使役的動作主」・「非使役的動作主」という下位類を設定している。この内、使役的動作主相当の編入を **-dor** は生産的に行える一方、**-nte** はこうした対象を極めて編入し辛いことを前章および前節の分析で確認している。また、前章の 20 世紀以降の使用が確認されている派生語の分析では、**-nte** 接辞は非使役的動作主を一定数編入していることを確認した。これは Laca (1993) における **-nte** は動作に対するコントロールを有した対象を編入することが稀であるとする説に対する明確な反例である。

本節では、非使役的動作主を表す両接辞による新語的な派生名詞を紹介する。表 1 に示したように、本研究で分析した 24 種類の **-dor** 名詞、15 種類の **-nte** 名詞は非使役的動作主を表していた。この事実から、両接辞は現代の語形成においても、非使役的動作主の編入を制限していないことがわかる。そして、この事実は前章で仮説として提示した両接辞の編入に関する規則を支持し、**-nte** とコントロールという意味的素性が全く相いれないわけではないことを示すものである。

非使役的動作主を表す派生名詞には以下のようなものがある。

**-dor**

Complotador, encuestador, llegador, opinador, orquestador, monitoreador, etc.

**-nte**

Dialogante, migrante, desfilante, cagante, llamante, ahorrante, incriminante, etc.

### 3.4.3. 使役的道具

動作主が意図をもってなんらかの目的に使用する人造物を表す意味役割、「道具」についても本稿では使役性の有無によって、「使役的道具」および「非使役的道具」という二種類の下位類を設定している。そして、前章では **-dor** は両方の種類の道具を編入する一方、**-nte** による使役的道具の編入は厳しく制限されていることを報告した。

この対比は、分析対象を新語的派生語に限定した本章の分析において、より明瞭な形で観察された。本章で扱った新語的派生語については、70 種類の **-dor** 派生名詞が使役的道具を表していることが確認されたのに対し、こうした対象を表す **-nte** 名詞は 1 例も観察されなかった。このことは、現代における語形成のルールにおいても、**-nte** による使役的道具の編入は制限されていること、および、前章における少数の使役的道具を表す **-nte** 名詞は例外として処理されるべきものであることを示唆している。

こうした対比が生じる理由は、動作主の編入における対比が生じる理由と同根のものであると考えられる。つまり、道具とは、常に動作主に行使されるものである以上、道具の関



与する動作には常に動作主へのコントロールが介在する。さらに、使役性を有する道具となれば、動作に対するコントロール、そして使役性を持つものである。そして **-nte** は使役性とコントロールの両方を持つ対象を編入しない接辞であると予測されている。

本研究では以下のような使役的道具を表す **-dor** 名詞を確認した。

**Precalentador, redireccionador, levitador, memorizador, cotizador, distorsionador, etc.**

また、本研究で扱った新語的 **-dor** 名詞の中には、コンピュータプログラムおよびインターネット上での料金支払いフォームなどの、いわば電子ツールを表すものがあった。こうした電子ツールは実体を持たないという点では、従来の典型的な意味での道具とは異なるが、人造物であり、動作主、つまり利用者に行使されることでなんらかの変化を生じさせるという点で、使役的道具と分類可能である。以下の文における、 **programa** と前置詞 **con** の共起の容認性もまた、こうした電子ツールが道具であることを示している。

(8) No quedan feos los videos hechos con ese programa.

#### 3.4.4. 非使役的道具

数こそは多くないものの、非使役的道具を表す新語的派生名詞の存在も確認されている。ここで興味深いのは、こうした非使役的道具の絶対数は使役的道具のそれに比べ、極めて限定的であるのにもかかわらず、非使役的道具を表す **-nte** による新語的派生名詞が二例のみであるが存在するという点である。このタイプの道具は使役性という素性については陰性であり、それ故に **-nte** による編入が制限されない。この事実もまた、コントロールおよび使役性の有無が、両接辞による派生の意味的容認性を左右するものであることを示唆しているといえる。

非使役的道具を表す両派生接辞による名詞としては以下のものがあった。

**-dor: simbolizador, sondador, orbitador**

**-nte: simbolizante, basculante**

#### 3.4.5. 原因

ここまでの分析では、**-nte** による派生名詞は必ずしも道具を表さないわけではなく、目的語相当の対象になんらかの変化を生じさせないものであれば、道具であっても表しうることを指摘した。しかしながら、**-nte** 派生名詞がまったく、使役性を持った対象を表さないとするのもまた、過剰な一般化である。

表 3 に示したとおり、両接辞による新語的派生名詞には、それぞれ一定数の、原因相当の対象を表すものがある。現代の両接辞の編入に関する規則は、それぞれ原因相当の対象の

編入を妨げるものではない、とすることもできるだろう。ここで強調しておきたい点は、**-nte** による新語的派生名詞の総数は **-dor** による派生名詞のそれに比べ三分の一程度であるにもかかわらず、原因相当の対象を表す **-nte** 名詞の総数は同様の **-dor** 名詞の総数を、絶対数においても上回っているという点である。この点も、前章で提示した仮説から説明可能であろう。つまり、仮説によれば **-dor** 接辞の編入する典型的な対象とは、動作へのコントロール、および使役性の両方をもつものであった（使役的動作主・使役的道具）。そして、原因相当の対象とは、この二種類の性質の内、コントロールを欠くものである。よって、**-dor** の編入する対象としては非典型例になる。一方、**-nte** の意味的特徴はどちらか片方の素性のみが陽性である対象、またはいずれも陰性である対象を編入することにあることが既に明らかになっている。原因とは使役性についてのみ陽性対象であり、従って **-nte** にとっては典型的な編入の対象と考えられる。原因相当の対象を表す **-nte** 派生名詞の多さはこのように説明可能であろう。

原因相当の対象を表す両接辞による派生名詞には以下のようなものがある。

**-dor**

potenciador, desmaquillador, descongestionador, desinhibidor, pegador, etc.

**-nte**

saborizante, revitalizante, descongelante, desestresante, exfoliante, acondicionante, etc.

#### 3.4.6. 非動作主

本研究では、コントロール、および、使役性を持たない有生の対象を非動作主として分類している。そして前章では **-dor** による非動作主の編入は制限されていることを報告し、これは **-dor** が問題となる二種類の両方が陰性であるような対象を編入しないためであると主張した。また、**-nte** は **-dor** よりも高い頻度でこうした対象を編入していたが、この点も仮説から説明される。つまり、「**-nte** は問題となる二種類の素性の内、両方が陽性であるような対象を編入しない」としたが、非動作主とはいずれの素性についても陰性である。従って、**-nte** はこうした対象を問題なく編入できるのだと考えられる。

この対比もまた、前章で観察された形よりもより明瞭な形で観察された。今回分析した新語的派生名詞の内、**-nte** によるものにはこうした対象を表しているものが確認されたが、**-dor** による派生名詞で非動作主を表しているものは一例も観察されなかった。この事実は、やはり、仮説の妥当性を補強するものである。

非動作主を表す **-nte** 名詞には以下のものがある。

Sufriente, despachante, nucleante, profesante

### 3.4.7. 内項相当の対象

前章では再帰動詞や非対格動詞の主語、つまり内項相当の対象を表す **-nte** 名詞を紹介した。そして **-nte** による新語的派生名詞の中にも、こうした対象を表しているものが確認されている。当該接辞によるこうした対象の編入もまた、現代においてその生産性を保っているといえるだろう。その一方で、こうした対象を編入していると思われる **-dor** 名詞は全く観察されなかった。これはやはり、**-dor** が高い動作主性指向の接辞であるためだろう。

**-nte**

envejeciente, replicante, emergente, reemplazante, basculante, resaltante, circulante, silbante

(9) La víctima, un envejeciente de 67 años, recibió heridas de parte de dos personas, aún sin identificar, que se desplazaban a bordo de una motocicleta.

(10) Uso de cultivos de tejido como nucleante.

(11) Los replicantes<sup>11</sup> sí son androides, son creaciones humanas como el monstruo de Frankenstein.

### 3.4.8. まとめ

本節では収集した新語的派生名詞の表す対象を有生性、語根動詞の表す動作、状態に対するコントロール、および使役性の有無により分類を行った。こうした値の組み合わせにより、使役的動作主、非使役的動作主、被動作主、使役的道具、非使役的道具、原因、内項相当の対象という七種類の範疇が設定され、両タイプの接辞の意味は異なる分布を示した。これまでの分析をまとめたものを以下に表 3 として再掲する。

---

<sup>11</sup> この派生語はスペイン語のルールの中で形成されたのではなく、英語の SF などで使用される用語、**replicant** からの翻訳である可能性が高い。しかしながら、この語が英語からの借用語であったとしても、翻訳される際に **-dor** が使用されなかったこと、ならびに、**-dor** による派生語、**replicador** は複製された人間ではなく、複製に使用される機会を指す。このことから、複製された人間を表すために **-nte** が使用されたのにもスペイン語内部からの動機もあったと考えられる。従って本論では **replicante** を内項相当の対象を表す **-nte** 名詞として扱っている。

表 3. 分析結果

	-dor	-nte
使役的動作主	94 (42.3%)	4 (5.8%)
非使役的動作主	24 (10.8%)	15 (21.7%)
非動作主	2 (0.9%)	4 (5.8%)
使役的道具	70 (31.5%)	0 (0%)
非使役的道具	3 (1%)	2 (2.9%)
原因	29 (13.1%)	36 (52.2%)
内項相当の対象	0 (0%)	8 (11.6%)
計	222	69

そして以下に提示する表 4 は前章で分析した非新語も含む -dor 派生名詞の意味の分布と、本章で分析した新語的 -dor 派生名詞の意味の分布をそれぞれまとめたものである。

表 4. 非新語を含む -dor 名詞と新語的 -dor 名詞の意味の分布

	(非) 新語的-dor	新語的-dor
使役的動作主	417 (43.8%)	94 (42.3%)
非使役的動作主	222 (23.3%)	24 (10.8%)
非動作主	21 (2.2%)	2 (0.9%)
使役的道具	251 (26.1%)	70 (31.5%)
非使役的道具	12 (1.2%)	3 (1%)
原因	39 (4.1%)	29 (13.1%)
内項相当の対象	0 (0%)	0 (0%)
計	962	222

このように、非新語的なものを含む -dor 名詞群と新語的な -dor 名詞群の間には概ね、意味の分布に差異がないことが確認された。いずれの場合においても、-dor 派生名詞の表す対象の大多数を占めるのは使役的動作主と使役的道具である。そしてその一方で、非動作主や内項相当の対象といったコントロールも使役性を持たない対象の編入は厳しく制限されている。分析対象を新語に限定した場合とそうでない場合のいずれにおいても -dor による外項の編入の方向性は同様のものであるといえるだろう。

次に表 5 には、同様に前章で提示した非新語を含む -nte 派生名詞と本章で分析した -nte 派生名詞の意味の分布をまとめたものである。

表 5. 非新語を含む-nte 名詞と新語的-nte 名詞の意味の分布

	(非)新語的-nte	新語的-nte
使役的動作主	14 (5.2%)	4 (5.8%)
非使役的動作主	94 (35.1%)	15 (21.7%)
非動作主	47 (17.5%)	4 (5.8%)
使役的道具	4 (1.5%)	0 (0%)
非使役的道具	6 (2.2%)	2 (2.9%)
原因	68 (25.4%)	36 (52.2%)
内項相当の対象	35 (13.1%)	8 (11.6%)
計	268	69

一見してわかる通り、新語的 -nte 名詞の表す対象は非新語的な同接辞による派生名詞の表す対象に比べ、原因にあたるものが多く、また、非使役的動作主や非動作主、内項相当の対象の数が相対的に減少している<sup>12</sup>。本章で扱った分析対象の語根動詞の中には、活動動詞や自動詞の数がそもそも少なかったことを差し引くとしても、新語的な -nte 名詞の表す対象の半数以上が原因相当にあたるというこの観察の結果から、現代における、-nte の典型的な機能は、語根動詞の表す動作の原因にあたる対象の編入であるといえるだろう。

また、前章の分析では、-nte による派生名詞には使役的な動作主や道具といったコントロールと使役性を併せ持つ対象を表すものが極端に少なかったが、この傾向は本章で分析した新語的な -nte 名詞にもみられた。このことは、-nte という接辞は編入に際し、高い動作主性を持つ対象を拒絶していることを示唆するものである。

以上の結果から、両接辞はそれぞれ以下のような性質を持った接辞であると説明することができるだろう。

#### -dor

- ① 語根の表す動作に対するコントロールと使役性を併せ持つ対象を典型的に編入する。  
→使役的動作主・使役的道具 (+CON, +CAU)
- ② 語根の表す動作に対するコントロールと使役性のどちらか一つのみを持つ対象を編入する。  
→非使役的動作主 (+CON, -CAU) ・原因 (-CON, +CAU)
- ③ 語根の表す動作に対するコントロールと使役性のいずれも持たない対象を編入することは稀。  
→非動作主・内項相当の対象 (-CON, -CAU)

<sup>12</sup> 同様の傾向が、表 4 にもみられることを確認されたい。

-nte

- ① 語根の表す動作に対するコントロールを持たず、使役性を持つ対象を典型的に編入する。  
→原因 (-CON, +CAU)
- ② 語根の表す動作に対するコントロールを持ち、使役性を持たない対象を編入する。  
→非使役的動作主 (+CON, -CAU)
- ③ 語根の表す動詞に対するコントロールと使役性のいずれも持たない対象を編入する。  
→非動作主、内項相当の対象 (-CON, -CAU)
- ④ 語根の表す動詞に対するコントロールと使役性の両方を持つ対象を編入することは稀。  
→使役的動作主・使役的道具 (+CON, +CAU)

### 3.5. 同語根ペアの分析

前章で紹介した両接辞による派生名詞の中には、同一の動詞を語根とするペアが複数確認された (picador/picante)。そして、本章で分析した両接辞による新語的派生名詞の中にも、こうしたペアが 24 種類確認された。これらのペアには、意味の差が確認されたものと、確認されなかったものがあつた。本節では特に、こうした意味の差および同義性がこれまでに得られた記述から説明可能であることを示し、その妥当性を支持する根拠として実例を紹介しながら提示する。

#### 3.5.1. 意味の差の観察されたペア

本節では、意味の違いが観察された新語的動詞を語根とする同語根ペアを紹介していく。観察された意味の違いの多くは、コントロールと使役性の有無に基づくことを確認された。

既に 3.4.1. で述べた通り、「なんらかの活動に人々を招集する」という動作を表す動詞 convocar からは convocador および convoante という二種類の名詞が派生される。いずれも招集人、招集する団体を表し、本研究の分類上、使役的動作主と分類されるものであるが convocante はデモなどの主催集団を表すのにとどまる一方で、convocador はそうした対象に加え、招集を行う特定の個人を表す。このように、両派生名詞は使役的動作主を表すものの、convocador は -nte 接辞による派生語に比べ、より高い意味的透明性を有しているとい

えるだろう。当該節で紹介した例を以下に再掲する。

- (12) El paro, según los sindicatos, ha "colmado" todas sus expectativas al igual que la manifestación celebrada en Oviedo por la tarde, a la que han asistido decenas de miles de personas -más de 100.000 según los convocantes y entre 20.000 y 25.000 según la Policía-.

招集団体

- (13) La organización de apoyo a los presos de ETA Askatasuna era la convocante de esta marcha que recorrió Hendaya en silencio y sin incidentes y que empezó y acabó ante el Ayuntamiento de esa localidad.

招集団体

- (14) ¡Bolívar, el soñador de la Confederación Continental; el convocador de los Anfictiones del Istmo de Panamá, entre los cuales se había deslizado como un augurio la idea de crear una autoridad "sublime" (es la palabra), para presidir, sin duda, al continente confederado! ¡Bolívar, cuya ambición era más grande que su gloria, que era muy grande, y que no había recatado en las conversaciones de Chuquisaca ni sus malquerencias argentinas, ni su voluntad de hacer y de deshacer desde los Andes hasta el Plata, desde el Plata hasta el Amazonas!".

招集者

こちらにも既に 3.4.1. で紹介した通り、「(主に公共料金の) 支払いをする」という動作を表す *cotizar* から *cotizador*, *cotizante* という二種類の派生名詞が形成される。いずれも、「支払人」を表すことがあり、この点は両者の意味的な共通点である。

しかしながら、両派生名詞の実例を観察したところ、*cotizador* にのみ、オンラインの支払ツールを指す用法が確認された。このペアにおいても、前節で紹介した *convocador/convocante* ペア同様、*-dor* による派生名詞は高い意味上の透明性を持つ一方で、*-nte* による派生名詞の意味は極めて限定的である。*cotizante* の意味は限定的である一方で、*cotizador* は語根動詞の表す動作を実行する対象をより幅広く表すことができると換言することもできるだろう。以下の例文も 3.4.1. で既に紹介したものである。

- (15) Además, hay que tener en cuenta el tremendo cambio en la pirámide poblacional, con un mayor número de consumidores de servicios sanitarios en contraposición a un menor número de 'cotizadores'.

支払人

- (16) Para facilitar la cotización y/o contratación de la póliza, Zurich Connect pone a disposición del usuario un servicio de call centers, la web, el cotizador online, y la posibilidad de llamada gratuita a través de Skype y de videollamada con un asesor interactivo.

支払フォーム

- (17) Esta cifra es compatible con la creación de más de 400.000 empleos netos y con el aumento del número de cotizantes a la Seguridad Social en casi 600.000.

支払人

Acondicionador/acondicionante の語根は「なにかを整える、調整する」という動作を表す動詞 acondicionar である。両派生名詞はある程度、同義的である。たとえば、両者は共に「(髪の毛の) コンディショナー・リンス」という原因相当の対象を表すことを確認している。この点は、両者の共通点として考えられ、仮説から予測可能である。両者の差異として、acondicionador のみが、上記の原因相当の対象に加え、エアコン、冷房装置を表す(西和中)<sup>13</sup>という点が挙げられる。このコントラストもまた、記述から説明可能であろう。こうした空調装置は分類上、コントロールと使役性を持つ使役的道具に該当するものであり、-nte がこうした対象を編入しえないのであると考えられる。

- (18) Apagar las luces en las habitaciones mientras no se utilicen, hacer un uso racional de la energía eléctrica, y hacer un uso moderado del acondicionador del aire.

エアコン

- (19) Para combatir el cabello seco usa un buen acondicionador o mascarilla y aplica algún tratamiento intensivo para acondicionar la cabeza.

コンディショナー

- (20) Siliconas naturales que actúan como abrillantador y acondicionante sin aportar peso al cabello.

コンディショナー

「ぴんと張る」、「緊張状態に置く」という動作を表す動詞、tensionar からのも両接辞による派生名詞が形成される。しかしながら、tensionador, tensionante の表す対象は同種のものではない。

Tensionador はネジなどをきつく締める機械、ミシンのボビンといった装置、つまり使役的道具を表す。

<sup>13</sup> DRAE にも 2. m. Aparato para acondicionar o climatizar un espacio limitado. とする記載がある。



(21) Un tensionador ajustable que permite trabajar con la menor tensión del hilo.

ボビン

(22) Colocar el otro tensionador a una distancia de 20m o más sobre el cable portante, colocándole la tapa con sus tornillos bien apretados.

テンショナー

一方の tensionante はなんらかの緊張状態をもたらす抽象的な要因を表す。

(23) Tensionante: factor ajeno a los ritmos fenológicos o ciclos biológicos de las poblaciones biológicas nativas, que determina una pérdida destructiva de elementos u organización del ecosistema; por ejemplo: fuego, vertimientos, caza, tala, etc.

緊張状態をもたらす要因

このように、語根となる動詞 tensionar は外項に使役的道具だけでなく、原因も選択するが、両接辞はいずれも、自由に二種類の外項を編入するわけではない。上述の通り、tensionador は使役的道具を、tensionante は原因にあたる対象を表す。この分布は偶然のものではなく、それぞれの接辞が異なる基準で外項を編入していることによる。

この他にも、「失格させる」、「信用を失墜させる」<sup>14</sup>という動作を表す動詞 descalificar を語根とする派生名詞のペアが存在すること、そしてその意味が異なることが確認されている。まず、descalificador は、「執拗に人を批判し、人間としての尊厳を損なわせる人物」、つまり使役的動作主に当たる人物を表すようである。

(24) Siembra así en el corazón de su hijo enormes resentimientos que otras mujeres pagarán más adelante, cuando tenga la oportunidad de vengarse de la figura femenina o masculina, si el descalificador es el padre.

尊厳を損なわせる人物

一方の descalificante は「(広義の) 失格の要因」、例えば、「スポーツの試合における退場の要因となる反則」を表すのが主要な用法である。つまり、descalificante は原因相当の対象を表す派生名詞といえるだろう。

---

<sup>14</sup> 西和中における語義。

- (25) También fue determinante la descalificante que pitó el árbitro a uno de los jugadores del CB Villarrubia, tres técnicas en total fueron las que marco el colegiado tras las insistentes protestas de los locales cuando el partido se les empezaba a poner difícil.

反則

このペアにおいても、-dor のみが使役的動作主を編入し、-nte は原因相当の対象のみを編入するという対比が認められた。

「葉を枯れさせる」、「葉を落とす」という動作を表す動詞 *defoliar* にも両接辞は付加可能で、いずれの派生語も派生名詞としての用法を持つ。両派生名詞も「枯葉剤」という原因相当の対象を表すという点では共通している。この点は仮説から予測可能であった。

- (26) Fue entonces cuando se fumigaron los plantíos desde helicópteros y avionetas con el defoliador químico paraquat (más tarde sustituido por el glifosfato).

枯葉剤

- (27) Solo el desconocimiento sobre los peligros que encierran las dioxinas explica que estén presentes no solamente en sustancias tales como el agente naranja empleado como defoliante en el Vietnam (guerra química), multitud de sustancias químicas cloradas (plaguicidas y otros productos químicos), sino también en la celulosa blanqueada con cloro y empleada en papeles de todo tipo, productos de uso [...]

枯葉剤

*Defoliador* は枯葉剤だけでなく、「葉を枯れさせる、ダメージを与える虫」も表す。虫であっても、主体的に *defoliar* という動作を遂行している以上、本研究における分類基準でいえば、使役的動作主となるだろう。この点についても、仮説から予測可能であり、ひいては仮説の妥当性を支持するものである。

- (28) El spanworm del olmo es un defoliador serio de los bosques de árboles de sombra en los Estados Unidos orientales. Generalmente, esta plaga nativa se alimenta del olmo, el nogal americano, el roble, rojo y arce de azúcar, el haya americano, y el fresno.

葉にダメージを与える虫

このように仮説から予測される対比がこのペアにおいても観察された。

「最小限にする」という動作を表す動詞、*minimizar* からも両接辞による派生名詞が形成される。しかしながら、両派生名詞の間には、これまでに見てきたペアの場合同様、仮説か

ら予測可能な意味の違いが観測された。

両派生語は共に「何かを最小限にする要因」という原因相当の対象を表すことが確認されている。この点は両派生名詞の共通点であるといえる。たとえば、以下の例では *minimizador*, *minimizante* は共に同種の対象を表していることを確認されたい。

(29) Cómo hacer un minimizador de poros en casa<sup>15</sup>

毛穴ケア用美容液

(30) ¡Muero por probar el minimizante de poros de loreal!

毛穴ケア用美容液

しかしながら、*minimizador* にのみ、「意図的に何かを最小限に抑える人物」という使役的動作主相当の対象を表すために使用されているケースを確認している。

(31) Un minimizador es una persona que es consciente de los sentimientos de pena pero que trabaja para minimizar esos sentimientos, diluyéndolos por medio de una variedad de racionalizaciones.

辛い感情を抑える人物

この点も、*-dor* のみが動作へのコントロール、および使役性を併せ持つ対象を編入可能であるとする仮説から予測・説明可能であろう。

他動詞としては「上げる」、再帰動詞としては「(額面などが) のぼる」という動作を表す動詞 *remontar* にも両接辞は付加されうる。そして *remontador* は他動詞としての *remontar* から、*remontante* は再帰動詞としての *remontante* から派生されているものと思われる。具体的には前者は「リフト」などの使役的道具を、後者は「総額」などの内項相当の対象を表すことを確認している。

(32) Una naturaleza exuberante en la primavera, verano y otoño que se transforma en unas pistas de esquí de primera calidad con inversiones en remontadores de última generación.

リフト

---

<sup>15</sup> 美容記事のタイトル。

- (33) Sólo en el mes de mayo, los inmigrantes enviaron 631 millones de euros, según los datos estadísticos del Banco de España. Además, de acuerdo con los últimos baremos del Instituto Nacional de Estadística (INE), en España están empadronados 4,5 millones de extranjeros, lo que supone un 1% de la población, por lo que el remontante de las remesas seguirá aumentando en los próximos años.

総額

この対比が生じる理由も、仮説から説明されるだろう。つまり、このペアも仮説の妥当性を支えるものであると考える。

広義の「動性を与える」という動作を表す動詞、*movilizar* を語根とする派生名詞のペア、*movilizador/movilizante* にも、これまでに観察されたような、仮説から予測された意味上の対比が確認されている。*Movilizador* は「運動、イベントなどを盛り上げる人物」や、「筋肉を動かし、ほぐすマッサージ用の器具」を表しているケースを確認している。これは *-dor* が動作主性の高い対象を優先的に編入することによると考えられる。一方の *movilizante* は何かに結果として動性を与える要因を表す。これについても、*-nte* が動作主や道具といった高い動作主性を持つ対象を編入しえないことによると考える。

- (34) De esas casi tres horas que estuve allí lo que más emocionó fue las lágrimas de la viuda del inolvidable y recordado Amado Díaz Guillén, un movilizador social, a quien tuve el honor de conocer y tratar y del que guardo un gran recuerdo, que ayer, previo a la luchada, dio nombre al terrero de lucha de Las Huesas.

盛り上げる人物

- (35) Normalmente sales caminando al otro día del hospital, apoyando tu pierna operada con ayuda de muletas y a veces con una rodillera mecánica o inmovilizador para proteger la cirugía. Muchas veces es necesario usar un movilizador de rodilla (un aparato que te dobla y extiende la rodilla) por varios días.

膝の動きを助ける器具

- (36) Para un masaje activo, un masaje de circulación o bien un masaje epidermiante. También puede ser útil para limpiar la piel de toxicidad además de eliminar la grasa superflua. Es un gran movilizante de la celulitis.

動かす要因

*Envejecedor/envejeciente* の語根である動詞 *envejecer* もまた、先に見た *remontar* 同様、他

動詞としての用法と自動詞としての用法を持つものである。そして **-dor** は前者、**-nte** は後者と結びつき、派生名詞を形成する。これもまた、両者が異なる規則に沿って編入を行っていることによるだろう。

**Envejecedor** は以下に示すように、「何かを老朽化させる物質」や「デジタル画像を古びた写真風に変換するソフトウェア、ツール」といった原因や使役的道具を表しているケースを確認している。前者は原因、後者は使役的道具に相当するものであるが、いずれも仮説として提示した条件に違反するものではない。

- (37) Se trata de un envejecedor de imágenes ideal para quienes no tienen manejo de Photoshop y pretenden darle a sus instantáneas un toque original y antiguo.

画像に古びた印象を与えるソフトウェア

一方の **envejeciente** は非対格自動詞としての **envejecer**、つまり、「老ける」という動作を表す **envejecer** から派生していると考えられ、「年配者」を表す。

- (38) Nathalie Marie Hernández expresó que el Gobierno trabaja para que el envejeciente tenga una salud productiva y feliz.

年配者

同系統の意味的な対比は **reemplazador/reemplazante** 間にも確認された。**Reemplazador** は「文書作成ソフトにおける置換用のツール、プログラム」を、**reemplazante** は「代役、後任」を表す。前者は文書の一部を完全に変更させるものであり、使役性を持つものであるといえるだろう。一方、後者の **reemplazante** は目的語相当の対象の代わりとなる人や物を表すものであり、使役性も **reemplazar** という動作に対するコントロールも持たない。このように、このペアにおいても **-dor** の表す対象が、**-nte** の表すものに比べて高い動作主性を持つという対比が確認されている。

- (39) Para facilitar esta operación se recomienda utilizar el buscador y reemplazador de word.

置換ツール

- (40) 'Desafío Neymar': Scolari busca un reemplazante para el delantero<sup>16</sup>

代役

**Distorsionador/distorsionante** には使役的道具 VS.原因という対比が観察される。いずれも「歪ませる」という動作を表す他動詞としての **distorsionar** より派生したものであるが、前

<sup>16</sup> ニュースのタイトルであるためピリオドなし。

者は歪ませる道具、特に「ギターなどのディストーションエフェクター」という使役的道具相当の対象を表し、*distorsionante* は「状況に歪みをもたらす要因」という原因相当の対象を表す。これもまた、仮説から予測することのできる対比であろう。

- (41) El que a priori parecía otro grupo más de afortunado single de vocalista encantadora se convirtió en un combo multirracial por el que desfilaron sonidos de lo más atípicos entre sí, dando forma al directo de temas como "Da Hoola", "Smile" o "Free", en un alarde versatilidad pocas veces vista en este año pero en momentos empañada por las dificultades del guitarra con el distorsionador, que se las veía y se las deseaba para afinar en medio de la canción.

エフェクター

- (42) En ese sentido, olvidamos que Veracruz es una entidad con profundas desigualdades sociales donde el fenómeno de la extendidísima pobreza es un distorsionante muy grave para cualquier democracia que quiera consolidarse dentro del país, porque estas laceraciones sociales propician un clientelismo galopante que en los hechos, es una realidad innegable que en la actualidad aún se compran los votos por medio de canonjías en especie o de recursos económicos.

歪みを生じさせる要因

同様の対比は「解凍する」という動作を表す *descongelar* から派生したペアにも観察された。*Descongelador* は「オープンなどに搭載されている解凍装置・機能」や「主に車などに搭載されている凍結防止装置」という使役的道具相当の対象を、*descongelante* は「凍結防止剤」や「(広義の) 凍ったものを溶かすもの、要因」という原因相当の対象を表す。この意味の対比もまた、これまでに観察されてきたもの同様、偶然の結果ではなく、体系的な派生の結果であり、同時に仮説の妥当性を示すものであると考える。

- (43) Desarrolla funciones de microondas, asadora, tostadora, grill y descongelador de alimentos.

解凍機能

- (44) Quizá, la palabra más positiva del idioma y la más conducente al crecimiento constante en el amor sea "sí". "Sí" es el mejor "descongelante" de símbolos e ideas congelados.

場を和ませる要因

このように、これまでに紹介してきた意味の差のあるペアであるが、その意味の差は、使役性と動作に対するコントロールの有無の差であった。つまり、これまでに提示してきた仮

説から予測・説明可能な意味の対比であったといえるだろう。本章では 24 種類の新語的派生名詞のペアを分析したが、その内の 16 のペアにおいて意味の差が観察され、いずれも仮説から予測されたものだった。これらの意味の観察された 16 のペアをまとめたものが以下の表である。

表. 4 意味の差が観察された新語的派生名詞のペア

	-dor	-nte
convocar	(特定の)招集人	招集をする団体
cotizar	支払人 インターネット上の支払いフォーム	支払人
acondicionar	リンス、エアコン	リンス
referenciar	報告者、言及する人物	報告者、宛先人、参照先
tensionar	張力を与える道具	物事を緊張状態に置く要因
descongestionar	点鼻薬、搾乳機	点鼻薬
remontar	リフト、糸巻き	総額
dialogar	対話を建設的に進める人物	対話の参加者
descalificar	審判、反則	反則
movilizar	運動、イベントを促進する人物、マッサージ器	物事に流動性を与える要因
envejecer	画像をセピア調にするソフトウェア	老人
minimizar	最小限に抑える人物、要因	最小限に抑える要因
reemplazar	置換ソフト	代役
distorsionar	ディストーションエフェクター	歪みを生じさせる要因
descongelar	オープンなどの解凍装置	凍結防止剤
defoliar	葉にダメージを与える虫、枯葉剤	枯葉剤

このように、上記のペアでは常に、-dor による派生名詞が高い動作主性を持った対象を表し、-nte が原因や内項相当の対象といった低い動作主性の対象を表している。特に強調したい点は、逆のパターンのペア、つまり、-nte が -dor よりも高い動作主性を持った対象を編入するというケースは一例も観察されていないという点である。このことは、両接辞は、異なる動作主性の対象を優先的に編入し、特定のタイプの対象を編入しないとするこれまでの仮説を裏付けるものであるだろう。

### 3.5.2. 意味の差の確認されなかったペア

今回観察したペアには、同義的であると考えられるものも観察されている。その多くは、いずれの派生名詞も非使役的動作主、ないし原因にあたる対象を表すというものであった。このことは仮説から予想されており、この結果は仮説の妥当性を補強するものであるといえる。

「支援をする」という動作を表す動詞、auspiciar を語根とする派生名詞のペア auspiciador/auspiciante は高く同義的であるように思われる。いずれの名詞も「支援者」を表す。

(45) Puede hablarse Lostau como el principal auspiciador de la consolidación de la Universidad

en su primer tercio de siglo, consiguiendo aumentar notablemente el claustro de profesores y consolidar los estudios impartidos en Murcia, en un tiempo en el que la existencia de esta Universidad fue duramente cuestionada por muchos.

- (46) Desde hace varios años que Entel PCS es auspiciante oficial del fútbol de Chile y su selección.

この同義性も仮説により説明可能であると考ええる。つまり、動詞 *auspiciar* は使役性を持たない動詞であり、その外項は非使役的動作主であるといえるだろう。そして非使役的動作主は編入の可否を左右すると考えられる二種類の意味的素性についてはコントロールが陽性、使役性が陰性となる。両接辞はこの値の組み合わせをとる対象を編入することを妨げられておらず、「支援者」を指す二種類の派生名詞が形成されたのだと説明することができるだろう。

動詞 *saborizar* (味をつける) からなる派生名詞のペア *saborizador/saborizante* の間にも同義性が認められる。いずれの名詞も、「調味料」や「食品添加物」という原因相当の物質を表す。このことも、こうした対象はコントロールと使役性という素性について、後者のみ陽性であることから、この同義性も仮説から説明可能である。

- (47) Colocar las fugazzetas en horno moderado hasta que se comiencen a dorar. Mezclar el saborizador Napolitano Knorr® con el agua, dejar reposar 1 minuto y agregar el aceite.

- (48) El glutamato monosódico es quizá el saborizante más conocido.

es TenTen における両者の生起の回数は、*saborizador* が 77 回、*saborizante* が 1257 回と大きな開きがあった。この出現頻度の差もこれまでに得られた知見から十分に説明することができる。現代の両接辞を用いた派生のプロセスにおいては、両接辞は原因相当の対象を編入することができる。しかしながら、*-dor* にとっては、原因相当の対象の編入はあくまでも副次的な機能であり、その典型的な機能、用法は使役的動作主や道具といった高い動作主性を持つ対象の編入である。一方の *-nte* であるが、その典型的な機能は原因にあたる対象を編入することであることがこれまでの分析で判明している。逆に言えばこの同語根ペアもまた、*-nte* が現代においては原因相当の対象を編入することに特化した接辞であることを裏付けるものである。

*revitalizar* (「活性化させる」) から派生した名詞のペア、*revitalizador/revitalizante* においても同種の同義性が観察された。いずれも以下に見られるように、活性化させる原因を表している。



(49) También nos debemos alegrar que la administración reduzca costes de formalización y modificación de las hipotecas, aunque esta sea en menor medida de la pudiera servir como revitalizador del mercado inmobiliario, su objetivo parece claro, que los propietarios ya endeudados puedan seguir pagando la hipoteca, aunque ello nos pueda llevar a una situación ciertamente preocupante y es el alto endeudamiento que soporta la vivienda a través de la hipoteca, cuando una parte, cada vez más significativa no corresponde a su compra.

(50) Producto natural con alto contenido en proteínas, vitaminas del grupo A, B y C, así como sales minerales. Propiedades: Ayuda a mejorar la memoria. Actúa como regulador intestinal. Mejora la digestión de los alimentos. Es un revitalizante que contribuye a recuperar la energía perdida y a superar etapas de cansancio.

この同義性も、その語彙意味論的性質から想定の範囲内といえる。

「インターネット上の掲示板に意見を投稿する」という動作を語根とする *posteador/posteante* というペアに観察される同義性は仮説から体系的な説明を与えることが困難である。つまり、両派生語は先述の通り、「投稿する人物」という使役的動作主を表す。*-nte* がこうした対象を編入することは仮説からは予測不可能である。

しかしながら、こちらも先述の通り、このペアにおいては前者の使用頻度は後者に比べ圧倒的に高く、*posteante* の使用はごくごく一部の話者に限られている<sup>17</sup>。それゆえに、この同義性の説明が困難であることは、仮説の妥当性を脅かすものであるとはいえないだろう。

(51) Soy un nuevo posteador en este foro y me he apuntado para ayudaros en cualquier duda y añadir cosas que hacer a nuestro mini plus.

(52) Mi caso es parecido al anterior posteante , pero mi caso es peor, yo firmé el nuevo contrato con Axa, sin saber muy bien qué firmaba, pues estaba y sigo enferma, firmé por presiones.

前章で述べたように、*-izar* 接尾辞による動詞は厳密な分類上、形態的使役動詞とされるが、こうした動詞を本稿では語彙的使役動詞として扱っている。いずれにせよ、こうした *-izar* 接辞による動詞の主語は基本的に目的語を語根相当の対象、状態に変化させるものであると考えられる。この観点からいえば、動詞 *simbolizar* はその他の *-izar* 動詞に比べ、特殊である。この動詞の語義は「主語が目的語相当の対象を象徴する」というものであり<sup>18</sup>、目的語にあたる対象は特に何らかの変化を被らないためである。

<sup>17</sup> cf. 3.4.1.

<sup>18</sup> DRAE にもこの動詞の語義は“1. tr. Dicho de una cosa: Servir como símbolo de otra, representarla y explicarla por alguna relación o semejanza que hay entre ellas.” とある。

そしてこの動詞から、20 世紀以降に両接辞によって二種類の派生名詞が形成された。今回の分析では、いずれの派生名詞も、「何かを象徴・体現する人物、物」という非動作主および非使役的道具を表すこと、そして、それ以外の対象を表さないことが確認された。つまり、simbolizador と simbolizante は共に同義的であると考えられる。

-nte がこうした低い動作主性を有する対象を編入し、simbolizante という派生名詞を形成することは仮説から説明可能であると思われるが、同種の対象を表す simbolizador という派生名詞の存在は仮説への反例となる。しかしながら、前者の使用頻度は後者のそれに比べ高く、後者の使用は限定的であり<sup>19</sup>、この点は -nte の方がこうした低い動作主性の対象を編入するのに適切な接辞であるとする仮説から説明されるだろう。

このように、新語的な派生名詞のペアには同義的なものもある。そしてこの同義性は、語根動詞が活動動詞であるケース、または主語に原因以外の対象をほとんどとらない場合に生じるようである。活動動詞の主語は基本的に非使役的動作主であるが、このタイプの対象は原因同様、両接辞によって編入されうる。従って、こうした動詞には両接辞が付加され、かつ、派生名詞が同義的になるのだと考えられる。そしてこうした同義的ペアの存在もまた、これまでに提示してきた仮説から予測されるものであり、従って、その妥当性を裏付けるものであるといえるだろう。今回分析した 24 種類のペアの内、8 のペアでこうした同義性が観察された。当該の 8 ペアを以下の表にまとめた。

表 5. 同義的な新語的派生名詞のペア

	-dor	-nte
saborizar	調味料	調味料
reinterpretar	再演者	再演者
incriminar	非難する人物	非難する人物
desinformar	情報を捻じ曲げる人物	情報を捻じ曲げる人物
postear	投稿者	投稿者
desmaquillar	化粧落とし	化粧落とし
simbolizar	象徴する人、物	象徴する人、物
revitalizar	活力を与える要因・増強剤	活力を与える要因・増強剤

### 3.6. 結論

本章では出版、公開されている辞書、データベースなどから収集、作成した -dor/-nte 接辞による新語的派生名詞の意味を分析した。より具体的には、両タイプの派生名詞の語義を有生性、使役性、語根動詞の表す動作・状態に対するコントロールの有無という三種類の素性の値の組み合わせにより分類した。同種の分析は前章で、非新語を含む派生名詞を対象にすでに実施していたが、本章における分析の結果は前章におけるものと大きく異なるものではなく、むしろ両接辞は一貫した編入の傾向をみせていたことがわかった。

#### 3.1. で述べた通り、新語的な派生語の意味の決定には、語根と接辞の意味的価値以外の要

<sup>19</sup> es TenTen における simbolizador の実例は 16 例に留まった一方で、simbolizante については 106 例確認されている。

因の影響が少ないと考えられる。そして両タイプの派生名詞の表す対象はそれぞれ、コントロールと使役性という二種類の素性の値の組み合わせについて、異なる傾向を示していた。

-dor による新語的派生名詞の多くは使役的動作主、使役的道具を表し、それよりも数の上では劣るものの、非使役的動作主、非使役的道具、原因を一定の頻度で表す一方、非動作主や内項相当の対象を表さないことを確認した。この結果は、-dor の編入する対象は最低でも、コントロールと使役性という二種類の素性について、どちらかが陽性であるとする前章で提示した仮説を支持するものである。

一方の -nte 派生名詞の意味の分布傾向も、仮説から説明可能である。既に確認した通り、-nte による派生名詞が使役的動作主や道具を表すことは極めて稀であった。つまり、コントロールと使役性の両方の値が陽性である対象の -nte による編入は規則で制限されているといえるだろう。その一方で -nte は原因や非使役的動作主のようなどちらか片方の素性だけが陽性である対象、ならびに非動作主や内項相当の対象といった両方の素性が陰性であるような対象を編入可能であることを確認した。これらの点も仮説から予測されたことであり、仮説を支持するものであったといえる。また、-nte による新語的派生名詞の過半数は原因相当の対象を表すものであったことも興味深い。この事実は、-nte は上述の条件に当てはまる対象の中でも、特に原因と強く結びついていることを示唆する。本章での分析により、-nte の典型性が浮き彫りになったということもできるだろう。

上述の通り、本章の分析手法は前章におけるものと同一、つまり、タイプ頻度に基づく分析であり、対象は派生名詞であった。次章ではトークン頻度に基づく、両タイプの派生形容詞の修飾パターンの分析を実施する。この分析はこれまでに提示してきた仮説の別角度からの検証と位置づけられる。



## 4. 両接辞による派生形容詞

ここまでは両接辞による派生名詞を対象に分析を行ってきた。そして、先述したように両接辞は動詞に付加されることで、名詞だけでなく形容詞も派生する。本章では両接辞による派生形容詞を観察、分析し、両タイプの形容詞、ひいては形容詞派生接辞としての **-dor** と **-nte** の意味的な特徴と、その間に存在する意味的な差異と類似点を明らかにすることを目指す。

両接辞による派生形容詞は、様々なレベルでこれまでに論じてきた派生名詞と類似している。まず、名詞を派生する場合同様、両接辞は形容詞を派生する際であっても、動詞に付加される: *fumar* > *fumador*, *calmar* > *calmante*。従って、多くの両接辞による派生語は名詞としての用法と形容詞としての用法を兼ね備える<sup>1</sup>。DRAE は派生語、*fumador*, *calmante* を以下のように、形容詞であり名詞としての用法も持つものとして定義している。

*fumador*, ra

1. adj. Que tiene costumbre de fumar. U. t. c. s.<sup>2</sup>

*calmante*

1. adj. Que calma.

2. adj. Dicho de un medicamento: Que tiene efecto narcótico o que disminuye o hace desaparecer un dolor u otro síntoma molesto. U. m. c. s. m<sup>3</sup>.

さらに、両タイプの派生形容詞は意味論レベルにおいても類似している。両接辞による形容詞は意味論上、主語的とされる<sup>4</sup>。それは両接辞による派生形容詞が、その語根の主語相当の対象を表す名詞を修飾することによる。たとえば、以下の例における **a** と **b** が同義的であり、**b** の派生形容詞は **a** の動詞に、そして修飾されている名詞は **a** では主語に相当するものであることを確認されたい。

(1)

a. Ese hombre fuma.

b. Ese hombre fumador

(2)

<sup>1</sup> Cano (2013) などで指摘されているように、特に **-nte** はむしろ、本質的には形容詞派生であると考えられる。

<sup>2</sup> Usado también como sustantivo の略。

<sup>3</sup> Usado más como sustantivo masculino の略。

<sup>4</sup> 統語論上の観点から active adjective, adjetivo activo とされることもある(cf. Laca (1993), Rainer (1999))。

- a. Ese fármaco calma.
- b. Ese fármaco calmante.

両タイプの形容詞は主語的であること、つまり語根動詞の表す動作の主語に相当する名詞を修飾することから、*que V* と言い換えられる。

(3) Ese hombre fumador > Ese hombre que fuma

(4) Ese fármaco calmante > Ese fármaco que calma

なお、Rainer (1999) はこうした形容詞を *activo* とし、このタイプの形容詞を可能なパラフレーズに応じて、*activo puro* (*que V* と換言される用法) をはじめとした三種類の下位範疇に分類している。

Entre los adjetivos deverbales destacan dos grandes conjuntos, los activos y los pasivos, divisibles ambos en subconjuntos según la modalidad presente en la paráfrasis.

Al lado de los adjetivos activos puros, cuya paráfrasis simplemente «*que V*» (p. ej. *conmover* «*que conmueve*»), cabe resaltar sobre todo un grupo de adjetivos disposicionales, es decir, que expresan una disposición o una costumbre, parafraseables por «*que suele V, que tiende a V, propenso a V*» (p. ej. *adulón* «*que suele adular, propenso a adular*»). Mucho menos consistente es el tercer subconjunto activo, el potencial, cuya paráfrasis es «*que puede V*» (p. ej. *móvil* «*que puede moverse*»).

(Rainer 1999: 4597)

このように主語的な形容詞はその解釈に応じてさらなる下位分類が可能である。そして、両接辞による派生形容詞はいずれも、文脈に応じて Rainer (1999) の指摘した三種類のモダリティを持ちうる。この点は両タイプの派生形容詞の意味的類似点であると考えられるだろう。逆に言えば、こうしたモダリティの違いは両接辞の意味的な差異、あるいは固有性と直接結びついたものではない。従って本論で「主語的な形容詞」という用語を使用する際には Rainer (1999) の指摘したようなモダリティの区別は念頭に置かず、単純に語根動詞の主語相当の名詞を修飾する用法として扱うことを留意されたい。

両接辞による形容詞は動詞から派生され、単に形容詞という統語範疇に該当するというだけでなく、その意味的性質においても主語的であるという点で少なからず類似している。本章では少なくとも辞書のレベルでは主語的として説明される両タイプの形容詞の間にはなんらかの意味上の差異が存在するのか、それとも完全に同義・同機能的であるのかを検討していく。この問題の足掛かりとして、本章では両タイプの派生形容詞の修飾する名詞

がどのようなものであるのかを観察する。

既に紹介したように、名詞派生接辞としての両者は語根動詞の主語を編入するという点では類似していたが、いずれも主語にあたる対象であれば無制限に編入することができるわけではない。両接辞はそれぞれに特有の基準に合致するタイプの主語のみを編入しており、それぞれの接辞に編入することのできる意味タイプの対象と編入できないものが存在する。そしてこの編入に関わる基準の違いこそが両者の意味的差異と考えられると前章では主張した。

一方、両接辞による派生形容詞は語根動詞の主語にあたる対象を表す名詞を修飾するものである。従って、両接辞による派生名詞が異なる意味タイプの主語的対象を表していたように、両者による派生形容詞もまた、名詞を無制限かつ自由に修飾するのではなく、それぞれ、基準に合致するタイプの名詞のみを修飾することが予測される。

より具体的にいえば、例えば、現代スペイン語では *estabilizador* と *estabilizante* という二種類の形容詞が存在し、いずれも辞書では *que estabiliza* と説明されている (cf. DRAE)。両者はこのように、辞書レベルにおいては同義的であるが、両共に、自由に *estabilizar* という動作を遂行する対象を表す名詞を修飾するのではなく、それぞれが異なる名詞を修飾すること、異なる分布を示すことが予測される。この分布の違いこそが、両タイプの派生形容詞、ひいては形容詞派生接辞としての両者の意味的差異に密接に関連していると考えられる。以下ではこの予測を、*estabilizador/estabilizante* のような同語根ペアを分析しながら検証していく。より具体的にはコーパスを用いて派生形容詞を一つずつ、それが特徴的に修飾する名詞を記述していき、そのデータを基に、両接辞による派生形容詞、および形容詞派生接辞としての両接辞の間に存在する意味論的な差異と類似点を説明したい。次節では、本章における分析の対象、手法および両タイプの形容詞の修飾パターンを明らかにすることにどのような意義があるのかを論じる。次に 4.2. では分析対象の抽出方法に関する方法論を紹介する。4.3. では実際の分析結果を提示し、形容詞派生接辞としての両接辞間の意味的な差異は修飾する名詞の動作に対するコントロール、使役性の有無に基づくものであることを主張する。この対比は名詞派生接辞としての両接辞の間にも観察された対比と同種のものである。4.4. は結論部とし、さらに両接辞による派生形容詞には主語的な用法以外の用法、即ち、非主語的用法があることを指摘する。この非主語的用法については五章以降で扱う。

#### 4.1. 分析の意義

本章における最終的な目標は、両タイプの派生形容詞間の意味的な差異・類似点を明らかにすることにある。そのために、本章では特に、同一の動詞を語根とし接辞によってのみ異なる派生形容詞のペア (例えば *limitador/limitante*) を分析し、それぞれのタイプの派生形容詞のみせる修飾パターンを比較検討する。その後、それぞれのペアの記述を基に両派生形容詞、そして派生形容詞としての両接辞の意味的差異を考察するという手順で目標の達成を図る。本節では、こうした調査にはどのような意義があり、本論文全体にどのように位置づ

けられるのかを述べる。

第一の意義としては、この問題はこれまでにほとんど扱われることのなかったものであるという点、つまり、このテーマをとりあげること自体に一定の意義が認められることが挙げられる。これまでに繰り返し述べて来たとおり、両接辞による派生語の研究自体は様々な研究者によってなされてきたものの、多くの先行研究において分析の対象とされてきたのは両接辞による派生名詞であり、両者による派生形容詞を網羅的な分析の対象とした先行研究は存在しないようである。例えば、両接辞に関する比較的新しい研究である Cano (2013) は、形容詞派生接辞としての *-nte* に関する網羅的な研究がなされてこなかったことを指摘している。

El afijo *-nte* es un sufijo enormemente productivo a la hora de derivar adjetivos. Sin embargo, no ha sido objeto de estudio exhaustivo en la bibliografía, por lo que es difícil encontrar en español trabajos centrados exclusivamente en el sufijo *-nte*.

(Cano 2013: 76)

同様に、*-dor* 派生形容詞を主要な分析対象とした意味的研究もほぼなされていないようである。*-dor* を扱った研究の多くは名詞派生接辞としての *-dor* を対象とし、多くの場合、その意味というよりも形態論的性質や語根動詞の項構造の継承といった形態・統語論上の問題を扱うものであった<sup>5</sup>。

本章では両形容詞の修飾パターンを扱うが、この点について先行研究における言及が全くなかったわけではない。既に挙げた両接辞に関するいくつかの先行研究では、両タイプの派生形容詞の修飾パターンと、名詞派生接辞としての両接辞の編入の傾向の間に意味論上の平行性があると主張、または予想されている。ここでいう平行性とは、両派生名詞間に観察される意味上のコントラストが、両派生形容詞の修飾する名詞の間にも観察される、というものである。たとえば、*-dor* 名詞は *-nte* による名詞とは異なり、典型的、または自由に使役的動作主を表すことは指摘したとおりであるが、同様に *-dor* 形容詞も語根動詞の使役的動作主にあたる対象を表す名詞を典型的に修飾する、といったものである。

例えば Cano (2013) は大多数の *-nte* 名詞は *-nte* 形容詞からの品詞転換 (conversion) の結果生じたものであるとしている<sup>6</sup>。

Las gramáticas del español coinciden en que *-nte* es un sufijo que deriva productivamente adjetivos deverbales. Hemos visto en el capítulo anterior que algunos adjetivos tienen también una contrapartida nominal: e.g. *un gel exfoliante* > *un exfoliante*. En una primera

<sup>5</sup> cf. Pena (1980), Varela (1999), Mas Álvarez (2004), Cifuentes & Rodríguez (2011), Gràcia (2013)。

<sup>6</sup> また、Laca (1993) でははっきりとした言及・説明はないものの、この平行性を議論の前提としているように見受けられる。



aproximación, este tipo de ejemplos apuntan a una operación de conversión, dado que el significado del adjetivo se mantiene en el nombre.

(Cano 2013: 131)

Cano (2013) はこの平行性は存在するとしているが、そのための十分な根拠を提示しているとは言い難い。Cano (2013) の論拠は数例の内省に基づくものであるためである。この問題点は他の先行研究にも認められる。

「派生名詞の意味」を扱うのであれば、辞書というある程度の客観性を有した資料があり、それを使用することで一定の度合いまで恣意性が排除された分析、記述が可能であっただろう。しかしながら、「派生形容詞の修飾のパターン」を網羅した辞書のような資料は存在せず<sup>7</sup>、このため主観を排した修飾パターンの典型性の記述は困難なものであったように思われる。

そこで、本研究ではコーパスを使用し定量的な分析を実施することで上述の問題点の解決を図り、両タイプの派生形容詞の修飾パターンの記述を試みる。この試みはおそらく両接辞をめぐる研究の中でも初のものである。この本章における分析はトークン頻度に基づくものであり、したがって、前章までの記述、提案を補強するものでもある。

Tsutahara (2014) および二章、三章の記述の根拠はタイプ頻度の分析を根拠とするものであった。例えば、**-dor** は典型的には使役の動作主や道具を編入する接辞であるとしたが、それは分析した **-dor** 派生名詞の大多数は同種の対象を語義とすることが確認されたことによる。しかしながら、これは根拠として不十分であることは前章で述べた通りである。つまり、両接辞による派生名詞は多義的である以上、「大多数の **-dor** 派生名詞は使役的動作主を表す」としても、この事実は必ずしも「使役的動作主が、それぞれの **-dor** 派生名詞にとって第一義的な語義である」とは限らないためである。もしも使役的動作主が **-dor** にとっての一義的な語義でないならば、つまり、もしも「大多数の **-dor** 名詞は使役的動作主を表すことができるものの（辞書に記載はあるものの）、実際にそうした対象を表すことは稀である」のであれば、前章までの記述は妥当性を欠くこととなるだろう。従って、二、三章で実施したタイプ頻度に基づく分析と併せて、トークン頻度に基づく検証、つまり、具体的な **-dor** 名詞一つ一つが、使役的動作主・道具をその他のタイプの対象に比べ、より高い頻度で表されているか否かを確認する必要があるが、そうした検証もまた困難なものである。これまでに紹介した 1000 種類を超える両接辞による派生名詞の膨大な数の用例を手動で検討するのは現実的ではないだろう。

しかし、もしも、両タイプの派生名詞の編入のパターンと両タイプの派生形容詞の修飾のパターンに平行性が確認されれば、上述のトークン頻度に基づく検証も可能となる。つまり、

---

<sup>7</sup> スペイン語のコロケーション辞書としては *Diccionario combinatorio del español contemporáneo* (REDES) や *Diccionario de colocaciones de español* (DiCE) 等がある。いずれもスペイン語における使用頻度の高い共起関係を収録したものであるが、**-dor** と **-nte** による派生語は網羅的に収録されているとは言い難い。

派生形容詞の修飾する名詞は、派生名詞の編入している対象とは異なり音形を持つものである。例えば、派生名詞 *fumador* の表す「喫煙者」は接辞に編入されている一方で、派生形容詞を含む同義的な名詞句、*hombre fumador* においては「喫煙者」が *hombre* として音形を伴って現れる。そしてこのように出現することで、それぞれの派生形容詞が強く結びついている名詞、ひいては主語相当の対象を自動的に、大規模なデータから抽出することが可能となる。この意味において、本研究を含めたタイプ頻度に基づく両タイプの派生語の意味的な研究に、本章における分析は新たな角度からの事実を提供しうるものである。この点もまた、定量的に両タイプの形容詞の修飾パターンを分析することの意義であると考ええる。

#### 4.1.1. 仮説

本章における分析は上述の着想に基づき、*-dor/-nte* 形容詞の名詞を修飾するパターンと、名詞派生接辞としての両接辞の編入のパターン間の平行性を検証するというものである。より具体的には、本章では以下の仮説を検証する。

*-dor* による形容詞は：

- 典型的には語根動詞の表す動作にとっての使役的動作主、使役的道具といった高い動作主性を有する対象を表す名詞を修飾する
- 原因に相当する対象を表す名詞を修飾する
- 非動作主や内項相当の対象を表す名詞を修飾しない

*-nte* による形容詞は：

- 語根動詞の表す動作にとっての使役的動作主、使役的道具といった高い動作主性を有する対象を表す名詞を修飾しない
- 典型的には原因に相当する対象を表す名詞を修飾する
- 非動作主や内項相当の対象を表す名詞を修飾する

形容詞派生接辞としての両接辞と、名詞派生接辞としての両接辞の間に意味的な平行性が確認されれば、または、上記の仮説が妥当だと判断されれば、それぞれのタイプの派生形容詞の分布が明らかになるだけでなく、前章までに提案してきた両接辞の意味的性質の記述を補強することにもなるだろう。

このように、本章における分析は両接辞による派生形容詞と、それらによって修飾される名詞との結びつきに焦点をあてるものである。よって、この分析は両タイプの派生形容詞のコロケーションに関する研究といえる。そこで、次節では、このコロケーションとはどのようなものであるのかを論じる。

#### 4.1.2. コロケーション

堀 (2009) は、語の連結をコロケーションと称した最初期の文献の一つとして、Palmer (1938) を挙げている。Palmer はコロケーションを以下のように規定している。

successions of two or more words the meaning of which can hardly be deduced from a knowledge of their component words.

(Palmer 1938: iv)

このように、Palmer の定義ではコロケーションは不透明な意味を持った語の連続、つまりイディオム的な連語を指すのに限定されているが、現代ではコロケーションは単に「習慣的な共起関係」として規定されることが一般的である。本研究でもこれを踏襲する。

*Collocation.* This is a lexical relation between two or more words which have a tendency to co-occur within a few words of each other in running text. For example, PROVIDE frequently occurs with words which refer to valuable things which people need, such as *help* and *assistance*, *money*, *food* and *shelter*, and *information*. These are some of the frequent collocates of the verb.

(Stubbs 2001: 24)

Collocations are groups of words which often go together.

(McCarthy and O'Dell, 2005: Introduction)

コロケーションとは語と語の間における、語彙、意味、文法等に関する習慣的な共起関係を言う。

(堀 2009: 7)

1990 年代以降、スペイン語学においてもコロケーションの研究は活発になっており、英語学、一般言語学と同様に、コロケーションは頻度の高い、特徴的な共起関係として扱われている。スペイン語学におけるコロケーションに言及した初期の研究には、Mendivil (1991) がある。Mendivil はコロケーションという用語ではなく、*preferencias usuales* という用語を用いているが、その定義と上記の一般言語学におけるコロケーションの定義は同様の方向性のものである。以下に “*tienden a vincularse*” と習慣性を表す動詞が用いられていることから明らかなように、スペイン語学においてもコロケーションは習慣的な共起関係を指すものである。

En las “*preferencias usuales*” normalmente unos términos tienden a vincularse a otros, sin que exista la correspondencia obligada en el sintagma (como en las locuciones) o que un elemento

suponga semánticamente al otro (como en las solidaridades léxicas).

(Mendívil 1991: 717)

Koike (2001) によれば、スペイン語学において初めてコロケーション (colocación) という用語を使用したのは Írsula (1992) であった。以下に示すように、Írsula による colocación の定義もまた、これまでに紹介してきたコロケーションの定義と同様のものである<sup>8</sup>。

... las combinaciones frecuentes y preferentes de dos o más palabras, que se unen en el seno de una frase para expresar determinados acontecimientos en situaciones comunicativas establecidas.

(Írsula 1992: 717)

このように、多くの研究において、コロケーションはある語の習慣的な共起関係であると定義されている。共起関係が「習慣的」または “preferente” であるか否かの判断、ひいてはある共起関係がコロケーションであるか否かの判断は母語話者の内省によりなされる場合もあれば、統計的指標が用いられる場合もある。本研究では、問題となる両接辞による派生形容詞のコロケーションを後者、統計的手法を基に抽出していく。前者の立場<sup>9</sup>をとらない理由としては、網羅的にコロケーションを抽出することが難しいという点、そしてコロケーションと非コロケーション（自由結合）の境目は必ずしもはっきりとしたものでなく、判断が恣意的になる可能性があるという点が挙げられる。

いずれにせよ、コロケーションが習慣的な共起関係であると捉えられるようになったことにより、tomar el pelo のような意味が固定されているイディオムや noche oscura のような語から意味が予測される意味的に透明な語の共起関係もコロケーションとして扱われる。コロケーションとは語の共起関係全般を指すとはいえ、当然ながらその中には「頻出かつ自然」なものもあれば、「低頻度で特定のレジスター、文脈でのみ用いられる」もの、「一定の頻度で現れるものの、意味が不透明で極めて固定化された共起関係」も存在する。このように様々なあり方のコロケーションが存在し、語と語の結びつきの強度は一定のものではなく、連続体であると考えられている。堀 (2009) ではこの連続体は以下のようなものであるとして提案されている。

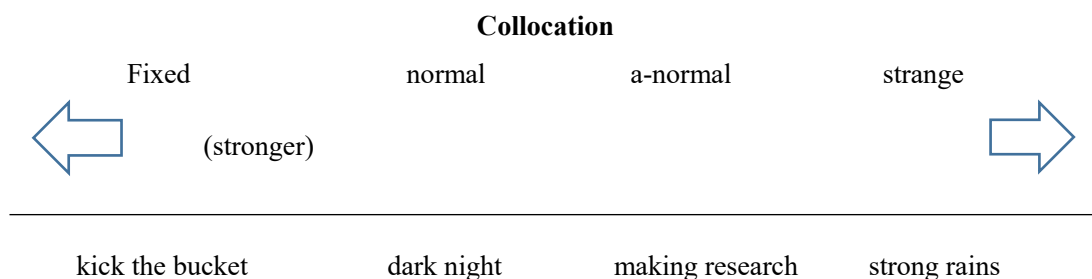
<sup>8</sup> スペイン語学における多くのコロケーション研究においてもコロケーションは Írsula (1992) が定義した形でとらえられている (Aguilar-Amat 1994, Corpas 1996, Koike 1996, 2001, Castillo 1998, Bustos 2006 等)

<sup>9</sup> 英語のコロケーション研究では Mackin (1978) がこうした立場をとっている。スペイン語学においては Fernández (2014) も以下のように述べていることから、同様の立場をとっているといえるだろう。

Algunas de las razones esgrimidas hacen referencia a que la coocurrencia frecuente resulta insuficiente para establecer la existencia de una colocación, puesto que existen, por ejemplo, colocaciones formadas por unidades léxicas infrecuentes, lo que dificultaría su detección mediante el análisis estadístico de corpus. Por otro lado, algunas combinaciones tan frecuentes como *mirar el mar* no forman una colocación, sino una combinación libre.

(Fernández 2014: 2)

図 1. コロケーションの強度



本章における分析の目的は、第一に **-dor** による派生形容詞と **-nte** による派生形容詞がどのような名詞を修飾するのか、その特徴的な修飾のパターンを記述することにある。つまり、本章では問題となる形容詞が修飾する名詞の中でも特に形容詞と強く結びついたものを抽出していき、そうした名詞の語彙意味論的性質を明らかにしたうえで、両タイプの派生形容詞の特徴を記述していく。

## 4.2. 方法論

本節ではより具体的に、本章における分析に用いた分析手法、およびコロケーションの抽出などの方法論を紹介する。

### 4.2.1. 分析対象

本章での分析の最終的な目的は、両接辞による派生形容詞の特徴的な修飾パターンを特定したうえで、形容詞派生接辞としての **-dor/-nte** 間に存在する意味的な差異、類似点を説明することにある。そこで、本章では同一動詞を語根とする、両接辞による派生形容詞のペア (i.e. *cortador/cortante*) を分析対象とし、それぞれの形式の特徴的な修飾パターンを探る。ペアを扱うのはこれまでの分析でペアを取り上げてきたことと同様の理由による。

両派生形容詞のペアであるが、前章までに分析してきたペアの内、コーパス **es TenTen** (分析に使用するコーパス。次節で詳述) における、形容詞としての出現頻度がそれぞれ 1000 を超える 40 のペアを分析対象として取り上げる。このように、一定以上の頻度を持つ派生語のみを取り上げるのは、分析の妥当性を確保するためである。具体的には、以下のペアを分析対象として扱う。

表 1. 分析対象のペア

	-dor	-nte	総計
integrar	47885	193942	241827
gobernar	127048	42430	169478
dominar	6370	154342	160712
conservar	145449	4352	149801
visitar	2352	106090	108442
contaminar	3562	87374	90936
cantar	6636	60804	67440
portar	50136	3994	54130
operar	44532	4636	49168
estimular	2941	36723	39664
limitar	2576	35030	37606
aspirar	1853	33580	35433
amenazar	9303	24636	33939
triunfar	11220	17444	28664
motivar	21653	4300	25953
donar	2243	20439	22682
cortar	3708	18360	22068
contar	16843	3961	20804
aislar	1441	17865	19306
tranquilizar	9944	4554	14498
navegar	6809	6154	12963
embriagar	2639	9549	12188
volar	6736	5222	11958
deslizar	2100	9491	11591
observar	9969	1478	11447
cautivar	5929	4037	9966
secar	7531	2047	9578
globalizar	7042	1618	8660
estabilizar	7148	1007	8155
detonar	2046	6103	8149
cargar	6677	1396	8073
avasallar	4818	3181	7999
discriminar	5067	2648	7715
certificar	6032	1091	7123
bloquear	3643	3041	6684
totalizar	5233	1412	6645
socializar	3586	1220	4806
perforar	2665	1468	4133
quemar	2037	1330	3367
moralizar	1407	1936	3343
総計	616809	940285	1557094

表内の数値であるが、例えば、integrar/-dor の枠内の 47885 は使用したコーパス内で、派生語、integrador の生起回数が 47885 回であったことを示している。その中には、派生名詞

としての *integrador* の使用も含まれている。

#### 4.2.2. コーパスとコロケーションの強度

コロケーションの強度を測定する際には、使用する資料体の規模が大きければ大きいほど正確な結果が得られる。そこで本研究ではスペイン語コーパスの中でも最大規模の、*es TenTen* コーパスを使用する。コーパス名にある *TenTen* は「10 の 10 乗」、つまり 100 億語規模であることを示す。*es* は「スペイン語」の略字である。本コーパスはウェブサイト *Sketch Engine* 内で公開されているが、当該サイトにはスペイン語だけでなく英語や日本語の *TenTen* コーパスも公開されており、言語学の研究だけでなく、辞書の作成にも使用されている<sup>10</sup>。コーパスの詳細や *TenTen* コーパスの理念については、*Jakubíček et al. (2013)* を参照されたい。

このコーパスには分析機能、*Word Sketch Differences* が搭載されており、本章における分析ではこの機能を使用し、先に紹介した派生形容詞のペアを分析する。多くのコーパスでは一度に一種類の語や句、レマが分析されないが、この *Word Sketch Differences* 機能を利用することで、同時に二種類のレマを分析することができる。この機能を使用することで問題となる二種類のレマの内の片方とのみ強く結びついた語が検出される。基本的に、類似した二種類の語をコロケーションという観点からその類似点、差異を探るために使用される分析機能である。形容詞については、*Word Sketch Differences* で分析すると、それとの結びつきの強い名詞、修飾されやすい名詞がリストとなって表示される。同じ動詞を語根とする同義的な派生形容詞の意味的差異・類似点の記述を目指す本章の目的に合致した極めて有用な機能であるといえるだろう。

例えば、分析対象である *limitador/limitante* というペアを *Word Sketch Differences* を用いて分析すると以下の表が得られる。

---

<sup>10</sup> 小学館、Oxford University Press, Cambridge University Press, Collins 等の出版社も *Sketch Engine* を辞書の作成にあたって使用している。

表 2. Limitador/limitante の分析

limitador/limitante esTenTen [2011, Eu + Am, Freeling v4] freqs = 2,576 | 35,030

limitador	6.0	4.0	2.0	0	-2.0	-4.0	-6.0	limitante
modifies	1,658	8,202	3.50	3.60				
brida	26	0	7.1	--				
reactancia	5	0	5.9	--				
resistor	4	0	5.6	--				
fusible	6	0	4.9	--				
impedancia	7	0	4.7	--				
válvula	59	0	4.5	--				
creencia	111	448	4.6	6.6				
factor	119	3,081	1.9	6.6				
dilución	0	12	--	4.2				
fator	0	5	--	4.3				
emocionalidad	0	6	--	4.3				
aa	0	13	--	4.7				
factores	0	15	--	4.7				
sustrato	0	35	--	4.7				
enzima	0	65	--	4.9				
mayor	0	109	--	4.9				
grande	0	37	--	5.0				
nutriente	0	111	--	5.3				
membrana	0	117	--	5.3				
toxicidad	0	57	--	5.5				
nutrimento	0	19	--	5.6				
fuerte	0	44	--	5.8				
reactivo	0	76	--	6.5				
principal	0	528	--	6.9				
aminoácido	0	140	--	7.0				

Word Sketch Differences から得られる表はこのように、緑、赤、白の三色で区分されている。それぞれの色は、それぞれの語との結びつきの強さを表している。

緑のセクション内の名詞は典型的に **limitador** によってのみ修飾され、**limitante** によって修飾されない名詞、赤いセクション内の名詞は **limitante** によって典型的に修飾され、**limitador** が修飾することのない名詞がコロケーションの強度順に列挙される。この二種類のセクション内の名詞を観察していくことで両タイプの派生形容詞に固有の修飾パターンが推測できる。また、白いセクション内の名詞は両派生形容詞が一定の頻度で修飾する名詞であり、両タイプの派生形容詞の類似点を記述する足がかりとなる。

Word Sketch Differences を用いた分析においては、コロケーションの強度を表す指標として、絶対頻度および **logDice** という二種類の指標を選択することができる。前者は問題となる二語の単純な共起の回数、後者はそれに統計的な処理を施したものであるが、本研究では後者をコロケーション上の強度を測定するための尺度として採用する。

絶対頻度はコロケーション、共起関係の強さを測定するための指標としては必ずしも適切なものではない。例えば、es TenTen には、2,084,306 件の **estudiante(s)** という語の生起がある。そして、同コーパスにおいてこの名詞が定冠詞 **el, la, los, las** と共起する回数は 854,997 回であった。このように、およそ 41% の **estudiante** は定冠詞と共起していることになり、この共起回数の多さから、定冠詞と **estudiante** の共起関係は強いように思われる。しかしながら、定冠詞の側からこの共起関係をみると、それはむしろ弱いものである。当該



コーパスには、952,568,249 回の定冠詞の生起が確認されていて、この定冠詞の内、*estudiante* と共起した回数は 854,997 であり、その共起率はおよそ 0.09% に留まる。

このように、語と語の結びつきは、単純な共起の回数からははかり知ることができないために、コロケーションの研究においては統計的指標が用いられる。本研究で使用する指標、*logDice* もその一つで、これはダイス係数を対数化したものである。そのダイス係数であるが、以下の数式から得られる。

$$\text{ダイス係数} = \frac{2fab}{fa + fb}$$

ダイス係数とはこのように、ある語 *a* と共起語 *b* のそれぞれの出現頻度の和で *a* と *b* の共起回数を二倍した数値を割ったものである。このダイス係数はコロケーションの強度を測る指標として妥当なものと考えられているが、それは通常、極めて低い数値となり、分析や議論を煩雑なものにすることがしばしばあった。そこで Rychlý (2008) はこのダイス係数を対数化し、さらに 14 を加えた *logDice* を提案した。この点について Rychlý (2008) は以下のように述べている。

As one can see from the previous section, Dice score gives very good results of collocation candidates. The only problem is that the values of the Dice score are usually very small numbers. We have defined *logDice* to fix this problem.

$$\text{logDice} = 14 + \log_2 \frac{2fab}{fa + fb}$$

Values of the *logDice* have the following features:

- Theoretical maximum is 14, in case when all occurrences of X co-occur with Y and all occurrences of Y co-occur with X. Usually the value is less than 10.
- Value 0 means there is less than 1 co-occurrence of XY per 16,000 X or 16,000 Y. We can say that negative values means there is no statistical significance of XY collocation.
- Comparing two scores, plus 1 point means twice as often collocation, plus 7 points means roughly 100 times frequent collocation.
- The score does not depend on the total size of a corpus. The score combine relative frequencies of XY in relation to X and Y.
- All these characteristics are useful orientation points for any field linguist working with collocation candidate lists.

(Rychlý 2008: 9)

logDice の他に、広く知られているコロケーションの指標としては T スコア、および MI スコア等がある<sup>11</sup>。しかし前者は共起の絶対頻度の高い語を、後者は共起回数の少ない語をそのほかの指標に比べ高く評価する傾向がある。その性質から、例えば名詞のコロケーションを T スコアを用いて分析した場合、定冠詞や指示代名詞といった機能語が検出されることがしばしばある<sup>12</sup>、同様に、MI スコアによる分析では、その性質から母語話者ですら聞きなれない語や、つづりのおかしい文字列が強度の高いコロケーションとして検出されるケースが散見される<sup>13</sup>。logDice による分析でこうした極端な共起語が検出されることは稀であり、本研究では語の共起関係が習慣的であるか否かを判断する際に、この logDice を判断の基準として使用する。

### 4.3. 分析

40 種類の派生形容詞の同語根ペアをコーパス es TenTen にて、Word Sketch Differences 機能を用いて分析したところ、多くのペアにおいて異なるコロケーションのパターンが確認された。そして、少数ながら、「両タイプの派生形容詞と強く結びついた名詞」も確認されている。以下の節では実例、数値を交えながら分析の結果を紹介していく。

#### 4.3.1. コロケーションの違い

40 種類の派生形容詞のペアを分析したところ、多くのペアにおいて、片方の派生形容詞に固有のコロケーションのパターンが観察された。つまり、語根の動詞が同一のものであり、意味上、que V と同義的であるにもかかわらず、多くの場合においてそれぞれの形容詞の典型的に修飾する名詞、コロケーションのパターンは異なることがわかった。

そして分析対象となるそれぞれの派生形容詞の持つ固有のコロケーションパターンは、これまでに提案してきた両接辞の異なる意味的性質から説明される。様々な先行研究で予想されてきた通り、これまでに観察されてきた両接辞が名詞を形成する際の編入のパターンと、両接辞による派生形容詞の修飾のパターンの間には、一定の平行性があるということもできるだろう。

本章における分析の対象である派生形容詞の最小対の修飾パターンを分析したところ、同種の対比が確認された。つまり、語根動詞にとっての使役的動作主や使役的道具にあたる対象を表す名詞は、-dor による派生形容詞と強く結びついており、一方の -nte による形容詞は原因相当の名詞を修飾するという対比が観察された。このことから、両派生形容詞による修飾の可否は、修飾される名詞の語根動詞の表す動作に対する動作主性に左右されると

<sup>11</sup> たとえば、スペイン語学でも広く使用されている Mark Davies の作成した一連のコーパスや先述の Sketch Engine 内のコーパスには T スコアと MI スコアの高い共起語をコロケーションとして検出する機能が実装されている。

<sup>12</sup> es TenTen における、Libro と共起している語で最も T スコアの高い語は el であり、その次が del である。それ以降は de, un, en と機能語が続く。

<sup>13</sup> es TenTen における、Libro と共起している語で MI スコアの高い語としては registradocompra, anacarmen 等があった。前者と libro の共起の絶対頻度が七回、後者との共起回数は六回であった。

いえるだろう。次節以降では、こうした対比をみせる実例を実際に紹介していく。

#### 4.3.1.1. Limitador VS. limitante

先に紹介したペア、limitador/limitante 間には、やはり -dor のみが高い動作主性を持つ対象を表す名詞を修飾し、limitante はそうした名詞を修飾しないという対比が観察された。Word Sketch Differences による当該最小対の分析結果を表 3 として再掲する。

表 3. Limitador と limitante の修飾パターン

limitador/limitante					
esTenTen [2011, Eu + Am, Freeling v4] freqs = 2,576   35,030					
limitador	6.0	4.0	2.0	0	-2.0 -4.0 -6.0 limitante
modifies	1,658	8,202	3.50	3.60	
brida	26	0	7.1	--	
reactancia	5	0	5.9	--	
resistor	4	0	5.6	--	
fusible	6	0	4.9	--	
impedancia	7	0	4.7	--	
válvula	59	0	4.5	--	
creencia	111	448	4.6	6.6	
factor	119	3,081	1.9	6.6	
dilución	0	12	--	4.2	
fator	0	5	--	4.3	
emocionalidad	0	6	--	4.3	
aa	0	13	--	4.7	
factores	0	15	--	4.7	
sustrato	0	35	--	4.7	
enzima	0	65	--	4.9	
mayor	0	109	--	4.9	
grande	0	37	--	5.0	
nutriente	0	111	--	5.3	
membrana	0	117	--	5.3	
toxicidad	0	57	--	5.5	
nutrimento	0	19	--	5.6	
fuerte	0	44	--	5.8	
reactivo	0	76	--	6.5	
principal	0	528	--	6.9	
aminoácido	0	140	--	7.0	

いずれの形容詞も「制限・限定する」という動作を表す動詞 *limitar* から派生しており、辞書レベルでは“Que pone límites. (DRAE)”と説明される。このように辞書は両派生形容詞を同義的であるものとして扱っている。しかしながら、表 3 の分析結果はそれぞれの形容詞に典型的に修飾しやすい名詞、および修飾することのできない名詞が存在することを示唆している<sup>14</sup>。

そしてこの表内の名詞一つ一つを観察していると、表内の分布には一定の方向性があることに気付く。たとえば、緑のセクション内の名詞は *limitador* とは強く結びついている一方で、*limitante* によっては修飾されない。そしてこのセクション内の多くは人造物を表す: *brida* ‘締め金’ (7.1), *fusible* ‘ヒューズ’ (4.9), *válvula* ‘バルブ’ (4.5) (括弧内の数字は logDice 値)。これらの名詞はいずれも、派生形容詞の語根動詞、*limitar* の主語、使役的道具に相当

<sup>14</sup> また、この表からは、*creencia* という名詞が両形容詞によって修飾されることもわかる。

するものである。以下のパラフレーズのパターンを参照されたい。

Brida limitadora = brida que limita, brida con la que limita<sup>15</sup>

‘flange that limits’, ‘flange with which limits’

この事実からわかるのは、**limitador** という形容詞は、「何かを制限する人、物」を修飾するものであるが、その中でも特に「何かを制限する使役的道具」を修飾する形容詞であるという点である。

一方の **limitante** であるが、この形容詞によって典型的に修飾され、**limitador** によって修飾されることのない名詞は一樣に、原因や内項に相当する対象を表すものである：**aminoácido** (7), **reactivo** (6.5), **nutrimento** (5.7)。まず、**aminoácido** および **nutrimento** は語根 **limitar** の内項、ないしは **limitarse** の主語に相当するといえるだろう。**Aminoácido limitante**, **nutrimento limitante** はそれぞれ、「制限アミノ酸」、「制限栄養素」を表すものである。こうした句におけるアミノ酸や栄養素は何かを制限するものではなく、量の不足しているアミノ酸、栄養素、つまり「制限されているアミノ酸、栄養素」を指す。以下のスペイン語による制限アミノ酸、制限栄養素の解説を参照されたい。

- (5) Aminoácidos limitantes. Son aquellos que faltan en la estructura de una proteína y que hacen que la proteína no se pueda aprovechar debido a esa falta.

(ABC.dietas.com)

- (6) Cuando un nutrimento no está presente en cantidades suficientes se le llama nutrimento limitante y debe ser adicionado. Las tecnologías de fertilización han nacido y se han desarrollado para llenar estas necesidades.

(Google Books)

**Reactivo limitante** における形容詞は他動詞としての **limitar** から派生したものと思われる。つまり、この場合、**reactivo** は語根動詞 **limitar** の原因に相当するものである。

- (7) Debido a que el reactivo limitante es el que limita las cantidades de productos que pueden formarse, el rendimiento teórico se calcula a partir de la cantidad de reactivo limitante.

このように、**limitador** のみが修飾する名詞は使役的道具のような高い動作主性を持つ対象を表すものであり、**limitante** の修飾する名詞は内項相当の対象、原因に相当する対象を

---

<sup>15</sup> 言い換えの文法性の判定はスペイン人インフォーマントに依頼した。

表すものである。この対比はまさに、両接辞による派生名詞の間にも観察されたものであり、**-dor** は高い動作主性、**-nte** はそれよりも低い動作主性に結びついた接辞であることがうかがえる。また、本節内で取り上げた語句にはきわめて専門性の高いものが数例あった。そしてそうしたケースにおける派生形容詞の使用も、これまでの仮説から十分に説明を与えることができた。これは仮説の説明能力、妥当性の高さを示すものだろう。

#### 4.3.1.2. Estabilizador VS. estabilizante

動詞 **estabilizar** から派生された形容詞のペアにも同種の修飾パターンの違いが観察された。**Estabilizar, estabilizante** は何かを安定させる人、物を修飾するものであるが、それぞれの形容詞には修飾しやすい名詞、修飾しにくい名詞が存在する。以下に両形容詞の分析結果を示す。

表 4. estabilizador と estabilizante の修飾パターン

# estabilizador/estabilizante

esTenTen [2011, Eu + Am, Freeling v4] freqs = [7,148](#) | [1,007](#)

estabilizador	6.0	4.0	2.0	0	-2.0	-4.0	-6.0	estabilizante
modifies	5,720	312	3.60	3.40				
barra	<a href="#">1,712</a>	0	8.6	--				
estancamiento	<a href="#">92</a>	0	7.3	--				
musculatura	<a href="#">37</a>	0	6.5	--				
aleta	<a href="#">48</a>	0	6.4	--				
músculo	<a href="#">90</a>	0	5.6	--				
desarrollismo	<a href="#">6</a>	0	4.9	--				
pontón	<a href="#">6</a>	0	4.9	--				
alerón	<a href="#">10</a>	0	4.8	--				
tobillera	<a href="#">5</a>	0	4.8	--				
paracaidas	<a href="#">4</a>	0	4.5	--				
composicion	<a href="#">7</a>	0	4.5	--				
osteotomia	<a href="#">4</a>	0	4.4	--				
ligamento	<a href="#">9</a>	0	4.3	--				
laguna	<a href="#">38</a>	0	4.2	--				
contrapeso	<a href="#">5</a>	0	4.1	--				
fármaco	<a href="#">17</a>	0	4.0	--				
pestaña	<a href="#">7</a>	0	3.7	--				
pata	<a href="#">22</a>	0	3.5	--				
resorte	<a href="#">6</a>	0	3.5	--				
polimero	<a href="#">5</a>	0	3.4	--				
gato	<a href="#">15</a>	0	3.3	--				
lodo	<a href="#">4</a>	0	3.3	--				
varilla	<a href="#">4</a>	0	3.2	--				
aditivo	<a href="#">15</a>	<a href="#">7</a>	4.9	4.4				
ampolla	0	<a href="#">5</a>	--	5.2				

このペアにおける二種類の形容詞に固有の修飾パターンにおいても、先ほどと同様の対比が観察される。まず、最も **logDice** 値の高い **barra** ‘バー’(8.6) であるが、これは **estabilizar** の表す動作を遂行するために使用する使役的道具に該当する。このほかにも、**Aleta** ‘フェンダー、ウイング’(6.4), **tobillera** ‘足首サポーター’(4.8), **resorte** ‘バネ’(3.5) と使役的道具を表

すと思われる名詞が複数確認されている。

一方の *estabilizante* が固有に修飾する名詞としては、*ampolla* ‘アンプル’ のみが確認された。これは病状、体調などを安定させるために投与される薬物であり、原因相当といえるだろう。

また、表 4 によれば、両形容詞は *aditivo* という名詞と、それぞれ一定の強度で結びついている。この点も、*aditivo estabilizador/estabilizante* という句において、*aditivo* の表す対象が、動詞 *estabilizar* の原因にあたるものであることも興味深い。つまり、この事実は、両接辞は語根動詞の原因相当の対象を拒むものではないことを示唆している。

このように、*estabilizador/estabilizante* のペアにおいても *-dor* による形容詞のみが使役的道具という動作主性の高い対象を表す名詞を修飾し、*-nte* はそれよりも低い動作主性の対象を表す名詞を修飾するという対比が存在する。

#### 4.3.1.3. Perforador VS. perforante

「穴をあける」という動作を表す動詞、*perforar* から類義的な *perforador/perforante* という派生形容詞のペアが形成される。しかしながら、その修飾のパターンは同一ではない。以下の表を参照されたい。

表 5. perforador と perforante の修飾パターン

perforador/perforante					esTenTen [2011, Eu + Am, Freeling v4] freqs = 2,665   1,468				
perforador	6.0	4.0	2.0	0	-2.0	-4.0	-6.0	perforante	
modifies	2,349	925	3.70	3.50					
martillo	180	0	9.4	--					
máquina	985	0	7.7	--					
poliqueto	11	0	7.2	--					
broca	15	0	7.0	--					
insecto	58	0	6.7	--					
barrena	8	0	6.6	--					
lamáquina	7	0	6.6	--					
taladro	14	0	6.5	--					
coque	8	0	6.3	--					
escarabajo	10	0	5.9	--					
colgajo	0	6	--	5.9					
torpedo	0	4	--	6.0					
vena	0	62	--	6.0					
dermatosis	0	4	--	6.1					
proyectil	0	23	--	6.2					
munición	0	21	--	6.3					
corrosion	0	3	--	6.6					
arterias	0	3	--	6.6					
esclerectomia	0	3	--	6.7					
foliculitis	0	4	--	6.8					
tálamo	0	5	--	6.8					
municion	0	6	--	7.4					
escleromalacia	0	5	--	7.4					
colagenosis	0	7	--	7.9					
queratoplastia	0	16	--	8.8					

このように、perforador/perforante のペアにもこれまでに紹介してきた意味的差異と同種の差異が確認された。

まず、perforador によってのみ修飾される名詞、その中でもとりわけ当該形容詞との結び付きの強い名詞の多くは本研究における分類上、使役的道具とされる対象を表すものである: martillo ‘ハンマー’<sup>16</sup> (9.4), máquina ‘機械’ (7.7), broca ‘ドリル、鋸’ (7.0), barrena ‘錐、ドリル’ (6.6)。

また、興味深い点として、perforador が固有に修飾する名詞の中には有生物、特に虫を表すものがある (poliqueto ‘ゴカイ等の多毛類’, insecto ‘昆虫’, escarabajo ‘甲虫’)。いずれも、句全体で、植物などに穴を空ける虫を表している。こうした虫たちは広義の使役的動作主に該当するといえるだろう。

Perforador の典型的に修飾する名詞が、使役的動作主や道具といった高い動作主性を持つ対象を表すものである一方で、perforante が固有に修飾する名詞の中には、そうした名詞は観察されない。Munición ‘弾薬’ (7.4) や corrosión ‘腐食’ (6.6) のように原因相当の対象を表

<sup>16</sup> ただし、martillo perforador は穴あけドリルを指す。

す名詞、または *arterias* ‘動脈’(6.6) や *vena* ‘血管’(6.0) のような、「貫く」という動作に対してコントロールはおろか動性すらも持たない対象を表す名詞も、*perforante* のみが修飾する名詞として観察されている。「動性すらも持たない」としたのは、*arterias perforantes*, *vena perforante* における語根の *perforar* が「何かを貫き存在している」という状態を表す用法にあることによる。例えば以下の例では当該動詞は血管が筋肉の層を貫くという動作を表しているのではなく、血管と筋肉の層の位置関係を表している。

- (8) *Esto tiene como resultado múltiples episodios de la tensión creciente de pared con obstrucción del desagüe venoso submucoso, especialmente donde estas venas perforan las capas musculares lisas.*

こうした動性を持たない *perforar* と、人や機械が動性を伴って穴を空ける動作を表す場合と区別して考えられるべきであろう。例えば、前者は高垣 (2014) のいう位置関係動詞に該当するものであり、何かに穴を空けるという動作を表す動詞としての *perforar* とは異なる様々な統語的なふるまいをみせる<sup>17</sup>。

いずれにせよ、こうした動作主性の低い対象を外項にとる位置関係動詞としての *perforar* が *-nte* によって派生され、上述の意味的性質を持つ外項相当の対象を表す名詞を修飾するという事実もまた、これまでの記述から予測されるものであり、興味深い。

#### 4.3.1.4. *Secador* VS. *secante*

動詞 *secar* を語根とする派生形容詞のペアもまた、本章における分析の対象である。語根が同一の動詞、そして少なくとも辞書・語のレベルでは極めて同義的であるにもかかわらず、両派生形容詞の修飾のパターンはそれぞれ大きく異なる。そしてそのパターンの違いはこれまでにみてきたものと同一線上にあるものであると考える。まずは以下の分析結果を参照されたい。

<sup>17</sup> 高垣 (2014) では、*cortar* という動詞にも「何かを切る」という動作を表す用法の他に、位置関係動詞としての用法があることが指摘され、位置関係動詞としての *cortar* のみが *estar* 受動文において本来の外項に相当する対象を *por* 句でとることが紹介されている。

a. \**La bandera está cortada por el líder de los manifestantes.*  
b. *La calle está cortada por los manifestantes.*

(高垣 2014: 145)



表 6. Secador と secante の修飾パターン

secador/secante						esTenTen [2011, Eu + Am, Freeling v4] freqs = <a href="#">7,531</a>   <a href="#">2,047</a>	
secador	6.0	4.0	2.0	0	-2.0	-4.0	-6.0 secante
modifies	1,013	1,509	3.20	3.50			
lavadora	<u>78</u>	0	9.1	--			
fieltro	<u>11</u>	0	7.3	--			
planchador	<u>5</u>	0	7.1	--			
tómbola	<u>5</u>	0	6.6	--			
tolva	<u>10</u>	0	6.4	--			
usar	<u>3</u>	0	6.1	--			
tambor	<u>30</u>	0	5.9	--			
horno	<u>51</u>	0	5.2	--			
silo	<u>7</u>	0	5.1	--			
estufa	<u>6</u>	0	4.5	--			
habia	<u>5</u>	0	4.4	--			
rodillo	<u>5</u>	0	4.2	--			
ducha	<u>8</u>	0	4.0	--			
máquina	<u>75</u>	0	4.0	--			
filtro	<u>74</u>	<u>3</u>	5.2	0.6			
cilindro	<u>30</u>	<u>4</u>	5.5	2.5			
loción	0	<u>3</u>	--	4.1			
aceite	0	<u>121</u>	--	4.1			
circunferencia	0	<u>7</u>	--	4.6			
papel	0	<u>599</u>	--	5.2			
centralismo	0	<u>12</u>	--	5.8			
pilote	0	<u>7</u>	--	6.1			
tanino	0	<u>14</u>	--	6.5			
talco	0	<u>7</u>	--	6.8			
recta	0	<u>97</u>	--	7.8			

これまでに紹介してきたケース同様、-dor による派生形容詞、secador が典型的に修飾する名詞は使役的な道具を表すものである: tolva ‘ホッパー（穀物を移動させる機械）’ (6.4), filtro ‘フィルター’ (5.2), rodillo ‘ローラー’ (4.2)。

その一方、secante の修飾する名詞は、やはりこれまでにみてきたケース同様、原因や内項相当の対象を表すものであり、使役的道具や動作主を表す名詞は観察されない。 talco ‘タルク’ (6.8) や papel ‘紙’ (5.2) のような原因相当の対象を表す名詞もあれば、aceite ‘油’ (4.1) のように、内項相当の対象を表すものもある<sup>18</sup>。

このように、secador/secante のケースにおいても、名詞の表す対象の持つ、secar という動作に対する動作主性に応じて、修飾に使用される形容詞が異なるという事実が観察された。

<sup>18</sup> 二章で紹介したとおり、aceite secante は aceite que se seca に対応する。

#### 4.3.1.5. Cortador VS. cortante

これまでに紹介してきたように、両接辞による派生名詞の間に観察される意味的な差異、対比と同様のものが両接辞による派生形容詞の修飾パターンの間に観察されるようである。よって、使役的道具や動作主が **-nte** による派生形容詞によって固有に修飾されるケースは稀であり、今回の調査では **cortador/cortante** のペアにそれと思しきケースがみられたのにとどまる。両形容詞の分析結果を参照されたい。

表 7. Cortador と cortante の修飾パターン

cortador/cortante						esTenTen [2011, Eu + Am, Freeling v4] freqs = 3,708   18,360	
cortador	6.0	4.0	2.0	0	-2.0	-4.0	-6.0 cortante
modifies	2,366	12,501	3.50	3.50			
oruga	129	0	10.0	--			
hormiga	234	0	9.8	--			
isocas	17	0	7.8	--			
gusano	70	0	7.3	--			
soplete	13	0	7.1	--			
draga	14	0	7.0	--			
máquina	518	0	6.8	--			
tractor	21	0	6.5	--			
orugas	6	0	6.4	--			
plotter	7	0	6.2	--			
troquel	7	0	6.1	--			
broca	7	0	5.9	--			
abeja	17	0	5.9	--			
aguilón	4	0	5.8	--			
hormigas	4	0	5.7	--			
isoca	4	0	5.7	--			
cabezal	28	10	6.3	3.9			
cuchilla	56	48	7.9	6.5			
inserto	9	24	6.1	5.8			
filo	4	334	2.9	8.6			
borde	9	588	1.3	7.3			
esfuerzo	0	711	--	5.9			
contuso	0	37	--	6.6			
arista	0	171	--	7.8			
herida	0	4,002	--	10.6			

Cortador が固有に修飾する名詞に、oruga (10) や hormigas (9.8) といった使役的動作主相当の対象を表すものがあり、soplete (7.1) や draga (7.0) のような使役的道具を表す名詞があること、および、cortante のみが修飾する名詞に、herida (10.6) のような内項相当の対象を表す名詞、arista (7.8) のような位置関係動詞としての cortar の主語にあたる対象を表す名詞があることは本章のこれまでの分析結果からいっても予想に難くない。

ここで興味深いのは、白いセクション、つまり両方の形容詞との強いコロケーション上の結びつきのある名詞として、cuchilla という使役的道具相当の対象を表す名詞がある点であ

る。この名詞と **cortador** のコロケーション強度は **logDice** 値では 7.9、**cortante** との結びつきについては 6.5 と、どちらの形容詞も一定の強さで当該の名詞と結びついている。これは、「**-nte** による派生形容詞は動作主性の高い対象を表す名詞を修飾しない」とするこれまでの提案への反例ともとれるが、派生名詞としての **cortante** が **-nte** による派生名詞の中では例外的なものであったことを再度指摘しておきたい。二章で指摘したように、**cortante** という派生語の初出時期は 16 世紀後半と比較的早い年代にあり、それ故に、多くの **-nte** 名詞とは異なり、「肉屋の主人」、「肉切り包丁」といった本研究における分類上は使役的動作主や道具に該当する対象を表していた。しかしながら、その初出時期の早さ、およびその意味の限定性の高さから、**cortante** からは **-nte** による派生における意味決定への働きかけを抽出することは難しいと述べた。

そして本章における分析においても **cortante** のみが、ほかの **-nte** 形容詞とは異なり使役的道具と強く結びついていることが明らかとなった。この **cortante** の派生語としての固有性から本研究ではこの派生語と使役的道具との結びつきを、例外として扱う。

#### 4.3.1.6. その他のペア

これまでに紹介してきたような、**-dor** による派生形容詞のみが語根動詞の使役的動作主、道具にあたる対象を表す名詞を修飾するという対比は以下のペアにおいても観察されている。

表 8. 使役的動作主・道具を表す名詞を修飾する -dor 形容詞

派生形容詞	修飾される名詞
operador	brazo/3.6 使役的道具
secador	tolva /5.6, cilindro/4.4, filtro/4.1, silo/3.9, estufa/3.1, rodillo/3.1 máquina/2.7 使役的道具
cortador	oruga /8.9, hormiga/8, isoca/7.7, gusano/6, aguilón/5.7 使役的動作主 soplete/6.6, draga/5.9, máquina/5.7 使役的道具
estabilizador	barra/7.6, aleta/5.7, tobillera/4.6, paracaída/4.4, resorte/2.7 使役的道具
bloqueador	lengüeta/5.2, perno/4.4, polea/4.3, relé/4.1 使役的道具
cargador	pala/10.5, retroexcavadora/6.7, minipala/6.4, horquilla/4.5, tolva/3.8, máquina /3.3 使役的道具
motivador	conferenciante/4.6, conferencista/3.3 使役的動作主 palanca/2.8, resorte/2.3 使役的道具
perforador	poliqueto/6.9, escarabajo/5.1, insecto/4.7 使役的動作主 martillo/8, máquina/6.4, barrena/6.3, broca/6, taladro/5.3 使役的道具
globalizador	capitalista/3.2 使役的動作主
integrador	maestro/5.3 使役的動作主
socializador	agente/4.4 使役的動作主 instrumento/0.1 使役的道具
contador	perito /9.4, lbacea/4.6 使役的動作主 báscula/4.4, máquina/3.6 使役的道具
totalizador	contador/4.5 使役的道具
quemador	bicho/4.3, gusano/2.5 使役的動作主 copela/7, fierro/5.5, hornillo/5.5, mechero/4.2, RAM/2.9 使役的道具
aislador	buje/6.5 使役的道具
detonador	pistola/5.3, revólver/5.2 使役的道具
limitador	brida/7.1, resistor/5.6, fusible/4.9, válvula/4.5 使役的道具
amenazador	ogro/3.9 使役的動作主
aspirador	barredora/8.6, robot/6.9, irrigador/6.1 使役的道具
estimulador	vibrador/5.6 使役的道具

また、これまでの分析では、語根動詞の内項相当の対象を表す名詞と強く結びついた形容詞は -nte によるもののみであることを述べた。そうしたケースをまとめたのが以下の表 9 である。

表 9. 内項相当の対象を表す名詞を派生する -nte 形容詞

派生形容詞	修飾される名詞
limitante	aminoácido/7, nutrimento/5.6
secante	aceite/3.1
deslizante	anticaída/7.1, compuerta/6.4, tapa/6.0, tackle/5.2, vector/5.2, toldo/5.2, acoplamiento/4.9, embrague/4.9, pistón/4.9, carcasa/4.8, bandeja/4.7
volante	ceniza/8.4

#### 4.3.1.7. まとめ

ここまでの分析の結果から、先行研究などで予想されていた両接辞による編入のパターン、および修飾のパターンの間には一定の意味論上の平行性があることができるだろう。前章までの分析で確認された通り、使役的動作主や使役的道具といった高い動作主性を持つ対象の編入は基本的に -dor によってのみなされていた。そして、両接辞は形容詞も

形成するが、こうした対象を表す名詞の修飾は、やはり典型的には **-dor** 形容詞によってなされるようである。

一方、前章までの両接辞による派生名詞の分析の中で、**-nte** のみが名詞を形成する際に、語根動詞にとって内項に相当する対象といった、低い動作主性の対象を編入することが確認されており、この点も、両接辞を隔てるものであるとした。そして、本章における派生形容詞の分析においては、**-nte** による形容詞のみがこうした対象を典型的に修飾することを確認した。

このように、両接辞は主語的な名詞と形容詞を派生するものの、それぞれが異なるタイプの主語と結びついていること、そしていずれのケースにおいても **-dor** のみが動作に対するコントロールおよび使役性を有する対象を編入、修飾し、**-nte** のみが低い動作主性の対象を編入、修飾するという差異が認められた。

特にこれまでの派生名詞、派生形容詞のペアの分析は、両接辞は主語的とされながら、主語的な対象であれば、自由に編入、修飾できるわけではなくそれぞれなんらかの基準に基づき、選択をしたうえで編入、修飾をしていることを示唆している。そしてこの基準の違いこそが両接辞の意味的差異であると考えられる。

#### 4.3.2. 共通するコロケーション

Word Sketch Differences はこれまでに見てきたような、問題となる二種類の形容詞に固有のコロケーションを検出するだけでなく、両者が共に一定の強度で結びついている語を検出する。本章での目的に照らし合わせていえば、両形容詞が共に一定以上の頻度で修飾する名詞も検出される。本章における分析では、そうしたタイプの名詞も確認された。本節ではそうした両タイプの形容詞と一定の強度で結びついている名詞を紹介し、それがどのような意味タイプの名詞であるのかを紹介していく。

##### 4.3.2.1. 原因

今回分析したペアの分析において、最も頻繁に観察された「両タイプの形容詞と一定の強度で結びついている名詞」の大多数は語根の動詞にとって原因に相当する対象を表す名詞であった。具体的には、両タイプの形容詞と一定の強度で結びついている 85 の名詞が得られ、その内の 60 の名詞が、語根動詞の表す動詞にとっての原因に相当する対象を表すものであった。

**cautivador/cautivante** のペアには、特に、両タイプの形容詞によって修飾される名詞が多く観察された。まずは以下の表を参照されたい。

表 10. Cautivador と cautivante の修飾パターン

cautivador/cautivante					esTenTen [2011, Eu + Am, Freeling v4] freqs = 5,929   4,037				
cautivador	6.0	4.0	2.0	0	-2.0	-4.0	-6.0	cautivante	
modifies	1,992	1,376	3.10	3.10					
metrópoli	5	0	4.7	--					
dulzura	3	0	4.1	--					
hada	3	0	3.9	--					
suavidad	3	0	3.8	--					
cala	3	0	3.8	--					
elegancia	4	0	3.5	--					
simpatía	5	0	3.4	--					
panorámica	3	0	3.3	--					
sonrisa	117	27	6.0	3.9					
melodía	13	6	4.0	2.9					
encanto	8	4	3.2	2.2					
mirada	70	37	3.5	2.6					
fragancia	9	5	4.6	3.9					
paisaje	34	20	3.1	2.4					
perfume	6	4	3.3	2.7					
aroma	12	10	3.4	3.1					
belleza	41	35	3.6	3.3					
frescura	3	3	3.4	3.5					
prosa	6	9	3.4	4.0					
postal	0	4	--	3.2					
sonoridad	0	4	--	4.2					
hermosura	0	3	--	4.4					
orador	0	9	--	4.4					
oratoria	0	3	--	4.7					
policromía	0	3	--	5.5					

表内の白のセクション内の名詞は両形容詞によって修飾されるものである。セクション内には十種類の名詞が挙げられているが、いずれも *cautivar* という動詞の原因に相当するものである：melodía ‘メロディー’ / -dor: 4.0, -nte: 2.9, encanto ‘魅力、魔法’ / -dor: 3.2, -nte: 2.2, mirada ‘視線’ / -dor: 3.5, -nte: 2.6, fragancia ‘香り’ / -dor: 4.6, -nte: 3.9, paisaje ‘景色’ / -dor: 3.1, -nte: 2.4, perfume ‘香水’ / -dor: 3.3, -nte: 2.7, aroma ‘アロマ’ / -dor: 3.4, -nte: 3.1, belleza ‘美貌’ / -dor: 3.6, -nte: 3.3, frescura ‘新鮮さ’ / -dor: 3.4, -nte: 3.5, prosa ‘散文’ / -dor: 3.4, -nte: 4.0。

また、*avasallador/avasallante* のペアにも、十種類の両形容詞によって修飾される名詞が検出された。表 11 が当該ペアの分析結果である。

表 11. avasallador と avasallante の修飾パターン

avasallador/avasallante esTenTen [2011, Eu + Am, Freeling v4] freqs = [4,818](#) | [3,181](#)

avasallador	6.0	4.0	2.0	0	-2.0	-4.0	-6.0	avasallante
modifies	2,401	1,383	3.40	3.40				
ímpetu	<u>20</u>	0	6.0	--				
centralismo	<u>14</u>	0	5.9	--				
scrum	<u>5</u>	0	5.3	--				
empuje	<u>17</u>	0	4.9	--				
lirismo	<u>3</u>	0	4.5	--				
estruendo	<u>3</u>	0	3.9	--				
torrente	<u>9</u>	0	3.8	--				
embate	<u>6</u>	0	3.2	--				
furia	<u>4</u>	0	2.9	--				
intimidación	<u>5</u>	0	2.7	--				
influjo	<u>13</u>	<u>3</u>	4.9	2.9				
pasión	<u>21</u>	<u>6</u>	3.6	1.8				
carisma	<u>11</u>	<u>3</u>	4.8	3.0				
triumfo	<u>56</u>	<u>19</u>	3.2	1.6				
poderío	<u>6</u>	<u>4</u>	3.3	2.8				
prepotencia	<u>4</u>	<u>3</u>	4.0	3.8				
andar	<u>3</u>	<u>3</u>	3.0	3.1				
irrupción	<u>3</u>	<u>5</u>	2.3	3.1				
personalidad	<u>84</u>	<u>170</u>	4.2	5.2				
modernidad	<u>4</u>	<u>8</u>	3.0	4.1				
globalización	<u>3</u>	<u>7</u>	1.6	2.9				
honestidad	0	<u>3</u>	--	3.0				
optimismo	0	<u>4</u>	--	3.3				
colonialismo	0	<u>3</u>	--	3.7				
neoliberalismo	0	<u>3</u>	--	3.7				

そしてこのペアにおいても白のセクション内の名詞は **andar** を除き、いずれも原因相当の対象を表すものである: **pasión** ‘情熱’, **carisma** ‘カリスマ’, **triumfo** ‘栄光’, **poderío** ‘権力’, **prepotencia** ‘権力の乱用’, **irrupción** ‘突入、急襲’, **personalidad** ‘人格’, **modernidad** ‘近代性’, **globalización** ‘グローバル化’。

このように、「両派性形容詞によって修飾される名詞」の多くは原因に相当する対象を表すものであった。前章までの分析で、両接辞は派生名詞を派生する際に原因相当の対象を編入することが明らかとなり、本節の分析の結果も、両接辞による派生形容詞は、それぞれ原因相当の対象を表す名詞と一定の強さで結びついていることを示している。両接辞は本質的に、原因相当の主語を編入、修飾しうるものであり、この点こそが両接辞の意味論的な共通点であると考えられる。

表 12 内のペアにおいても、両形式の派生形容詞が同一の、原因相当の対象を表す名詞を修飾することが確認されている。



表 12. 両方の派生形容詞によって修飾される名詞

派生形容詞	修飾される原因相当の名詞
estabilizador/estabilizante	agente (2.1/ 0.9), aditivo (4/ 3.2)
bloqueador/bloqueante	anticuerpo (4.6/ 3), fármaco (4.6/ 3.2)
motivador/motivante	factor (3.1/ 1.1)
embriagador/embriagante	olor (2.6/ 2.1), sustancia (1/ 1.3)
globalizador/globalizante	capitalismo (4.4/ 2.6), neoliberalismo (6.3/ 5)
totalizador/totalizante	discurso (1.9/ 1), universalidad (2.4/ 2.9), pretensión (3.6/ 2.8)
moralizador/moralizante	discurso (1.3/ 1.6), prédica (4.8/ 5.4), tono (0.7/ 2.5)
detonador/detonante	cartucho (2.7/ 1.6), elemento (1.1/ 1.3), chispa (2.3/ 3.2), cápsula (3.6/ 4.9)
limitador/limitante	creencia (4.6/ 6.6)
estimulador/estimulante	electrodo (4.1/ 2.2), péptido (4/ 3.4), gel (4/ 4.5), factor (2.9/ 4.7)

#### 4.3.2.2. 非主語的用法

前節でみたように、両タイプの派生形容詞によって修飾される名詞の多くは語根動詞の表す動作の原因に相当する対象を表す名詞であった (60/85)。

そして原因を表す名詞の次に多かったのが、語根動詞の主語に相当しない、抽象的な対象を表す名詞である。次章で述べる通り、両派生形容詞が修飾する名詞は必ずしも、語根動詞の主語に相当するわけではない。こうした名詞の修飾を本研究では、両派生形容詞の非主語的用法として扱う。

例えば、ペア *tranquilizador/tranquilizante* における両形容詞は名詞 *efecto* を共に修飾する。そしてこれらの *efecto tranquilizador*, *efecto tranquilizante* という名詞句における *efecto* は派生形容詞の語根 *tranquilizar* の主語に該当するものではない (??*un efecto tranquiliza algo*)。本章での目的はあくまでも、名詞派生接辞としての *-dor*, *-nte* の編入の傾向と、両接辞による派生形容詞の修飾パターンの相違を探ることであり、このような、両派生形容詞が名詞を非主語的用法で修飾しているようなケースは主語的用法におけるものと同列に扱われるべきではないだろう。こうした非主語的用法における両派生形容詞は次章以降で詳しく扱う。

4. 節では分析対象とした派生形容詞のペアにおいて、両形容詞から修飾されうる名詞を紹介し、そうした名詞は基本的に、語根動詞の原因にあたる対象を表す名詞であることを指摘した。この事実は、両接辞による派生形容詞は、原因相当の対象を表す名詞を問題なく修飾できること、つまり、この点が両者の類似点であることを示唆している。

両接辞は原因相当の主語を排除しないという共通点は、両接辞による派生名詞の共通点としても指摘されたものである。従って、本節で紹介した、両タイプの形容詞は原因相当の対象を表す名詞を修飾するという事実もまた、前章までに提示してきた記述を裏付けるものである。

#### 4.4. 結論

本章では同一の動詞を語根とする、*-dor* および *-nte* 接辞による派生形容詞のペアを分析した。両タイプの派生形容詞は *que V* と換言されるなど、両者の間には一定の意味論上の



類似性が存在するといえる。しかしながら本研究における分析によって、両形式の派生形容詞はそれぞれ全く同じ性質のものではないこと、そして両者間の類似点と差異が明らかになった。より具体的には、両タイプの派生形容詞の名詞の修飾パターンを同時に分析、対照したことにより、それぞれの形容詞は、主語的とはいえ、語根の主語相当の対象を表す名詞であれば自由に修飾するわけではないことが明らかとなった。それぞれの形式の形容詞にはそれぞれの、修飾しやすい名詞とそうでない名詞があることが判明したと換言することもできるだろう。この修飾のパターンこそが両タイプの派生形容詞、ひいては両接辞の意味的差異であると考ええる。

実際に分析をした派生形容詞の分布、修飾の傾向はそれぞれの派生形容詞に固有、散発的であるというよりも、接辞に応じて一定の方向性、規則性が観察された。そして両タイプの派生形容詞の修飾パターンと名詞派生接辞としての両接辞の編入のパターンの間には平行性があると説明できる。

前章までに指摘したように、名詞派生接辞としての **-dor** は語根動詞にとっての使役的動作主や使役的道具といった動作主性の高い対象を典型的に編入し、非動作主や内項相当の対象のような動作主性の低い対象を編入しない。そして **-dor** による派生形容詞は使役的動作主や使役的道具を表す名詞と強くコロケーションとして結びついている一方で、低い動作主性を表す名詞との結びつきは確認されなかった。この分析結果と前章までの分析を照らし合わせれば、**-dor** という接辞そのものの固有性が浮き彫りとなる。つまりこの接辞は名詞、形容詞を派生するいずれの場合においても、語彙的使役性と動作に対するコントロールを持つ主語と結びつくことから、高い動作主指向の接辞と説明することができるだろう。

**-nte** についても同様の平行性が確認されている。名詞派生接辞としての **-nte** は **-dor** とは異なり、使役的動作主や道具といった高い動作主性を有する対象を編入することが稀、実質的には不可能であった。そして、**-nte** 派生形容詞との強い結びつきの見られた名詞の中に、こうした対象を表すものは少数の例外を除き確認されなかった。このように、**-nte** は高い動作主性を持つ対象の編入、修飾が制限されており、この点は **-dor** との差異を雄弁に語るものであると考えられる。他方、**-nte** の **-dor** にはない固有性としては、非動作主や内項相当の対象の編入、修飾が可能であるという点が挙げられる。このように、**-nte** も **-dor** 同様、語根動詞の主語を指向する接辞ではあるが、より正確には、低い動作主性指向の接辞とされるべきであろう。このように、両接辞は指向する主語の意味タイプにおいて異なっているといえる。

本章における分析では、それぞれの派生形容詞が固有に修飾する名詞の意味タイプだけでなく、両者が共に修飾することのできる名詞の意味タイプも明らかになった。後者については、その大多数が派生形容詞の語根動詞の表す動作にとっての原因に相当するものであった。二、三章で確認したように、名詞派生接辞としての両接辞は、共に一定の自由度で原因相当の対象を編入する。従って、両派生形容詞が原因相当の名詞を修飾するという事実は、単に両タイプの派生形容詞間の意味的類似点であるというよりも、両接辞そのものの共通

する意味的類似点であるといえるだろう。

このように、前二章における分析と本章における分析は **-dor** は高い動作主性、**-nte** はそれよりも低い動作主性指向の接辞であるという事実を指し示すものである。これまでの分析からは、結果として同じ結論が導き出されたが、それぞれ、全く異なる観点から行われた分析であったことを強調しておきたい。

二、三章における分析はタイプ頻度に基づく分析であった。つまり、こちらの分析では、**-dor** は典型的に高い動作主性の対象を、**-nte** はそれよりも動作主性について劣る対象を典型的に編入するとした。この結論の根拠は、出来る限り多くの派生名詞を集め、その大多数が上述のタイプの対象をそれぞれ表していたという点である。ただしこれだけでは上記の記述の根拠として不十分であることは前章で指摘したとおりである。つまり、それぞれの派生名詞は多義的である以上、例えば **-dor** 名詞にとっての使役的動作主などの高い動作主性を持つ対象は、「多くの **-dor** 名詞がそうした対象を表すこと自体は可能であるが、あまり一般的ではない」という状況もまた、ありうるためである。

一方の本章での分析は、トークン頻度に基づく分析であった。本章では分析対象となるペアを構成する派生形容詞を個別に、その特有かつコロケーションとしての強度の高い名詞を抽出した。その結果、**-dor** による派生形容詞の特有の修飾パターンとして、高い動作主性を有する対象を表す名詞を修飾すること、同様に、**-nte** 形容詞のみが低い動作主性の対象を表す名詞を修飾することが確認された。

これら二系統の分析は、それぞれ全く異なるアプローチから行われたものである。しかしながら、いずれの分析も **-dor** と高い動作主性を有する対象の結びつきと、**-nte** と低い動作主性を有する対象との結びつきを示すものであった。よって、前二章の分析と本章における分析は、相互にその妥当性を補強しあうものであるともいえるだろう。



## 5. -dor/-nte 形容詞の非主語的用法

ここまでの分析で扱った派生語は統語範疇の違いこそあるものの、意味論上はいずれも主語的である。「主語的」としたのは、名詞であれば、語根動詞の表す動作の主語に相当する対象を表し、形容詞であれば、そうした対象を表す名詞を修飾することによる。そして、この主語的用法は、両接辞による派生形容詞にとって唯一の用法でないこと、つまり非主語的用法と呼ぶべき用法が存在することも四章で述べたとおりである。まず、派生形容詞の主語的用法であるが、その意味論上の性質として、*que V* と言い換えられることを述べた。例えば以下の例を確認されたい。

- (1) Jefe fumador > jefe que fuma
- (2) Fármaco calmante > fármaco que calma

しかし、両タイプの派生形容詞はこのように、常に *que V* とパラフレーズされるものではない。両形容詞の修飾する名詞は必ずしも、意味上、語根動詞の主語にあたるものではないともいえる。例えば以下のようなケースでは両接辞による派生形容詞の *que V* による言い換えは容認され難い。

### (3) -dor 形容詞

habilidad lectora ‘??habilidad que lee’, expediciones buceadoras ‘??expediciones que bucean’, sesión negociadora ‘??sesión que negocia’, voracidad compradora ‘??voracidad que compra’, impotencia controladora ‘??impotencia que controla’, etc.

### (4) -nte 形容詞

efecto alisante ‘??efecto que alisa’, objetivo aestesiante ‘??objetivo que anestesia’, estrategia dicotomizante ‘??estrategia que dicotomiza’, efecto suavizante ‘efecto que suaviza’, función limitante ‘??función que limita’, actitud triunfante ‘??actitud que triunfa’, etc.

本研究の目的は、接辞 *-dor/-nte* による派生語を網羅的に分析することである。そこで本章および次章ではこれまでに分析していない、両接辞による派生形容詞の持つ非主語的用法、および非主語的形容詞を派生する接辞としての *-dor* と *-nte* の分析を行う。まず、本章ではこれまでに先行研究などにおいてほとんど論じられることのなかった非主語的用法における両接辞による派生形容詞の記述を行い、分析を進める上で前提となる非主語的用法における派生形容詞の性質を提示する。次章では *función limitadora/función limitante* のような、同じ名詞を非主語的用法で修飾している、同語根派生形容詞のペアを分析しながら、非

主語的用法における **-dor/-nte** の意味的な差異、類似点を考察する。

本章で論じる問題は以下の三点である。以下の点を明らかにし、次章では得られた記述を基に、両接辞による非主語的形容詞の意味的な類似点と差異を探っていく。

1. 非主語的用法はどのような用法であるのか
2. 非主語的用法はいつから使用されているのか、その起源
3. 非主語的用法は限られた形容詞のみが持つ限定的、例外的な用法であるのか、または、一定の生産性、自発性を持った用法であるのか

### 5.1. 非主語的用法について

当然ながら、「非主語的用法」という呼称は、当該用法の意味論的性質を十分に表すものではない。本節ではこの用法、または非主語的解釈が、主語的でないのであれば何を示すものであるのか、どのような機能を持つものであるのかを考察する。

非主語的用法についてまとめた言及をした初期の研究としては Rainer (1999) が挙げられる。Rainer (1999) はスペイン語における派生形容詞全般を概説的に扱ったものであるが、**-dor** による形容詞を扱う中で、当該形容詞には **que V** と言い換えることのできない用法があることを指摘している。

Y, extendiendo tal uso, se ha llegado a utilizar tales adjetivos incluso con sustantivos semánticamente incongruentes: expediciones buceadoras «\*expediciones que bucean», optimismo exportador «\*optimismo que exporta» [...]. En estos casos, parece que estamos asistiendo al nacimiento de un nuevo uso relacional de **-dor/a**: política negociadora = política de negociación, etc.

(Rainer 1999: 4602)

Rainer (1999) はこの **que V** と言い換えられない用法を関係的用法 (**uso relacional**) と呼んでいる。Rainer (1999) はスペイン語における派生形容詞全般の概説であり、**-dor** 形容詞の非主語的用法に関する言及は上に引用したものにとどまる。同著者と Wolborska-Lauter による後の研究、Rainer y Wolborska-Lauter (2012) は、**-dor** 形容詞の非主語的用法にのみ焦点をあてた網羅的な研究である。Rainer y Wolborska-Lauter (2012) については次節で詳しく紹介する。

Rainer による一連の研究では **-dor** の持つ関係的用法が網羅的に扱われているが、**-nte** 形容詞の非主語的用法については一切の言及がなされていない。以下の **-nte** 形容詞の記述に見られるように、Rainer はこの用法は **-dor** による派生形容詞に特有のものと考えていたように思われる。

Como adjetivos activos, nuestras formaciones en -nte son todas parafraseables con «que V».

(Rainer 1999: 4602)

-nte による派生形容詞にも同様の関係的用法があることを指摘したのは Tsutahara (2015a) であった。これは新語的な -nte 派生形容詞を観察中に確認された que V とパラフレーズすることのできない様々な非主語的用法を報告したものであり、その一部は Rainer のいう関係的用法であると考えられる。例えば、先に紹介した (4) は Tsutahara (2015a, b) から引用したものである。

以上の点から、両接辞による形容詞は修飾する名詞の主語的としての属性を明示する用法以外にも、関係的用法を持つと考えられる。そしてこの関係的用法はこれまでの両接辞による派生語の研究において、分析の対象から除外されてきた。

次節ではこの関係的用法について詳述し、何故、両派生形容詞の que V と換言されることのない用法が、関係的用法と考えられるのか、その根拠を示す。

#### 5.1.1. 関係的形容詞

関係的形容詞は Trask (2013) の relational adjective の項では以下のように説明されている。

An adjective derived from a noun which has no semantic content beyond that present in the noun and which serves only to provide a form of the noun which can act as a modifier: telephonic from telephone and Glaswegian from Glasgow. In English, relational adjectives are few and little used in comparison with the frequency of compounding: we prefer to say Glasgow telephone system, rather than Glaswegian telephonic system. Languages in which compounding is poorly developed, such as the Romance languages and Slavonic languages, typically make extensive use of relational adjectives: Spanish, for example, has alimentación infantil (literally, ‘infantile food’) for baby food and novela policíaca (literally, ‘policial novel’) for detective story.

このように、関係的形容詞は名詞から派生されるものであり、派生においてなんらかの新たな意味づけがされない、修飾する名詞を分類する機能を持つ形容詞であるとされる。それ故に、複合 (英・compounding, 西・composición) との機能上の類似性が指摘される。複合もまた、二種類の名詞を併置し、主要部となる名詞の指示する対象を限定するという表現上の操作である。

本章で扱う -dor, -nte による形容詞の関係的用法は、語根の表す動作によって、修飾する名詞の表す対象を限定、分類するものといえる。例えば、Rainer (1999) の紹介した habilidad lectora は「能力」を、「能力全般」から「読む能力・読解力」に限定・分類するものであり、Tsutahara (2015a) で取り上げた objetivo anestesiante も、「目的」を、「目的全般」から「麻痺させる目的」に限定している。

関係的用法における両派生形容詞は主語的用法における場合とは全く異なる様々なふるまいをみせる。そしてこれらは、関係的用法が主語的用法とは異なる、別個の用法であることを示すものでもあるだろう。

まず、この関係的用法の特徴として、*que V* といった関係節ではなく、前置詞 *de* を用いて言い換えられるという点が挙げられる。例えば、Rainer (1999)、Rainer y Wolborska-Lauter (2012) および Tsutahara (2015a) では、先に (3), (4) として挙げた例を、以下のように言い換えている: *política negociadora* > *política de negociación*, *expediciones buceadoras* > *expediciones de buceo*, *objetivo anestesiante* > *objetivo de anestesiarse*, *efecto alisante* > *efecto de alisar* 等。

所有を表す前置詞 *de* を用いて言い換えられるという事実はこの用法が関係的であることを示唆するものである。例えば、関係的形容詞と、本来的に所有を表す前置詞句の意味・機能上の類似性は Gunkel & Zifonun (2008) 等で指摘されている。

Possessive constructions express a meaning similar to that of relational adjective noun constructions if the of-phrase is interpreted generically:

(6) output of the industry – industrial output, winds of the ocean – oceanic wind

(Gunkel & Zifonun 2008: 285)

本研究では、以後、ある派生形容詞がいずれの用法で使用されているのかを判断する際に、パラフレーズに用いられる語句をその判断の基準にしていく。

また、Rainer y Wolborska-Lauter (2012) はこの用法が関係的用法である根拠として、接辞を *-ivo* や *-torio* に置き換え可能であるという事実を指摘している。これらの接辞は関係的形容詞を派生する極めて生産性の高い接辞である。

Para entender plenamente los factores que determinan el uso del *-dor* relacional es necesario analizarlo en el contexto más amplio de sus competidores dentro de la categoría de los adjetivos de relación y, más allá, de los atributos Prep. + (Artículo) + N de idéntica función. El concepto (N) que está en relación con N, como es sabido, se expresa en español por un gran número de patrones léxicos. De la profusión de sufijos que compiten en este ámbito interesan aquí sobre todo *-ivo* y *-orio* en su uso relacional porque tienen, como *-dor*, una preferencia por sustantivos deverbales (nombres de acción). Al igual que incremento exportador significa incremento de la exportación, avance legislativo denota un avance en la legislación y propuesta reformatoria se refiere a una propuesta de reforma. En pocos casos, más en América Latina que en España, el sufijo *-al* se añade al sustantivo en *-ión*, como en capacidad organizacional. Como resulta de las paráfrasis utilizadas para definir el significado de *-ivo* y *-orio*, los atributos preposicionales del tipo Prep. + (Artículo) + N pueden expresar los mismos conceptos relacionales.

(Rainer y Wolborska-Lauter 2012: 312)

Tsutahara (2016b) では Rainer y Wolborska-Lauter の挙げた根拠の他に、英語との対照という観点から、両派生形容詞の非主語的用法が関係的用法であることを指摘している。(3) および (4) で紹介した関係的用法における *-dor/-nte* 形容詞を含む名詞句は英語に訳出される際にその多くは *-ing* による動名詞 の形で訳出される。以下に挙げるケースは対照データベース *linguee* から収集したものである。スペイン語における関係的用法の派生形容詞と現在分詞の対応関係を確認されたい。

(5) *habilidad lectora/reading skill*

Libros Amigos está diseñado para niños desde el jardín infantil al segundo grado, o niños fuera de esa edad que quieran mejorar su habilidad lectora.

‘Book Buddies is designed for kids in kindergarten through second grade, or kids outside this age range who want to work on their reading skills.’

(6) *sesión negociadora/negotiating session*

La sesión negociadora se volvió a convocar el 27 de abril y el 1 de junio para continuar la discusión sobre las propuestas negociadoras.

‘The negotiating session reconvened on 27 April and 1 June to continue the discussion of negotiating proposals.’

(7) *efecto suavizante/softening effect*

El Canto indio, para nuestro gusto, se inclina a ser demasiado nasal, y el efecto suavizante del vibrato está casi totalmente ausente.

‘Indian singing, by our taste, is inclined to be too nasal, and the softening effect of vibrato is almost totally absent.’

(8) *actitud triunfante/winning attitude*

Esta actitud triunfante se plasma en la fuerte integración productiva, en los modernos sistemas de construcción, en la automatización [...]

‘This is a winning attitude which can be seen in the drive for an integrated manufacturing process, in modern construction [...].’

この対応関係は何を示唆するものであるのか。先に引用した Trask (2013) の解説にもあるように、英語においてはある名詞となんらかの事物の関係性を表す表現手段は、関係的形容詞の使用にのみ限られるのではなく、名詞と名詞の複合、所有を表す前置詞の使用など、他にもいくつかの表現手段が存在する。そして関係的形容詞の使用よりも、名詞と名詞の複



合の方がより一般的な関係性を表す表現手段である。そして実際に、本章で問題となる、「動作による名詞の分類、制限」は英語ではこのように動名詞と名詞の複合によって表されている。

ここで強調したいのは、こうした英語の動名詞と名詞の複合がスペイン語に訳出される際には、**-dor/-nte** 形容詞が用いられているという点である。この英語における複合表現との平行性は、**-dor/-nte** 形容詞の非主語的用法が動作と名詞の関係性を表すものであることを示唆していると考えられるだろう。

また、その他の関係的形容詞としての特質として、Tsutahara (2016b) では「複数形の名詞 + 形容詞 A y 形容詞 B 句」において、派生形容詞の単数形で使用が認められている点を指摘した。関係的形容詞がこうした構文において単数形で用いられ得る (*Las literaturas española, francesa e inglesa*) ことは Bosque (2006) で指摘されている。そして本研究で取り上げている派生形容詞も、関係的用法で用いられる場合はこうした構文において、単数形で用いられ得る。

- (9) La combinación de sus efectos calmante y fortalecedor parece ahuyentar la ira y la frustración, [...].

(es TenTen)

両接辞による派生形容詞は、主語的用法で用いられる場合、この構文内であっても常に複数形で用いられなければならないことは、この非主語的用法は主語的用法とは根本的に異なる関係的用法であることを示唆している。

- (10) Fármacos calmantes y relajantes

- (11) \*Fármacos calmante y relajante

以上の根拠から、本研究においては **que V** と換言することのできない両接辞による派生形容詞の用法は「語根動詞の表す動作、状態を形容詞が修飾する名詞と関連付け、名詞の解釈を限定する用法」とする。

## 5.2. 両派生形容詞の持つ関係的用法の自発性、生産性

前節では Rainer や筆者による一連の先行研究において、両接辞による派生形容詞は主語的用法だけでなく、非主語的な関係的用法を持つことが指摘された。本節ではこの関係的用法は少数の派生形容詞のみが持つ限定された例外的な用法であるのか、または一定の条件下で使用される生産性の高い用法であるのかという点について論じる。結論からいえば、この用法は後者、つまり派生形容詞の関係的解釈は一定の条件下であれば、両接辞による派生形容詞全般に生じ得るものであると考える。

その根拠として、Tsutahara (2015a) では、関係的用法としての派生形容詞によって修飾される名詞の間には語彙意味論上の共通点がみられることを指摘した。派生形容詞の解釈は特定の意味タイプの名詞を形容詞が修飾する際に関係的になりやすい。そしてそのタイプは、抽象物を表し、かつ事象を補語としてとるものである。典型例としては、*efecto, función, acción, tendencia, actitud* 等がある。これらはいずれの名詞も抽象物を表し、*de* 句として動作を表す語を補語としてとることを確認されたい。

(12) *Efecto de calmar, efecto de esterilizar, efecto de relajación*, 他

(13) *Función de limitar, función de estimular, función de protección*, 他

Rainer y Wolborska-Lauter (2012) の紹介している関係的 *-dor* 形容詞の修飾している名詞もまた、この性質を持つ。例えば *sesión* の表す対象は抽象物であり、また、*sesión de consulta/meditación* といったように *de* + 事象名詞句をとる。これら二点を満たす名詞を派生形容詞が修飾する際にその解釈は関係的となる。

(14) *sesión negociadora, incremento exportador, impotencia controladora, aventuras descubridoras, aptitud educadora, descenso inversor, eficacia gestora, vida lectora, presión vendedora*

Tsutahara (2015a) では、87 種類の *-nte* による新語的派生形容詞の用例を分析し、そのうち、57 種類の派生形容詞がこの関係的解釈を持つことを確認した。また、同稿でこうした新語的かつ関係的用法を持った *-nte* 形容詞について、その実例をコーパスから収集し、関係的用法の派生形容詞によって修飾されている名詞は特定のタイプに偏っていることを確認した。以下に挙げる名詞が、特に関係的用法における派生形容詞によって修飾されやすい名詞である。

*Efecto* ‘effect’ (49), *carácter* ‘character’ (27), *tendencia* ‘tendency’ (26), *proceso* ‘process’ (21), *acción* ‘action’ (18), *actitud* ‘attitude’ (14), *función* ‘function’ (13)

(Tsutahara 2015a: 483)<sup>1</sup>

このように、用法の固定化されていない派生形容詞の大多数が、修飾する名詞の意味タイプ次第で関係的に解釈されるという事実は、両派生形容詞の関係的用法は現代スペイン語において、生産性、透明性を有していることを示唆するものである。

---

<sup>1</sup> カッコ内の数字はこれらの名詞を関係的用法で修飾する *-nte* 形容詞のタイプ数を示す。

### 5.3. 派生形容詞の关系的用法の起源

すでに述べたように、この両派生形容詞の关系的用法は先行研究においてほとんど言及されることがなかった。その理由の一つとして、この用法は新しいものであるが故に、分析・研究の対象として取り上げられることが少なかったことが考えられる。例えば先に引用したように、Rainer (1999: 4602) ではこの用法は *uso nuevo* とされている。

Rainer (1999) はこの关系的用法の通時的側面に関する記述はこのように、単に「新しい用法」としただけであったが、後続の Rainer y Wolborska-Lauter (2012) および Tsutahara (2015b) では、より詳細な、この用法の起源、定着に関する通時的な記述がなされている。本節ではそれぞれの先行研究を紹介しながら、両派生形容詞の关系的用法が生じ始めた年代や、広く使われるようになった時期を示す。

#### 5.3.1.1. Rainer y Wolborska-Lauter (2012)

Rainer y Wolborska-Lauter (2012) は、以下に挙げる 12 種類の *-dor* 形容詞の关系的用法をコーパス CORDE を用いて分析し、その起源を考察した研究である: *ensor*, *comprador*, *controlador*, *descubridor*, *educador*, *exportador*, *gestor*, *inversor*, *investigador*, *lector*, *negociador*, *vendedor*。著者らはこの分析から、*-dor* による派生形容詞は早いもので 19 世紀中ごろ、多くは 20 世紀前半に关系的用法を獲得したと述べている。より具体的には、Rainer y Wolborska-Lauter (2012: 316-317) に掲載されている分析結果をまとめた表を参照されたい。ここでは分析対象となる关系的派生形容詞を含む名詞句と、その初出時期が紹介されている。

表 1. Rainer y Wolborska-Lauter (2012) における関係的用法の初出時期のまとめ

adjetivo	1850–1900	1901–1950	1951–
censor			labor censora 1969 juicio censor 1970 resquicio censor 1970
comprador		egofismo comprador 1948	afición compradora 1951
controlador			acción controladora 1966 labor controladora 1966 misión controladora 1966 excepción controladora 1970 método controlador 1973
descubridor		carácter descubridor 1946–52 fin descubridor 1946–52 idea descubridora 1946–52 moralidad descubridora 1946–52 movimiento descubridor 1946–52 obra descubridora 1946–52 privilegio descubridor 1946–52 propuesta descubridora 1946–52	ceguera descubridora 1962 diseño descubridor 1971 proceso descubridor 1971
educador	idea educadora 1875 orden educador 1875 poder educador 1876 carácter educador 1877 régimen educador 1877 punto de vista educador 1885 sistema educador 1885 fin educador 1887 método educador 1889	función educadora 1907 eficacia educadora 1910	criterio educador 1955 naturaleza educadora 1966
exportar		importancia exportadora 1926 mercado exportador 1946 centro exportador 1949	negocio exportador 1963 insuficiencia exportadora 1971 sector exportador 1971 posición exportadora 1972
gestor		pensamiento gestor 1929	
inversor			facultad inversora 1962 fiebre inversora 1971
investigador	ansia investigadora 1874 inquietud investigadora 1876 atención investigadora 1878 frenesí investigador 1885 plan investigador 1888	anhelo investigador 1900 pensamiento investigador 1910 tesón investigador 1913 verdad investigadora 1918 intelecto investigador 1920 afán investigador 1924 método investigador 1924 trabajo investigador 1936 valor investigador 1946 movimiento investigador 1946	esfuerzo investigador 1963 diversidad investigadora 1970 proceso investigador 1970 papel investigador 1973 pluriempleo investigador 1973
lector		tolerancia lectora 1918	esfuerzo lector 1958 curiosidad lectora 1967 hábito lector 1970
negociador			actitud negociadora 1962 posición negociadora 1971 mandato negociador 1974
vendedor			corriente vendedora 1974

Rainer y Wolborska-Lauter (2012) で使用されたコーパス、CORDE はこうした特定の語、

句の通時的な分析を行う際には極めて有用なものであるが、その規模は限定的である。そこで Rainer y Wolborska-Lauter (2012) はより規模の大きい、Google Books を使用し、分析結果の検証を実施した。こうしたより大きな資料体による検証を実施することについて、Rainer y Wolborska-Lauter (2012) は以下のように述べている。

El CORDE es un corpus sumamente valioso que sin embargo tiene sus límites, por contener un número todavía reducido de textos. Como se ha comprobado en varios estudios (García Jiménez 2009, Rainer 2009a) Google Books, que constituye un corpus muchísimo más extenso que el CORDE, permite ahora documentar con mayor precisión la cronología de fenómenos lingüísticos en el español moderno, aunque el manejo de esta herramienta requiere tiempo y cautela. Esta constatación vale también para el uso relacional de -dor, como vamos a ver.

(Rainer y Wolborska-Lauter 2012: 317)

この分析の結果、16 世紀における -dor による関係的形容詞の使用例が発見されたが、そうした名詞句が後の時代に、コンスタントに用いられてこなかったことから、著者らはこうした実例を、偶発的に生じ、その後定着に至らなかった *casos aislados* とし、体系的な関係的用法の使用は 19 世紀中ごろから始まったものであるとの主張を変えていない。

Rainer y Wolborska-Lauter (2012) は、「-dor 形容詞の関係的用法はいつ生じたものであるのか」という問題のほかに、「同用法は、どのように、何故生じたのか」という点に関しても考察している。著者らはこの問題について、-dor 形容詞による関係的用法はフランス語からの借用であったと結論づけている。

同稿によれば本来主語的とされる派生形容詞に関係的用法が生じるという現象はスペイン語だけでなく、様々なロマンス諸語でも確認されている。特にカタルーニャ語やポルトガル語といったイベリア半島内のロマンス諸語では -dor 系統の接辞による派生形容詞の関係的用法は頻繁に観察される。その一方で、フランス語やイタリア語のような、イベリア半島よりも東の地域では、その使用が限定的であることが Rainer y Wolborska-Lauter (2012) では指摘されている。以下の同研究、306 ページに掲載されている表を参照されたい。

表 2. 現代ロマンス諸語における派生形容詞の关系的用法

		portugués	catalán	francés	italiano
1	<b>inclinaciones censoras</b>	—	—	—	—
2	<b>voracidad compradora</b>	<b>voracidade compradora</b>	<b>voracitat compradora</b>	—	—
3	<b>impotencia controladora</b>	—	—	—	—
4	<b>aventuras descubridoras</b>	<b>aventuras descubridoras</b>	<b>aventuras descobridoras</b>	—	—
5	<b>aptitud educadora</b>	<b>aptidão educadora</b>	<b>aptitud educadora</b>	<b>aptitude éducatrice</b>	<b>attitudine educatrice</b>
6	<b>incremento exportador</b>	<b>incremento exportador</b>	<b>increment exportador</b>	—	—
7	<b>eficacia gestora</b>	<b>eficácia gestora</b>	<b>eficàcia gestora</b>	—	—
8	<b>descenso inversor</b>	—	<b>descens inversor</b>	—	—
9	<b>carrera investigadora</b>	<b>carreira investigadora</b>	<b>carrera investigadora</b>	—	—
10	<b>vida lectora</b>	<b>vida leitora</b>	<b>vida lectora</b>	—	—
11	<b>sesión negociadora</b>	<b>sessão negociadora</b>	<b>sessió negociadora</b>	—	—
12	<b>presión vendedora</b>	<b>pressão vendedora</b>	<b>pressió venedora</b>	<b>pression vendeuse</b>	<b>pressione venditrice</b>

このように、現代フランス語における -dor 相当の接辞による一義的には主語的な派生形容詞の关系的用法はスペイン語ほど生産的ではない。しかしながら、Rainer y Wolborska-Lauter (2012) は、スペイン語における -dor 形容詞の关系的用法は、もともとはフランス語からの翻訳借用であったとしている。その根拠として、スペイン語において特に早い時期に关系的用法を獲得したと考えられる派生形容詞形容詞 *educador* と *investigador* よりも、対応するフランス語における派生形容詞の当該用法の方が、より早い時期に生じていたことを紹介している。以下の表を参照されたい。

表 3. educador/éducatrice の関係的用法の初出時期

colocación	fecha		colocación	fecha	
español	CORDE	Google	francés	Frantext	Google
función educadora	1907	1835	fonction éducatrice	–	1837
influencia educadora	–	1852	influence éducatrice	1911	1806
fuerza educadora	–	1860	puissance éducatrice	1914	1843
punto de vista educador	1885	1897	poin de vue éducateur	–	1853
régimen educador	1877	1895	régime éducateur	–	1839
experiencia educadora	–	1916	expérience éducatrice	1918	1899
idea educadora	1873	1904	idée éducatrice	–	1859
carácter educador	1877	1870	caractère éducateur	–	1841

表 4. investigador/investigatrice の初出時期

colocación	fecha		colocación	fecha	
español	CORDE	Google	francés	Frantext	Google
paciencia investigadora	–	1838	patience investigatrice	–	1837
sagacidad investigadora	–	1838	sagacité investigatrice	–	1813
curiosidad investigadora	–	1828	curiosité investigatrice	–	1884
método investigador	1924	1895	méthode investigatrice	–	1821
marcha investigadora	–	1831	marche investigatrice	–	1818
tendencia investigadora	–	1849	tendance investigatrice	–	1843
anhelo investigador	1900	1842	ardeur investigatrice	–	1844

Rainer y Wolborska-Lauter (2012) は、19 世紀におけるスペイン語の語形成に対するフランス語の影響が極めて強いものであったとし、関係的用法はそうした状況下で流入したと述べている。現代において、スペイン語の派生形容詞の方がフランス語のものに比べて、関係的用法を持ちやすいという事実については、スペイン語が 20 世紀前半からフランス語の影響から脱し、独自の語形成のパターンを持つに至ったことによるとしている。

Lo que diferencia el uso relacional de -dor de los casos mencionados es que en tiempos más recientes este uso ha evolucionado de manera diferente en ambas lenguas. Mientras el francés no ha cambiado mucho desde el siglo XIX, en español y en otras lenguas iberorrománicas el uso relacional de -dor se ha extendido notablemente. También en los otros casos de influencia francesa del apartado anterior se ha mostrado en los artículos citados que el español se emancipa en la primera mitad del siglo XX, pero esta emancipación no ha mermado sustancialmente el paralelismo creado en el siglo XIX como consecuencia de la acuñación masiva de calcos sobre modelos franceses.

(Rainer y Wolborska-Lauter 2012: 321)

### 5.3.1.2. Tsutahara (2015b)

Tsutahara (2015b) もまた、Rainer y Wolborska-Lauter (2012) と同様に、-dor による関係的用法の起源を考察したものである。この研究が Rainer y Wolborska-Lauter (2012) と異なっている点としては、派生形容詞のみを分析の対象とするのではなく、「名詞 + 関係的用法の派生形容詞」からなる名詞句を分析の対象としたこと、ならびに、-dor 派生形容詞の関係的用法だけでなく、-nte 派生形容詞によるものも扱ったという点が挙げられる。また、同稿では、「いつ、関係的用法は広く用いられるようになったのか（定着をしたのか）」という問題、および、「派生形容詞の関係的用法は自然な言い回し、表現であるのか」という問題も考察している。本節および下位節では Tsutahara (2015b) を紹介し、両派生形容詞の関係的用法をより多角的に考察する。

#### 5.3.1.2.1. データ

Tsutahara (2015b) では、「名詞 + 関係的用法における -dor/-nte 派生形容詞」という名詞句を分析の単位とした。こうした名詞句の Google Books Corpus における初出年および、使用頻度が高くなった時期を記録していき、両タイプの派生形容詞の関係的用法の起源、およびスペイン語において、広く使用されるようになった時期を考察した。本節ではどのようにして分析対象となる名詞句を収集したのか、その手法を紹介する。

Tsutahara (2015a) で指摘したように、両派生形容詞の関係的用法、または関係的解釈は無条件かつ散発的に生じるものではなく、形容詞の修飾する名詞が特定の意味タイプを満たすものである場合に生じるものであった。抽象物を表し、かつ事象を表す語や句を補語とするような名詞を派生形容詞が修飾する際には、派生形容詞の解釈は関係的になりやすい。特に、以下の五種類の名詞を派生形容詞が修飾する際には、関係的解釈にほぼ限定されることも、Tsutahara (2015a) で述べたとおりである。

efecto, función, carácter, proceso, actitud

派生形容詞の関係的解釈が、こうした条件下でほぼ規則的に生じる性質、および、派生形容詞は名詞に後置されるという性質を活用し、まず Tsutahara (2015b) の調査では、コーパス、Google Books Corpus において、

efecto (función/carácter/proceso/actitud) + \*-dor (\*-nte)

という文字列を検索した。\*-dor および \*-nte はそれぞれ、「全ての -dor (-nte) でおわる文字列」を表しており、例えば efecto \*-dor と検索することで、当該コーパス内の「全ての efecto + -dor 形容詞」名詞句が得られる。Efecto のような名詞を -dor 形容詞が修飾するとき、その解釈はほぼ常に関係的となるため、効率的に関係的用法で用いられている派生形容



詞を収集することができる。

上記の手法により、Google Books Corpus から、498 種類の関係的用法における -dor 派生形容詞を含む名詞句、および、同様の -nte 派生形容詞を含む名詞句が 360 種類を抽出した。これらの合計 858 種類の名詞句が Tsutahara (2015b) における分析対象である。

これら 858 種類の名詞句について、主要部となる名詞と形容詞の形式の内訳をまとめたものが以下の表である。

表 5. 分析対象の内訳

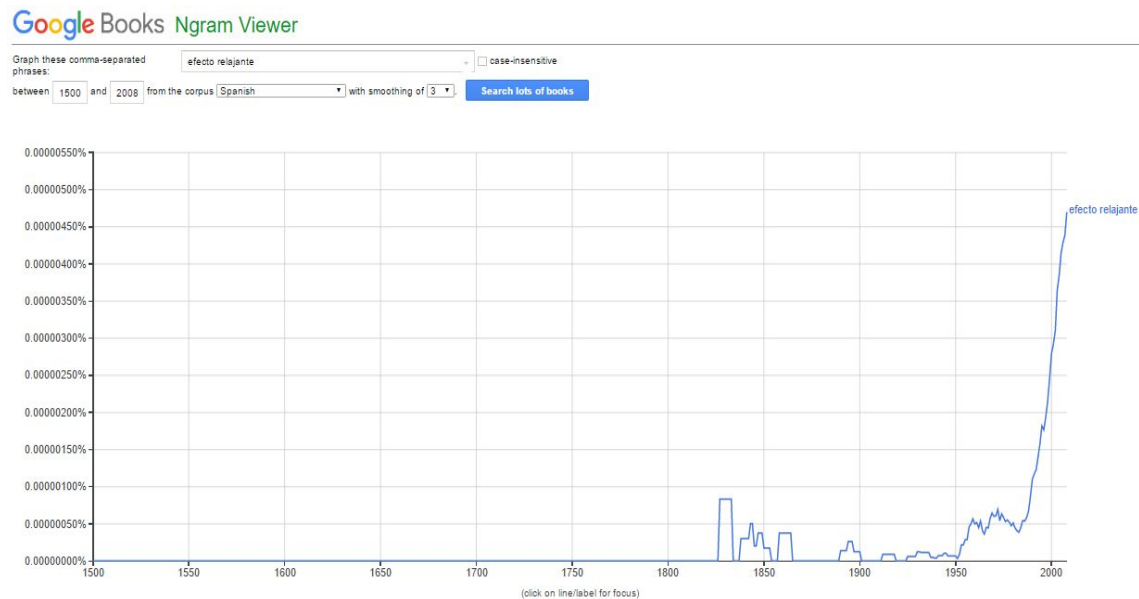
頻度	-dor	-nte
efecto	99	87
carácter	97	77
proceso	102	54
actitud	101	87
función	99	55
total	498	360

#### 5.3.1.2.2. 分析

Tsutahara (2015b) では Google Books Ngram Viewer を用いて収集した名詞句の分析を行った。三章で紹介したように、Google Books Ngram Viewer では検索された語、句の年代毎に標準化された使用頻度の推移が折れ線グラフの形で得られる。三章ではある語が新語的であるか否かを検討するために使用したが、Tsutahara (2015b) では分析対象となる関係的形容詞を含む名詞句の初出時期と使用が一般的になった時期を特定し、表現としての自発性、自然さを考察するために使用した。

例えば efecto relajante であれば、以下のグラフが示される。

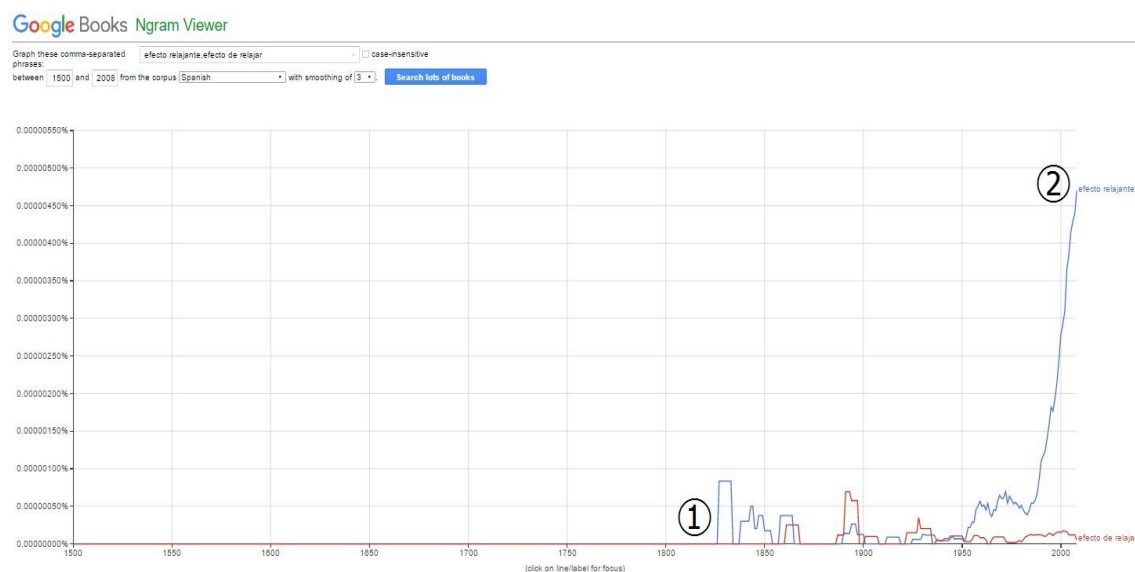
図 1. efecto relajante の使用頻度推移



しかし、Tsutahara (2015b) では、問題となる名詞句のみを分析したわけではない。本研究では、Google Books Ngram Viewer では同時に複数の語や句を検索することができるという性能を活用し、競合する同義的な名詞句、N de V 句を同時に検索している。このように、競合する同義的な名詞句との使用頻度の差を観察することで、関係的用法の表現上の自発性の記述を試みた。この点については 5.3. で詳述する。既に述べたように、関係的用法の形容詞は多くの場合において、所有を表す前置詞 (典型的には *de* を用いたもの) + 名詞という形に換言可能である: *comida española* > *comida de España*。そして、Tsutahara (2015b) で扱った *-dor, -nte* による関係的派生形容詞も、*de* 句により換言することができる。例えば、*efecto relajante* であれば *efecto de relajar* と言い換えられる。もしも、派生形容詞の関係的用法が動作と名詞の関連性を表現する手段として自然なものであれば、競合する *de* 句による名詞句と同等もしくはそれ以上の頻度で用いられると考えられる。そして、もし関係的用法が文法的に可能ではあるが、一般的、自然ではない用法であれば、その使用頻度は *de* 句を下回ることが予測される。

例えば、*efecto relajante* のケースであれば、同義的な名詞句、*efecto de relajar* を併せて検索することで、以下のような結果が得られる。この場合、2000 年以降は *efecto relajante* の使用頻度が *efecto de relajar* の使用頻度よりも圧倒的に高いことから、名詞 *efecto* と *relajar* という動作の関連性を表す際には派生形容詞 *relajante* を使用することが自然であることが推測される。

図 2. Efecto relajante/efecto de relajar の使用頻度



このようにして得られた分析結果について、Tsutahara (2015b)では、派生形容詞による名詞句の初出時期（表内①）、関係的用法が広がりを見せた時期の特定のために派生形容詞を含む名詞句の出現頻度が最大となる点、グラフの頂点(表内②)、および、競合する *de* 句を含む名詞句との 2000 年以降の使用頻度の差を記録していった。これらはそれぞれ、関係的形容詞の初出時期、この用法が定着した時期、および表現としての自然さを推定するためのものである。

#### 5.3.1.2.2.1. 両形容詞の関係的用法の起源

Tsutahara (2015b) では両形容詞の関係的用法が生じた年代を特定するために、収集した 858 種類の名詞句の初出時期を記録した。その結果をまとめたものが以下の二点の表である。

表 6. -dor 派生形容詞の初出時期

	1750–	1800–	1850–	1900–	1950–	2000–	Total
efecto –dor	0	6	42	38	13	0	99
carácter –dor	0	23	39	26	9	0	97
proceso –dor	0	2	20	49	31	0	102
actitud –dora	0	8	24	58	11	0	101
función –dora	0	10	27	53	9	0	99
total	0	49	152	224	73	0	498

表 7. -nte 派生形容詞の初出時期

	1750–	1800–	1850–	1900–	1950–	2000–	Total
efecto -nte	3	19	21	38	6	0	87
carácter -nte	0	20	23	26	8	0	77
proceso -nte	0	1	10	34	9	0	54
actitud -nte	0	12	31	38	6	0	87
función -nte	0	3	10	34	8	0	55
Total	3	55	95	170	37	0	360

まず目をひく点として、大多数、858 種類の分析対象である名詞句の約 75% は 1850 年から 1950 年の間に最初の用例が確認されたことが挙げられる。この結果は Rainer y Wolborska-Lauter (2012) の記述を裏付けただけでなく、-dor だけでなく -nte による形容詞の關係的用法についても、多くの場合において、その初出時期が 1850 年から 1950 年の間であったということを示している。-nte 派生形容詞の關係的用法も、-dor による当該用法が生じたのと同時代に生じたと考えられるだろう。

分析対象の名詞句には 1800 年以前に使用されていたものが数種類、確認されている。しかしながら、それらについてはいずれも Rainer y Wolborska-Lauter (2012) のいうところの孤立したケース (casos aislados) であったと思われる。具体的には efecto と -nte 形容詞による名詞句の内の 3 例 (efecto estimulante/purgante/atenuante) が、18 世紀後半から使用されたことを確認したが、例えば、efecto estimulante は 1798 年に一例の使用が確認されているだけで、18 世紀中の当該名詞句の使用はこの一例に留まる。Efecto estimulante が本格的に広く使用され始めたのは 20 世紀以降のことである。

#### (15) 1798 年における efecto estimulante の用例

[...] yo concluyo que todos tienen mas ó menos de efecto estimulante [...]

(Prospecto de medicina sencilla y humana, vol 6. p. 314 )

このように、今回の分析で確認された 18 世紀中の派生形容詞の關係的用法はいずれも限定的なものであり、孤立しているといえる。

#### 5.3.1.2.2.2. 關係的用法が広がりをもせた時期

Tsutahara (2015b) では、派生形容詞の關係的用法がいつ生じたのかだけではなく、この用法が広く使用されるようになった時期についても考察した。この時期を特定するために足がかりとしたのが、各名詞句の使用頻度の推移を示す折れ線グラフの頂点である。この頂点に対応する時期を Tsutahara (2015b) では、当該名詞句における派生形容詞の關係的用法が一部の話者だけではなく、一般に使用が容認されるようになった時期と位置付けた。

収集した 858 種類の名詞句について、それぞれの使用頻度が最大となった時点をまとめたものが以下の表である。この点については、より精緻に広がりをもせた時期を特定するために、20 年おきに時期を区切った。

表 8. 関係的形容詞の使用頻度が最も高い時期

	1800-	1820-	1840-	1860-	1880-	1900-	1920-	1940-	1960-	1980-	2000-	total
efecto -nte	0	2	2	2	0	5	8	9	11	24	24	87
efecto -dor	0	0	0	2	2	1	3	4	7	30	50	99
carácter -nte	0	0	2	7	2	8	8	2	13	21	14	77
carácter -dor	0	0	2	9	1	7	4	2	11	27	34	97
proceso -nte	0	0	0	0	0	3	0	3	15	23	10	54
proceso -dor	0	0	0	0	1	1	2	2	10	65	21	102
actitud -nte	0	0	1	2	5	2	12	12	29	14	10	87
actitud -dora	0	0	0	0	0	2	6	26	25	23	19	101
función -nte	0	0	0	0	0	1	4	6	15	16	13	55
función -dora	0	0	0	0	1	1	1	5	20	44	27	99
total	0	2	7	22	12	31	48	71	156	287	222	858

一見してわかるように、この用法は 20 世紀以前に比べ、20 世紀、特に 20 世紀後半から広く用いられるようになったと考えられる。より詳しく言えば、関係的用法の起源自体は 19 世紀中ごろ、場合によっては 18 世紀後半まで遡るものであるが、多くの母語話者によって、広く用いられるようになったのは 20 世紀後半のことであることが推測される。

この結果は、Rainer (1999) における、関係的用法を *uso nuevo* とする記述の妥当性を支えるものにもなるだろう。特に、222 の名詞句の使用頻度のグラフ上の頂点は 2000 年以降にあり、現代においても、名詞と動作の関連性を表す表現手段として、定着の過程にあることがわかる。

#### 5.3.1.2.2.3. 表現としての自発・自然性

Rainer (1999), Rainer y Wolborska-Lauter (2012) および Tsutahara (2015a, b) における分析によって、両接辞が主語的な用法だけでなく、関係的用法を持つこと、そして、関係的用法が生じた時期、および広く使用され始めた年代が明らかになった。Tsutahara (2015b) ではさらに、両派生形容詞の関係的用法の表現上の自発性 (*espontaneidad*) についても考察した。

両派生形容詞による関係的用法は 20 世紀中ごろから使用される頻度が増加したことが判明したが、これは 20 世紀以降に、この用法が表現上の自発性を獲得したことを必ずしも意味するものではない。例えば、派生形容詞の関係的用法は 20 世紀以降に使用される頻度が増加したが、この用法が動作と名詞の関連性を表す表現手段として、どの程度自発的なものであるのかはここまでに提示したデータから推し量ることは不可能である。つまり、関係的用法を含む名詞句は “N de V” などの形にパラフレーズ可能であり、派生形容詞の関係的用法は動作と名詞の関連性を示す唯一の表現手法ではない。それ故に、両派生形容詞の関係的用法は、「動作と名詞の関連性を表すための自発的かつ自然な表現手段」である可能性もあれば、「容認はされ得るものの、例外的であり、動作と名詞の関連性を表すためには通

常、別の表現手段が用いられる」という可能性もある。拙稿では、この関係的用法のより多角的な記述のために、この用法の表現上の自発性を考察する必要があると述べた。

そこで、Tsutahara (2015b) では、分析の対象とした 858 種類の名詞句と、それぞれの名詞句と同義的であつ一定の生産性を有すると考えられる N+de V 句 (efecto calmante/efecto de calmar) を同時に分析し、その使用頻度の差を分析した。前者を ADJ、後者を DE とし、結果をまとめたものが以下の表である。全部で 87 種類の efecto -nte 句の場合においては ADJ > DE となるケースが 65 例、DE > ADJ となるのは 22 例となっている。これは、87 種類の efecto -nte 句の内、65 の名詞句が、対応する de V による名詞句よりも使用頻度が高く、22 の同様の名詞句が同義的な de V 句よりも使用頻度が低かったことを表している。

表 9. 派生形容詞の関係的用法と前置詞句の使用頻度の高低

	ADJ > DE	DE > ADJ	total
efecto -nte	65	22	87
efecto -dor	77	22	99
carácter -nte	77	0	77
carácter -dor	95	2	97
proceso -nte	52	2	54
proceso -dor	98	4	102
actitud -nte	76	11	87
actitud -dora	94	7	101
función -nte	43	12	55
función -dora	88	11	99
total	765	93	858

分析の結果、今回の分析対象となった 858 種類の名詞句の大多数は、同義的な de V による名詞句よりも使用頻度が高いことが分かった。つまり、現代スペイン語において、両派生形容詞の関係的用法は、ある名詞となんらかの動作の関連性を示すための有力かつ自発的、自然な表現手段であるということができらるだろう。

#### 5.4. まとめ

多くの先行研究において、主語的とされていた両接辞による派生形容詞には非主語的用法とすべき用法があることを本章では指摘した。まず、本章の前半部分ではこの用法の主語的用法とは異なる点を紹介しながら、当該用法が修飾する名詞と形容詞の語根動詞の表す動作・状態との関連性を表す用法、つまり関係的用法であると主張した。後半部分では、Rainer y Wolborska-Lauter (2012) および Tsutahara (2015a, b) を概観しつつ、この両派生形容詞による関係的用法の起源、生じた年代、一般に用いられるようになった年代および、名詞と動作の関連性を表す表現手段としての自発性を明らかにした。筆者による Tsutahara (2015a, b) であるが、Rainer y Wolborska-Lauter (2012) の -dor 派生形容詞の関係的用法に関する記述を基に、分析対象を拡大、さらに -nte による派生形容詞にも関係的用法があるこ

とを指摘し網羅的な記述を行った研究として位置づけられるだろう。また、関係的用法の初出の年代だけでなく、広まりを見せた時期、ならびに表現としての自発性に関する考察も、Tsutahara (2015b) の新奇性である。

本章で紹介した様々な事実はこの関係的解釈は、限られた数の両派生形容詞が限定された文脈でのみ持ちうるような例外的なものではなく、修飾する名詞の性質次第で生じうる体系的なものであることを示唆している。従って、両接辞は主語的派生名詞、主語的派生形容詞を形成するという点のみならず、関係的形容詞を派生するという点においても共通している。そして、両接辞による形容詞の関係的用法は現代において名詞と動作の関係を示すための極めて自然な表現手段である。本稿の目的は両接辞の意味的な類似点と差異を明らかにすることであり、従って、**-dor** による関係的形容詞と **-nte** による関係的形容詞の比較、検討を行う必要があると考える。

そこで、次章では「同一の動詞を語根とし、かつ同じ名詞を関係的用法で修飾する **-dor/-nte** 派生形容詞のペア (ex. *función limitadora/función limitante*)」を分析し、関係的形容詞を派生する接辞としての **-dor, -nte** の意味的性質の記述、および、両者の間に存在する意味的な差異と類似点の説明を行う。





## 6. 関係的形容詞派生接辞としての-dor/-nte

両接辞は主語的な名詞や形容詞の他に、関係的形容詞も派生する。そして、両接辞による関係的形容詞の中にも同語根ペアが存在する。本章ではこうしたペアを分析することで、一見同義的な二種類の関係的派生形容詞の意味的な類似点と差異を明らかにすることを目指す。この分析を通じて、関係的形容詞を派生する接辞としての -dor/-nte 両接辞の意味的特性を明らかにしたい。例えば動詞 *relajar* には両接辞が付加されうる。そして、派生形容詞 *relajador* と *relajante* はいずれも名詞 *efecto* を修飾することが確認されている。名詞句、*efecto relajador/efecto relajante* における両形容詞はいずれも関係的解釈をとる：*efecto relajador/relajante* > *efecto de relajar*/?*efecto que relaja*。いずれの名詞句も、「リラックス効果」を指し、一見同義的である。しかしながら、実際に、両接辞による関係的派生形容詞は本当に、完全に同義的であるのだろうか。本章では この *efecto relajador/relajante* のような「名詞 + 両接辞からなる関係的派生形容詞」句を分析していく。

### 6.1. 方法論

分析の対象とするのは、*efecto relajador/efecto relajante* のような、「名詞 + 関係的解釈の同語根の派生形容詞」からなる名詞句ペアである。

分析対象としたペアは、Tsutahara (2015b) で分析した名詞句から抽出した。また、同稿では扱わなかった *tendencia* および *acción* を主要部とした関係的用法の派生形容詞を含む名詞句も分析対象として加えた。以下の表に、実際に本章で分析する両接辞による関係的形容詞を含む名詞句のペアをまとめた。

表 1. 分析対象

修飾される名詞	ペアの語根動詞	語根の総数
efecto	suavizar, detonar, ejemplarizar, vigorizar, fascinar, deshumanizar, desestructurar, estructurar, atenuar, esterilizar, erosionar, mediar, contaminar, excitar, aglutinar, bloquear, desequilibrar, vivificar, reforzar, polarizar, equilibrar, deformar, limitar, debilitar, neutralizar, embriagar, deslumbrar, homogeneizar, retardar, moralizar, democratizar, reactivar, paralizar, estimular, tranquilizar, distorsionar, dinamizar, desestabilizar, desmoralizar, estabilizar	40
acción	degradar, esterilizar, aglutinar, desecar, contaminar, tranquilizar, fertilizar, humanizar, limitar, neutralizar, ejemplarizar, totalizar, paralizar, retardar, bloquear, excitar, fundar, disgregar, socializar, deformar, estabilizar, estimular, purificar, vivificar, dominar, santificar, unificar, integrar, moralizar, civilizar, transformar	31
función	totalizar, simbolizar, ideologizar, equilibrar, humanizar, limitar, fundar, aislar, unificar, integrar, comunicar, objetivar, socializar, alienar, ejemplarizar, legitimar, moralizar, aglutinar, estimular, significar, estructurar	21
proceso	fundar, humanizar, integrar, desintegrar, homogeneizar, deshumanizar, totalizar, secularizar, enajenar, personalizar, aglutinar, socializar, deformar, globalizar, alienar, estructurar, modernizar	17
tendencia	deshumanizar, universalizar, totalizar, privatizar, idealizar, liberalizar, secularizar, centralizar, globalizar, homogeneizar, modernizar, moralizar, socializar	13
actitud	ejemplarizar, triunfar, objetivar, interrogar, cuestionar, desafiar, conciliar	7

先述したように、こうした名詞句のペアはそれ自体を見る限り、極めて同義的である。例えば、*efecto relajador* と *efecto relajante* という二種類の句は、それ自体ではいずれも「リラックスさせる効果」を表していると考えられる。従って、それぞれの接辞による関係的形容詞に固有の性質を探るためには、名詞句だけでなく、その周辺の文脈を観察していくことが必要である。そこで、分析対象となる名詞句の実例を *es TenTen* から抽出し、名詞句の意味だけでなく、どのような文脈でどのように用いられているのかを観察していった。*es TenTen* では以下に示すように、そのほかのコーパスに比べ、文脈を広く復元することができる。

- (1) A nivel prototipo disponemos ya de innumerables ejemplos que presentan propiedades beneficiosas para nuestro organismo, con efectos contrarrestados y testados desde el punto de vista científico. Por ejemplo, una sábana bajera que se ha desarrollado conjuntamente con una empresa textil, está sábana presenta un efecto anti-estrés que deriva en una mejora significativa de la calidad de sueño, y, además aparecen una serie de efectos secundarios beneficiosos como la disminución del tiempo necesario para conciliar el sueño, disminución de las molestias de contracturas musculares, **efecto relajante** y bienestar general; propiedades que han sido testadas en pacientes por varios centros de investigación norteamericanos. Éste es un caso puntual donde la sinergia de cada uno de estos agentes ha permitido conseguir un producto específico para la mejora de la salud. En poco tiempo podremos encontrar en el mercado sábanas que ayuden a dormir, pijamas con propiedades

hidratantes y auto-regenerantes, ropa interior dermatológica que evita el crecimiento microbiano, calcetines que mejoren la sensación de confort, vendas y apósitos funcionalizados capaces de tratar cierto tipo de patologías y, en definitiva, artículos

(es TenTen)

## 6.2. 分析

収集した関係的用法の派生形容詞を含む名詞句を観察する中で、両タイプの派生形容詞の意味的な差異、類似点が確認された。本研究ではこの差異と類似点を記述するために、意味上の主語という概念を導入する。関係的形容詞を派生する接辞としての両接辞の意味的な固有性は、意味上の主語の選択に関わる基準であると考ええる。

そこで 6.2.1. では、両者の意味的な差異に直結していると考えられる意味上の主語について、それがどのようなものであるのか詳述する。そして 6.2.2. で、実際にこの意味上の主語をめぐる差異、およびそれぞれのタイプの関係的形容詞の特有性を、実例を紹介しながら説明していく。

### 6.2.1. 意味上の主語

前章で指摘したように、関係的用法における両形容詞の修飾する名詞は形容詞の語根動詞の主語に相当するものではない。その根拠として、こうした形容詞を含む名詞句の **que V** によるパラフレーズが極めて困難であることを指摘した: **efecto relajante** > ??**efecto que relaja/efecto de relajar**。

しかし、そうした名詞句が使用される文脈には、多くの場合、派生形容詞によって修飾こそされていないものの、つまり、形容詞に修飾される位置とは別に、語根動詞の主語に相当する対象を表す名詞句が生じていることが確認された。こうした対象を本研究では意味上の主語と呼ぶ。以下の例を参照されたい。

- (2) La atmósfera terrestre (地球の大気<sup>2</sup>) tiene un doble **efecto limitador** (限定的にする) a la hora de estudiar el cosmos.

(es TenTen<sup>3</sup>)

- (3) La glicerina (グリセリン) tiene una **función hidratante** (潤いを与える), ya que regula la absorción y liberación de agua en la piel, además de tener un efecto suavizante y emoliente<sup>4</sup>.

<sup>2</sup> 以降、意味上の主語と語根動詞の関係を把握しやすくするために、意味上の主語と関係的形容詞の語根動詞の語義を括弧内に日本語で記載する。

<sup>3</sup> (2) 以降の例も、特に記載のない場合は、es TenTen より引用したものである。

<sup>4</sup> ラテン語の動詞 **emollire** の分詞形 **emollientis** を語源とする形容詞であるが、現代スペイン語では **emollire** を語源とする動詞は存在せず、この形容詞のみが使用されている。本稿の分析対象は動詞を語根と

(2) では、形容詞 *limitador* は名詞 *efecto* を修飾しているが、*efecto* は実際に何かを限定するものではない。従ってこの名詞の表す対象は、語根の *limitar* の表す動作を実行するものではなく、それゆえに、(2) における *limitador* は関係的用法であると考えられる。(2) の最も妥当な解釈は、「地球の大気には宇宙の研究を限定的にする二重の効果がある」であろう。従って、実際に (2) において研究を限定的にしているものは *limitador* に修飾されている *efecto* ではなく、(2) 全体の主語、*La atmósfera terrestre* である。本研究では、(2) における *La atmósfera terrestre* のような、関係的形容詞によって修飾はされていないものの、解釈上、形容詞の語根の表す動作を実現する対象を表す名詞、名詞句を意味上の主語として扱っていく。この意味上の主語は、それぞれのタイプの形容詞の持つ固有の性質と強く結びついたものである。従って、(2) 以降では問題となる関係的形容詞を黒字で、意味上の主語には下線を引き、強調する。

(3) についても、同様である。修飾されている名詞、*función* や *efecto* は関係的形容詞の語根である *hidratar*, *suavizar* の主語に相当するものではない。そして解釈上、実質的に当該動詞の表す動作を実現しているのは文全体の主語である *La glicerina* であろう。従って、この名詞句が関係的形容詞、*hidratante*, *suavizante* の意味上の主語であると考えられる。

この意味上の主語は、多くの場合において関係的形容詞を含む名詞句の「所有者」として現れることが観察された。(2) と (3) の例では、*tener* の主語である *La atmósfera* および *La glicerina* が実際に派生形容詞の語根である *limitar*, *hidratar*, *suavizar* の表す動作の主語に相当している。

他にも、*tener* の主語が意味上の主語であるケースは多く観察される。

- (4) El cobre (銅) es relativamente peligroso para los peces y tiene **un efecto inhibitor** (抑制する) de la fotosíntesis.
- (5) El hipoclorito de sodio NaOCl (次亜塩素酸ナトリウム) es un irrigante con adecuadas propiedades que contribuye a un efectivo debridamiento quimiomecánico. Actúa como lubricante para la instrumentación, neutraliza los productos tóxicos, tiene **acción disolvente** (溶かす) y **detergente** (洗浄する) .
- (6) Frente a los espacios multifuncionales de la ciudad tradicional (伝統的都市の多機能空間) , que tenían **función integradora** (統合する) para la comunidad, las ciudades modernas han privilegiado espacios monofuncionales (Michael Walzer).
- (7) Dicho orden (先述の様式) tiene **carácter excluyente** (除外する) , de forma tal que sólo

---

する派生形容詞であり、この形容詞は分析、議論の対象から捨象した。

podrán adjudicarse plazas ocupadas por interinos cuando no existan plazas sin ocupar, y únicamente se revocarán los nombramientos de promoción interna temporal, además de cuando concurra el supuesto anterior, cuando no hubiesen plazas provistas por personal estatutario interino.

また、当然ながら、意味上の主語は **tener** と同義的な **poseer** の主語としても、しばしば現れる。

(8) Un opiáceo bien conocido, como la metadona (メタドンのようなよく知られたオピエート) , también posee **efecto bloqueador** (ブロックする) de los receptores NMDA (4,5).

(9) El celiprolol (セリプロロール) no posee efecto **estabilizante** (安定させる) de la membrana.

本章で分析している関係的形容詞の意味上の主語は **ejercer**, **producir**, **cumplir** のようななんらかの動作の実行を表す動詞、軽動詞の主語としてもしばしば現れる。以下の例を参照されたい。

(10) **Músculo esquelético**. Cuantitativamente es el principal tejido en el que la insulina (インスリン) **ejerce acción estimuladora** (刺激する) sobre utilización de glucosa.

(11) Melón (メロン) . **Ejerce acción revitalizante** (活力を与える) **y renovadora** (一新する) de células de huesos, dientes, piel, ojos, uñas y cabello; protege del ataque de bacterias y virus, desintoxica los tejidos del cuerpo, neutraliza los efectos de triglicéridos y colesterol (tipos de grasa que predispone a padecer enfermedades cardiovasculares) y activa hormonas sexuales.

(12) Pre-denticium (商品名) es un gel de masaje que previene la irritación que se puede producir en las encías sanas del bebé como consecuencia del desarrollo de la dentición, proporcionándole una sensación de alivio. Asimismo, protege las encías y produce un **efecto suavizante** (和らげる) .

(13) Gracias a los conocimientos orientales, los boticarios descubrieron que había cuatro secreciones animales (分泌液) , hasta entonces insospechadas, que producían **efectos embriagadores** (酔わせる) en los seres humanos.

- (14) Desde la perspectiva individual (derecho subjetivo), dicha estandarización (スタンダード化) cumple una **función estabilizadora** (安定させる) ya que le permite al sujeto prever, proyectar y determinar su conducta presente y futura de acuerdo a "las reglas del juego" que se establecen para la convivencia con "el otro".
- (15) Pues es claro que la imagen de Allende tiene la virtud de aglutinar a todas aquellas identidades que se sienten parte de la izquierda, pero también es claro que la única manera en que esa imagen (イメージ) puede cumplir esa **función aglutinante** (接着する) es vaciándose de sentido o, más precisamente, volviéndose ambigua.

また、動作の主語にあたる対象が所有形容詞で現れることを確認した。

- (16) "Si bien la Comisión [Europea] se promociona como la más firme promotora de un enfoque económico social, crece la preocupación de que sus **tendencias liberalizadoras** (自由化する) incrementen las demandas a los gobiernos nacionales para imponer nuevos recortes en el gasto público como parte de la cada vez más estricta disciplina monetaria", escribieron Mirjam van Reisen, Simon Stocker y Georgina Carr en el capítulo del Informe de Social Watch dedicado al movimiento de "indignados".
- (17) En el mundo actual (現在の世界), con su **tendencia globalizante** (グローバル化する), la suerte de las instituciones modernas está ligada más que nunca a factores que van mucho más allá de su ámbito de control, pues la constante es el cambio.
- (18) Concluyendo, la teoría del valor (労働価値説) ha terminado con su **función racionalizadora** (合理化する) (así como con su función fundadora) de la economía política.
- (19) El cuarteto californiano (カリフォルニアのカルテット) atrajo la atención del público gracias a la energía en estado puro de *Perry Farrell*, a su **actitud desafiante** (挑む) y carismática y a los furiosos riffs de guitarra de Dave Navarro.

意味上の主語は前置詞 *de* 句内に生じることもしばしばある。この点も、この前置詞が所有関係を表すものであることと関連していると考えられる。

- (20) En un comunicado, el director del PMA en Kenia, Tesema Negash, ha señalado que el **efecto debilitador** (弱くする) de una prolongada sequía (続く干ばつ), acompañado por una pobreza crónica, conlleva la falta de alimento para miles de familias.

- (21) Desde hace siglos y en todos los rincones del mundo, las madres conocen el **efecto calmante** (落ち着かせる) de las nanas (子守唄), con su combinación de voz, canto y movimientos de arrullo, y se las cantan a sus hijos con dulzura para que se duerman o dejen de llorar.
- (22) Los terremotos se deben a las corrientes de aire producidas por la **acción desecadora** (乾燥させる) del Sol (太陽).
- (23) Una característica importante es que esta proteína sufre mutaciones o cambios en su secuencia de aminoácidos, lo que permite al virus escapar de la **acción neutralizante** (中和させる) de los anticuerpos (抗体).

これまでに紹介してきたケースでは、意味上の主語は特定性を有するものであった。しかしながら、意味上の主語が不特定であるケースも散見される。(24)を参照されたい。

#### (24) CONTENIDOS TEMÁTICOS:

Normas de traducción artística. La traducción como **proceso creador** (創造する). Relación entre el original y la traducción: criterios diferenciales. Forma y estructura del discurso: alcance del valor connotativo; reducción y expansión.

(24) は、マドリード・コンプルテンセ大学の文献学部の開講している翻訳論のシラバス内の文である。ここで問題となる名詞句、**proceso creador** は講義のテーマの一つとしており記載されており、同一句内はもちろん、(24)として引用した部分にも、意味上の主語を表していると考えられる名詞句は見られない。(24)、そしてシラバスというレジスターの性質上、ここで **crear** という動作を実際に行うのは、特定された人物ではなく、翻訳に携わる者全般であると考えられる。

以上、本節では、本章における議論において極めて重要となる関係的形容詞の意味上の主語について、その性質や現れ方を紹介した。意味上の主語の現れ方については紙面の都合上、主要なもののみを紹介した。従って、(2)-(24)までに紹介した意味上の主語の出現パターンは必ずしも網羅的なものではないことに注意されたい。

#### 6.2.2. 意味上の主語の選択パターン

観察によればそれぞれのタイプの関係的形容詞に、意味上の主語として共起可能な名詞句とそうでない名詞句が存在する。言い換えれば、両接辞による派生形容詞にそれぞれ特有の意味上の主語の選択に関わる基準が存在する。これこそが両者の固有性であり、それぞれを

区別するものであると考える。そして、この規則は前章までに紹介してきた両接辞による外項の編入や、両者による主語的派生形容詞の修飾に関わる規則と同一線上のものである。つまり、**-dor** による関係的形容詞は使役的動作主や道具を意味上の主語として選択し、**-nte** によるものはそうした対象を表す名詞を意味上の主語として選択しない。分析した名詞句のペアにはこうした使役性と、動作に対するコントロールの有無に関わる対比が数多く観察された。次節以降では、具体例を挙げながらこの対比を紹介していく。

#### 6.2.2.1. Acción purificadora VS. acción purificante

本節では **acción purificadora** と **acción purificante** の間で観察された意味上の差異を紹介する。いずれも、それ自体では「浄化行動 ‘**acción de purificar**’」と理解されるものであり、同義的である。そしてそれに加えて、**es TenTen** における出現頻度は前者が 48 回、後者は 43 回と、使用頻度の上でも拮抗している。しかしながら、観察によれば両者は同じ意味タイプの意味上の主語を選択することがあるものの、それぞれ異なる基準で意味上の主語を選択しているように思われる。以下の例を参照されたい。

(25) El tea tree (ティーツリー) es famoso por su acción purificante (浄化する) .

(26) El agua escurrida pierde valor muy rápidamente, aunque lo recupera parcialmente en los humedales (lagunas, pantanos y embalses), debido a la **acción purificadora** (浄化する) de los vegetales acuáticos y organismos descomponedores (水棲植物と分解者) .

(25) では **purificar** の意味上の主語にあたるのは **El tea tree**、(26) では **los vegetales acuáticos y organismos descomponedores** がそれに該当する。いずれも無生物であり、道具のように動作主に使用されるものでないことから、**purificar** という動作に対するコントロールを持たない。従って、両者はこれまでの分類基準でいえば、**purificar** という動作の原因に相当するものであるといえるだろう。このように、関係的派生形容詞としての **purificador** と **purificante** は、原因相当の対象を表す名詞を意味上の主語として選択する。この点は両者の意味上の類似点、共通点であると考えられる。

しかし、**purificar** という動作はこうした原因相当の対象だけでなく、(27) のように、意思を持った動作主によっても実現されうるものである。また、**purificar** という動作は汚れのあるものを浄化するという動作を表すものであり、語彙的使役動詞である。従って、(27) における動詞 **purificar** の主語 **nosotros** は本研究における分類では、使役的動作主となるものである。

(27) El imam Salvador López López dice: "Aquí purificamos nuestros espíritus y rezamos a Allah. Hoy no vinieron todos, algunos tienen que trabajar." El imán sonríe. "Pero nos va



bien. Nuestra comunidad es aún pequeña, seremos unos doscientos, pero de a poco vamos creciendo."

そして、本節で分析の対象としている *acción purificadora* と *acción purificante* の内、使役的動作主を意味上の主語としていたのは前者のみであった。

(28) Para saber si Jesús (人名) reina ya en el corazón del educador le invita a analizar sus propias acciones, la transformación de su vida y su conducta, como prueba de que efectivamente Jesús ha realizado una **acción purificadora** (浄化する) dentro de su corazón.

(29) Fue descubierto gracias a las cámaras de seguridad, que mostraban imágenes muy claras de Rubén con su ametralladora. Lo que quedaba de la Policía se juró atraparlo, por el bien de la sociedad y por vengar lo que había hecho a la institución. Sin embargo, Rubén pudo más que toda la policía de la ciudad. Mató a todos sus integrantes, y luego a todos los ciudadanos. Algunos de ellos, antes de morir, intentaban terminar la **acción purificadora** (浄化) de Rubén (人名) con un tiro.

*Acción purificante* については、コーパスから抽出された 43 例の意味上の主語は、いずれも (25) のように原因相当の無生物であった。

前章までの分析によれば、主語的な名詞と形容詞を派生する接辞としての *-dor* は使役的動作主のような高い動作主性を持った対象と強く結びついている一方で、*-nte* がそうした対象を編入、修飾することは極めて稀であった。この対比こそが主語的用法における *-dor*, *-nte* の意味上の差異であり、ひいてはそれぞれの接辞の固有性であると結論付けた。そして、本節で分析した *acción purificadora* と *acción purificante* において確認された意味上の主語の選択における対比もまた、主語的な *-dor*, *-nte* 間で確認された対比と同一線上のものであったことは極めて興味深い。つまり、この対比は主語的派生名詞、主語的派生形容詞、関係的形容詞、いずれのタイプの派生語を形成する際にも確認されるものであり、両者の間の本質的な差異であると考えられる。

#### 6.2.2.2. Efecto esterilizador VS. efecto esterilizante

「消毒、殺菌する」という動作を表す動詞 *esterilizar* にも両接辞が付加される。いずれの派生形容詞も名詞 *efecto* を修飾し、その場合、両形容詞は関係的に用いられる。これらの形容詞によるペア、*efecto esterilizador* と *efecto esterilizante* の間にも、前節で紹介したような意味上の主語の選択における差異が確認されている。

まず、(30) と (31) のケースのように、両関係的派生形容詞は、*esterilizar* という動作の原因に相当する対象を表す名詞を意味上の主語とする。いずれの場合においても、意味上の主

語は化学物質であり、消毒・殺菌という状態の変化を引き起こすものである。

(30) Recurrimos a la creolina (クレオリン) , fácilmente disponible y barata. Es un derivado del petróleo (石油から派生した物質) , con **efecto esterilizador** (消毒する) y desinfectante, con amplio uso para diversas infestaciones parasitarias en animales.

(31) El Acido Peracético (過酢酸) es un potente oxidante con **efecto esterilizante** (消毒する) .

コーパスから収集された 22 の *Efecto esterilizante* 句の意味上の主語はいずれも (31) 同様、原因に相当するものであった。一方、*efecto esterilizador* 句は使役的道具を表す名詞を意味上の主語として選択する場合があることを確認している。これは両者間の意味上の差異であると考えられる。

(32) En esta presentación, exponemos los recientes progresos en el desarrollo de nuestros dispositivos emisores de luz (光を照射する装置) que trabajan en el ultravioleta profundo basados en AlGaIn [...]. También se muestra por primera vez **el efecto esterilizador** (殺菌する) que se ha logrado con nuestros dispositivos (装置) .

このように、使役的道具が *-dor* 形容詞によってのみ選択されるという事実は、前章までの記述から予想され、また、それを補強する。二章で論じたように、使役的道具は、使役性と動作に対するコントロールの両方を実質的に有する対象である。そしてこうした高い動作主性を持った対象は *-dor* によってのみ選択されるとこれまでに繰り返し述べてきた。従って、(30)-(32) におけるそれぞれの接辞による関係的形容詞の意味上の主語の選択に関わる基準は、主語的用法における両接辞の編入、修飾のパターンと同様のものであることを示唆しているといえるだろう。

#### 6.2.2.3. Función moralizadora VS. función moralizante

動詞 *moralizar* を語根とする両接辞による派生形容詞も名詞 *función* を修飾する。*Función* という抽象概念が人や物を教化することは解釈上不自然であり、名詞句、*función moralizador*, *función moralizante* における派生形容詞は関係的用法で用いられていると考えられる ( ?? *función que moraliza/función de moralizar*)。この名詞句のペアにおいても先に紹介したものと同種の意味上の対比が確認された。

まず、いずれの名詞句も原因相当の対象を意味上の主語とすることを確認している。

(33) La **función moralizadora** (教化する) de este derecho (権利) se dirige a equilibrar las fuerzas, en una controversia que en principio se plantea como dispareja.

- (34) Monterroso fue consciente del tratamiento dado corrientemente a sus textos, y en muchas ocasiones intentó, no sin cierta irritación, combatirlo aludiendo, por un lado, a su constante preocupación estilística y, por otro, a su escepticismo respecto a toda **función moralizante** (教化する) de la literatura (文学) .

**Función moralizante** は原因相当の対象のみを意味上の主語として選択する一方で、**función moralizadora** 句の意味上の主語は必ずしも原因ではない。(35) のように、動作主が意味上の主語として選択されるケースが存在することが確認されている。

- (35) Hay que entender que cualquier poder está dado por aquel que entiende de que la ley está hecha para dominar y no para cumplirla, el poderoso (権力者) tiene **una función moralizadora** (教化する) .

これらのケースにおいても、これまでに紹介してきたケース同様、関係的用法における場合であっても、-dor は使役性と動作へのコントロールを有する対象と強く結びつき、また、-nte とそうした対象と結びつかないという対比が確認された。

#### 6.2.2.4. その他のケース

これまでに紹介してきたケースの他にも、意味的主語のパターンにおける同様の差異が確認された例がある。

**Función fundadora/fundante** のペアでは前者のみが使役的動作主を意味上の主語とすることを確認した。

- (36) El padre (父親) , no puede estar ausente de la estructura familiar, su figura es necesaria y trascendental. Tiene **una función fundadora** (築き上げる) de la personalidad futura del hijo.

一方の **función fundante** の意味上の主語には、**fundar** という動作へのコントロールを持つものは確認されていない。

- (37) En las respuestas que tradicionalmente fueron aportadas al problema del obrar, los filósofos, en efecto, habían podido apoyarse, de una manera u otra, en un Principio nouménico (ヌーメノンの原則) cuya **función fundante** (築き上げる) estaba asegurada por una doctrina de principios últimos, principios a su vez imposibles de fundar.

**Función integradora/integrante** のペアにおいては前者のみが使役的動作主を意味上の主語とする。(38) の **integrar** の意味上の主語である **el profesor** は意思を以てグループをまとめているものと解釈される。

- (38) [...] la ruptura con relaciones inconscientes de poder por parte del profesor que suponen relaciones de dependencia-sumisión; y hacer mayor hincapié en **la función integradora** (まとめる) del profesor (教員) con respecto al grupo de alumnos.

一方の **función integrante** は管見の限り、非動作主という使役性も動作に対するコントロールも持たない対象のみを意味上の主語とするようである。動詞 **integrar** の主語には以下のような、極めて動作主性の低いものがある<sup>5</sup>。

- (39) Cuatro platos integran el menú: consomé clarificado con tres raviolis, vieiras con ensalada de brotes de lechuga y vinagreta de cítrico, rodaballo salvaje con emulsión de patata y trompetas de la muerte, y pechuga de pintada con foie acompañada de lombarda y col verde.

**Función integrante** も (39) における当該動詞の用法と対応している。この名詞句の選択する意味上の主語は観察した限りでは、状態動詞の主語に相当するような低い動作主性を持つものばかりであった。

- (40) Hay que practicar la operación en sentido inverso y ver si estos constituyentes (これらの構成要素) tienen **función integrante** (構成する) al nivel superior.

**Función socializadora/socializante** においても **socializadora** のみがコントロールを有した対象を意味上の主語とすることを確認した。コーパス内の 254 の **función socializadora** の実例の中では、最も高い頻度で、意味上の主語として選択されていたのが **escuela, familia** であった<sup>6</sup>。この場合、**escuela, familia** は共に動作主のメトニミーとして解釈されており、これまでに紹介してきたケースと地続きであるように思われる。一方で、**función socializante** の用例は 18 例に留まり、**escuela** と **familia** が意味上の主語として生じているケースは確認されなかった。これは **socializar** という動作が意図性なくして成立し難いものであることと無関係ではないだろう。

- (41) La Escuela (学校) tiene **una función socializadora** y formativa, ha de impartir

<sup>5</sup> この **integrar** は Dicho de diversas personas o cosas: Constituir un todo. *El equipo lo integran once jugadores.* (DRAE) と説明されるように状態動詞的なアスペクトを持つものである。

<sup>6</sup> **Escuela** が意味上の主語になっているケースは 30、**familia** については 21 例確認された。

conocimientos y desarrollar capacidades e inquietudes, pero probablemente, una de las causas de que la Escuela no cumpla adecuadamente su cometido es el que haya renunciado a educar para el ocio.

- (42) Cabría preguntarse dentro de esta aproximación qué ocurre cuando el niño crece en una especie de anomia o cómo se produce la constitución de la persona moral cuando se presenta un vacío de **la función socializadora** (社会生活に適合させる) de la familia y la escuela (家庭と学校), y es la calle y los medios masivos de comunicación los que pasan a dar los criterios morales, que no dio esa primera socialización; que pasa entonces, dado que la mediación afectiva que está implicada en ese proceso es fundamental para el niño.

また、この意味上のコントラストは *acción* を主要部とする名詞句のペアにも多く見られた。Acción limitadora/limitante というペアでは両者が共に関係的用法で当該名詞を修飾している (‘acción de limitar’)。観察により、acción limitadora のみが意味上の主語として使役的道具を選択することが確認された。

- (43) **La acción limitadora** (制限する) de corriente del Fault Tamer (商品名), que se ilustra en la Figura 4, evita estas operaciones innecesarias del interruptor instantáneo por fallas en el transformador.

この文脈では意味上の主語は *Fault Tamer*<sup>7</sup> である。この製品は電流を抑制するヒューズであり、使役的な道具であると考えられる。ここでこうした意味タイプの名詞を意味上の主語とするのが -dor による関係的形容詞に限られるのもこれまでの記述から予測される。

Acción esterilizadora/esterilizante についても同様で、前者のみが、意図的に esterilizar を遂行する対象を表す名詞を意味上の主語とする。

- (44) Ese consejo conciliar me mueve a recordar a los peruanos, gracias a la amabilidad del diario El Comercio de Lima, que los obispos peruanos salimos en defensa de la mujer andina cuando el gobierno (政府), a partir de 1995, realizó **una acción esterilizadora** (不妊にする) de campesinas, puesto que tal actitud pastoral ha sido puesta en duda.

同様に、acción estabilizadora/estabilizante のペアでも前者のみが使役的な道具を意味上の主語とする。後者がそうした対象を意味上の主語とするケースは確認されなかった。

---

<sup>7</sup> 商品概要: <http://www.sandc.com/products/fusing-outdoor-distribution/fault-tamer.asp>

(45) Muñequera Boomerang<sup>8</sup> (商品名)

Diseñada con **acción estabilizadora** (安定させる) conjunta de muñeca y dedo pulgar, confiere a la articulación un alto grado de estabilización.

このように、-dor による関係的形容詞のみが高い動作主性を持つ対象を意味上の主語とするという対比は、修飾される名詞が **función** と **acción** である場合に特によく観察された。これはこの二種類の名詞が、動作主や道具といった対象と意味論上の相性が良いことによると考えられる。一方で、例えば **efecto** のような名詞は当該タイプの名詞との相性が悪いと思われる。(46) の容認度の低さはこの意味上の相性の悪さから生じていると考える。

(46) ?? efecto de ese instrumento, ?? efecto de esta persona

そして実際に、今回観察した「efecto + 関係的形容詞句」で意味上の主語として使役的動作主や道具を選択しているものは 6.2.2.2. で紹介した **efecto esterilizador/esterilizante** のペアに限定されていた。

また、今回分析した名詞句のペアについては、**función** や **acción** の他には、**tendencia** を主要部とするペアで、ここまでに紹介してきた意味上の主語の選択パターンの違いが確認された。

(47) Izaguirre recuerda que fue el diario Página 12 de la mano de uno de sus hombres fuertes, Horacio Verbitsky (人名), quien siempre tuvo **una tendencia liberalizadora** (自由化する) con respecto a las drogas y que desde ese medio, en forma permanente y sistemática, apunto con malicia a quienes dedican su vida a la lucha frontal contra los mercaderes de la muerte.

#### 6.2.2.5. 意味上の主語の選択における類似性

先述の通り、両接辞は原因相当の対象を表す名詞を意味上の主語として選択するという点では類似している。次節で詳述するように、派生形容詞が名詞 **efecto** を修飾する際には意味上の主語が原因となることが極めて多い。さらに **efecto** を修飾する派生形容詞のペアにおいては両者が同じ名詞を意味上の主語とするケースが確認された。

(48) Resistencia a la insulina durante la gestación no está limitado al **efecto estimulador** (刺激する) de la insulina (インスリン) sobre el transporte de glucosa, sino también al destino metabólico de la glucosa y al recambio de proteínas

---

<sup>8</sup> 手首のサポーター。

- (49) Esta ausencia del aumento de los andrógenos se pudo haber debido al efecto supresor de la leptina sobre la TT y la TL y a la disminución del **efecto estimulante** 刺激する) de la insulina (インスリン) sobre dichas hormonas.
- (50) Un segundo cambio neuro–adaptativo sería consecuencia de las fuertes asociaciones que se forman entre los **efectos reforzadores** (強化する) de las drogas (ドラッグ) y los estímulos ambientales asociados a su consumo.
- (51) Los fenómenos adictivos inducidos por los opioides y otras drogas de abuso están relacionados tanto con los **efectos reforzantes** (強化する) de estas drogas (これらのドラッグ) como con la necesidad que se genera en el adicto para paliar las consecuencias negativas de la ausencia de las mismas.
- (52) Los **efectos paralizadores** (麻痺させる) de la toxina botulínica (ボツリヌス毒素) duran unos meses.
- (53) En caso de inyección de una dosis demasiado fuerte, se puede inyectar una antitoxina, que contrarresta los **efectos paralizantes** (麻痺させる) de la toxina botulínica (ボツリヌス毒素) .

(48) と (49) にはそれぞれ、efecto estimulador と efecto estimulante という名詞句が含まれている。そして、いずれも意味上の主語として、insulina を選択している。いずれも、句全体で「インスリンの持つ刺激効果」を表す。同様に、(50) と (51) では efecto を修飾する関係的派生形容詞 reforzador, reforzante の両方が、droga を意味上の主語としている。(52) と (53) では同様に、修飾する名詞、語根を同じくする両派生形容詞が la tóxima botulínica を意味上の主語としている。このように、原因相当の対象を意味上の選択する関係形容詞としては、両者の類似性は極めて高い。

また、二章から四章では、両接辞による主語的な派生語の意味的な共通点として使役性を持たない動作主を表し、修飾することを報告した。そして同様の類似点は、少数ながら本章における分析でも確認された。

「名詞 actitud + 派生形容詞」句における語根動詞の過半数は使役性を欠き、かつその主語は動作に対するコントロールを有する。より具体的には、以下の表の triunfar, objetivar, interrogar, cuestionar, desafiar が該当する。

表 2. Actitud を主要部とする名詞句

actitud	ejemplarizar, triunfar, objetivar, interrogar, cuestionar, desafiar, conciliar
---------	--

そして活動動詞の主語は多くの場合、非使役的動作主である。 **Actitud** を主要部とした名詞句のペアでも、同種の非使役的動作主が意味上の主語として選択されることが確認された。このことも、両接辞は非使役的動作主を拒絶しないとする本研究における仮説を補強するものだろう。

動詞、**interrogar** からなる派生形容詞を含む名詞句、**actitud interrogadora/interrogante** はいずれも意味上の主語として人物を選択する。**Interrogar** は活動動詞であり、その主語は使役性を持たない動作主である。そして、両接辞はともにこのタイプ的主語を拒絶することはないと想定されており、従って、関係的形容詞を派生する場合であっても、ともに意味上の主語としてこのタイプの名詞を選択するのだと考えられる。

- (54) El ensayista cubano concentra su atención a la vez en los juicios de Paz sobre Duchamp – en plática intensa con Apariencia desnuda –, pero también, en particular, en **la actitud interrogadora** (質問・尋問する) del crítico (批評家), lo cual constituye, en realidad, el imán intenso de Los signos mutantes del laberinto, interesado en trazar una imagen global de la perspectiva general de Paz sobre el arte y la cultura de su tiempo.

- (55) El muchacho (少年) se volvió a mirarlo con sus hermosos ojos azules, en **actitud interrogante** (質問・尋問する) .

そしていずれの派生形容詞も (54), (55) にあるように、意味上の主語として人物を表す名詞を選択する。この点はこれまでの記述から説明可能だろう。

**Interrogar** と同種の動作を表す **cuestionar** も両接辞によって派生され、いずれの形容詞も **actitud** を関係的用法で修飾する。そしていずれの場合も、人物、つまり非使役的動作主が意味上の主語として選択される。このように、両関係的形容詞は非使役的動作主を意味上の主語として選択するという点で類似している。

- (56) La dimensión cognitiva supone que a través de los conocimientos que el estudiante va adquiriendo, se pasa del nivel reproductivo al creativo. Para lograr este tránsito es necesario que exista una apropiación del conocimiento, lo que implica una identificación con el objetivo del conocimiento científico, alcanzar la verdad se convierte en valor porque ella compulsa a la búsqueda infinita del conocimiento, infiriéndose **una actitud cuestionadora** (疑問視する) del estudiante (学生) ante los contenidos impartidos.

- (57) Quizá nos puede preguntar como diócesis: ¿por qué te has portado así con los jóvenes a los que no has logrado traer a tus filas? Diócesis de Piedras Negras ¿por qué te has portado así



con los más alejados, con aquellos que ya se fueron de mi iglesia?, ¿por qué te portaste así que los dejaste ir?, ¿por qué te has portado así, con los que más necesitan y no les has tendido la mano? Tenemos que entender **esta actitud cuestionante** (疑問視する) de la Santísima Virgen (聖母), también ante nuestra iglesia particular.

分析対象のペアを構成する語根動詞は表 1 に示したように、多くは語彙的使役動詞である。しかしながら、**actitud** を主要部とするペアの中には二種類に留まったものの、語根が状態動詞であるペアが確認された。具体的には **triunfar**<sup>9</sup>, **desafiar** を語根とするものである。以下の例を参照されたい。

- (58) Fuerza, garra y **actitud triunfadora** (勝ち誇る) es lo que mostraron ayer 500 atletas (500 人のアスリート) en la inauguración de las terceras Olimpiadas Especiales de la provincia.
- (59) Cristo (キリスト) en **actitud triunfante** (勝ち誇る) y victoriosa y con un lábaro en las manos, aparece posado sobre la piedra que tapara el sepulcro.
- (60) En todo caso yo en la foto veo que el que tiene la mano en alto (手を高くあげている者) con **actitud desafiadora** (挑戦する) no es el carabinero.
- (61) El cuarteto californiano atrajo la atención del público gracias a la energía en estado puro de Perry Farrell (人名), a su **actitud desafiante** (挑戦する) y carismática y a los furiosos riffs de guitarra de Dave Navarro.

このように、少なくともこれら二種類の動詞を語根とする派生形容詞は、いずれも状態動詞の主語相当の対象、本研究の分類上、非動作主に該当する対象を選択する。**-nte** による形容詞がこうした対象を意味上の主語として選択することは前章までの分析から予測されたことであった。一方、これまでの観察によれば **-dor** は典型的には高い動作主性を持った主語相当の対象を選択する接辞であり、**-dor** による形容詞が非動作主を意味上の主語として選択するケースは限定的であった。そして、これまでの **-dor** による主語的名詞、主語的形容詞の分析においても、非動作主の編入、修飾は稀であった。本性における分析により **-dor** の高い動作主性への指向性がより浮き彫りになったといえるだろう。

#### 6.2.2.6. まとめ

本節では両接辞による関係的派生形容詞の意味的な性質を記述するために、同じ名詞を修

<sup>9</sup> Triunfar には *quedar victorioso* (DRAE) という状態動詞的な用法の他に、「優勝する」、「打ち勝つ」という非状態動詞的用法がある。

飾する同一動詞を語根とした派生形容詞のペアを観察した。関係的用法における派生形容詞の修飾する名詞は語根の主語に相当するものではないが、多くの場合において語根の表す動作を実行する対象、つまり意味上の主語を読み取ることは可能である。そして、これまでの観察によれば両関係的形容詞は異なる基準によって、この意味上の主語を選択しており、この基準こそが、両タイプの関係的派生形容詞、ひいては関係的形容詞派生接辞としての **-dor**, **-nte** の意味的な固有性であると推測される。

本節では、特に、**-dor** による関係的派生形容詞のみが使役的動作主や道具といった動作主性の高い対象を意味上の主語とするという対比を重点的に論じた。分析の対象とした名詞句は関係的形容詞を形成する接辞によってのみ異なっているため、この対比はそのまま、**-dor** と **-nte** 間の意味的な差異であるということができよう。この対比は主語的な派生名詞および主語的派生形容詞を形成する接辞としての両者の間にも確認されたものであり、したがって、**-dor** は高い動作主性を持った対象を優先的に編入、修飾、選択し、**-nte** はそうした対象を拒絶するという対比は両者を隔てる根源的なものである。

また、同様に、両接辞による関係的形容詞は原因や非使役的動作主にあたる対象を意味上の主語とすることを両者の意味上の類似点として報告した。両接辞による主語的な派生語も、同様のタイプの対象を編入、修飾することから、この点も両接辞に根源的な性質であると考えられる。

そして、少数ではあったが、語根が状態動詞であり、いずれの形容詞も意味上の主語として非動作主相当の対象を選択しているケースも確認された。

### 6.3. インフォーマント調査

前節の分析結果は以下のように要約されるだろう。

#### 関係的用法における意味上の主語の選択

##### **-dor** による派生形容詞

使役的動作主、使役的道具に相当する対象を意味上の主語とする (**-dor** に固有)

原因、非使役的動作主、非動作主に相当する対象を意味上の主語とする (**-nte** との類似点)

##### **-nte** による派生形容詞

使役的動作主、使役的道具に相当する対象を意味上の主語としない

原因、非使役的動作主、非動作主に相当する対象を意味上の主語とする (**-dor** との類似点)

この記述の根拠はコーパスから収集した実例である。しかし、その観察は網羅的なもので

はない。使用したコーパス *es TenTen* は 100 億語に近い規模のコーパスであり、当該コーパス内の用例をすべて漏らさず分析することは事実上不可能である。従って、この記述は別角度から検証される必要がある。

そこで以下では提案した両関係的形容詞の意味上の主語の選択に関する基準について、スペイン語母語話者に対するインフォーマント調査を通じ、その妥当性を検証していく。

インフォーマントの数は 10 名であり、いずれのインフォーマントもスペイン人である。以下では便宜上、10 名のインフォーマントをそれぞれ A-J とする。

### 6.3.1. アンケートの構成

本節では実施したアンケートの構成について述べる。実際にインフォーマントに配布したアンケートは以下のものである。質問の対象となる文は、コーパスから実際に抽出された文をできる限り短くしたものである。これは派生形容詞の容認性について、意味上の主語以外の要素の干渉を極力遮断するためである。

Cada una de las siguientes oraciones contiene un adjetivo formado por el sufijo *-dor* y el sufijo *-nte*. ¿Pueden utilizarse ambos adjetivos indistintamente en cada oración, o por el contrario, solamente uno de ellos? Si es así, ¿cuál? ¿Hay alguna oración en la que no se pueda utilizar ninguno? ¿Cuál?

En el caso de que se puedan utilizar ambos adjetivos, ¿son totalmente sinónimos e intercambiables, o hay alguna diferencia en el sentido entre ellos?

1. La proteína aglutina los eritrocitos. Sí, la proteína tiene un efecto **aglutinador/aglutinante** de los eritrocitos.
2. Los padres tienen que fundar el futuro de sus niños. Su función **fundadora/fundante** es muy importante.
3. Fault Tamer es un aparato que limita la corriente. La acción **limitadora/limitante** de corriente del Fault Tamer despeja fallas de alta magnitud en los transformadores.
4. José interroga a Pablo. Su actitud **interrogadora/interrogante** me parece muy descarada.

5. Los adultos socializan a los pequeños, les enseñan la cama, el avión, el cielo, los zapatos, la mano, el abuelo, todo lo que le rodea. Esta función **socializadora/socializante** de los adultos tiene mucha importancia.
6. Como somos científicos, para nosotros, cuestionar el mundo es lo más importante. Es decir, tenemos que tener actitud **cuestionadora/cuestionante**.
7. La toxina botulínica paraliza los músculos. En efecto, la toxina botulínica tiene un efecto **paralizador/paralizante**.
8. En el monte Sión Jesús purificó el templo. Esta acción **purificadora/purificante** de Jesús es muy famosa.
9. Desafiamos el peligro. Mantengamos esta actitud **desafiadora/desafiante**.
10. Los manifestantes bloquearon las calles. Debido a estas acciones **bloqueadoras/bloqueantes** de los manifestantes, no pudimos salir de la ciudad.
11. Este dispositivo puede esterilizar los materiales médicos. Esta función **esterilizadora/esterilizante** es la aportación de nuestro proyecto.
12. Estudiante del IPN crea un dispositivo que paraliza vehículos robados. La función **paralizadora/paralizante** del dispositivo será una invención revolucionaria.
13. Esta crema suaviza la piel. Sí, esta crema tiene un efecto **suavizador/suavizante**.
14. Los vientos alisios suavizan el clima. Sí, los vientos tienen un efecto **suavizador/suavizante**.
15. El plomo contamina el río. En efecto, el plomo tiene un efecto **contaminador/contaminante**.
16. El presidente humanizó la lucha contra el terrorismo. Esta acción **humanizadora/humanizante** tiene mucho mérito.

17. Están muy contentos con el resultado del partido. Su actitud **trionfadora/triunfante** me hace mucha gracia.
18. El autor tiene una postura muy objetiva. Su actitud **objetivadora/objetivante** hace sus obras muy relevantes.
19. El sanitario estabilizó al herido. Gracias a su acción **estabilizadora/estabilizante**, ese soldado fue salvado.
20. Integrar a los estudiantes extranjeros en la clase es la tarea más importante para mí. Esto es la función **integradora/integrante** de los profesores.

アンケートに提示した文は以下の四種類に分類される。

- A) 関係的形容詞が **acción** を修飾し、かつ使役的動作主、道具を意味上の主語とするもの
- B) 関係的形容詞が **función** を修飾し、かつ使役的動作主、道具を意味上の主語とするもの
- C) 関係的形容詞が **efecto** を修飾し、かつ原因を意味上の主語とするもの
- D) 関係的形容詞が **actitud** を修飾し、かつ非使役的動作主や非動作主を意味上の主語とするもの

A) および B) は **-dor** による関係的形容詞のみが使役的動作主や道具をとるという点を検証するためのもので、C) と D) は原因や非使役的動作主のような対象であれば、両タイプの形容詞が意味的主語として選択し得るという予想を検証するためのものである。6.2.5.における記述が妥当なものであれば、A), B) に分類される文では、**-dor** が使用されるという回答が大勢を占め、C), D) タイプの文では両方の接辞が使用可能と回答されることが予測される。

次節以降、このインフォーマント調査の結果を質問事項の系統別に紹介していく。

### 6.3.2. Acción を修飾する関係的形容詞の意味上の主語の選択

6.2.5. で述べたように、名詞 *acción* を *-dor* による関係的派生形容詞が修飾する際に、使役的動作主や道具がしばしば意味上の主語として選択される。そこで、こうした環境下で、本当に *-nte* による派生形容詞がこうした意味上の主語を選択することができないのかを確認するために、以下の五種類の文における派生形容詞の容認性を訊ねた。ここでは便宜上、意味上の主語と語根動詞の語義を記載し、下線と黒字による強調をおこなっているが、実際にインフォーマントに配布したアンケートでは行っていない。

1. FaultTamer es un aparato que limita la corriente. **La acción limitadora / limitante** (制限する) de corriente del FaultTamer (商品名) despeja fallas de alta magnitud en los transformadores.
2. En el monte Sión Jesús purificó el templo. **Esta acción purificadora / purificante** (浄化する) de Jesús (イエス) es muy famosa
3. Los manifestantes bloquearon las calles. Debido a **estas acciones bloqueadoras / bloqueantes** (ブロックする) de los manifestantes (デモの参加者), no pudimos salir de la ciudad.
4. El sanitario (衛生兵) estabilizó al herido. Gracias a su acción estabilizadora / estabilizante (安定させる), ese soldado fue salvado.
5. El presidente (大臣) humanizó la lucha contra el terrorismo. **Esta acción humanizadora / humanizante** (人道的にする) tiene mucho mérito.

1-5 における二種類の関係的形容詞の容認性に関する回答をまとめたものが以下の表である。

表 2. Acción 名詞句における関係的形容詞の選択

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
1	amb	dor	dor	dor	dor	amb	dor	dor	dor	dor
2	dor	dor	dor	dor	dor	dor	dor	dor	dor	dor
3	dor	amb	dor	dor	dor	amb	dor	dor	dor	dor
4	dor	dor	amb	amb	dor	amb	dor	nte	dor	nin
5	dor	dor	nin	nte	dor	dor	dor	dor	dor	dor

dor: *-dor* による形容詞のみが容認可能

nte: *-nte* による形容詞のみが容認可能

amb: 両方の形容詞が容認可能

nin: いずれの形容詞も使用不可

この結果の特に興味深い点として、「-dor 形容詞のみが容認可能」とする回答が 50 の回答の内、39 とおよそ八割を占めていた点である。加えて、「両方の派生形容詞が使用可能」との回答は 7 件あった。このように、意味上の主語が使役的道具、使役的動作主である場合は -dor による関係的形容詞が圧倒的に好まれるようである。

### 6.3.3. Función を修飾する関係的形容詞の意味上の主語の選択

Acción を修飾する場合と同様に、名詞、función を -dor による関係的形容詞が修飾する際の意味上の主語は使役的動作主や道具であるケースが多い。そこで、前節と同様に、función を高い動作主性の名詞を意味上の主語とした関係的形容詞が修飾している文脈を設定し、その容認性をインフォーマントに訊ねた。

6. Los padres (両親) tienen que fundar el futuro de sus niños. Su función fundadora / fundante (築きあげる) es muy importante.
7. Los adultos socializan a los pequeños, les enseñan la cama, el avión, el cielo, los zapatos, la mano, el abuelo, todo lo que le rodea. **Esta función socializadora / socializante** (社会に適応させる) de los adultos (大人たち) tiene mucha importancia.
8. Este dispositivo (装置) puede esterilizar los materiales médicos. **Esta función esterilizadora / esterilizante** (安定させる) es la aportación de nuestro proyecto.
9. Estudiante del IPN crea un dispositivo que paraliza vehículos robados. **La función paralizadora / paralizante** (麻痺させる) del dispositivo (装置) será una invención revolucionaria.
10. Integrar a los estudiantes extranjeros en la clase es la tarea más importante para mí. Esto es **la función integradora / integrante** (まとめあげる) de los profesores (教員たち) .

この 6-10 における二種類の派生形容詞の容認性をまとめたものが以下の表である。

表 3. función 名詞句における関係的形容詞の選択

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
6	dor	dor	dor	dor	dor	dor	dor	dor	dor	dor
7	dor	amb	dor	amb	dor	amb	dor	nte	dor	dor
8	amb	amb	dor	dor	amb	amb	dor	nte	dor	amb
9	amb	amb	amb	dor	dor	amb	dor	nte	dor	nte
10	dor	dor	dor	dor	dor	dor	dor	dor	dor	dor

ここでも、「-dor のみが容認可能」とした回答が 34 とおよそ七割を占めた。また、「いずれの形容詞も容認可能」とした回答も 12 件あった。いずれも、高い動作主性の意味上の主語と -dor 派生形容詞の相性の良さを示唆し、本章における記述の妥当性を補強するものである。

6-10 では、「-nte のみが容認可能」とした回答が 4 件あった。この回答は仮説の反例となり得るものであるが、これら 4 件の回答の内、3 件がインフォーマント H によるものであることは強調しておきたい。当該インフォーマントは、前節で紹介した 1-5 の質問においても一件、「-nte のみが容認可能」と回答しており、-nte 形容詞を好んで使う傾向にあると考えられる。

しかしながら、9 においてはインフォーマント H だけでなく、J も「-nte のみが容認可能」とし、さらに、A, B, C, F は「両方の形容詞が使用可能」としている。つまり、9 では、-nte による関係的形容詞が他の文に比べ容認されやすくなっている。その理由であるが、現代スペイン語においては *paralizante* という派生語が *paralizador* よりも単純に高い頻度で用いられていることと無関係ではないだろう。例えば *es TenTen* には、主語的な名詞、形容詞も含めた *paralizante* の用例が 4784 あるのに対し、*paralizador* のそれは 627 に留まる<sup>10</sup>。このように、*paralizante* が *paralizador* に比べ、より広く、頻繁に用いられていることから、9 における *paralizante* の容認性が他のケースに比べて高くなっていると推測される。

この点については、次節で詳細に扱う質問文 12 における回答の分布と併せて考えると興味深い。12 も関係的用法における *paralizador* と *paralizante* の容認性を問うものであるが、ここでは修飾される名詞が *efecto* であり、また、意味上の主語が使役的な道具ではなく、原因に相当するもの (*la toxina botulínica*) であるという点で異なっている。

12. La toxina botulínica paraliza los músculos. En efecto, la toxina botulínica (ボツリヌス毒素) tiene un efecto **paralizador/paralizante** (麻痺させる) .

このケースでの容認性に関する回答は以下の通り。

<sup>10</sup> *Paralizante* の出現頻度が *paralizador* よりも高いのは、動詞 *paralizar* の主語の大多数が原因相当の対象であることと無関係ではないだろう。例えば、*es TenTen* によれば、動詞、主語として *paralizar* と最も強く結びついている名詞は *miedo, terror, huelga* である。



表 4. Efecto paralizador/paralizante における関係的形容詞の選択

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
12	amb	nte	amb	amb	amb	amb	dor	nte	nte	nte

9 の場合と同様に、このケースは 関係的形容詞としての **paralizador/paralizante** の容認性を問うものであった。しかし、それにもかかわらず、回答の分布は 9 のものと比べ、大きく異なる。9 では **-nte** による形容詞のみが容認可能であったとしたインフォーマントは 2 名であったが、ここでは 4 名のインフォーマントが **-nte** のみを容認可能とした。それと同時に、9 では 4 名のインフォーマントが **paralizador** のみが容認可能としていたにもかかわらず、12 では同様の回答をしたインフォーマントは G のみであった。**-nte** による派生形容詞は語根の原因に相当する対象を表す名詞を意味上の主語とすることは仮説からも予想されていたことであり、また、**paralizante** は語としての使用頻度において **paralizador** を大きく上回っている。これらのことから、12 の **paralizante** が **paralizador** よりも好まれるという結果は 9 の結果に比べ、より必然的、自然なものであったといえるだろう。そしてこの二点を念頭に置けば、9 の結果の特異性が浮き彫りとなる。意味上の主語が使役的道具である場合には、それが原因である場合と比べ、**paralizador** の容認性が高くなり、**paralizante** のそれが低くなるという事実は両派生形容詞の容認性は意味上の主語のタイプに左右されること、そして、その「主語のタイプ」とは、使役性や動作へのコントロールといった動作主性と密接に関連していることを示唆するものである。

### 6.3.3. Efecto を修飾する関係的形容詞の意味上の主語の選択

関係的派生形容詞が名詞 **efecto** を修飾する場合は **acción, función** といった名詞を修飾する場合とは異なり、その意味上の主語の多くは語根動詞の原因に相当するものである。この点を踏まえ、両関係的形容詞は原因相当の対象を意味上の主語とし、これこそが両者間の類似点である、とする仮説を検証した。10 人のインフォーマントに以下の 11-15 の文を提示し、二種類の関係的形容詞の容認性を訊ねた。

11. La proteína aglutina los eritrocitos. Sí, la proteína (タンパク質) tiene **un efecto aglutinador/aglutinante** (接着する) de los eritrocitos.
12. La toxina botulínica paraliza los músculos. En efecto, la toxina botulínica (ボツリヌス毒素) tiene **un efecto paralizador/paralizante** (麻痺させる) .
13. Esta crema suaviza la piel. Sí, esta crema (このクリーム) tiene **un efecto suavizador/suavizante** (柔らかくする) .

14. Los vientos alisios suavizan el clima. Sí, los vientos ( 風 ) tienen **un efecto suavizador/suavizante** (和らげる) .

15. El plomo contamina el río. En efecto, el plomo ( 鉛 ) tiene **un efecto contaminador/contaminante** (汚染する) .

表 5. efecto 名詞句における関係的形容詞の選択

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
11	amb	dor	nte	amb	nte	nte	nte	dor	amb	nte
12	amb	nte	amb	amb	amb	amb	dor	nte	nte	nte
13	amb	nte	amb	nte	nte	amb	nte	nte	amb	nte
14	amb	dor	amb	amb	nte	amb	dor	nte	nte	nte
15	amb	amb	amb	amb	nte	nte	nte	nte	nte	nte

表に示したように、結果は予想されていた通り、前二節のものと大きく異なるものであった。前二節で紹介したケースでは、いずれも、「-dor のみ容認可能」とする回答が大多数を占めていたのに対し、11 - 15 のケースでは「-nte のみ容認可能」、「いずれも容認可能」とする回答が増えている。具体的には、「-dor のみ容認可能」とする回答が 5 件、「-nte のみ容認可能」が 25 件、「いずれも容認可能」が 20 件あった。

11 - 15 のような、形容詞の修飾する名詞が **efecto** で、かつ、意味上の主語が原因相当のものである場合、-nte 形容詞の容認性が上がることは予測されていたことである。「-dor のみ容認可能」という回答を除いた 45 の回答はいずれも -nte 形容詞の使用を認めるものである。-nte が最も典型的に編入、または修飾する対象は原因に相当することは、これまでの分析で、一貫して観察されてきた。そして、本章における分析によれば、-nte による関係的形容詞もまた、原因と強く結びついたものである。派生語のタイプを問わず、常に原因相当の対を選択することから、-nte は典型的に原因を選択する接辞であるといえることができるだろう。また、この結果はこれまでに繰り返し提示してきた記述から予測されるものであり、その妥当性を補強するものでもある。

一方の -dor 形容詞であるが、これを容認可能とする回答は 25 件あった。この接辞による形容詞が原因相当の対象を意味上の主語とすることは、コーパスにおける実例を調査する中で確認されており、-dor 形容詞を容認可能とする回答が一定数あることは予測されていた。そして、-nte は -dor よりも原因と強く結びついていることも、これまでの分析結果から予測されていたことである。11 - 15 の設問では表に示した通り、「いずれも容認可能」とする回答が 20 あったが、常に両形容詞の容認性が同等というわけではない。

例えば、11 についてインフォーマント D はいずれの形容詞も容認可能としつつも、“Ambos son gramaticalmente correctos, pero es mejor *aglutinante*.” としている。20 件の「いずれも容認可能」という回答が寄せられ、いずれも正しいが、-nte 形容詞の方がより自然であ

とするコメントが数件寄せられた<sup>11</sup>、その一方で、**-dor** 形容詞の方がより自然であるとするコメントはなかった。

この容認性の差はそれぞれの接辞が優先的に選択する意味タイプの違いから生じていると考えられる。四章では両接辞による主語的派生形容詞を分析した。分析によれば、いずれの接辞による形容詞も、語根の原因相当の対象を表す名詞を修飾していたが、結びつきの強さは異なっていた。四章で検討した形容詞のペアではほぼすべての場合において、**-nte** 形容詞の方がコロケーションとしてそうした名詞と強く結びついていた。そして、このコロケーションとしての強度の違いは、**-dor** にとっては原因の編入、修飾が二次的なものである一方で、**-nte** にとってはそれが主要な機能であることから生じていると結論づけた。つまり、関係的形容詞派生接辞としての両者の間にも、**-dor** は使役的動作主と道具を典型的に選択し、**-nte** は原因を典型的に選択するという意味的な差異が根本的なレベルにおいて存在しているのだと考えられる。

#### 6.3.4. Actitud を修飾する関係的形容詞の意味上の主語の選択

今回分析した **actitud** を主要部とする名詞句のペアにおいては、関係的派生形容詞の語根が活動動詞や状態動詞であるものが散見された。コーパスから収集したこれらの名詞句の実例の観察によれば、こうした関係的形容詞はともに非使役的動作主や非動作主を意味上の主語として選択する。6.2.5. で述べたように、この点は両者の意味的な類似点であると考えられる。本節ではこの説明の妥当性を検証していく。

以下に挙げたように意味上の主語が非使役的動作主である、両タイプの派生形容詞の容認性に関する設問を設けた。

16. José (人名) interroga a Pablo. Su actitud interrogadora/interrogante (尋問する) me parece muy descarada.

17. El autor (著者) tiene una postura muy objetiva. Su actitud objetivadora/objetivante (客観視する) hace sus obras muy relevantes.

18. Como somos científicos, para nosotros (我々) , cuestionar el mundo es lo más importante. Es decir, tenemos que tener **actitud cuestionadora/cuestionante** (疑問視する) .

容認性に関する回答は以下のとおりであった。

<sup>11</sup> 12 について、インフォーマント D が “Ambas son correctas, pero mejor *paralizante*.”、インフォーマント F が “*Paralizante* me suena mucho mejor que *paralizador* en este contexto, aunque tampoco diría que *paralizador* esté mal. Quizá en este caso es por frecuencia de uso.”、J が “Las dos suenan bien, aunque elegiría “*paralizante*”” と述べている。その他の設問についても、同種のコメントが寄せられた。

表 6. actitud 名詞句における関係的形容詞の選択

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
16	amb	amb	dor	nte	nte	dor	dor	amb	dor	nte
17	nin	nin	dor	nin	nte	nin	dor	dor	nte	nte
18	dor	dor	nin	dor	dor	dor	dor	nte	dor	amb

16 では四人のインフォーマントが「-dor 形容詞のみ容認可能」、三人のインフォーマントが「-nte 形容詞のみ容認可能」、残りの三人のインフォーマントが「両形容詞が容認可能」とし、容認性に関する判断が別れた。これは派生形容詞の語根動詞が活動動詞であることと関係しているように思われる。これまでに述べてきたように、両接辞による派生語は、活動動詞の主語に相当する動作に対するコントロールを有しつつも使役性は持たない対象の編入・修飾を問題なく行うことができる。活動動詞の主語相当の対象は本質的に、両接辞と問題なく共起し得る性質のものであるために、最終的な -dor, -nte の選択は話者一人一人の判断、意味以外の要因にゆだねられることが予測される。

17 でも容認性に関する判断が別れている。三人のインフォーマントが -dor のみを、別の三名が -nte のみを容認すると回答している。また、ここでは四名のインフォーマントがいずれも容認しないと回答した。

18 では八名のインフォーマントが「-dor のみを容認する」と回答した。ここで判断が偏った理由としては、cuestionador という語自体の使用頻度が cuestionante のそれに比べ三倍近く高いことによると考えられる<sup>12</sup>。

次に、意味上の主語が非動作主である、actitud triunfadora/triunfante, desafiadora/desafiante の容認性を訊ねた。実際に提示した設問と、回答は以下のとおりである。

19. Desafiamos el peligro. Mantengamos esta **actitud desafiadora/desafiante** (挑む) .

20. Están muy contentos con el resultado del partido. Su (彼らの) **actitud triunfadora/triunfante** (勝ち誇る) me hace mucha gracia.

表 2. actitud 名詞句における関係的形容詞の選択

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
19	amb	dor	nte	nte	nte	nte	nte	nte	nte	nte
20	amb	nte	nte	amb	dor	nte	nte	nte	dor	nte

19, 20 で問題としたのは 15-18 と同様に、actitud を主要部とする名詞句であるが、ここでは容認性に関する判断が後者の場合とは大幅に異なる。一見してわかるように、-nte のみを容認可能とする回答が大多数を占めている。このことから、少なくとも desafiador と triunfar を語根とする両接辞による関係的形容詞はいずれも非動作主を選択するが、その場

<sup>12</sup> es TenTen における cuestionador の生起回数は 1360、一方の cuestionante は 448 回であった。

合、スペインでは **-nte** による派生形容詞を使用するほうが母語話者にとってより自然であるということがいえる。**-dor** は使役的動作主や道具を編入、修飾、選択することを一義的機能とする接辞であり、状態動詞の主語に相当する対象、非動作主と意味上の相性が悪いいため、この容認性の差が生じるのだと考えられる。

#### 6.4. まとめ

本章では「名詞 + 両接辞による同一の動詞を語根とする派生形容詞」のペアについて、コーパスから収集した実例を観察し、得られた仮説を母語話者へのアンケートを通じて検証した。目的は両接辞による関係的形容詞の間にどのような意味的な類似点、差異があるのかを明らかにすること、および、関係的形容詞を派生する接辞としての両者の持つ意味的な性質を記述することにあつた。

設定した二種類の問題は、いずれも意味上の主語と密接に関連したものであつた。前章で述べたように、関係的用法における両形容詞の修飾する名詞は、その語根動詞に相当するものではない。しかしながら、その語根の表す動作の主語に相当する対象は文脈から読み取ることが可能であり、そうした主語にあたる対象を表す名詞を本研究では意味上の主語と呼んでいる。そして、この意味上の主語の選択に関する基準という観点から、本章では先に挙げた二種類の問題を説明した。

まず、両者の明らかな差異として、使役的動作主や道具という動作主性の高い対象を意味上の主語として選択するのは基本的に **-dor** 形容詞に限られることが挙げられる。この点は、**-dor** による関係的形容詞、ひいては、そうした形容詞を派生する接辞としての **-dor** の特徴的な性質として考えられるだろう。**-dor** による派生語は主語的な派生名詞であればそうした対象を典型的に表し、派生形容詞であれば、そうした対象を表す名詞とコロケーションとして強く結びついていた。このように、**-dor** は派生する語のタイプに関わらず、常に高い動作主性を持った対象を選択するものである。

一方の **-nte** による関係的形容詞の意味的な特徴として、語根の原因にあたる対象を **-dor** よりも高い頻度で選択するということが挙げられる。観察によれば、**-dor** による関係的形容詞も原因相当の対象を意味上の主語として選択し得る。しかしながら、インフォーマントへのアンケート調査によれば、意味上の主語が原因である場合は、**-nte** 形容詞の方がより好まれるようである。同様の傾向は、**-nte** による主語的な名詞や形容詞にもみられる。以上の点から、現代における **-nte** は語根動詞の主語の中でも特に、原因相当の対象と強く結びついた接辞であると性格づけられるだろう。また、非動作主を意味上の主語とする *actitud cuestionadora/cuestionante*、並びに、*actitud desafiadora/desafiante* のペアにおいても、**-nte** 形容詞の使用が好まれることを確認した。根拠となるデータ数は少ないものの、この事実もまた、関係的形容詞としての **-nte** の特質を示唆するものであると考える。



## 7. 結論

本論では *-dor*, *-nte* 両接辞の持つ意味的な性質を明らかにするために、それらによって形成される主語的な名詞、形容詞、および関係的形容詞を分析した<sup>1</sup>。そして分析により、いずれのタイプの派生語も語根動詞の主語と意味論上、密接に関連していることが明らかになった。両接辞による派生名詞であれば、それは編入された語根動詞の主語を表すものであり (cf. 二章、三章)、派生形容詞であれば語根動詞の主語に相当する対象を表す名詞を修飾する (cf. 四章)。関係的派生形容詞は語根動詞の主語相当の対象を表す名詞を直接修飾するわけではないが、当該動詞の主語に相当する対象を意味上の主語として選択する (cf. 五章、六章)。

このように、両接辞による派生語はなんらかの形で語根動詞の主語と結びついているが、いずれの場合においても、自由に語根動詞の主語を編入、修飾、あるいは意味上の主語として選択することができるわけではない。両接辞はそれぞれ、派生語の品詞、用法の別を問わず、一定の基準で主語を選択していることが分析の結果判明した。この選択基準こそが両接辞を特徴づける意味的な性質であると考えられる。

二章ではコーパス、*Corpus del español* から収集した 20 世紀以降に一度以上の使用が確認された両接辞による派生名詞を分析し、両者による主語編入の規則を探った。そしてこの規則は、語彙的使役性と主語の動作に対するコントロールの有無という二種類の素性の値の組み合わせとして説明可能であるとした。この章の分析結果は以下のようにまとめられる。

### *-dor*

- *+CON*, *+CAU* (使役的動作主・道具) であるような対象を編入する。*-nte* はほぼ、こうした対象を編入しないため、こうした対象の編入は *-dor* の固有性の性質であると考えられる
- 活動動詞の *+CON*, *-CAU* (非使役的動作主) であるような対象を編入する。また、典型的には状態動詞と考えられている動詞に付加された場合にも、同タイプの対象を編入することがある (ex. *vividor*)。これは *-dor* の動作主性への強い結びつきを示唆するものである
- 語彙的使役動詞からは *-CON*, *+CAU* という原因にあたる対象を編入しているケースも一定数確認した。しかしながら、使役的動作主・道具を外項にとりうる動詞であれば、後者を優先して編入する
- *-CON*, *-CAU* であるような対象を編入することは稀であり、非対格動詞や再帰動詞

---

<sup>1</sup> ここで挙げた派生語以外にも、両接辞による派生語には場所を表す名詞 (二章を参照) や主語的でも関係的でもない形容詞がある (四章を参照)。しかしながらこうした派生語の生産性は極めて限定的であり、両接辞の意味的価値を考察する上で、分析の対象からは除外した。

の内項相当の対象を編入するケースは確認されていない

-nte

- +CON, +CAU であるような対象、使役的動作主・道具を編入することは極めて稀である
- +CON, -CAU であるような対象、非使役的動作主を編入するケースを一定数確認した。しかしながら、-dor とは異なり、状態動詞からこうした対象を表す派生名詞を形成しない
- -CON, +CAU であるような対象、原因を表す。-dor とは異なり、原則的に、語彙的使役動詞からは専ら、こうした対象のみを編入する
- -CON, -CAU であるような対象、非動作主や非使役的道具を -dor よりも編入することが多い。この点は -dor との意味的な差異であると考えられる。語根動詞の内項にあたる対象を -dor とは異なり編入する。この点もまた、-nte と -dor を区別するものであると考えられる

この分析の結果から、両接辞による語根の主語の編入に関わる基準は以下のようなものであると仮定した。

-dor 接辞は CON, CAU という二種類の語彙的素性の内、少なくともどちらかが + であるような対象を編入する。

-nte は CON, CAU という二種類の語彙的素性の両方が + であるような対象を編入しない。

三章ではこの仮定を検証するために、分析対象を新語的な派生名詞に限定し、再度、同様の分析を行った。分析対象を新語に限定したのは、そうした派生名詞の意味は、語根動詞の意味と接辞以外の要因からほとんど影響を受けていないことが期待されるためである。

この分析の結果は仮説の妥当性を支持するものであった。つまり、-dor による新語的な派生名詞の大多数は使役的動作主や道具といった極めて高い動作主性を持った対象を編入したものであり、-nte による新語的派生名詞でそうした対象を編入しているものはごく少数の例外に限定されていた。一方で、観察した新語的な -nte 名詞の中には 非動作主や内項相当の対象といった低い動作主性の対象を編入しているものがあった。そして -dor がこうした対象を編入することは稀であることを確認した。

三章における分析結果と二章におけるものを併せて考えることで、-nte の意味的な性質がより明確な形で記述することが可能となった。二章における非新語を含む分析では、-nte 名詞の表す対象として最も頻繁に観察されたのは非使役的動作主であったが、三章におけ



る分析により、新語的な **-nte** 名詞の半数以上が原因相当の対象を表すことがわかった。この事実は **-nte** の現代における最も典型的な機能は、原因相当の対象の編入であることを示すものである。

**-dor** が高い動作主性、**-nte** がより低い動作主性に寄っているという対比は主語的な派生形容詞を形成する接辞としての両者の間にも観察される。四章ではコロケーションを切り口とし、名詞派生接辞としての両者による編入と、形容詞派生接辞としての両者による修飾の間には並行性があることを示した。

同章では **cortador/cortante** のような同じ動詞を語根とする派生形容詞のペアを、それらがどういった名詞を典型的に修飾しているのか、または、コロケーションとして結びついているのかを分析した。その結果、ほぼすべてのペアにおいて、片方のタイプによってのみ修飾され、もう片方のタイプによっては決して修飾されることのない名詞があることが明らかになった。そして分析により、この二種類の形容詞の、いわば修飾における「分担関係」も不規則なものではなく、規則に沿うものであることが明らかになった。観察によれば、派生形容詞の語根にとって使役的動作主や道具にあたる対象を表す名詞を修飾するのは **-dor** 形容詞のみであった。一方で、語根の内項に相当する対象、つまり、低い動作主性の対象を表す名詞を修飾するのは **-nte** 形容詞のみであった。この事実は形容詞を派生するプロセスでも、同様の規則が適用されることを示すものである。

先行研究で主に扱われてきたのが、上述の主語的な派生名詞および派生形容詞であった。本論では、これまでにほとんど論じられることのなかった両接辞による関係的な派生形容詞も分析の対象とした。このタイプの形容詞の分析は五章と六章で行った。まず五章では、このタイプの派生語がこれまでの先行研究で十分に観察、分析されていなかったことを指摘し、この用法が四章で扱った主語的用法の形容詞と意味、統語レベルで異なるものであることを示した。そして、この用法は主語的用法とは別個に扱われるべきものであると結論づけた。この用法は、より具体的には修飾する名詞と派生形容詞の語根の表す動作・状態を関連付ける用法と説明することができるだろう。

また、この用法がいつ、どのように生じたものであるのかについても同章で論じた。五章では Rainer y Wolborska-Lauter (2012) および Tsutahara (2015b) を紹介しながら、関係的形容詞は 19 世紀初頭前後に生じ、20 世紀中ごろ以降に広く使用されるようになったことを示した。

併せて、同章ではこの用法の自発性、表現手段としての自然さも考察した。先述したように、関係的形容詞の使用は、修飾する名詞と語根の表す動作を関連付ける表現手段であるが、現代スペイン語において、これが唯一の手段であるわけではない。例えば、「前置詞 **de** + 動詞の不定詞」句も同様の表現上の効果を持つ。858 種類の名詞と関係的派生形容詞からなる句を対応する前置詞を用いた句と比較、分析したところ、そのうちの 765 が現代においては同義的な 名詞 + **de** + **V** 句よりも使用頻度が高いことが確認された。このことから、現代において、両タイプの形容詞の関係的用法は例外、周縁的用法というよりも、名詞と動作の

関連性を表すための有力な表現手段であるといえるだろう。したがって、両接辞の意味的な性質を明らかにするためには、関係的派生形容詞も網羅的に分析していく必要があると述べた。

この観点から、六章では両接辞による関係的な派生形容詞のペアを分析し、それぞれのタイプの形容詞の意味上の固有性を明らかにし、その差異と類似点を明らかにすることを目指した。当該の章では *acción limitadora/limitante* のような名詞句のペアを分析し、これらの名詞句はそれ自体、一見同義的であるものの、意味上の主語の選択のパターンで異なっていることを示した。関係的用法における両接辞の差異が明らかとなったのは、Tsutahara (2016a), および、本論においてのことである。したがって、この点は本研究の、両接辞に関する研究、およびスペイン語における派生の意味論への最大の寄与である。

観察によれば、両タイプの関係的形容詞もまた、同接辞による主語的な名詞や形容詞と同様に自由に意味上の主語を選択するわけではなく、一定の基準に基づき選択を行っていた。そしてこの基準もまた、主語的な名詞や形容詞を派生する接辞としての両接辞の編入、修飾に関わる規則と同種のものであった。例えば先に紹介した *acción limitadora/limitante* であれば、いずれも、「抑制行動」として理解されるものだが、両者は何が（誰が）抑制を行うかという点で異なっている。コーパスから収集したデータ、および、インフォーマント調査によれば、前者のみがなんらかの装置、つまり使役的道具による抑制行動を表すことが可能で、後者は専ら、*limitar* という動作の原因相当の対象による抑制行動を表す。このように、両接辞による関係的形容詞というレベルにおいても、*-dor* が高い動作主性を持った対象を、*-nte* はそれよりも低い動作主性対象を選択するという対比が観察される。

ここまで扱ってきた両接辞の形成する派生語はそれぞれ、形態、統語レベルで異なるものである。しかしながら、両接辞による派生語は、そのタイプを問わず、常に語根動詞の主語にあたる対象をなんらかの形で要求する。そして、上述したとおり、それぞれの接辞は、それぞれに固有の一貫した基準により、編入、修飾する主語を選択していた。この基準は両接辞の意味的な性質と考えられるものであり、また、両者を区別するものでもある。

次節以降では、これまでの観察、分析から得られた知見を基に序章で設定した三種類の問題、つまり、両タイプの派生名詞の多義性、派生の容認性の予測の可否、そして両接辞が現在でも使用され続けている理由についてそれぞれ別個に論じていく。これを以て本論のまとめとしたい。

### 7.1. 両接辞による派生語と多義性

一章で述べたように、両接辞による主語的な派生名詞は二重の意味で多義的である。まず、一口に「*-dor* による派生名詞」といっても、その中には使役的な動作主、道具、使役性を持たない動作主や非動作主といった様々な意味タイプの対象を表すものがある。これは *-nte* による派生名詞の場合でも同様である。そして、実際に具体的な派生名詞一つ一つについても、一つの名詞が複数の意味タイプの対象を表すことは決して珍しくない (ex. *cortador*

‘何かを切る人物、道具’)。

本研究の第一の目標は、何故、この多義性が生じるのかという点について説明を与え、そして一つ一つの名詞について、その語が持ちうる意味、持ち得ない意味、いわば、多義の範囲の予測を行うことであった。この問題は、語根の動詞としての振る舞いと、両接辞の編入に関する基準から説明することができると考える。

まず、スペイン語の動詞は複数の意味タイプの対象を主語とすることができる。以下の例を参照されたい<sup>2</sup>。

- (1) Antes de usar un secador no olvides retirar todo el exceso de agua con una toalla. Luego, puedes **secar** el cabello siempre a una distancia de 15 cm del cabello y a una temperatura mínima o mediana.
- (2) Esta máquina **seca** el rumen extraído del estómago de los animales recién sacrificados, una vez seco es usado como sustituto para leña.
- (3) Los cambios en la viscosidad del aceite (el aceite **se seca** con el paso del tiempo) pueden provocar roces y dañar así la precisión del mecanismo (acelerarlo, ralentizarlo, pararlo).

(1) - (3) には動詞 **secar** が含まれているが、それぞれ異なる意味タイプの対象を主語としている。(1) では **secar** という使役性を含む動作を意図的に行う人物、つまり使役的動作主が、(2) では機械、即ち使役的道具が主語となっている。(3) では当該動詞は再帰形で用いられており、主語の **aceite** はこの動作の表す変化を被っている。このように、ある動詞が様々な意味タイプの対象を主語とするのは **secar** に限ったことではなく、現代スペイン語において頻繁に観察される現象である。動詞が潜在的に様々なタイプの主語を選択するものであり、接辞はそれを編入するものである以上、派生名詞が多義的になるのは当然といえる。

この事実に加え、名詞派生接辞としての両接辞は一定の基準により、動詞の主語を選択したうえで編入していることを念頭に置けば、両接辞による派生名詞がどのような意味を持ち得て、どのような意味を持ち得ないのかも予測することができるだろう。

先に挙げた **secar** は大きく分けて三種類の意味タイプの主語をとる。そして両接辞は付加された動詞の主語を編入する性質を持つものである。従って、まず、派生名詞 **secador, secante** は使役的動作主、道具、内項相当の対象を表すことが予測される。そして、本論における分析で明らかになった両接辞の意味的性質から、さらに正確な予測が可能となる。

まず、**-dor** であるが、分析によればこの接辞は使役性と動作に対するコントロールを併せ

---

<sup>2</sup> いずれも **esTenTen** より引用。太字による強調は筆者による。これ以降の例文についても特に説明のないものは同様である。

持つ対象を典型的に編入し、一方、そのいずれも持たない対象を編入しない。従って、派生名詞 *secador* についてはこの二種類の性質を持つ使役的動作主と道具を編入すること、つまり、何かを乾かす人物、乾かす道具を表す一方で、(3) のような内項相当の対象を表すことはないことが予測される。そして本研究で用いた辞書、西和中、DRAE には予測された語義の記載がある。

一方の *secante* であるが、この名詞を派生する *-nte* は *-dor* とは異なり使役的な動作主や道具を編入しない一方で、内項に相当するような低い動作主性の対象を編入することが明らかになっている。従って、この派生名詞は何かを乾かす人物や道具を表すことはなく、(3) のような内項相当の主語を表すと予測される。二章で使用した西和中、DRAE 両辞書における記載もこの予測に沿うものであった。

本研究で設定した第一の多義性に関する問題は、両接辞の持つ固有の意味的性質から、以上のように説明される。

## 7.2. 両接辞による派生語の容認性

両接辞による派生の容認性について、意味の観点から論じること序章で設定した課題である。両接辞、特に *-dor* が現代においても高い生産性を有することは両接辞による新語的派生名詞を扱った三章で指摘したとおりであるが、いずれも、無制限に動詞に付加することができるわけではない。つまり容認されない派生も存在する。例えば、現代スペイン語には「暗号を解読する人物、道具」を表す単純名詞は存在しない。従って、そうした対象を表すために、「暗号を解読する」という動作を表す動詞 *desencriptar* を語根とした名詞を両接辞によって派生する余地は存在するといえるだろう。しかしながら、実際にはこの動詞に付加されるのは *-dor* のみであり、*-nte* による派生は容認されない。この二種類の派生の容認性も、両接辞の異なる主語選択の基準から予測可能である。この動詞は語彙的使役動詞であり、その主語は常に動作主かコンピュータープログラムを含む道具のどちらかである。そしてこれまでの分析によれば、*-dor* はそうした対象を典型的に編入する一方で、*-nte* がそうした編入するケースは極めて稀である。*-nte* はこうした高い動作主性を持つ対象を制限していると考えられ、*desencriptar* のような使役的動作主と道具のみを主語とする動詞に付加されたところで、編入することのできる外項が存在しないために、この派生は容認されないのであると考えられる。現代スペイン語において、*-dor/-nte* による派生の容認性はこのように、意味的な要因によって左右されるものであり、本研究によって明らかになった両接辞の持つ意味的性質は、派生の容認性を一定の度合いまで予測することを可能にしたといえる。

しかしながら、派生の容認を左右するのは必ずしも意味的な要因だけではない。そうした要因として、阻止現象といったパラダイム上のものが挙げられる。例えば、*ladrón* という語が既に存在するために「盗む人物」を表すために、*robar* を語根とした派生は定着することにはなかった (cf. Laca (1993))。このように、派生が定着に至らない、あるいは容認されない要因には意味以外のものもある。

### 7.3. 両接辞による派生語の意味上の差異と共通点

両接辞は辞書レベルでは「動詞について」「…する(ような)」、「…する人」を表す形容詞、名詞派生接辞」(西和中)、『que ejecuta la acción expresada por la base』(DRAE)と説明されている。こうした定義はもちろん、両接辞の意味的な本質を捉えたものではあるが、十分なものではない。本研究で得られた成果は両接辞の類似点と差異を明確にし、ひいてはスペイン語という同一言語内で二種類の主語的接辞がそれぞれ生産性を保ち続けている理由、つまり **multiple affix question** を説明することを可能にしたものである。この問題も、序章で設定した問題の一つである。

繰り返し述べているように、両接辞は、語根の主語を編入、修飾、または意味上の主語とするという点では類似しているものの、その際に異なる基準に従っている。具体的には、**-dor** は典型的には語根動詞の動作主や道具にあたる対象を選択する接辞であり、**-nte** によるものは語根の原因や非使役の動作主、経験者を選択するものである。この対比は両接辞が派生する語のタイプに関わらず、常に観察される。

そして、このように考えれば、現代においても一見極めて同義的な二種類の接辞が共に一定の生産性を保ち、共存している理由も自明であろう。つまり、両者は共に語根の主語を表す名詞、またはそうした対象を修飾する形容詞を形成するが、**-dor** による派生語は高い動作主性を持つ主語を、**-nte** による派生語はそれよりも低い動作主性を持つ主語を編入、修飾するという意味上の分担関係が観察される。こうした動作主性の高低を表現し分けることが、現代にいたっても両接辞がスペイン語の中で共存している理由であると考えられる。この分担関係が存在することにより、スペイン語では動作主や道具、原因について、それらの動作に対するあり方を明確に表現することが可能となっている。同様のことは両接辞による関係的形容詞にもいえる。五章ではこうした形容詞について、それらが修飾する名詞を語根の表す動作・状態と関連付ける機能を持つとしたが、上記の観点からより明確に、両タイプの形容詞を説明し分けることも可能だろう。六章では両タイプの関係的形容詞は異なる基準に基づき意味上の主語を選択することを明らかにした。そしてその意味上の主語の選択基準は、主語的な名詞や形容詞を派生する接辞のそれと同様のものであった。つまり、**-dor** による関係的形容詞はより正確には、高い動作主性を持った主語による動作と修飾される名詞を関連付けるものであり、**-nte** による関係的形容詞は低い動作主性を持った主語による動作と修飾される名詞を関連付けるものである。

以上、本論では **-dor**, **-nte** 両接辞による派生語の網羅的分析を実施した。それぞれの接辞の意味的な性質を記述し、両タイプの派生名詞の多義性、派生の容認性の予測の可否、そして現代スペイン語において両接辞がともに生産性を維持している意義について見解を示した。



## 参考文献

- Aguilar-Amat, Anna. (1994). *Las colocaciones de nombre y adjetivo. Un paso hacia una teoría léxico-semántica de la traducción*. Tesis doctoral. Universidad autónoma de Barcelona.
- Alexiadou, Artemis., & Schäfer, Florian. (2006). Instrument subjects are agents or causers. *Proceedings of WCCFL*, 25, 40-48.
- Alexiadou, Artemis., & Schäfer, Florian. (2008). Instrumental -er nominals revisited. *online proceedings of WCCFL*, 27: <http://www.linguistics.ucla.edu/faciliti/wpl/issues/wccfl27/papers/alexiadouetal.pdf>
- Alexiadou, Artemis., & Schäfer, Florian. (2010). On the syntax of episodic vs. dispositional -er nominals. Rathert, M., & Alexiadou, A. (eds.). *Nominalizations across languages and frameworks*. Berlin: Mouton de Gruyter, 9-38.
- Alemaný Bolufer, José. (1920). *Tratado de la formación de palabras en la lengua castellana: la derivación y la composición*. Madrid: Librería General de Victorino Nuñez.
- Alvar Ezquerro, Manuel. (2007). El neologismo español actual. In: Toro, L. (org.). *Léxico español Actual, Actas del I Congreso Internacional de Léxico Español Actual*. Veneza: Libreria Editrice Cafoscarina, 11 – 35.
- Andreou, Marios. (2014). *Headedness in Word Formation and Lexical Semantics: evidence from Italian and Cypriot*. University of Padras: Dissertation.
- Aronoff, Mark. (1976). *Morphology in Generative Grammar*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Aronoff, Mark. (1984). Word formation and lexical semantics. *Quaderni di Semantica*, 5 (1), 45-49.
- Bauer, Laurie. (1983). *English Word Formation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bauer, Laurie., Lieber, Rochelle., & Plag, Ingo. (2013). *The Oxford Reference Guide to English Morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Beniers, Elizabeth. (1992). Los nombres de agente. *Estudios de lingüística aplicada*, 15-16, 11-20.
- Biber, Douglas. (2012). Corpus-based and corpus-driven analyses of language variation and use. In Heine, B., & Narrog, H. (eds.). *The Oxford handbook of linguistic analysis*. Oxford: Oxford University Press.
- Bisetto, Antonietta. (2006). The Italian Suffix-tore. *Lingue e linguaggio*, 2, 261-280.
- Bisetto, Antonietta., & Scalise, Sergio. (2005). The classification of compounds. *Lingue e linguaggio*, 4(2), 319-0.
- Bisetto, Antonietta. & Melloni Chiara. (2005). Result Nominals: A Lexical-Semantic Investigation. *On-line Proceedings of the Fifth Mediterranean Morphology Meeting (MMM5)*, 15-18.
- Booij, Geert., & Lieber, Rochelle. (2004). On the paradigmatic nature of affixal semantics in English and Dutch. *Linguistics*, 42.2, 327-358.
- Bosque, Ignacio. (dir). (2004). *Redes: Diccionario combinatorio de español contemporáneo*. Madrid:

- Ediciones SM. (REDES).
- Bosque, Ignacio. (2006). Coordinated adjectives and the interpretation of number features. In Brugè L. *Studies in Spanish Syntax*. Venezia: Libreria Editrice Cafoscarina, 47-60.
- Bosque, Ignacio., y Demonte, Violeta (eds.). (1999). *Gramática descriptiva de la lengua española*. Madrid: Espasa Calpe.
- Bustos Plaza, Alberto. (2006). Verbos generales y verbos específicos: conjuntos y clases de argumentos en colocaciones de verbo y sustantivo. *EPOS*, XXII, 51-65.
- Cano Cambroner, María de los Ángeles. (2010a). La interfaz léxico-sintaxis: el caso de los verbos de movimiento en inglés y en español. *Interlingüística*, 20. [http://filcat.uab.cat/clt/XXIVAJL/Interlinguistica/Encuentro%20XXIV/Cano\\_Cambroner\\_REV\\_F.pdf](http://filcat.uab.cat/clt/XXIVAJL/Interlinguistica/Encuentro%20XXIV/Cano_Cambroner_REV_F.pdf).
- Cano Cambroner, María de los Ángeles. (2010b). Características temporales y aspectuales de los adjetivos deverbales en -nte no predicativos. *Hesperia: Anuario de filología hispánica*, 13, 91-100.
- Cano Cambroner, María de los Ángeles. (2013). *Las derivaciones en -nte y -dor: estructura argumental y complejidad sintáctica en una morfología neoconstruccionista*. Tesis doctoral. La Universidad Autónoma de Madrid.
- Castillo, María. (1998). "El término 'colocación' en la lingüística actual". *LEA*, 20/1, 41-54.
- Cheng, Winnie. (2012). *Exploring corpus linguistics: Language in action*. London: Routledge.
- Cifuentes, José Luis. (1999a). Inacusatividad y movimiento. *Revista española de lingüística*, 29, 31-61.
- Cifuentes, José Luis. (1999b). Bases sintácticas y bases semánticas de la inacusatividad en verbos de movimiento. *Revista de investigación lingüística*, 2-vol.II, 37-72
- Cifuentes, José Luis y Lavale Ortiz, Ruth María. (2009). Sobre verbos denominales: construcciones causativas y de localización. *Quaderns de filología. Estudios lingüísticos*, 14, 57-75.
- Cifuentes, José Luis., & Rodríguez, Susana. (eds.). (2011). *Spanish Word Formation and Lexical Creation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Copley, Bridget., & Martin, Fabienne. (eds.). (2014). *Causation in grammatical structures*. Oxford: Oxford University Press.
- Corpas, Pastor. (1996). *Manual de fraseología española*. Madrid: Gredos.
- Corominas, Joan. (1954). *Diccionario crítico etimológico de la lengua castellana*. Madrid: Gredos.
- Demirdache, Hamida., & Martin, Fabienne. (2015). Agent control over non-culminating events. In Barrajón López, E. (et al. eds.). *Verbal classes and aspect*. 185-217.
- De Miguel, Elena. (ed.). (2009). *Panorama de la lexicografía*. Barcelona: Ariel.
- Dixon, Robert Malcom Ward. (2000). A typology of causatives: form, syntax and meaning. In Dixon, R., & Aikhenvald, A. (eds.). *Changing Valency: Case Studies in Transitivity*. Cambridge: Cambridge University Press, 30-83.



- Dowty, David. (1991). Thematic proto-roles and argument selection. *Language*, 67-3, 547-619.
- Escandel Vidal, María Victoria. (1995). *Los complementos del nombre*. Madrid: Arco Libros.
- Fábregas, Antonio. (2010). A syntactic account of affix rivalry in Spanish nominalizations. In Rathert, M., & Alexiadou, A. (eds.). *The Syntax of Nominalizations across Languages and Frameworks*. Berlin: Mouton de Gruyter, 67-90.
- Fábregas, Antonio., & Marín, Rafael. (2012). The role of aktionsart in deverbal nouns: State nominalizations across languages. *Journal of Linguistics*, 48 (1), 35-70.
- Fernández Lázaro, Gisele. (2014). Enseñanza-aprendizaje de las colocaciones en nivel inicial (A1 -A2). *MarcoELE: Revista de didáctica de español como lengua extranjera*, 19, 1-16.
- Ferret, Karen., Soare, Elena., & Villoing, Forence. (2010). Rivalry between French *-age* and *-ée*: the role of grammatical aspect in nominalization. In Aloni M., Bastiaanse, H., de Jager, T., & Schulz, K. (eds.). *Logic, Language and Meaning*. Berlin: Springer Berlin Heidelberg, 284-294.
- Ferret, Karen., & Villoing, Florence. (2015). French N-age instrumentals: semantic properties of the base verb. *Morphology*, 25(4), 473-496.
- Fradin, Bernard. (2012). Remarks on state denoting nominalizations. *Recherches linguistiques de Vincennes*, 1, 73-99.
- González, Ana Orol., & Alonso Ramos, Margarita. (2013). A comparative study of collocations in a native corpus and a learner corpus of Spanish. *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, 95, 563-570.
- Gràcia, Lluisa. (2013). Los nombres agentivos en "-dor" y la noción de herencia en morfología. *Anuario del Seminario de Filología Vasca "Julio de Urquijo"*, 51-66.
- Grupo DiCE. (2004). *Diccionario de colocaciones de español*. <http://www.dicesp.com/paginas>
- Gunkel, Lutz., & Zifonun, Gisela. (2008). Constraints on relational-adjective noun constructions: A comparative view on English, German and French. *Zeitschrift für anglistik und amerikanistik*, 56 (3), 283-302.
- Gutiérrez Gutiérrez, Carmen., Palomo García, Carmen., y González Ordás Emilia. (2011). *Diccionario de neologismos*. León: Everest.
- Harley, Heidi. (2008). On the causative construction. In Miyagawa, S. (ed). *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, 20-53.
- Heinold, Simone Beatriz. (2010). *Verbal properties of deverbal nominals: an aspectual analysis of French, German and English*. Dissertation. University of Stuttgart.
- 堀正広 (2009). 『英語コロケーション研究入門』 東京: 研究社
- 堀正広 (編) (2012). 『これからのコロケーション研究』 東京: ひつじ書房
- Írsula, José. (1992). Colocaciones sustantivo-verbo. En Wotjak, G. (ed.). *Estudios de lexicología y metalexicografía del español actual*. Berlin: De Gruyter. 159- 167
- 石川慎一郎 (2012). 『ベーシックコーパス言語学』 東京: ひつじ書房

- Jakubíček, Miloš., Kilgarriff, Adam., Kovář, Vojtěch., Rychlý, Pavel., & Suchomel, Vít. (2013). The tenten corpus family. *7th International Corpus Linguistics Conference CL*, 125-127.
- Kawaletz, Lea., & Plag, Ingo. (2015). Predicting the Semantics of English Nominalizations: A Frame-Based Analysis of *-ment* Suffixation. *Semantics of Complex Words*, 289-319. Berlin: Springer International Publishing.
- Kilgarriff, Adam., & Grefenstette, Gregory. (2003). Introduction to the special issue on the web as corpus. *Computational linguistics*, 29(3), 333-347.
- Koike, Kazumi. (1996). Verbos colocacionales en español. *Hispánica*, 40, 14-31.
- Koike, Kazumi. (2001). *Colocaciones léxicas en el español actual: estudio formal y léxico-semántico*. Alcalá de Henares: Universidad de Alcalá / Takushoku University.
- Laca, Brenda. (1993). Las nominalizaciones orientadas y los derivados españoles en "-dor" y "-nte". En Varela, S. (eds.). *La formación de las palabras*, 180-204. Madrid: Taurus.
- Lang, Mervyn. (1990). *Spanish word formation: productive derivational morphology in the modern lexis*. London: Routledge.
- Lapesa, Rafael. (1968). *Historia de la lengua española*. Madrid: Gredos.
- Lavale Ortiz, Ruth María. (2013). *Verbos denominales causativos en español actual*. Tesis doctoral. Universidad de Alicante.
- Leumann, Manu., & Hofmann, Joh Bapt. (1928). *Stolz-Schmalz lateinische grammatik*, 5ª edición. München: Beck'sche Buchhandlung.
- Lieber, Rochelle. (2004). *Morphology and lexical semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lieber, Rochelle. (2015). The semantics of transposition. *Morphology Special issue semantics in derivational morphology*, 1-17.
- Lüdtke, Jens. (2005). *Romanische Wortbildung. Inhaltlich – diachronisch – synchronisch*. Tübingen: Stauffenburg.
- Luján, Eugenio. (2010). Semantic maps and word formation: Agents, Instruments, and related semantic roles. *Linguistic discovery*, 8 (1), 162-175.
- Mackin, Ronald. (1978). On collocations: Words shall be known by the company they keep. Stevens, P. (ed.). *In Honour of AS Hornby*, 149-165. Oxford: Oxford University Press.
- Maienborn, Claudia. (2005). On the limits of The Davidsonian approach: The case of copula sentences. *Theoretical Linguistics*, 31, 275-316.
- Marchand, Hans. (1969). *The Categories and Types of Present-Day English Word Formation. A Synchronic-Diachronic Approach*. Munich: Beck.
- Martin, Fabienne., & Schäfer, Florian. (2014). Causation at the syntax-semantics interface. In Copley, B., & Martin, F. (eds.). *Causation in grammatical structures*. Oxford: Oxford University Press.
- Martin, Fabienne. (2010). The semantics of eventive suffixes in French. In Rathert, M. & Alexiadou, A. (eds.). *The semantics of nominalizations across languages and frameworks*. Berlin: Walter de

- Gruyter, 109-140.
- Martínez Celdrán, Eugenio. (1975). *Sufijos nominalizadores del español con especial atención a su morfonología*. Barcelona: Ediciones de la Universidad.
- McCarthy, Michael., & O'Dell, Felicity. (2005). *English collocations in use intermediate*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McEnry, Tony., & Wilson, Andrew. (1996). *Corpus linguistics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- McKoon, Gale., & MacFarland, Talke. (2000). Externally and internally caused change of state verbs. *Language*, 76, 833–858.
- Melloni, Chiara. (2007). *Polysemy in word formation: the case of deverbal nominals*. University of Verona: Dissertation.
- Melloni, Chiara. (2010). Action nominals inside: Lexical-semantic issues. In Rathert, M., & Alexiadou, A. (eds). *The Semantics of Nominalizations across Languages and Frameworks*, 141-168. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Mendívil, José Luis. (1991). Consideraciones sobre el carácter no discreto de las expresiones idiomáticas. *Actas del VI Congreso de lenguajes naturales y lenguajes formales*, 2, 711-36.
- Menéndez-Pidal, Ramón. (1968). *Manual de gramática histórica española*. 13ª ed. Madrid: Espasa-Calpe.
- Meyer-Lübke, Wilhelm. (1890). *Italienische Grammatik*. Leipzig: O.R. Reisland.
- Moreno Cabrera, Juan Carlos. (1993). 'Make' and the semantic origins of causativity: a typological study. In Comrie, B. & Maria. P. (eds.). *Causatives and transitivity*, 155-164. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins.
- Navalón, Javier. (2011). Instrumental verb formation. In Cifuentes, J L., & Rodríguez, S. (eds.). *Spanish Word Formation and Lexical Creation*, 21-42. Amsterdam: John Benjamins.
- Observatori de neologia. *Diccionario de neologismos on line*. <http://obneo.iula.upf.edu/spes>.
- Palmer, Harold. (1938). *A Grammar of English Words*. London: Longmans.
- Pena, Jesús. (1980). *La derivación en español: verbos derivados y sustantivos deverbales*. Santiago de Compostela: Yerba.
- Pharies, David. (2002). *Diccionario Etimológico de los Sufijos Españoles (y de otros elementos finales)*. Madrid: Gredos.
- Picallo, Carme. (1999). La estructura del sintagma nominal: las nominalizaciones y otros sustantivos con complementos argumentales. En Bosque, I. and Demonte, V. (eds.). Madrid: Espasa Calpe. 363-394.
- Plag, Ingo. (1998). The polysemy of -ize derivatives: The role of semantics in word formation. In Geert Booij & Jaap van Marle (eds.). *Yearbook of morphology 1997*, 219–242. Dordrecht: Foris.
- Plag, Ingo. (1999). *Morphological Productivity: Structural Constraints in English Derivation*. Berlin: Mouton de Gruyter.

- Plag, Ingo. (2003). *Word-Formation in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Plag, Ingo. (2004). Syntactic category information and the semantics of derivational morphological rules. *Folia Linguistica*, 38 (3-4), 193-225.
- Plag, Ingo. (2006). *Productivity*. In Aarts, B. & McMahon, A. (eds.). *The Hand Book of English Linguistics*. Hoboken: Wiley-Blackwell, 537-556.
- Rainer, Franz. (1999). Derivación adjetival. En Bosque, I., y Demonte, V. (eds.). 4595-4644.
- Rainer, Franz. (2009). El origen de los nombres de instrumento en *-dora* del español. *Vox Romanica*, 68, 199-217.
- Rainer, Franz. (2010). Sobre la polisemia en la formación de palabras, *Hesperia*, 13, 7-52.
- Rainer, Franz (2011). The agent-instrument-place "polysemy" of the suffix *-tor* in Romance. *STUF-Language Typology and Universals*. 64.1, 8–32.
- Rainer, Franz. (2013). Can relational adjectives really express any relation? An onomasiological perspective. *SKASE-Journal of Theoretical Linguistics*, 10-1, 12-44.
- Rainer, Franz., & Wolborska-Lauter, Joanna. (2012). El uso relacional del sufijo *-dor/-dora* en español y su relación con el francés. *Romanische Forschungen*, 124 (3), 303-324.
- Real Academia Española. (2014). *Diccionario de la lengua española*. 23ª edición. Madrid. Espasa Calpe. (DRAE).
- Real Academia Española/Asociación de Academias de la Lengua Española. (2009). *Nueva gramática de la lengua española*. Madrid: Espasa Calpe. (NGLE).
- Rifón, Antonio. (1996-1997). Sinonimia y polisemia de los sufijos *-dor* y *-nte*. *Revista de lexicografía*, 3, 95-108.
- Ronjat, Jules. (1937). *Grammaire istorique des parlers provençaux modernes. Tome III, deuxième partie: morphologie et formation des mots*. Montpellier: Société des langues romanes.
- Rossowová, Lucie. (2009). *Sufijos nominales en español*. Tesina del máster. Universidad de Masaryk.
- Rufat, Anna. (2010). Apuntes sobre las combinaciones léxicas y el concepto de colocación. *Anuario de estudios filológicos*, 33, 291-306.
- Rychlý, Pavel. (2008). A lexicographer-friendly association score. *Proceedings of Recent Advances in Slavonic Natural Language Processing*, 6-9.
- Sánchez Mora, Ana María. (coord). (2013). *Neologismos del español actual*. Madrid: Gredos.
- Santiago Lacuesta, Ramón., y Bustos Gisbert, Eugenio. (1999). La derivación nominal. En I. Bosque., y V. Demonte (eds.). 4505-4594.
- Schäfer, Florian. (2008). Event Denoting -er Nominalizations in German. *Working Papers of the SFB 'Incremental Specification in Context*, 173-188.
- Schäfer, Florian. (2012). Naturally atomic -er nominalizations. *Recherches linguistiques de Vincennes*, 1, 149-174.
- Shibatani, Masayoshi (ed.). (1976). *Syntax and Semantics vol.6. The Grammar of Causative*

- Constructions*. New York: Academic Press.
- Shibatani, Masayoshi., & Pardeshi, Prashant. (2002). The causative continuum. *Typological studies in language*, 48, 85-126.
- Sichel, Ivy. (2010). Event-structure constraints on nominalization. *The Syntax of Nominalizations across Languages and Frameworks*, 159-199. Berlin: Walter de Gruyter.
- Sinclair, John. (1991). *Corpus, concordance, collocation*. Oxford: Oxford University Press.
- Stubbs, Michael. (2001). *Words and phrases. Corpus studies of lexical semantics*. Oxford/Malden: Blackwell.
- 高垣敏博. (2007). 『小学館西和中辞典 (第二版)』 東京 小学館 (西和中)
- 高垣敏博. (2014). 『事象構造とスペイン語の受動表現』 博士論文 東京外国語大学
- Trask, Robert Lawrence. (2013). *A dictionary of grammatical terms in linguistics*. London: Routledge.
- Tremblay, Antoine. (2006). *Spanish -dor Derivations*. Master thesis. Quebec University.
- Tsutahara, Ryo. (2014). Los nombres en -dor y -nte y causatividad. *Estudios Interlingüísticos*, 2, 149-161.
- Tsutahara, Ryo. (2015a). Adjectival Derivatives with the Spanish Suffix -nte: Active and Non-active Uses. *Procedia - Social and Behavioral Sciences*, 198, 479-486.
- Tsutahara, Ryo. (2015b). Los usos no agentivos de adjetivos deverbales en -dor y -nte -su origen y espontaneidad-. *Actas de Problemas actuales de la lingüística ibero-románica*, 1, 24-32.
- Tsutahara, Ryo. (2016a). Corpus Based Lexical Semantic Analysis of Minimal Pairs of Deverbal Adjectives with the Spanish '-dor/-nte' Suffixes. *EPiC Series in Language and Linguistics*, 1, 411-423.
- Tsutahara, Ryo. (2016b). El uso relacional de los derivados adjetivales con los sufijos -dor y -nte - sus semejanzas y diferencias-. *Hispanica*, 60, 1-25.
- Van Valin, Robert., & Randy, LaPolla. (1997). *Syntax: Structure, Meaning and Function*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Varela, Soledad. (ed.). (1993). *La formación de palabras*. Madrid: Gredos.
- Varela, Soledad. (1999). Sobre las relaciones de la morfología con la sintaxis. *Revista española de lingüística*, 29 (2), 257-282.
- Vendler, Zeno (1967). *Linguistics and Philosophy*. NY: Cornell University Press.

## コーパス

- Davies, Mark. (2002-). *Corpus del español (100 millones de palabras, siglo XIII-siglo XX)*.  
<http://www.corpusdelespanol.org>. (8/2015)
- Davies, Mark. *Google Books Corpus (Spanish) (45 billons of words)*.  
<http://googlebooks.byu.edu/x.asp>. (10/2015)
- Real Academia Española. *Banco de Datos. Corpus del español del siglo XXI (CORPES XXI)*.  
Disponible en <http://www.rae.es>. (11/2014).
- Real Academia Española. *Banco de datos (CORDE) [en línea]. Corpus diacrónico del español*. Disponible en <http://www.rae.es>. (7/2016)
- Kilgarriff, Adam. (et al.). *es TenTen*. [2011, Eu + Am, Freeling v4] (9,497,402,122 palabras).  
[https://the.sketchengine.co.uk/bonito/run.cgi/first\\_form?corpname=preloaded/esTenTen11\\_freeling\\_v4\\_virt;align=](https://the.sketchengine.co.uk/bonito/run.cgi/first_form?corpname=preloaded/esTenTen11_freeling_v4_virt;align=). (10/2016). (es TenTen)